

小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡

―湯川中学校改築工事に伴う発掘調査報告書―

二〇一六年三月 公益財団法人 和歌山県文化財センター

# 小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡

―湯川中学校改築工事に伴う発掘調査報告書―

2016年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

# 小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡

－湯川中学校改築工事に伴う発掘調査報告書－

2016年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター





1. 調査区全景（上空から）



2. 調査区1全景（西上空から）







1. 003 竪穴建物（北から）



2. 008 井戸（西から）





## 序

御坊市に所在する小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡は、日高川河口に広がる日高平野の一面に位置します。周辺には多くの遺跡が集中し、弥生時代以降は各期を通じて日高地方の中枢を占めてきたところです。

このたび、御坊市の委託を受けて湯川中学校の改築工事に伴う小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡の発掘調査を実施しました。付近では、十数次にわたる調査が行なわれていますが、今回が最も広い面積を調査したことになります。

調査では、弥生時代中期の竪穴建物・溝や奈良時代の溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の堀や井戸・池などが見つかりました。これらの成果から、弥生時代中期には集落があり、奈良時代と鎌倉時代には寺院の存在が窺え、室町時代には湯川氏の館が築かれていることが分かりました。

奈良時代の溝からは、道成寺創建期の瓦と同タイプの軒丸瓦が出土し、付近に白鳳期まで遡る寺院が存在した可能性があります。この寺は、「日本靈異記」に登場する「別寺」と考えることもできます。

また、湯川氏館の東を限る堀が見つかったことで、館の規模がほぼ想定できるようになり、東西約 225 m、南北 200 m の方形居館で、各地で見つかっている守護館に匹敵する規模であることが分かりました。

ここに、発掘調査の成果をまとめ、報告書を刊行いたします。本書が郷土の歴史を知る上で一資料となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査並びに報告書作成に当たりご指導・ご協力をいただきました関係各位の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、今後とも当文化財センターへの一層のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

平成 28 年 3 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター  
理事長 櫻井敏雄



## 例 言

1. 本書は、御坊市湯川町小松原に所在する小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、湯川中学校改築工事に伴うもので、平成25年度に発掘調査を実施し、平成27年度に報告書作成に伴う出土遺物等整理業務を実施した。
3. 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、御坊市の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
4. 発掘調査・整理業務の調査組織は下記のとおりである。

	【平成25年度】	【平成27年度】
事務局長	勝浦久和・里森 修	米田 良博
埋蔵文化財課長	井石 好裕	土井 孝之
発掘調査業務担当	川崎 雅史	
遺物整理業務担当		小林 充貴 川崎 雅史

5. 本書の執筆・編集は川崎が行った。
6. 発掘調査及び遺物整理業務で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は御坊市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査及び遺物整理業務に際し、下記の方々からご協力を得た。記して感謝を表します。  
小賀直樹 坂本亮太 新谷和之 白石博則 中村貞史 森村健一 水島大二 若林邦彦

## 凡 例

1. 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006. 4）に準拠して行った。
2. 調査並びに本書で使用した座標値は、平面直角座標系（世界測地系）第Ⅵ系のもので、値m単位で使用している。図面に使用している北方位は座標北で、標高は東京湾標準潮位（T.P.+）の数値である。
3. 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」（2010年版）に準じ、土質は調査担当者の任意の判断で行っている。
4. 調査区名・遺構番号は、基本的に発掘調査時のものを踏襲する。遺構番号は1からの通し番号で、遺構名は番号の後に遺構種別を記して表示している
5. 遺物番号は、土器類が番号のみで、石器・石製品がS、金属製品・銭貨がM、鍛冶関係・炭化物がC、木器・木製品がW、瓦類がTを冠して、それぞれ1から付している。
6. 調査で使用した調査コード13-24・024/025（2013年度－御坊市・小松原Ⅱ遺跡/湯川氏館跡）で、記録資料はこのコードを用いて管理している。

# 本文目次

巻頭図版

序・例言・凡例

第1章 環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 経過と経緯	5
第1節 調査の経緯	5
第2節 確認調査	5
第3節 発掘調査	5
第4節 出土遺物等資料の整理	6
1. 出土遺物応急整理	6
2. 出土遺物等整理業務	6
3. 木製品等保存処理	6
第5節 普及活動	7
1. 現地説明会	7
2. 現地見学	7
第3章 既往の調査	8
第4章 調査方法	10
第1節 基準点・水準点測量	10
第2節 地区割り	10
第3節 写真撮影・実測	10
第4節 航空写真撮影	11
第5節 基本層位と遺構面	11
第5章 調査の成果	12
第1節 調査概要	12
第2節 弥生時代の遺構と遺物	12
1. 竪穴建物	15
2. 土坑	24
3. 溝	28
第3節 古代の遺構と遺物	33
第4節 鎌倉時代の遺構と遺物	36
第5節 室町時代の遺構と遺物	41
1. 堀	41
2. 井戸	57
3. 池	67
第6節 近世の遺構と遺物	74

第6章 まとめ	75
第1節 弥生時代	75
第2節 古代	77
第3節 鎌倉時代	78
1. 浄土宗系寺院	78
2. 土器	78
第4節 室町時代	79
1. 湯川氏について	79
2. 土器組成	79
3. 湯川氏館とその周辺	81
4. 湯川氏館の規模	83
5. 庭園と方形区画	84
6. 虎口	84
7. 館の消長	85
遺物観察表（土器類）	87
遺物観察表（石器・石製品）	106
遺物観察表（鍛冶関係・炭化物）	106
遺物観察表（木器・木製品）	107
遺物観察表（金属製品・銭貨）	109
遺物観察表（瓦）	110

## 挿図目次

図1 周辺の遺跡	1	図16 004竪穴建物 出土遺物（1）	19
図2 尾ノ崎遺跡方形周溝墓群	3	図17 004竪穴建物 出土遺物（2）	20
図3 堅田遺跡（日高郡衙跡）	4	図18 024竪穴建物	21
図4 既往の調査区	8	図19 024竪穴建物 出土遺物	22
図5 地区割り	10	図20 028竪穴建物	23
図6 基本層位	11	図21 028竪穴建物 出土遺物	23
図7 弥生時代の主要遺構	12	図22 弥生時代の土坑・溝	24
図8 遺構全体図	13・14	図23 068土坑	25
図9 002竪穴建物	15	図24 弥生時代の溝・土坑断面	25
図10 002竪穴建物 出土遺物	15	図25 弥生時代の土坑 出土遺物（1）	26
図11 003竪穴建物	16	図26 弥生時代の土坑 出土遺物（2）	27
図12 003竪穴建物 出土遺物	17	図27 005溝 出土遺物（1）	28
図13 036土器棺墓	18	図28 005溝 出土遺物（2）	29
図14 036土器棺墓 出土遺物	18	図29 270溝 出土遺物	30
図15 004竪穴建物	19	図30 弥生時代の石器（1）	31

図31	弥生時代の石器（2）	32	図64	026井戸 出土遺物	60
図32	古代・鎌倉時代の主要遺構	33	図65	048井戸	61
図33	263溝断面	33	図66	048井戸 出土遺物	61
図34	遺構から出土した古代の遺物	34	図67	070井戸	62
図35	原位置を離れた古代の遺物	35	図68	070井戸 出土遺物	63
図36	295井戸	36	図69	131井戸	64
図37	鎌倉時代の遺物（1）	37	図70	131井戸 出土遺物（1）	64
図38	鎌倉時代の遺物（2）	38	図71	131井戸 出土遺物（2）	65
図39	調査区2南壁断面	39・40	図72	261井戸	66
図40	室町時代の主要遺構	41	図73	261井戸 出土遺物	66
図41	001堀断面	42	図74	268井戸	67
図42	001堀内橋脚遺構	42	図75	268井戸 出土遺物	68
図43	001堀内土器皿出土状況	43	図76	236池 出土遺物（1）	68
図44	001堀 出土遺物（1）	43	図77	236池 出土遺物（2）	69
図45	001堀 出土遺物（2）	44	図78	236池 出土遺物（3）	70
図46	001堀 出土遺物（3）	45	図79	236池 出土遺物（4）	71
図47	001堀 出土遺物（4）	46	図80	室町時代の瓦（1）	72
図48	001堀 出土遺物（5）	47	図81	室町時代の瓦（2）	73
図49	001堀 出土遺物（6）	48	図82	銭貨	73
図50	019堀断面	49	図83	近世の主要遺構	74
図51	019堀 出土遺物	49	図84	近世の遺物	74
図52	027堀	50	図85	弥生時代中期の小松原Ⅱ遺跡周辺	75
図53	027堀 出土遺物	51	図86	小松原Ⅱ遺跡検出の竪穴建物と 出土遺物	76
図54	258堀断面	52	図87	道成寺創建期の瓦	77
図55	258堀 出土遺物	52	図88	鎌倉時代の木製品	78
図56	259堀断面	53	図89	戒名を刻んだ鳥衾瓦	78
図57	259堀内橋脚遺構	54	図90	各遺跡の土器組成	80
図58	259堀出土遺物（1）	55	図91	湯川氏館とその周辺	82
図59	259堀出土遺物（2）	56	図92	湯川氏館推定復元図	83
図60	008井戸	57	図93	湯川氏館変遷図	85
図61	008井戸底の曲物	57	図94	「天正四年」銘の平瓦	86
図62	008井戸 出土遺物	58			
図63	026井戸	59			



## 図版目次

- 巻頭図版1 1. 調査区全景（上空から）  
2. 調査区1全景（西上空から）
- 巻頭図版2 1. 003竪穴建物（北から）  
2. 008井戸（西から）
- 図版1 1. 遺跡近景（南東上空から）  
2. 調査区1（南上空から）  
3. 調査区1（上空から）
- 図版2 1. 調査区2（北上空から）  
2. 調査区2（上空から）  
3. 調査区2（東上空から）
- 図版3 1. 調査区1西側 遺構検出状況（北から）  
2. 調査区1東側 遺構検出状況（南東から）  
3. 調査区1全景（北西から）
- 図版4 1. 調査区1全景（東から）  
2. 002竪穴建物（南から）  
3. 002竪穴建物 断面（北から）
- 図版5 1. 003竪穴建物（上空から）  
2. 003竪穴建物 遺物出土状況（南から）  
3. 003竪穴建物内 172土坑断面（南から）
- 図版6 1. 003竪穴建物内 036土器棺墓（南から）  
2. 004竪穴建物（北から）  
3. 004竪穴建物 断面（西から）
- 図版7 1. 024竪穴建物（東から）  
2. 024竪穴建物 炭化木・遺物検出状況（南東から）  
3. 024竪穴建物内 153土坑断面（南西から）
- 図版8 1. 028竪穴建物（西から）  
2. 028竪穴建物内 143土坑断面（南から）  
3. 028竪穴建物内 145土坑断面（北から）
- 図版9 1. 弥生時代の土坑（上空から）  
2. 068土坑 遺物出土状況（北東から）  
3. 293土坑 断面（南西から）
- 図版10 1. 005溝（上空から）  
2. 005溝 遺物出土状況（南西から）  
3. 005溝 断面（北西から）
- 図版11 1. 266・270溝（上空から）  
2. 270溝 遺物出土状況（東から）  
3. 266・270溝 断面（東から）
- 図版12 1. 263溝（上空から）  
2. 263溝 断面（南西から）  
3. 260谷状遺構 断面（東から）
- 図版13 1. 295井戸（北東から）  
2. 295井戸 断面（北東から）  
3. 295井戸 井戸側（北東から）
- 図版14 1. 001堀（上空から）  
2. 001堀 A-A'断面（東から）  
3. 001堀 C-C'断面（南から）
- 図版15 1. 001堀内 橋脚遺構（東から）  
2. 001堀内 乱杭遺構（北西から）  
3. 001堀内 土師器皿出土状況（北から）
- 図版16 1. 019堀（東から）遺構302  
2. 019堀 D-D'断面（東から）  
3. 027堀（上空から）
- 図版17 1. 027堀内 石垣（北西から）  
2. 027堀内 石垣（北東から）  
3. 027堀 断面（北東から）
- 図版18 1. 258・259堀（南から）  
2. 258・259堀（北から）  
3. 258堀 断面（南から）
- 図版19 1. 259堀 断面（南から）  
2. 259堀内 橋脚遺構（南から）  
3. 259堀内 橋脚遺構（西から）
- 図版20 1. 008井戸（西から）  
2. 008井戸 断面（西から）  
3. 008井戸内 方形枠・曲物（西から）
- 図版21 1. 026井戸（東から）  
2. 026井戸 断面（北から）  
3. 026井戸内（東から）

図版22	1. 048井戸（東から） 2. 048井戸 断面（東から） 3. 048井戸内（東から）	図版26	1. 268井戸（南から） 2. 268井戸 断面（南から） 3. 268井戸底（南から）
図版23	1. 070井戸（南から） 2. 070井戸 断面（南から） 3. 070井戸内（西から）	図版27	1. 236池（上空から） 2. 236池断面（北東から） 3. 調査区1 近世土坑群（上空から）
図版24	1. 131井戸（西から） 2. 131井戸 断面（東から） 3. 131井戸底（東から）	図版28	1. 調査区2 近世土坑群（東から） 2. 042土坑 断面（東から） 3. 057土坑 断面（南から）
図版25	1. 261井戸（南から） 2. 261井戸 断面（東から） 3. 261井戸内（北から）	図版29～34	弥生土器
		図版35	弥生時代の石器
		図版36	弥生時代の石器・古代の遺物
		図版37・38	鎌倉時代の遺物
		図版39～53	室町時代の遺物

## 表目次

表1	湯川氏館跡に係る既往の調査……	9	表4	室町時代の遺構の土器組成………	80
表2	小松原Ⅱ遺跡に係る既往の調査…	9	表5	236池の土器組成 ……………	80
表3	260谷状遺構の土器組成・鎌倉時代	79	表6	各遺跡の土器組成……………	81

## 写真目次

写真1	堅田遺跡環濠集落……………	2	写真7	出土遺物等整理業務・復元作業	6
写真2	堅田遺跡出土の青銅器鑄型……	2	写真8	出土遺物等整理業務・組版作業	6
写真3	小松原銅鐸……………	2	写真9	第2回現地説明会……………	7
写真4	岩内3号墳遺物出土状況…………	3	写真10	湯川中学校での説明会…………	7
写真5	発掘調査風景……………	5	写真11	航空写真撮影風景……………	11
写真6	出土遺物等整理業務・実測作業	6	写真12	基本層位……………	11



# 第1章 環境

## 第1節 地理的環境

小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡が所在する御坊市は、紀伊半島の西海岸を占める和歌山県のほぼ中央に位置し、護摩壇山に源を発する日高川の河口域を占める。市域は南北16.3km、東西8.4kmと細長く、西で太平洋を臨み、北部で日高郡日高町・美浜町、東部で印南町・日高川町に隣接し、面積約44km<sup>2</sup>を有する。地形的に見ると、市の北端には白馬山脈があり、日高川北岸には県下第2の沖積平野である日高平野が広がる。平野部と山脈の間には比較的緩やかな丘陵が広がり、亀山や八幡山などの独立丘陵が島状に点在する。一方、日高川以南では山並みが海岸近くまで迫り、平野は海岸段丘上とその開析谷に沿う小平野に求めるのみである。

## 第2節 歴史的環境 (図1)

御坊市は肥沃な日高平野を基盤に古くから発達したところであり、多くの遺跡が遺されている。

**旧石器時代** 旧石器時代の遺跡は、日高川以南の海岸段丘上で多く見つかり、和歌山市



- |            |            |           |          |
|------------|------------|-----------|----------|
| 10 阪東丘古墳群  | 15 亀山銅鐸出土地 | 20 八幡山古墳群 | 25 湯川氏館跡 |
| 11 富安Ⅰ窯跡   | 16 朝日谷遺跡   | 21 富安Ⅰ遺跡  | 27 蛭田坪遺跡 |
| 12 富安岡遺跡   | 17 亀山遺跡    | 22 津井切遺跡  | 28 堅田遺跡  |
| 13 鳳生寺山墳墓  | 18 亀山城跡    | 23 小松原Ⅰ遺跡 | 29 東郷遺跡  |
| 14 鳳生寺山古墳群 | 19 亀山古墳群   | 24 小松原Ⅱ遺跡 |          |

図1 周辺の遺跡





写真1 堅田遺跡環濠集落



写真2 堅田遺跡出土の青銅器鑄型

南東部や紀の川市貴志川町、有田川町などとともに県下では最も古くから人々が生活していた地域として周知されている。当該期の遺跡としては、尾ノ崎遺跡や壁川崎遺跡などがあり、ナイフ型石器・スクレイパー・細石刃などの遺物が出土している。

**縄文時代** 縄文時代の遺跡としては、日高川以南では海岸段丘上に中村Ⅰ・Ⅱ遺跡や尾ノ崎遺跡・壁川崎遺跡などがあり、前期末以降の土器などが出土している。日高川以北の沖積平野部では、後期以降に田井遺跡や小松原Ⅱ遺跡などが営まれるようになる。

**弥生時代** 弥生時代の遺跡は、水田を管理しやすい平野部に集中するようになる。古い時期の日高川が形成した自然堤防上には上流域より東郷・津井切・富安Ⅰ・小松原Ⅱ・蛭田坪・堅田などの遺跡が連なる。このうち堅田遺跡(写真1・2)は3重の環濠を巡らした前期の集落で、日本最古とされる青銅器の鑄型(ヤリガンナ)が出土した。中期初め頃の集落は今の所明らかになっていないが、隣接する美浜町吉原遺跡でこの時期の方形周溝墓が検出されている。中期中頃以降、日高平野に展開する集落は活況を呈し、東郷遺跡・小松原Ⅱ遺跡・富安Ⅰ遺跡が遺物・遺構の豊富さからも中心的な集落になると考えられる。中期末頃になると平野部に展開していたほとんどの集落は活動を止め、それと整合するかのよう平野部を見下ろす亀山遺跡に高地性集落が営まれる。亀山遺跡は後期中頃まで続き、その後、平野部での集落が再度活発化する。そんな中であって東郷遺跡は、唯一後期前半段階でも集落は平野部に立地する。一方、日高川以南の中村地区遺跡では、中期末から後期前半頃まで平野部に集落があり、その後、すぐ傍の丘陵上に集落を移し、古墳時代前期まで継続する事が明らかになっている。庄内・布留段階まで丘陵上に集落が立地する現象は、岩内Ⅱ遺跡や熊野神社遺跡でも確認されており、高地性集落の成立時期が一過的なものでなく、成立の原因も一元的でないことが窺える。

銅鐸は平野部周辺で7個出土している。県下で最も古く位置付けられる外縁付鈕1式横帯文銅鐸が小松原Ⅱ遺跡



写真3 小松原銅鐸

の近くで（写真3）、扁平鈕式銅鐸3個が亀山遺跡の一面で発見されているのをはじめ、亀山の北側に位置する向山からは突線鈕（3・4）式銅鐸2個が、東郷遺跡の近くからは県下最大の突線鈕5式銅鐸が出土している。

弥生時代後期後半以降、日高川以南の海岸沿いでは製塩が行われるようになり、製塩土器が出土する遺跡が分布する。このうち野島遺跡は当地域ではいち早く製塩を始めた集落と考えられ、多くの製塩土器が出土している。

**古墳時代** 古墳時代の遺跡は、前期に関しては弥生時代から継続するものが多く、周辺に広く展開するようになる。東郷遺跡では前期初頭に水路の掘削など大規模な開発が行われる。また広域な地域からの搬入土器が多い事から見て活発に交流していた事が窺え、

この時期の日高平野における中心的な集落であったと考えられる。古墳時代中・後期の集落は、富安I遺跡や東郷遺跡が知られるのみである。

古墳は日高川右岸では平野部北側の丘陵地に、左岸では海岸段丘上に集中しており、御坊市域だけでも約150基の古墳が確認されている。前期末から中期に位置付けられる古墳としては、日高川の北側では鏡・玉類・刀剣類などが出土した阪東丘1・2号墳がある。また、鳳生寺古墳群は古式須恵器や滑石製品が副葬され、西麓に位置し同様な遺物が出土する富安I遺跡との関係が注目される。日高川の南では、岩内3号墳（写真4）が中期古墳として挙げる事ができる。また、尾ノ崎遺跡の方形周溝墓群（図2）は古墳時代前期初頭から中期初頭にかけて造営され、最終的には前方後方形の周溝墓も現れる。

古墳時代後期になると竪穴式石室や横穴式石室を内部主体とする多くの古墳が築かれ、各所に古墳群を形成する。天田28号墳は当地方では唯一の前方後円墳で、紀中・紀南地方では例が少ない埴輪が出土する。中村1号墳は一つの墳丘に竪穴式石室1基と土坑2基を主体部にもち、土坑からは製塩土器が出土している。

終末期の古墳には、岩内1号墳がある。地



図2 尾ノ崎遺跡方形周溝墓群



写真4 岩内3号墳遺物出土状況

方では珍しい漆塗木棺や銀線蛭卷太刀が出土し、築造時期や遺物内容から有間皇子の墓とする説もある。

古墳時代の須恵器を焼成していた窯跡としては、富安Ⅰ窯跡がある。6世紀後半代から7世紀にかけて操業される窯跡で、2基の登窯が小谷部に並列していた。このうち1号窯跡は残存状態がよく、窯体は地面をトンネル状に削り抜いて築造していることが明らかになっている。

古代～中世 日高川下流域は日高郡に属し、この地域に財部・内原・岩淵の3つの郷を比定することができる。日高郡衙は、堅田遺跡周辺に存在したことが発掘調査で明らかにされている。調査では規則正しく配置された大規模な掘立柱建物群が検出され、硯や墨書土器などが見つかっている。また、小松原



図3 堅田遺跡（日高郡衙跡）

Ⅱ遺跡では大きな掘形をもつ掘立柱建物や硯などが見つかっており、役所などの存在を考えることができる。堅田遺跡にあった郡衙が奈良時代後半には廃絶していることや、小松原Ⅱ遺跡で奈良時代から平安時代の遺物が出土することから、郡衙が小松原Ⅱ遺跡周辺に移動した可能性も考えられる。小松原Ⅱ遺跡の最近の調査では、道成寺の創建期の瓦と同形式の白鳳瓦が出土しており、『日本霊異記』の説話に郡衙近くの寺として登場する「別寺」の可能性もある。

財部郷からは、調として塩を貢納していたことが平城宮出土の木簡により窺うことができる。岩内Ⅱ遺跡では倉を含む9棟の掘立柱建物が検出されており、硯の出土などからも、岩淵郷の郷家などの可能性も考えられる。

古代の須恵器窯としては、富安Ⅰ窯跡から継続するように7～8世紀にかけて操業される富安Ⅱ窯跡や8世紀のみ操業される猪野々窯跡がある。

平安時代前・中期の当地の様子を窺う資料は少ないが、後期になると荘園がつけられるようになり、富安荘・藪財荘・日高荘があったことが文書資料から窺うことができる。また、朝廷貴族による熊野御幸が行われるようになり、道沿いには王子社が設けられる。

南北朝時代、北朝方として活躍した湯川氏は足利幕府の奉公衆として、小松原館や亀山城を拠点に室町時代末頃には日高をはじめ牟婁・有田まで勢力を拡大するが、天正十三年（1585）の羽柴秀吉の紀州攻めにより退転する。



## 第2章 経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

御坊市立湯川中学校が改築されることになり、既往の建物を取壊し、敷地南側のグラウンド・テニスコートに新規に体育館・校舎を建築することになった。開発対象地には弥生時代から中世の遺跡である小松原Ⅱ遺跡及び室町時代の湯川氏館跡が展開し、改築工事に伴い記録保存目的の発掘調査の要否及び記録保存目的を要する範囲を判断するために確認調査が必要となった。

### 第2節 確認調査

確認調査は、「平成24年度湯川中学校改築工事に伴う小松原Ⅱ遺跡確認調査監理業務」として御坊市から委託された公益財団法人和歌山県文化財センターが技師1名を派遣して、御坊市教育委員会生涯学習課の担当職員の指示を受けて平成24年6月7日～9月10日にかけて実施した。このうち現地調査は、6月15日～7月13日である。調査は体育館・校舎の軸方向で井桁状に基本軸を設け、それに沿うように調査区を設定した。調査区は、幅2mで、長さ4～18mのトレンチ14箇所（総延長143m）と、4m×4mのグリッド1箇所の計15箇所で、総面積は302㎡である。

確認調査の結果、開発予定地の全面で弥生時代以降の遺構が検出でき、南側には湯川氏館の池が存在し、東端には湯川氏館の東堀の存在が予想できるなど、小松原Ⅱ遺跡の内容や湯川氏館の構造を知るうえでも全面的な本調査が必要と判断された。

### 第3節 発掘調査

本調査は、「湯川中学校改築工事に伴う小松原Ⅱ遺跡及び湯川氏館跡発掘調査業務」として御坊市の委託を受けた。当初の調査予定面積は、建物基礎の余掘り分を含めて3,953㎡で、業務期間は、平成25年4月23日から平成26年3月30日である。このうち発掘調査は、「小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡発掘調査工事」として、株式会社梶工務店が工事を請け負い、5月17日～12月26日まで和歌山県教育委員会の指導を受けて実施した。



写真5 発掘作業風景

また、発掘調査に伴う航空写真撮影と基準点測量は、「小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡発掘調査に伴う航空写真測量・基準点測量」として、株式会社共和に業務委託した。

調査対象地は、体育館部分の調査区1と校舎部分の調査区2に分かれ、順次調査を行った。

調査区1の掘削作業は6月から8月末までで、8月29日に第1回航空写真測量・撮影を実施した。

9月からは調査区1の埋戻し作業とともに、調査区2の掘削作業をおこない、11月14日に第2回航空写真測量・撮影を実施した。



その後、補足調査の後、調査区2の埋戻し作業を行い、12月26日までに発掘調査工事の作業を終了した。なお、最終的な調査面積は、側溝やフェンスが崩壊する恐れがあったことから、控えを取り内側で調査区を設定したことにより、3,783㎡と縮小している。

1月以降は、実績報告書作成、図面・写真整理、航空写真測量図の校正をおこない、1月31日までに発掘調査業務のすべての作業を終了した。

## 第4節 出土遺物等資料の整理

### 1. 出土遺物応急整理

調査で出土した遺物については、時期決定を行い、調査方法の判断資料とするため、また、現地説明会等で公開をすることを目的として、調査現場の監督員詰所において洗浄作業を実施した。作業は土器類・瓦類・石器・石製品・木製品について行い、金属製品については水を使わずハケによって泥落としを行っている。総数量は遺物収納コンテナ197箱と大型水槽に1箱分である。



写真6 出土遺物等整理業務・実測作業

### 2. 出土遺物等整理業務

報告書作成に伴う出土遺物整理業務は、発掘調査で出土した遺物全点を対象に行った。

遺物の登録・注記・接合・補強・復元・実測等の一連の作業を行うとともに、木製品については再洗浄も実施した。また、遺構実測図の調整をおこない、遺物実測図とともにトレース作業を実施し、これらを組版して図面原稿を作成した。



写真7 出土遺物等整理業務・復元作業

現場で撮影した遺構写真については、収納・登録等の作業を行った。また、報告書掲載の遺物写真を撮影し、主要な遺構写真とともに組版を行い写真図版を作成した。

また、遺物観察表を作成するとともに、一連の作業を踏まえ原稿執筆を行った。

業務は平成27年4月から実施し、平成28年3月に本書を刊行するに至った。

### 3. 木製品等保存処理

木製品・金属製品等は、ほぼ原形を保って出土しても、そのまま乾燥させると形が崩れ、場合によっては粉末状になる。木製品は水漬することで、一時的な保存は可能であるが、水替え



写真8 出土遺物等整理業務・組版作業

が常時必要で長期保存には適さず、展示するのも困難である。このことから、出土した木製品・金属製品および炭化物のうち重要度が高く、また処理の緊急性を要する木製品52点と、金属製品2点、炭化物1点について保存処理を行った。保存処理は、(株)吉田生物研究所に委託して高級アルコール含浸法により実施した。なお、保存処理を実施しなかった木製品については、バキュームシーラーによって真空パックを行っている。

## 第5節 普及活動

### 1. 現地説明会

普及活動の一環として、発掘調査で得られた数々の成果を地元をはじめ多くの方々に広く知ってもらうため、調査区1の掘削作業が終了した8月31日(土)に第1回目、調査区2の掘削作業があらかた終了した11月17日(土)に第2回目の現地説明会を開催した。当日は現場内において直近で井戸や堀などの遺構を見学してもらうとともに、遺物の展示コーナーを設け弥生時代から室町時代にかけての土器・石器・木製品などを公開した。町名の由来にもなる湯川氏館の調査内容と言う事もあって、参加者は地元区のほか、近隣市町村、県外からも訪れ、第1回目で約60名、第2回目で約70名である。

### 2. 現地見学

御坊市では近年にない大規模な発掘調査で、多くの成果もあったことから、調査の期間中、学校あるいは教育関係機関からの現地見学が多くあった。小学生の現地見学では、実際に出土した土器や石器を手にしてもらったが、初めて触れた先人が残した遺物に感激していた。なお、湯川中学校の現地見学は現場内に水が溜まった状態であったことから、中学校体育館においてパワーポイントを使って説明を行った。

- 8月7日 藤田小学校6年生 引率教諭 計46名
- 9月2日 御坊市文化財保護審議委員会 7名
- 9月5日 湯川中学校1・2・3年生 教諭 計約200名
- 10月16日 御坊市教育研究会 社会科部会 中学校教諭 5名
- 11月18日 御坊市文化財保護審議委員会 7名
- 11月20日 湯川小学校6年生 引率教諭 計58名
- 11月21日 湯川小学校5年生 引率教諭 計74名



写真9 第2回現地説明会



写真10 湯川中学校での説明会



### 第3章 既往の調査

小松原Ⅱ遺跡は、JR御坊駅付近から紀央館高校・湯川中学校付近にかけて広がる遺跡で、日高川右岸に形成された自然堤防上の標高約5mに位置する。周辺は、当地方でも遺跡が最も集中する地域であり、各期を通じて日高地方の中核を占めてきた。蛭田坪遺跡とは駅前通りを挟んで分かれるが、一連の遺跡であると解釈できる。

これまで、校舎改築や駅前広場整備工事・店舗建設などに伴って数多くの発掘調査が行われ、断片的ではあるが遺跡の様相が明らかになっている。遺跡で最も遡る遺物として縄文時代後期の土器が出土している。その後、弥生時代前期の遺物が出土するが、遺構などは明らかでなく、集落が最も活況を呈するのが弥生時代中期以降で、御坊駅前から湯川中学校にかけて広く展開し、日高平野における拠点的な集落になると考えられる。弥生時代後期前半から末頃まで遺構・遺物は出土しないが、弥生時代末頃から古墳時代になると、御坊駅前付近から紀央館高校にかけて集落が営まれるようになる。古代では瓦や硯や製塩土器などの土器が広い範囲で出土し、大形の掘立柱建物が検出されるなど、官衙や寺院の存在が考えられ、奈良時代後期以降は郡衙が推定される遺跡でもある。また、熊野街道が遺跡付近を南下し、遺跡に接する小松原集落は、日高川の渡河を控えた宿場町であった。

中世には、浄土系寺院が存在したことが窺え、室町時代になると日高地方を拠点として有田・牟婁地方にも勢力を及ぼした湯川氏の館が築かれ、堀・井戸・土坑などとともに多量の遺物が出土している。

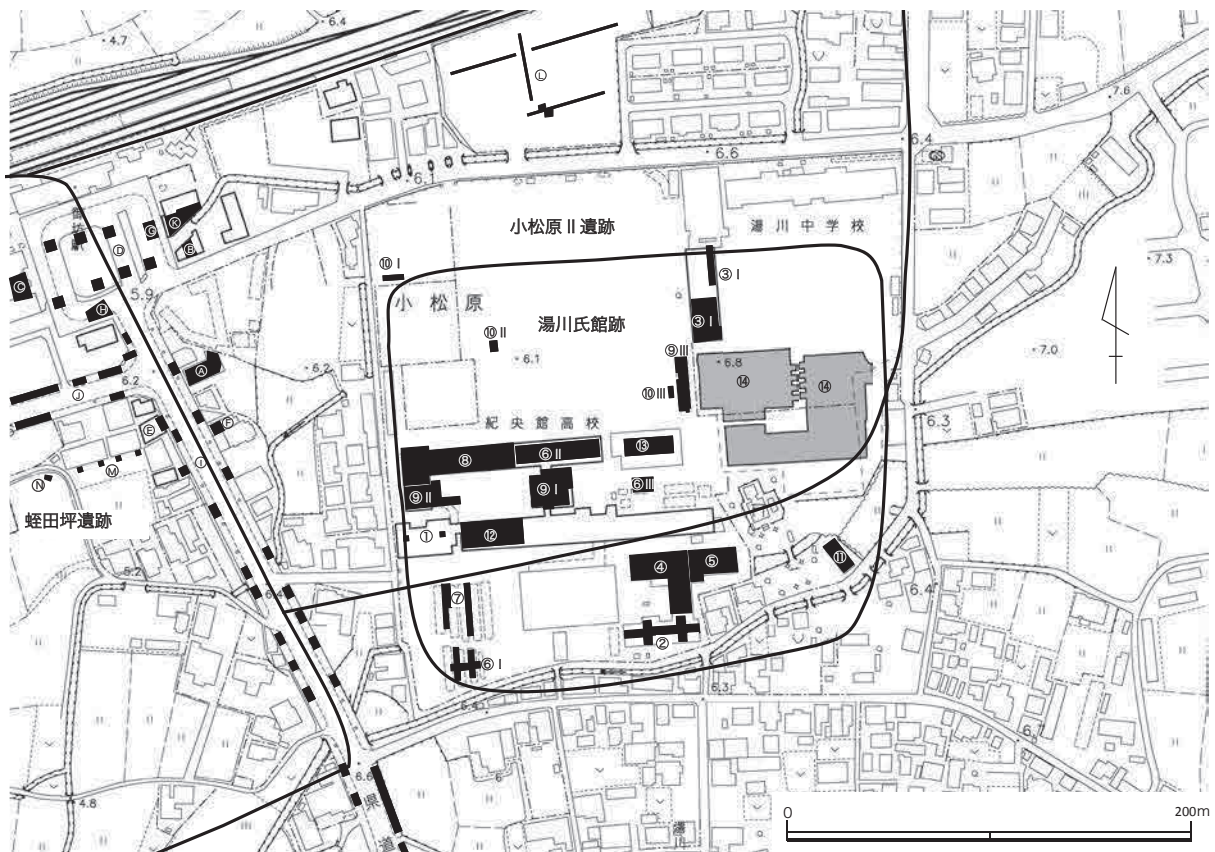


図4 既往の調査区

表1. 湯川氏館跡に係る既往の調査

	調査年月	調査の原因	面積 (㎡)	調査の概要	報告書
1	1978.07	高等学校校舎改築	18	グリッド2箇所	-
2	1980.06～07	高等学校校舎改築	130	室町時代の石列	*1
3	1980.12～1981.01	中学校特別教室改築	190	館の北を画する堀 弥生時代中期の竪穴建物1棟 近世の土坑	*2
4	1981.07～09	高等学校校舎改築	430	館の南に位置する東西・南北方向の堀 池 (2013年検出の236池の続き)	*3
5	1982.07～08	高等学校格技場改築	350	池 (2013年検出の236池の続き) 排水溝	*4
6	1983.07～10	I. 高等学校自転車置場建設	135	近世すき溝 土坑	*5
		II. 高等学校校舎改築	400	弥生時代中期の土坑2基・溝または溝状遺構3条 中世の溝2条・室町時代の井戸1基	
		III. 高等学校校排水処理上の建設	165	江戸時代の土坑 (粘土採掘土坑)	
7	1984.08～09	I・II. 高等学校自転車置場建設	227	館南西部を東西に走る堀の南肩 近世のすき溝	*6
8	1985.04～08	高等学校校舎改築工事	763	弥生時代中期・古墳時代初頭の溝 谷状遺構 (縄文時代後期・弥生時代前期の遺物) 館の西側を画する2重の堀 堀間に土塁	*7
9	1986.07～10	I. 高等学校管理特別教室棟建設	364	弥生時代中期の溝4条 古墳時代前期の溝1条 室町時代の井戸3基・堀・溝1条	*8
		II. 高等学校特別教室棟建設	234	鎌倉時代の溝1条 1985年度検出の館内堀・土塁・外堀の続き 谷状遺構	
		III. 高等学校体育器具庫建設	183	弥生時代中期の土坑 奈良時代の土坑 室町時代の井戸1基・堀 (2013年検出の001堀の北西側部分) 江戸時代の粘土採掘土坑	
10	1988.10～11	高等学校運動場整備工事	125	I. 2013年検出の001堀の北西コーナー部 II. 古代・中世の溝4条 III. 弥生時代中期の土器棺墓・土坑・溝 古墳時代初頭の竪穴建物1棟	*9
11	1987.11～12	地区集会場の建設	160	館の南東部 池 (2013年検出の236池の続き) 堀・土塁 (堀は池に繋がる)	*10
12	1991.02～03	高等学校危険校舎改築	511	鎌倉時代の自然流路 仏教関係の遺物群 室町時代の堀	*11
13	1996.02～03	高等学校格技場建設	404	弥生時代中期の土坑 室町時代の井戸1基・堀 (2013年検出の001堀の西側部分)	*12
14	2013.05～12	中学校改築工事に伴う調査	3,783	江戸時代の粘土採掘土坑	
合計			8,572	本報告	

\*調査原因にある高等学校は和歌山県立御坊商工高等学校 (現紀央館高等学校) 中学校は御坊市立湯川中学校

表2. 小松原Ⅱ遺跡に係る既往の調査 (遺跡が接する蛭田坪遺跡も一部含む また、表1と重複するものは省略する)

	調査年月	調査の原因	面積 (㎡)	調査の概要	報告書
A	1980.07～08	店舗建設	210	弥生時代中期の溝 古代の掘立柱建物1棟・土坑 中世の溝	*13
B	1983.05～06	住宅建設	123	弥生時代中期の溝1条・後期の溝1条 土坑	*14
C	1985.01～03	店舗建設	210	弥生時代中期の方形周溝墓2基 古代の溝	*15
D	1988.11～12 1989.11～12	御坊駅前広場整備	200	グリッド8箇所 弥生時代中期の竪穴建物1棟・溝7条 古代・奈良時代・中世の溝各1条	*16
E	1989.01	住宅建設	8	弥生時代の溝 奈良時代の溝 中世の土坑	*17
F	1989.04	住宅建設	6	古墳時代の溝1条	*18
G	1989.11～12	御坊駅前広場整備	144	Dの調査グリッド4を拡張 弥生時代中期の焼失竪穴建物1棟・土坑1基・溝1条 奈良時代の溝1条・土坑2基	*19
H	1990.08～09	御坊駅前広場整備	140	弥生時代から古墳時代の溝7条 奈良時代・中世の溝3条	*20
I	1993.08～09	御坊駅前吉原線街路整備	150	トレンチ19箇所 弥生時代中期の溝・土坑 古墳時代の竪穴建物・溝 古代の掘立柱建物・溝 中世の掘立柱建物など	*21
J	1993.12～1994.01	御坊駅前新川橋線街路整備	160	トレンチ7箇所 弥生時代・古墳時代・古代の溝	*22
K	1995.09	店舗建設		弥生時代中期の竪穴建物・溝 中世の土坑	未報告
L	2000.05	工場建設	160	奈良時代の掘立柱建物・土坑	*23
M	2000.10	集合住宅建設	16	弥生時代後期末の竪穴建物1棟・溝 古代の溝・土坑	*24
N	2012.12	店舗建設	11	弥生～古墳時代の土坑・ピット・溝状遺構	*25
合計			1,538		

- \*1 『御坊商工高等学校埋蔵文化財試掘調査報告』和歌山県教育委員会 1981.3
- \*2 『小松原Ⅱ遺跡(2)』『1980年度埋蔵文化財発掘調査概報』御坊市遺跡調査会 1981.3
- \*3 『湯川神社境内遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報』御坊市遺跡調査会 1982.3
- \*4 『湯川神社境内遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報Ⅱ』御坊市遺跡調査会 1983.3
- \*5 『湯川神社境内遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報Ⅲ』御坊市遺跡調査会 1984.3
- \*6 『湯川神社境内遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報Ⅳ』御坊市遺跡調査会 1985.3
- \*7 『小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報Ⅴ』和歌山県教育委員会 1986.3
- \*8 『県立御坊商工高等学校埋蔵文化財発掘調査概報・小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)の調査-』和歌山県教育委員会 1987.3
- \*9 『小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報Ⅵ』御坊市遺跡調査会 1988.3
- \*10 『湯川神社境内遺跡』『昭和62年度御坊市内遺跡発掘調査概報』御坊市教育委員会 1988.3
- \*11 『小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)発掘調査概報Ⅶ』御坊市遺跡調査会 1991.3
- \*12 『県立御坊商工高等学校建設に伴う小松原Ⅱ遺跡(湯川氏館跡)発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター 1996.3
- \*13 『小松原Ⅱ遺跡(1)』『1980年度埋蔵文化財発掘調査概報』御坊市遺跡調査会 1981.3
- \*14 『小松原Ⅱ遺跡』『昭和59年度富安Ⅰ遺跡他発掘調査概報』御坊市教育委員会 1985.3
- \*15 『蛭田坪遺跡』『昭和59年度富安Ⅰ遺跡他発掘調査概報』御坊市教育委員会 1985.3
- \*16 『御坊駅前広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査略報』御坊市遺跡調査会 1989.2
- \*17 『蛭田坪遺跡』『昭和63年度御坊市内遺跡発掘調査概報』御坊市教育委員会 1989.3
- \*18 『小松原Ⅱ遺跡』『平成元年度御坊市内遺跡発掘調査概報』御坊市教育委員会 1990.3
- \*19 『御坊駅前広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』御坊市遺跡調査会 1990.2
- \*20 『御坊駅前広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』御坊市遺跡調査会 1990.10
- \*21 『蛭田坪遺跡』財団法人和歌山県文化財センター 1993.12
- \*22 『蛭田坪遺跡』財団法人和歌山県文化財センター 1994.3
- \*23 『小松原Ⅱ遺跡』『平成12年度日高郡御坊他市内遺跡確認調査概報』御坊市教育委員会 2001.3
- \*24 『蛭田坪遺跡』『平成12年度日高郡御坊他市内遺跡確認調査概報』御坊市教育委員会 2001.3
- \*25 『蛭田坪遺跡』『御坊市埋蔵文化財調査年報・平成24年度-』御坊市教育委員会 2013.3



## 第4章 調査方法

### 第1節 基準点・水準点測量

基準点は、世界測地系を座標値とする3級基準点と4級基準点を設置した。3級基準点は、国土地理院設置の電子基準点「広川」「川辺」「みなべ」を既知点として、GPS観測において公共測量作業規程に準じて調査区に隣接する箇所に設置した。4級基準点は、新設した3級基準点を既知点として、結合多角方式及び単路線方式によりTS観測において公共測量作業規程に準じて、調査区に隣接する3箇所に設置した。また、これとは別に3級の引照点を2箇所に設けている。

3級水準点の標高の基準は、直近の一等水準点「I□9185」「I□交9184」の最新の成果(T.P.表示)を既知点として今回新設した3級基準点・4級基準点までの路線において観測を行った。

### 第2節 地区割り

調査地の地区割りは国土座標第VI系(世界測地系)を使用し、小松原II遺跡・湯川氏館跡の範囲を網羅する北東(X = -231.0km, Y = -77.0km)に基点を設け、その点から南西に大区画・小区画を設けて区割りを行っている。

大区画は基点をA1地点と定めて、西方向へ100mごとにB、C、D…、南方向に2、3、4…という軸を設定した1辺100m四方の区画で、北東隅の地区名を用いてA1、C3などと呼称する。次に、この大区画の北東隅をa1地点として、そこから4mずつ西方向へb~y、南方向へ2~25とそれぞれの方向に25分割し、一辺4mの正方形区画を小区画とする。小区画は北東隅の地区名からa1区~y25区と呼称する。地区名は大区画-小区画(A1-a1区など)で表す。今回の調査区は、大区画でD9・10、E9・10の範囲内に相当する。

### 第3節 写真撮影・実測

写真撮影は全景のほかに、検出した遺構のうち竪穴建物や井戸など主要な遺構の個別写真、遺

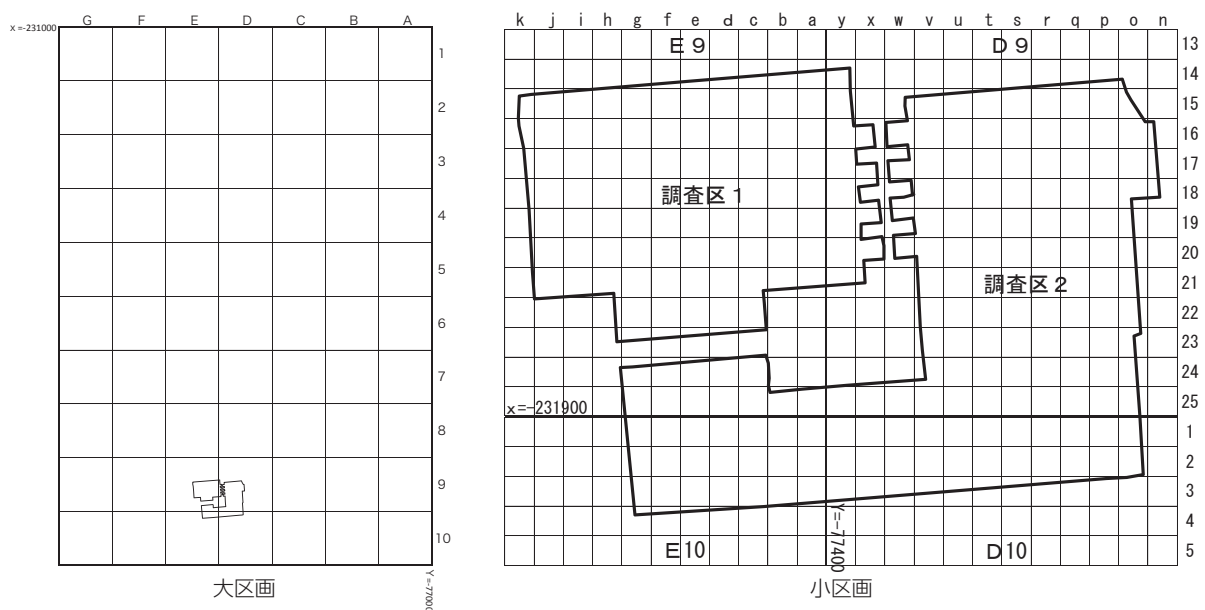


図5 地区割り

構断面・周囲の断面などについて行っている。

平面実測図は、航空写真測量で図化（ $S = 1/50$ ）している。このほか遺構配置図（ $S = 1/100$ ）、調査区壁面土層図（ $S = 1/20$ ）、主要な遺構平面図・断面図（ $1/10 \cdot 1/20$ ）などがあり、主に方眼紙（A2）に作成している。

写真は4×5判モノクロ・カラーリバーサル、6×7判モノクロ・カラーリバーサル、35mm判モノクロ・カラーリバーサル、デジタルカメラを用いて調査員が撮影した。全景写真は撮影用足場を組んで撮影したのをはじめ、次項に記した航空写真撮影を行った。

#### 第4節 航空写真撮影

航空写真は専門会社に委託し、発掘調査により検出した遺構をラジコンヘリにより、調査区1・調査区2のそれぞれにおいて撮影を行った。各撮影では垂直全体写真、垂直部分写真、周辺部を含めた斜め写真を撮っている。

成果品はデジタルモザイク写真、カラーリバーサル（6×6判）で納入されている。



写真11 航空写真撮影風景

#### 第5節 基本層位と遺構面

昭和20年以降に施された厚さ0.7～1.0mの盛土下で第1層の水田耕作土となる。第1層は近世以降のものであり、20～40cmの間で2～4面の水田面が確認できる。第1層直下で弥生時代から近世の遺構が検出でき、各期の遺物包含層は存在しない。遺構面は1面のみで、基本的なベースは第2層：10YR5/4（にぶい黄褐）シルトとなるが、南東部で第2層が不在な範囲では第3層：10YR5/3（にぶい黄褐）シルト混の細砂層上でも一部の遺構を検出している。なお、第4層は10YR4/2（灰黄褐）シルト混の砂礫層（ $\phi \sim 3\text{cm}$ ）となる。

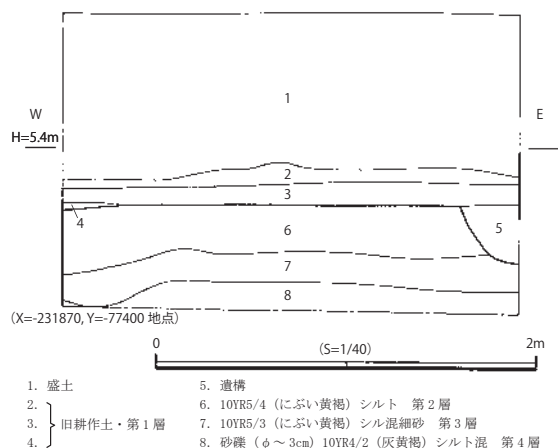


図6 基本層位



写真12 基本層位

## 第5章 調査の成果

### 第1節 調査概要 (図8、巻頭図版1・図版1・2)

調査区は体育館部分の調査区1と校舎部分の調査区2に分かれ、順次調査を行った。二つの調査区は接しており、両調査区に跨って検出した遺構も存在することから、調査区を分けずに時代を追って説明を行う。

検出した遺構には、弥生時代、奈良時代、鎌倉時代、室町時代、近世のものがある。古墳時代、平安時代の遺構および遺物は見つかっていない。

なお、遺構番号は遺構の時代・種類にかかわらず検出した順に1からの通し番号で付している。

### 第2節 弥生時代の遺構と遺物 (図7)

検出した遺構には竪穴建物5棟(002・003・004・024・028)、土器棺墓1基(036)、土坑(025・067・068・074・125・256・257・277・293・300ほか)、溝3条(005・266・270)、柱穴などがある。このほか、並行する細い2本の溝(218)を部分的に検出しているが、竪穴建物の壁溝の可能性が考えられる。この時期の遺構は、調査区1側の北西側に多く、低地に向かう南東側は希薄となっている。弥生時代の遺構の時期は中期後葉を中心とする時期で、後期の遺構・遺物は見つかっていない。

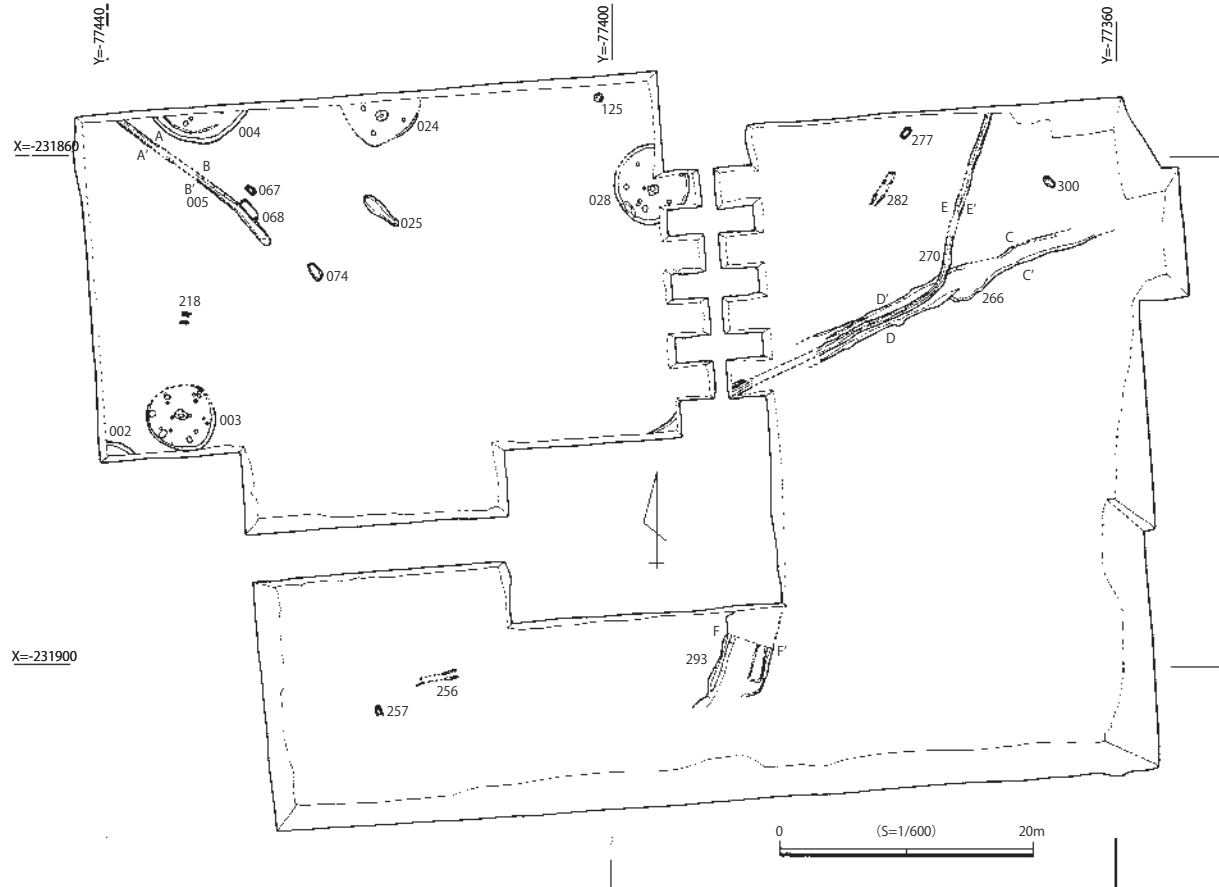


図7 弥生時代の主要遺構

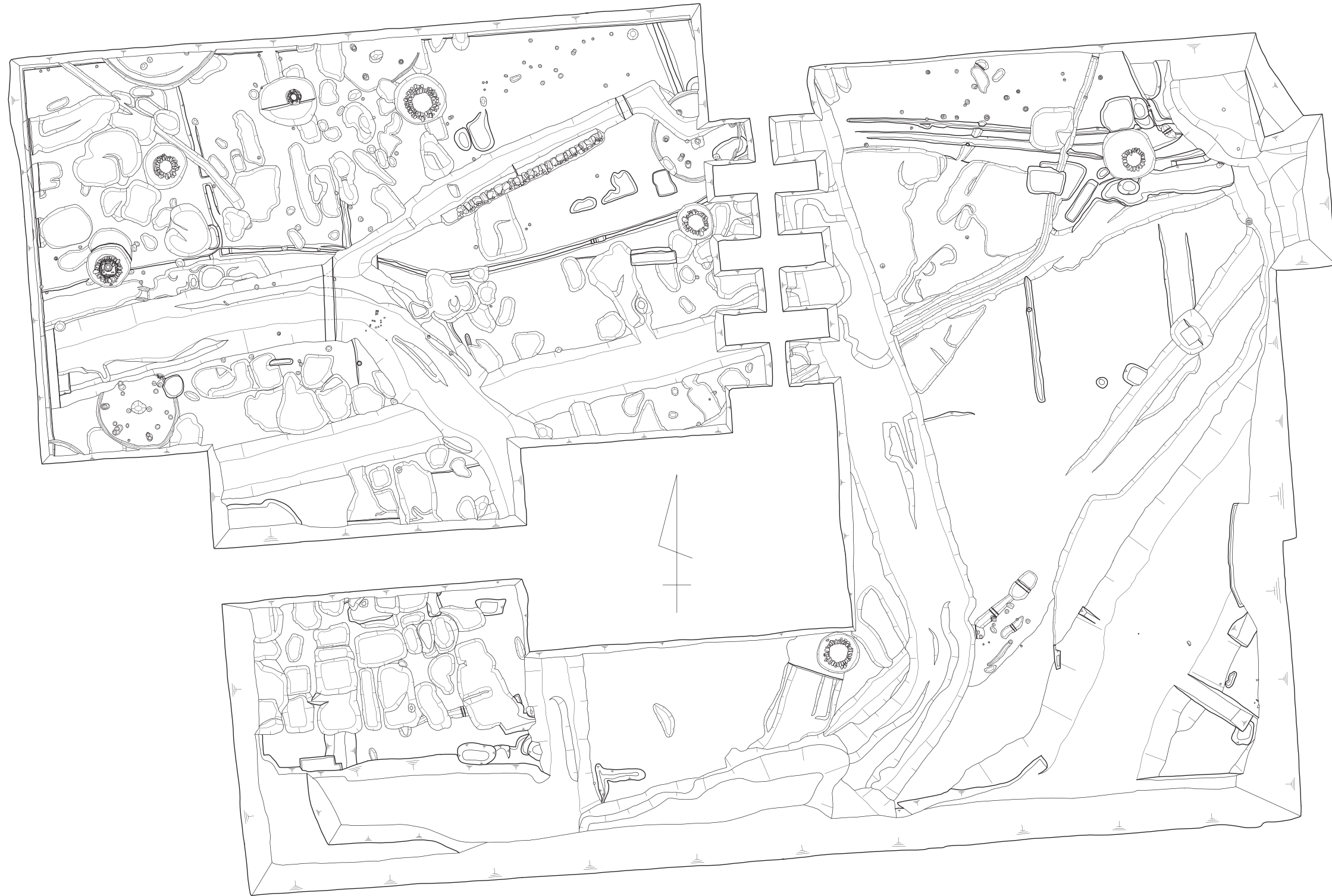
Y=-77440

Y=-77400

Y=-77360

X=-231860

X=-231900



(S=1/300)

0 5 10 20m

图8 遗构全体图



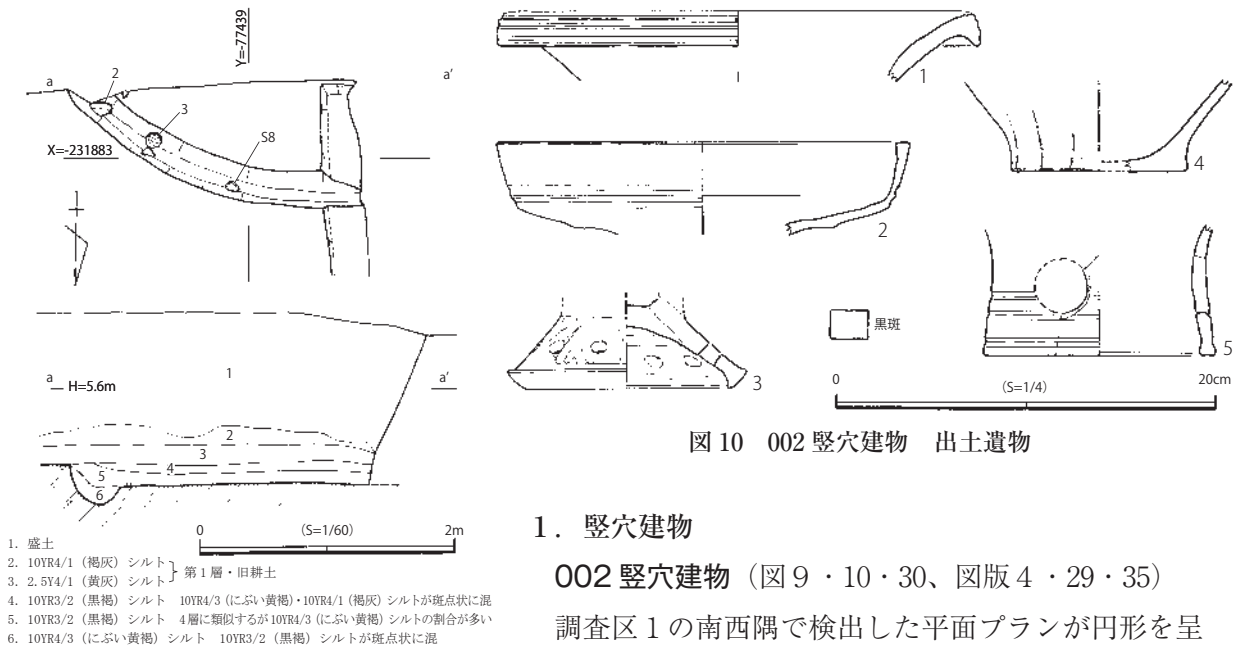


図9 002 竪穴建物

図10 002 竪穴建物 出土遺物

## 1. 竪穴建物

### 002 竪穴建物 (図9・10・30、図版4・29・35)

調査区1の南西隅で検出した平面プランが円形を呈する建物で、南西側の大半が調査区域外となる。003 竪穴建物と約2.0m隔てて位置する。長さ2.3m、幅1.0mを確認したのみで、規模は明らかでないが、残存する壁の高さは0.15mを測る。壁際には幅0.25m前後、深さ0.15mの溝が巡るが、床面上からは柱穴などの遺構は検出できなかった。

遺物は、埋土などから弥生土器壺(1)・甕・高杯(2・3)のほか壺または甕の底部(4)・脚台部(5)、礫石器(S8)・サヌカイト剥片などが出土している。

### 003 竪穴建物 (図11・12・30、巻頭図版2、図版5・29・35)

調査区1の南西隅付近で検出した平面プランが円形の建物で、002 竪穴建物の北東に約2.0m隔てて位置する。北側が室町時代の堀によって削平されているが、今回の調査で見つかった建物の中では比較的全容が明らかな建物である。規模は直径5.5mで、残存する壁の高さは0.2mを測る。壁際には幅0.25m前後、深さ0.1m前後の溝が巡る。上屋を支える支柱は6本で、1.7～2.0mの間隔をあげ二個一単位で検出できることから、建替えが行われていることが窺える。ただ、その場合、壁溝が一重で重複も確認できないことから、拡張を伴わない建替えと判断できる。柱穴は直径0.25～0.4m、深さ0.15～0.6mを測り、柱の直径は痕跡から20cm前後であると想定できる。建物中央には不整楕円形を呈する長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.7mの172土坑があり、底部分には厚さ0.1mの炭層が堆積していた。土坑の長軸方向の両側には、直径0.25～0.3m、深さ0.2m余りの柱穴が取り付け、所謂「松菊里型住居」の形態をもつ。土坑北側の床面では直径0.4m余りと直径0.6m余りの2箇所の地床炉が認められた。地床炉は床面が強く被熱し、赤く硬化していた。中央の172土坑には被熱が認められないことから、土坑自体は炉の機能を持たず、地床炉から出た炭や灰をかき入れた穴であると考えられることもできる。

遺物は、床面や埋土から弥生土器壺(6～12)・甕(13～17)・壺または甕の底部(18～21)・高杯(22～25)、石鏃(S1・S2)、サヌカイト剥片、台石などの礫石器(S6～S11)、石器原材(S12)が出土している。台石のいくつかは床面に据え置かれた状態で、土器も原位置を保つと考えられるものが多いことから、建物の廃絶段階で放棄された状態を示すものと考え

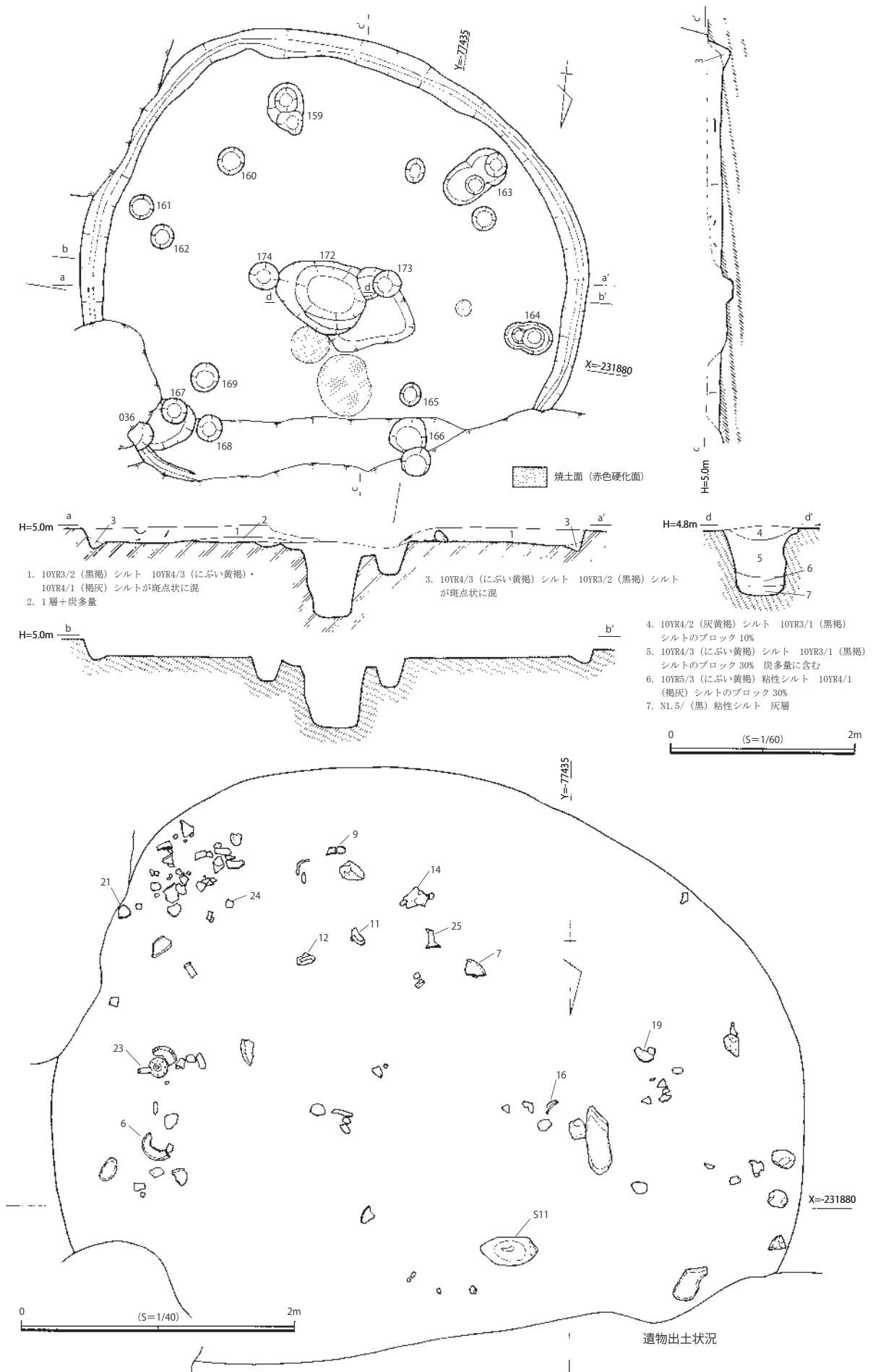


図 11 003 竖穴建物

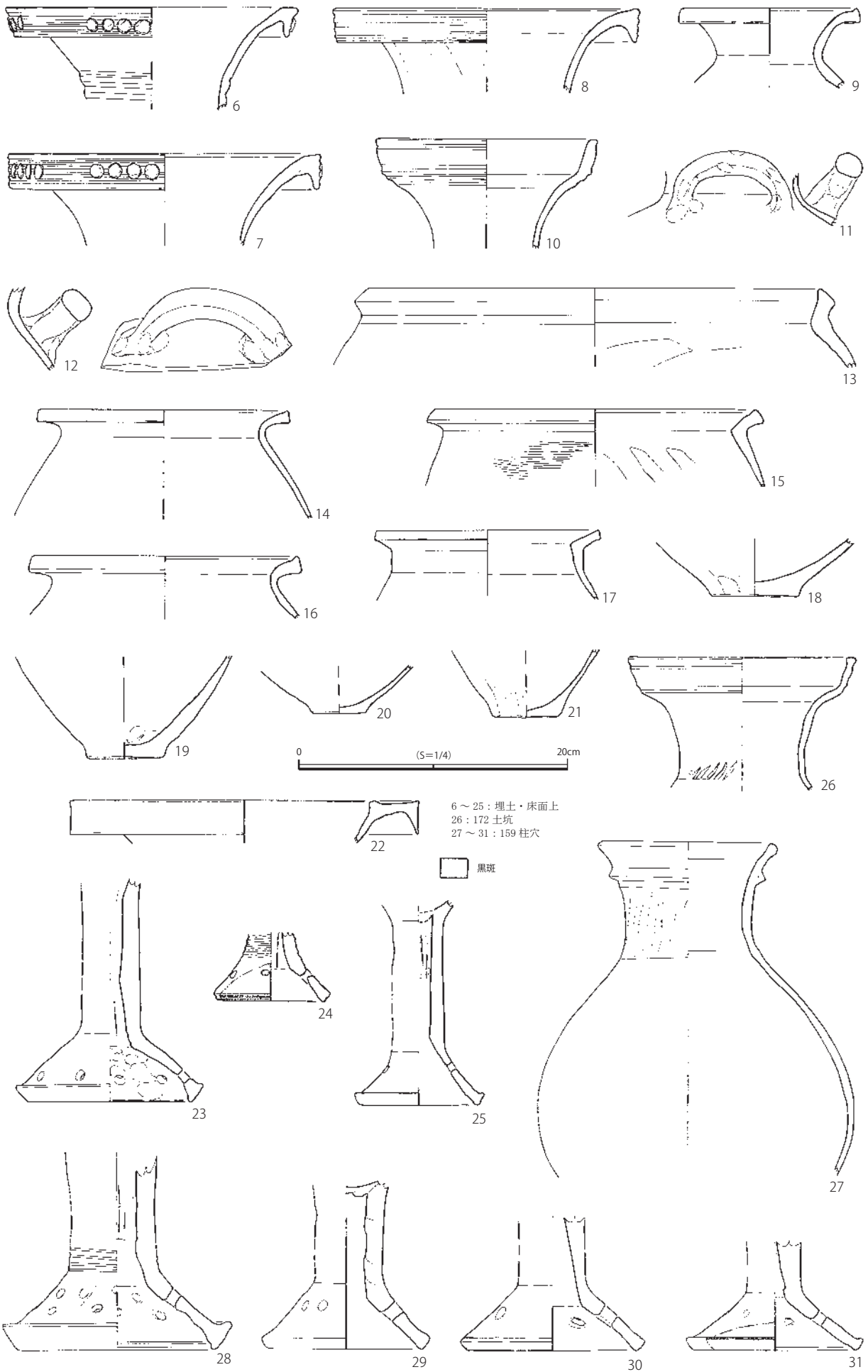


图 12 003 竖穴建物 出土遺物

ることできる。このほか、172 土坑から弥生土器壺 (26)・甕・高杯、159 柱穴から弥生土器壺 (27)・高杯 (28～31)・器台、礫石器 (S 9) などが出土している。

### 036 土器棺墓 (図 13・14・30、図版 6・29・35)

003 竪穴建物の北東側の壁際に位置する。長さ 0.7 m、幅 0.4 m 以上、深さ 0.1 m の小土坑の底に、建物の壁を挟むように直径 0.3 m、深さ 0.25 m の小穴を掘削し、その中央にやや内側に傾けた状態で土器棺を納めたものであるが、南側は攪乱により一部破壊されていた。土器棺は高さ 25cm、腹径 20cm の弥生土器甕 (33) で、上部を弥生土器台付鉢 (32) の鉢部で蓋をしていた。003 竪穴建物に伴う遺構で小児棺と考えられる。また、小土坑からは弥生土器高杯 (34)、石鏃 (S 3) が出土している。

### 004 竪穴建物 (図 15～17・30、図版 6・30・35)

調査区 1 の北西隅付近で検出した平面プランが円形を呈する建物で、024 竪穴建物の西側に約 7.0 m 隔てて位置する。北西側には 1980 年度の校舎建設に伴う発掘調査で見つかった竪穴建物があり、これとほぼ接していると考えられる。また、南西側に約 1 m 隔てて同時期の 005 溝が延びている。北側の 2/3 程度が調査区域外となるが、検出した輪郭から推定して、直径 8.4 m 程度の建物になると考えられ、今回の調査で見つかった建物の中では最大である。残存する壁の高さは残りの良いところで 0.3 m を測り、壁際には幅 0.25～0.3 m、深さ 0.05 m 前後の溝が巡る。床面の中央付近は一段窪んでおり、壁溝との間には幅 0.35～1.0 m、高さ 0.05 m 前後のベッド状遺構が構築されている。中央の一段下がった床面上からは柱穴が 3 箇所検出できるが、すべてが上屋を支える主柱であったか明らかでない。柱穴は直径 0.3～0.35 m、深さ 0.2～0.45 m を測る。

遺物は、弥生土器壺 (35～45)・甕 (46～53)・手捏ね土器 (54)・壺または甕の底部 (55)・高杯 (56～59)・鉢 (60～62)・脚台 (63～65) などが出土している。床面直上から出土したものが少ないが、ある程度建物が埋まった段階で堆積している黒色土からは多量の弥生土器が出土している。これは建物廃絶後、窪みとなっていた箇所土器が一括投棄された結果であると考

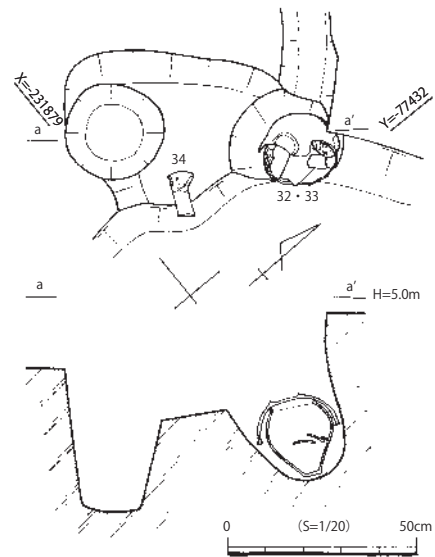


図 13 036 土器棺墓

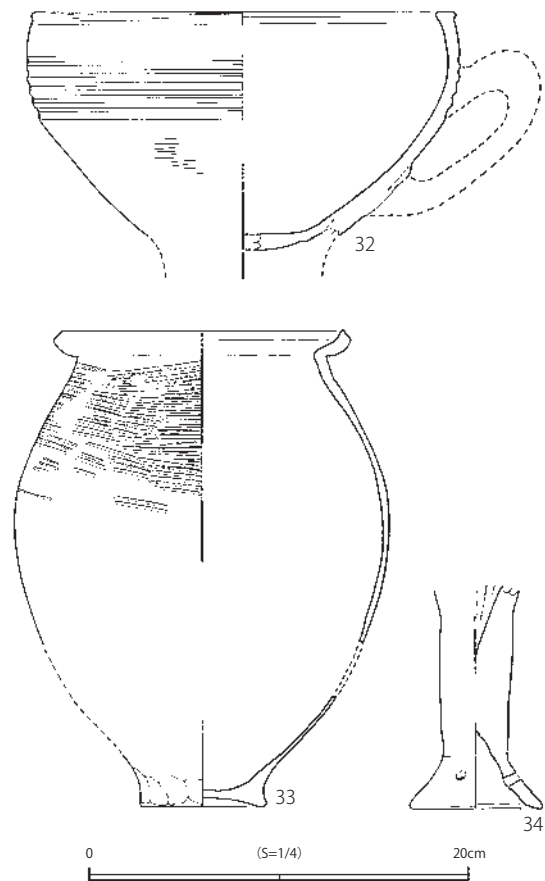


図 14 036 土器棺墓 出土遺物



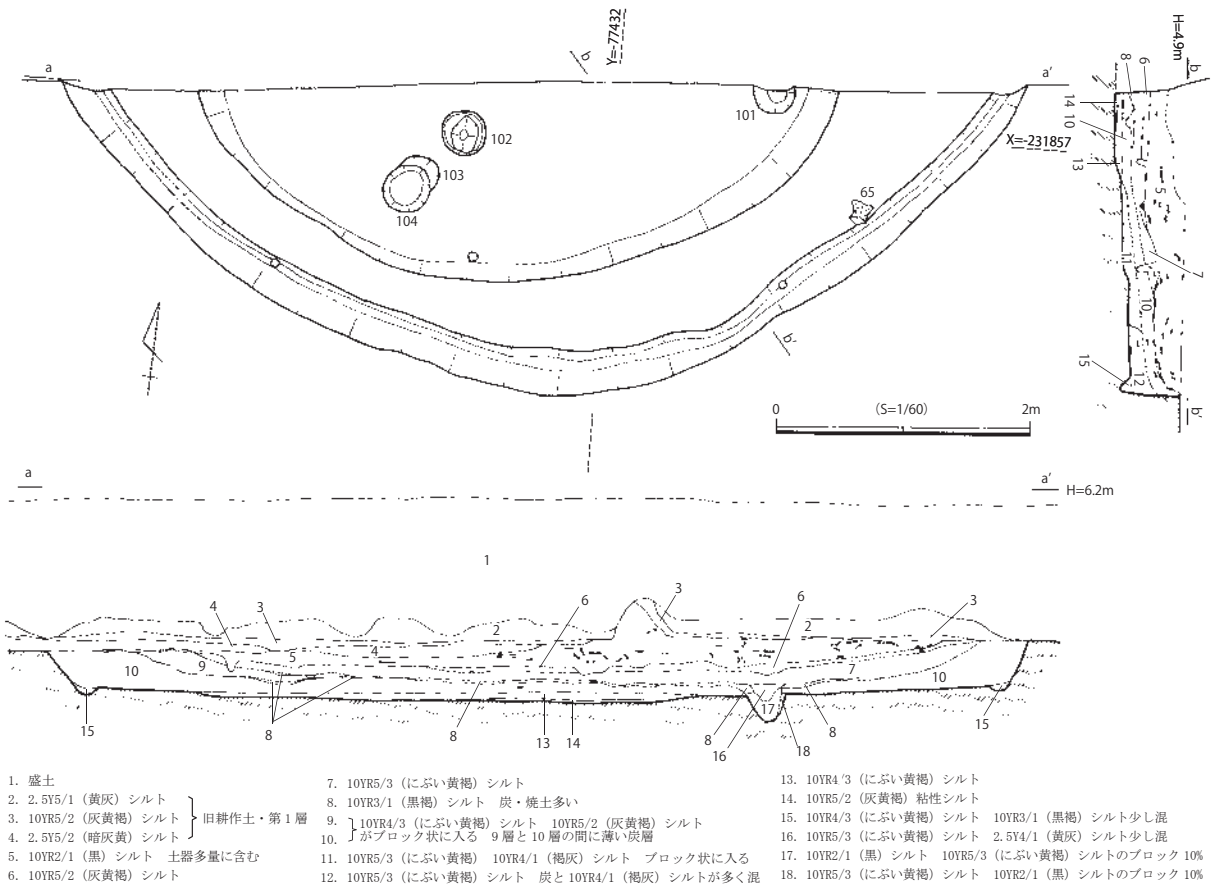


図 15 004 竪穴建物

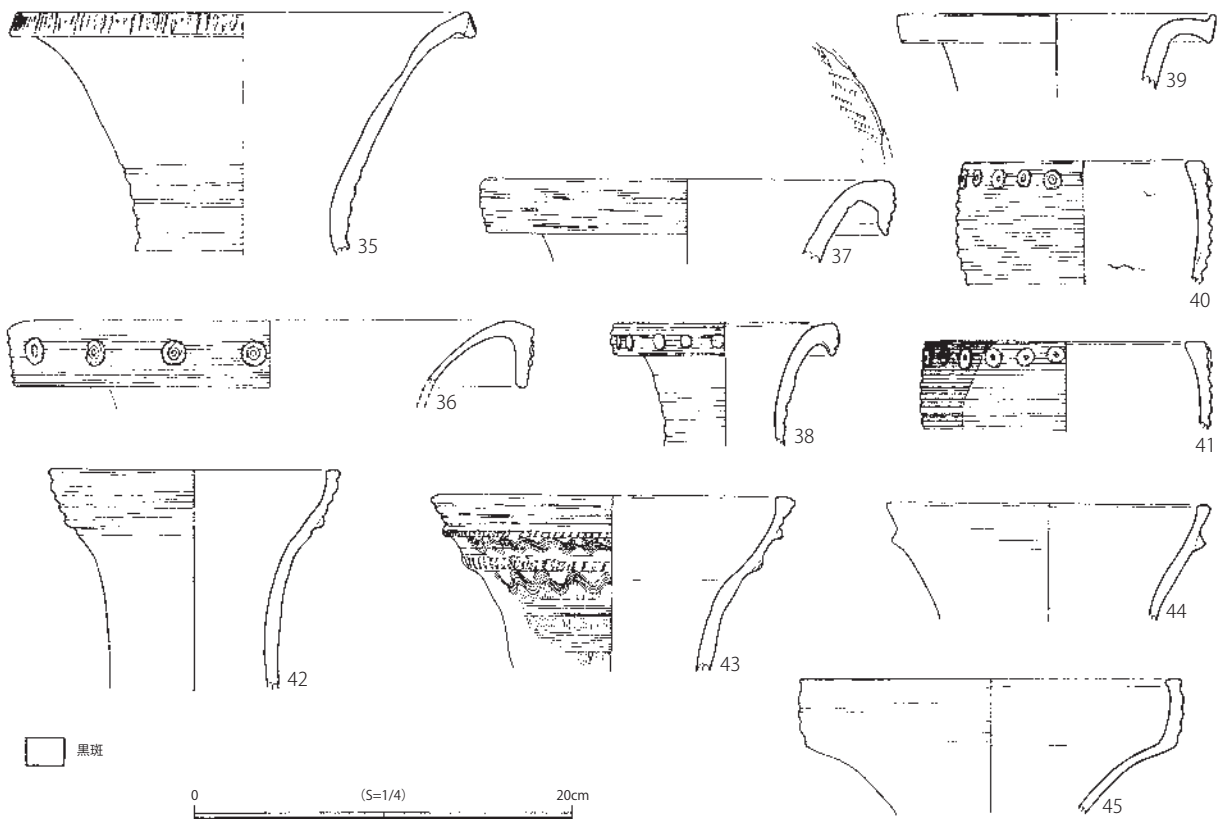


図 16 004 竪穴建物 出土遺物 (1)

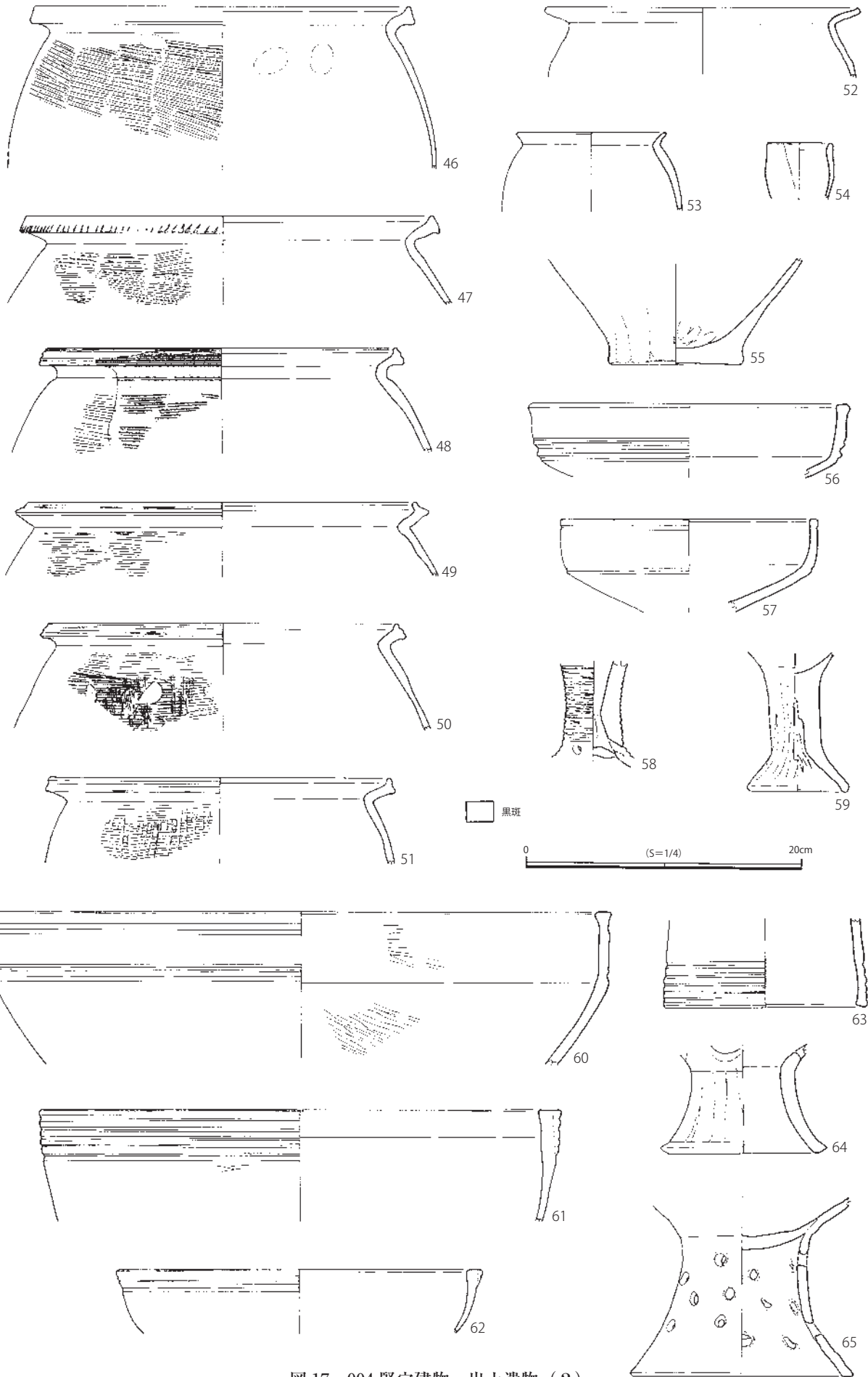


图 17 004 竖穴建物 出土遺物 (2)

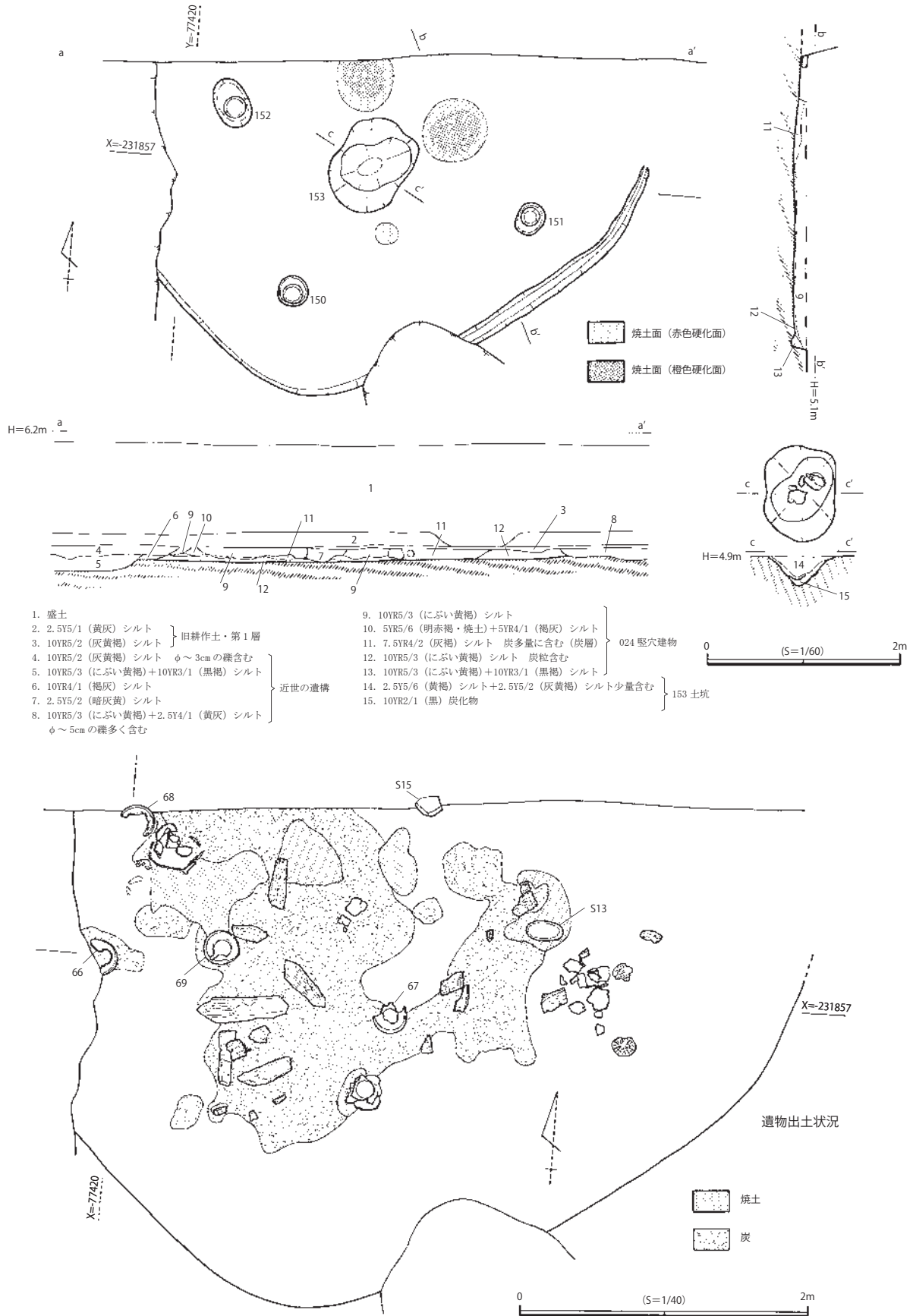


図 18 024 竪穴建物

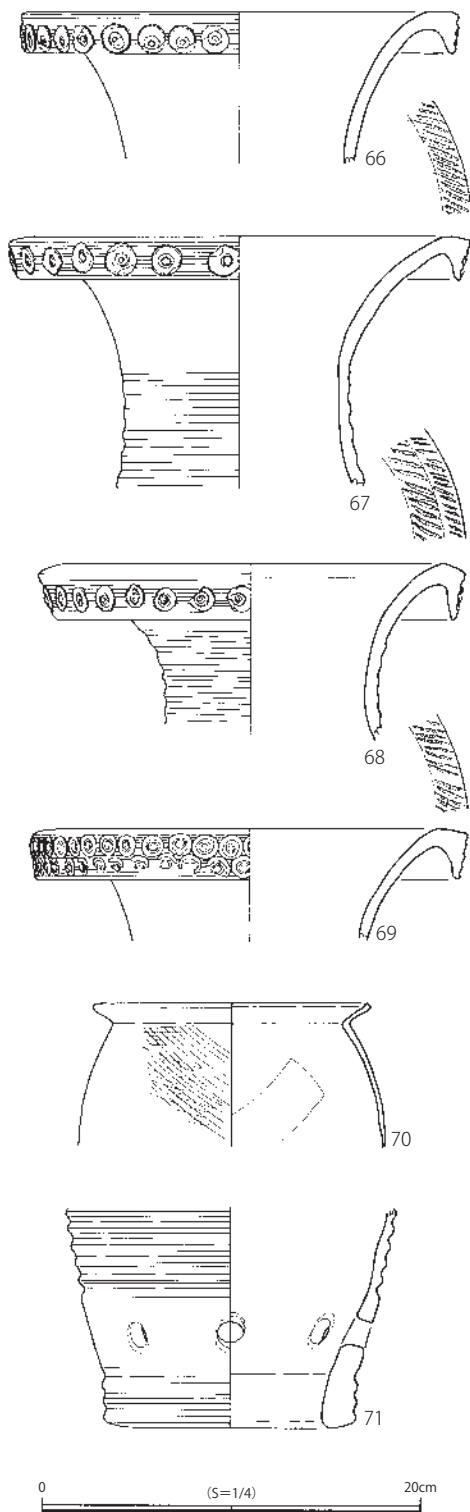


図19 024 竪穴建物 出土遺物

遺物は上記した以外に弥生土器脚台(71)、石包丁(S5)や台石などの礫石器(S13～S15)などが、中央の153土坑からは弥生土器甕(70)が出土している。

#### 028 竪穴建物 (図20・21・31、図版8・31・35)

調査区1の北東隅付近で検出した建物で、平面プランは円形を呈する。建物の北東・南東隅が

えられる。このほか104柱穴から石鏃(S4)が出土している。

#### 024 竪穴建物 (図18・19・30・31、図版7・30・31・35)

調査区1の北端中央で検出した建物で、平面プランは隅丸方形に近い。北側の約1/3が調査区域外となり、各所で後世の遺構によって削平されることから全容は明らかでない。規模は一辺(直径)が5m前後に復元できる。残存する壁の高さは0.1m前後で、南東部の壁際にのみ幅0.1～0.2m、深さ数cmの溝が掘削されている。上屋を支える支柱は4本であったと考えられ、調査区内では3本の柱穴を検出している。柱穴は2.0mと2.5mの間隔をあけて位置し、大きさは直径0.3～0.5m、深さ0.4～0.5mを測る。柱は痕跡から直径20cm前後であると考えられる。建物中央には不整楕円形を呈する長さ1.0m、幅0.75m、深さ0.3mの153土坑があり、底には厚さ0.05～0.1mで炭が堆積していた。土坑に接して北と北東側の床面には直径0.65m前後の範囲で地床炉が2箇所存在する。地床炉は周囲が赤色で中央付近が橙色に変色して硬化していることから、かなり高温の被熱であることが窺える。

建物からは柱や垂木などの建築部材が炭化した状態で出土しており、火災に遭っていることが窺える。炭化木の残存状態は良くないものの、焼け落ちた状態を観察してみると炭化木の上に焼土が認められることから、上屋を葺いた萱などの上に土を載せていたことが想像できる。また、炭化木や焼土の上からはほぼ同形態の弥生土器広口壺5個(66～69)が伏せられた状態で出土している。二次焼成を受けていない状況からも、建物が焼け落ちた後に置かれたものであると考えられ、儀式に伴う土器の可能性もある。なお、不時の火災にしては床面上の土器類が少ないことから、建物の廃絶などに伴い意図的に建物を焼いたことも想像できる。



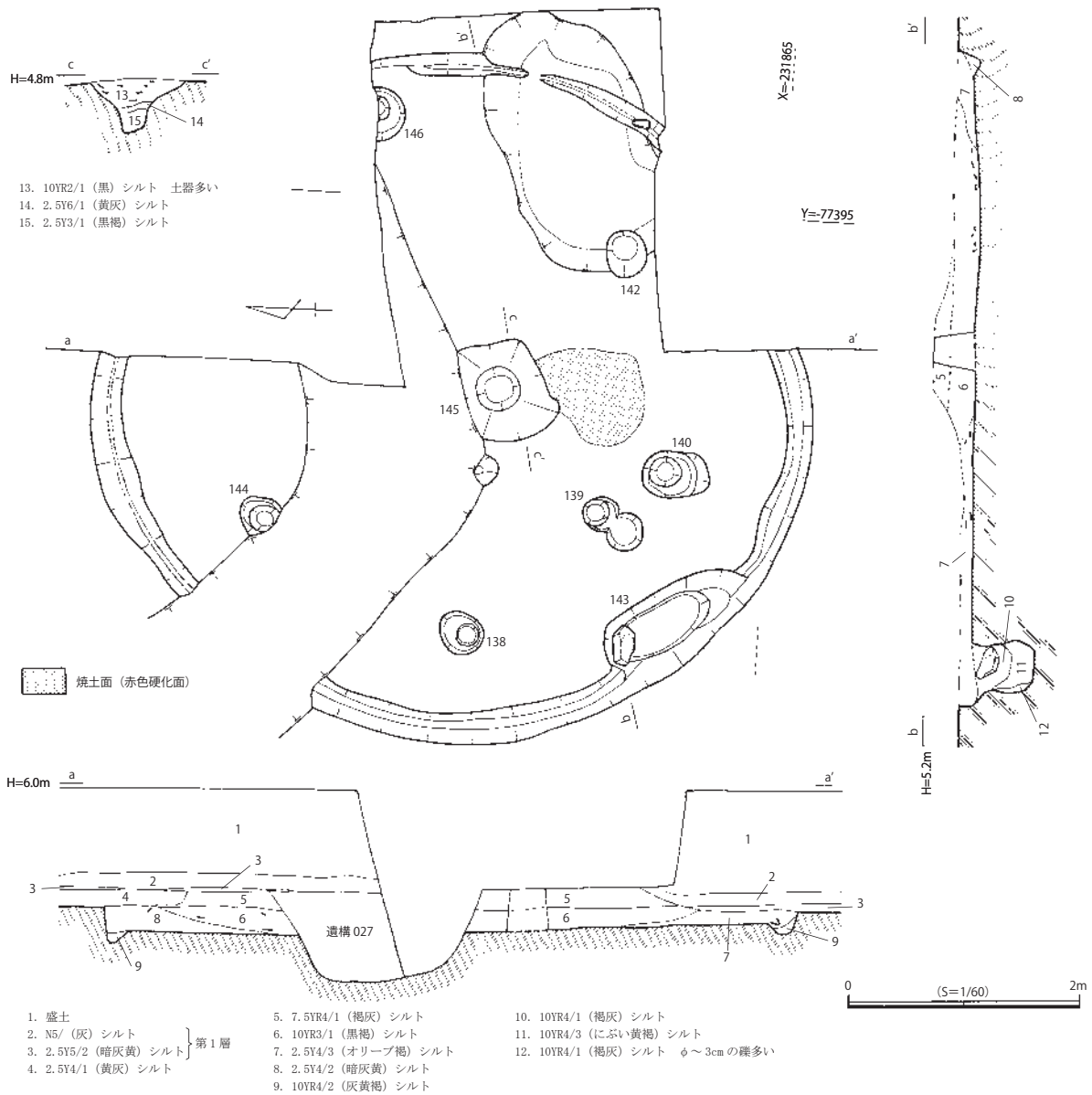


図20 028 竪穴建物

調査区域外となり、また、後世の遺構などによって部分的に削平されるが、比較的全容を推定することができる。規模は南北6.15m、東西6.0mで、壁の高さは残りのより箇所では0.35mを測る。壁際には幅0.2~0.3m、深さ0.1m程度の壁溝が巡る。上屋を支える主柱は6本であったと考えられ、調査区内ではそのうち5本の柱穴を確認している。柱穴は2.0~2.5m間隔をあけて位置し、大きさは直径0.35~0.4m、深さ0.15~0.55mである。柱の太さ

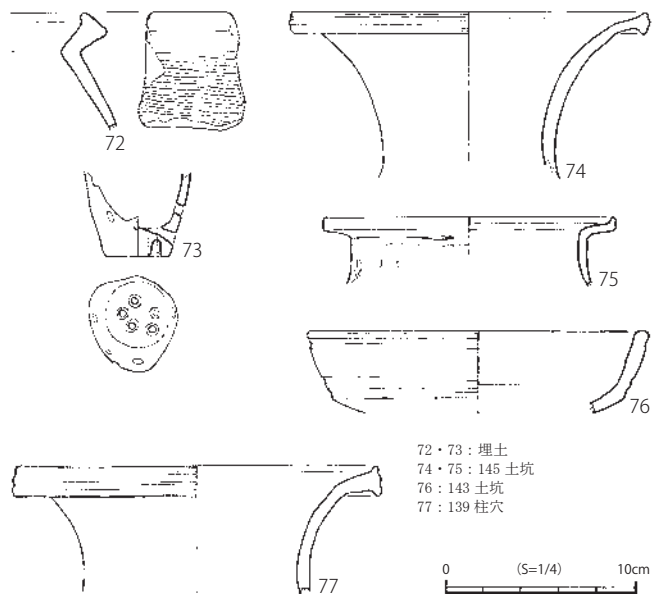


図21 028 竪穴建物 出土遺物

は痕跡から 20cm 前後であったと考えらる。建物中央には、上部が楕円形・下部が円形に掘削された 145 土坑があり、下部には灰や炭が混ざる土が堆積していた。土坑の規模は長さ 1.0 m、幅 0.9 m、深さ 0.45 m を測る。土坑の南に接して 0.8 m × 0.8 m の範囲で地床炉が存在し、床面が被熱して赤く硬化していた。建物南西の壁際には、長さ 1.3 m、幅 0.5 m、深さ 0.55 m の長楕円形を呈する 143 土坑が掘削されている。土坑は下部がわずかに袋状にひろがり、貯蔵穴の可能性が高い。

遺物は、建物埋土から弥生土器甕 (72)・器種不明の多孔土器 (73)、礫石器 (S17・S18) が、中央の 145 土坑から弥生土器壺 (74)・甕 (75) が、143 土坑からは弥生土器高杯 (76)、礫石器 (S20) が、139 柱穴からは弥生土器壺 (77)、146 柱穴からは礫石器 (S19) などが出土しているが、他の建物に比して量は少なく、原位置を保つものはない。

## 2. 土坑

### 025 土坑 (図 22・25、図版 9・31)

調査区 1 の中央付近で検出した土坑で、北側に約 4 m 隔てて 024 竪穴建物が位置する。平面形状は長楕円形を呈し、長さ 3.55 m、幅 1.1 m、深さ 0.1 m を測る。断面形状は舟底状を呈する。遺物は弥生土器壺・甕 (78)・高杯 (79)・手捏ね土器 (80) などが出土している。

### 067 土坑 (図 22・25、図版 9・25)

調査区 1 の北西部で検出した土坑で、068 土坑の北側に 0.6 m 隔てて位置する。平面形状は楕円形を呈し、長さ 1.0 m、幅 0.5 m、深さ 0.06 m を測る。断面形状は舟底状を呈する。遺物は弥生土器壺 (81) などが出土している。

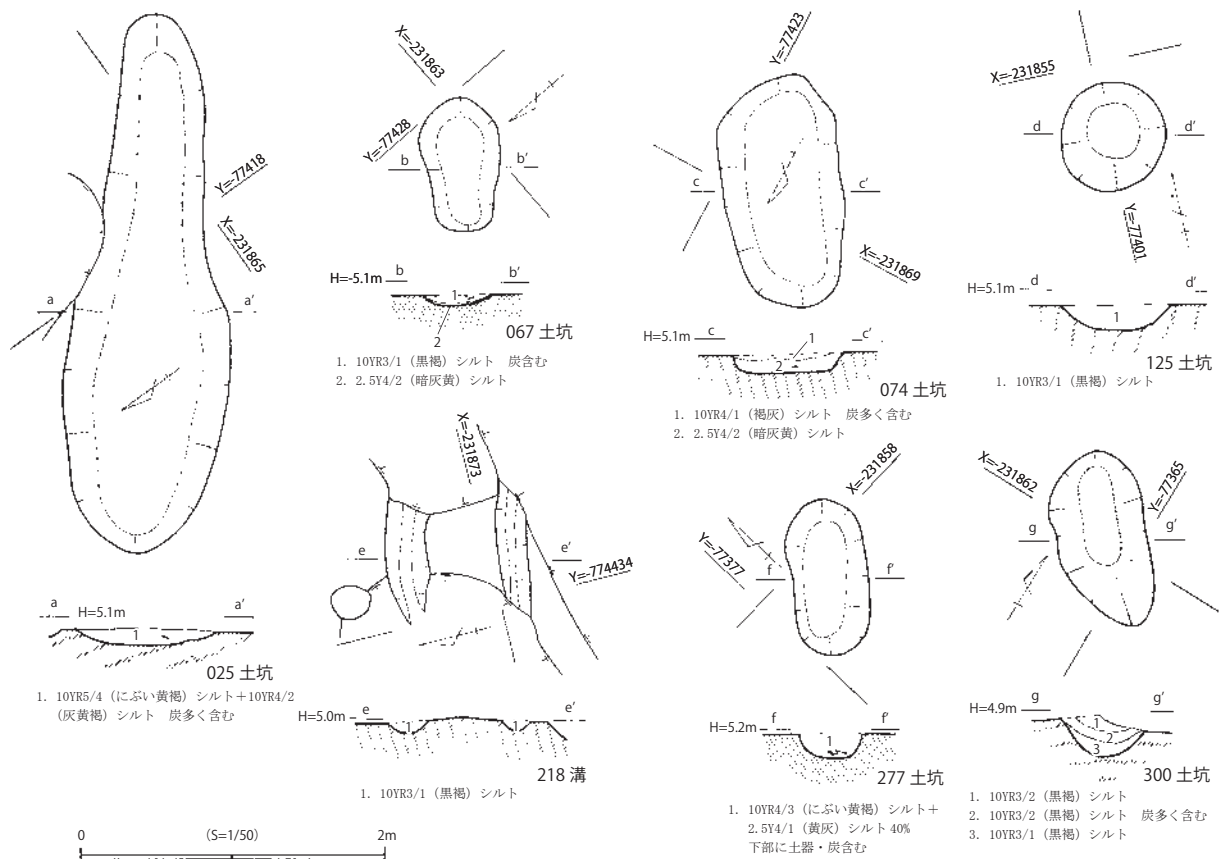


図 22 弥生時代の土坑・溝

068 土坑 (図 23・25・26・30、図版 9・31・32・36)

調査区 1 の北西部で検出した土坑で、067 土坑の南に位置する。005 溝と重複し、それより新しい。平面形状は楕円形を呈し、長さ 1.9 m、幅 0.85 m、深さ 0.3 m を測る。断面の形状は舟底状であるが、東側の壁がややオーバーハングしている。遺物は土坑全体を充填するように弥生土器が出土しており、その量はコンテナ約 6 箱分である。出土した弥生土器には壺 (82～97)・甕 (98)・甕蓋 (99)・高杯 (100～103)・台付壺 (106)・台付鉢 (104・105)・脚台部 (107～110)・鳥形土器 (111) のほか石錘 (S 7) や砥石 (S21) などの礫石器が出土している。

### 074 土坑 (図 22、図版 9)

調査区 1 の中央付近で検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈し、長さ 1.55 m、幅 0.8 m、深さ 0.13 m を測る。断面形状は舟底状を呈する。周辺で検出した 025・067・068 土坑とともに、長軸方向は、005 溝の軸方向とほぼ同じである。遺物は弥生土器壺・甕・高杯が出土している。

### 125 土坑 (図 22)

調査区 1 の北東部で検出した土坑で、028 竪穴建物の北に位置する。平面形状は円形を呈し、直径 0.7 m、深さ 0.17 m を測る。断面の形状は舟底状である。遺物は弥生土器壺・甕などが出土している。

### 277 土坑 (図 22・26・31、図版 36)

調査区 2 の北端付近で検出した土坑で、近接して 270 溝が位置する。平面形状は楕円形を呈し、長さ 1.05 m、幅 0.5 m、深さ 0.17 m を測る。断面の形状は舟底状である。遺物は弥生土器壺・甕 (112)・礫石器 (S22・S23) などが出土している。

### 293 土坑 (図 24・26、図版 9・32・33)

調査区 2 の中央南側で検出した遺構で、後世の遺構により削平されるなど本来の形状は不明である。幅 4.0 m、深さ 0.4 m で、長さ

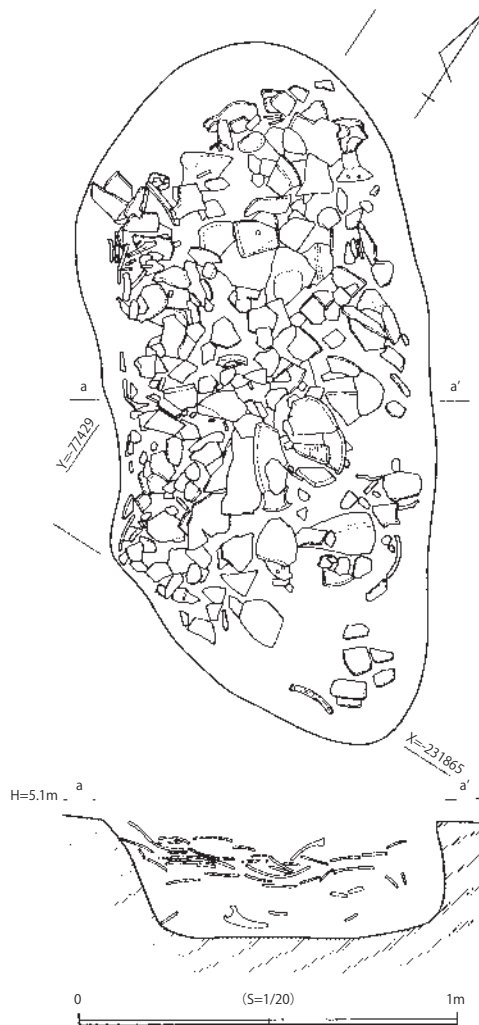


図 23 068 土坑

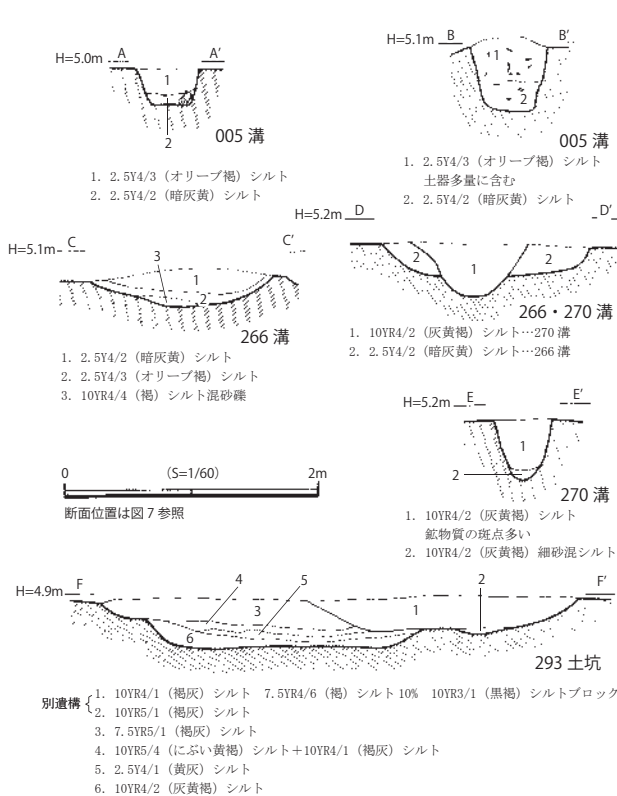


図 24 弥生時代の溝・土坑断面

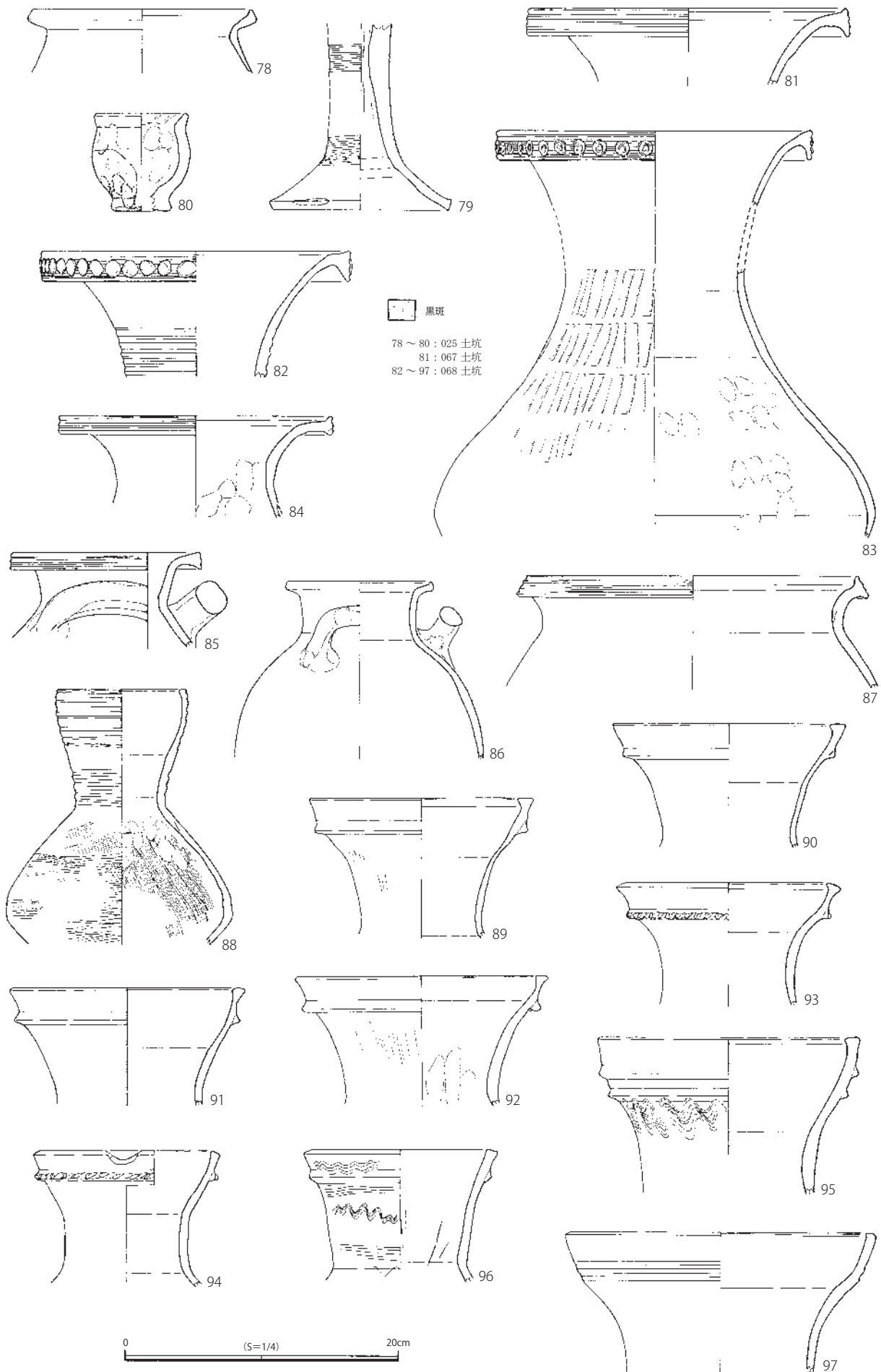


図 25 弥生時代の土坑 出土遺物 (1)



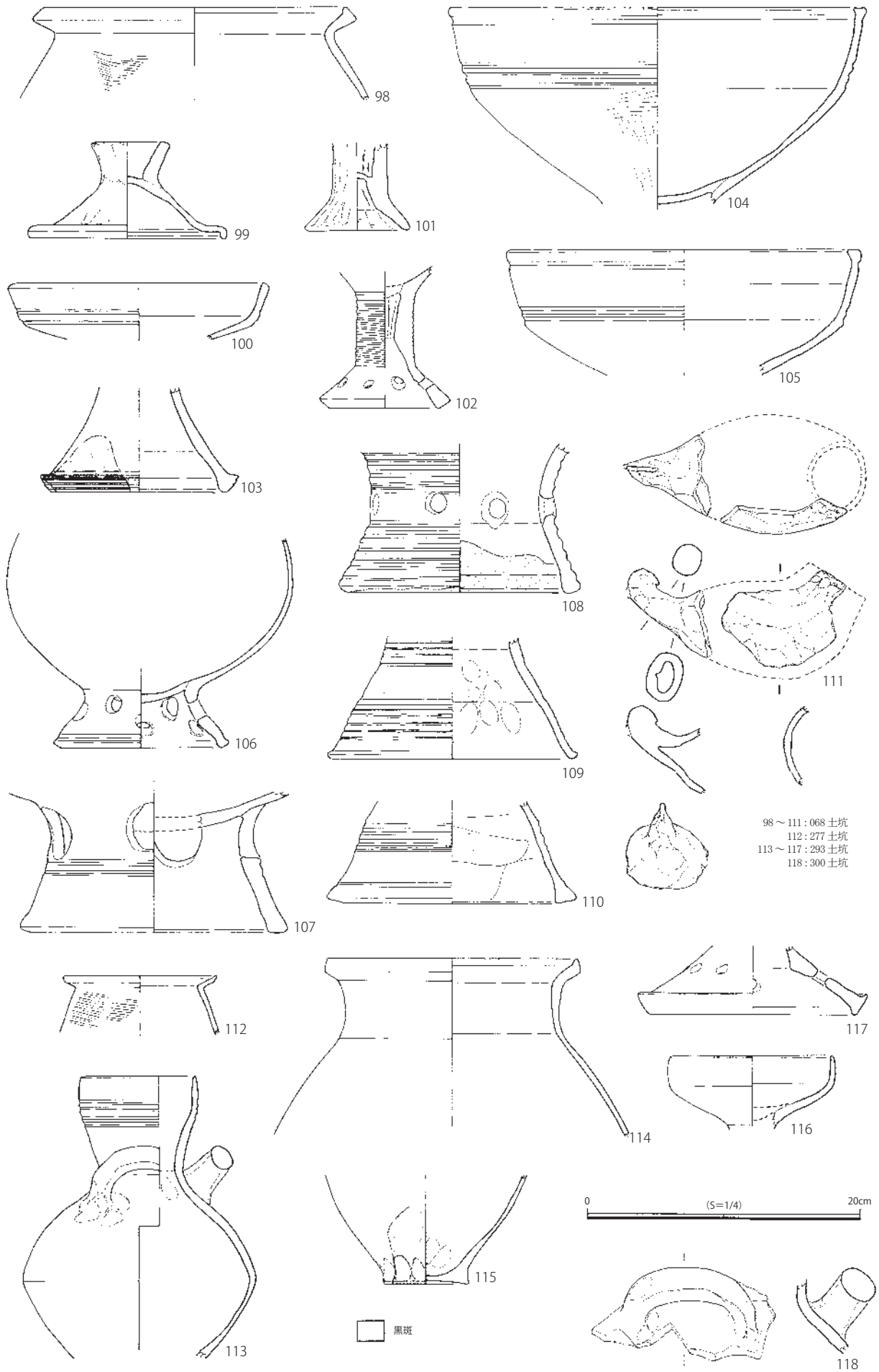


図 26 弥生時代の土坑 出土遺物 (2)

8.0 m以上を測る。土坑としているものの、溝状遺構の可能性もある。断面形状は舟底状を呈する。遺物は弥生土器壺（113・114）・甕・高杯（116・117）、壺または甕底部（115）などが出土している。

### 300 土坑（図 22・26）

調査区 2 の北東部検出した土坑で、近接して 266・270 溝が位置する。平面形状は楕円形を呈し、長さ 1.2 m、幅 0.6 m、深さ 0.26 m を測る。断面の形状は深い舟底状である。遺物は弥生土器壺（118）などが出土している。

## 3. 溝

### 005 溝（図 24・27・28・31、図版 10・33・34・36）

調査区 1 の北西部で検出した溝で、004 竪穴建物と約 1.0 m の間隔をあけて北西－南東方向に延びる。南東端は調査区内で終わり、長さ 15.0 m を確認している。幅 0.5～0.6 m、深さ 0.5 m 前後を測る。068 土坑と接する付近を中心に多量の弥生土器が出土しているが、北西側では希薄となる。出土した土器には壺（119～127）、甕（128～131）、高杯（134～137）、壺または甕底部（132・133）、鉢（138）、脚台部（139・140）、器台（142）、台形土器（143）のほか、礫石器（S24）がある。

### 218 溝（図 22）

調査区 1 の西側で検出した溝状遺構で、並行する 2 本の溝が弧状に延びるが、後世の遺構によって削平され、確認できたのは長さ約 0.8 m である。溝は幅 0.2～0.26 m で、深さ 0.05 m を測る。形状から拡張を伴う建替えを行った竪穴建物の一部である可能性が高い。遺物は溝内や周辺から弥生土器が出土している。

### 266・270 溝（図 24・29、図版 11・34）

調査区 2 の北部で検出したもので、二つの溝は部分的に重複するが、270 溝の方が新しい。270 溝は弧状を描いて北東－南西方向に延び、両端が調査区域外となる。断面形状は U 字状を呈し、幅 0.5 m 前後、深さ 0.3～0.45 m で、調査区内では長さ約 28.0 m を確認している。遺物は溝全体的に出土するのではなく、部分的に集中して出土している。出土した弥生土器には壺（144～151）、甕（152）、

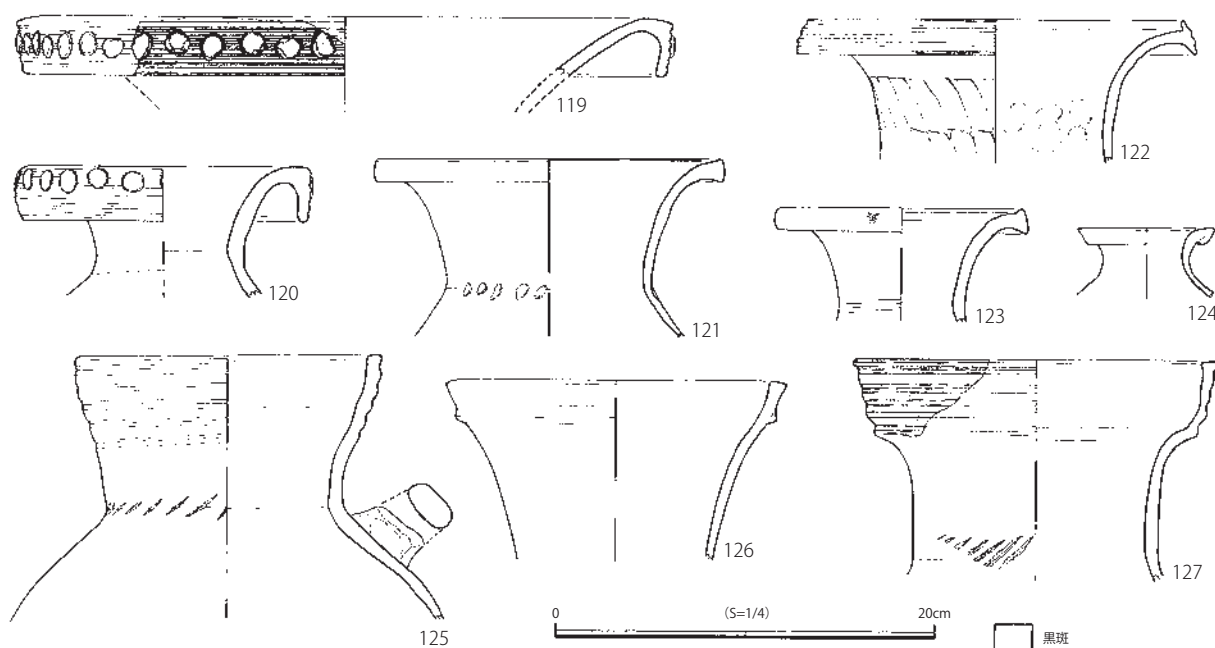


図 27 005 溝 出土遺物 (1)

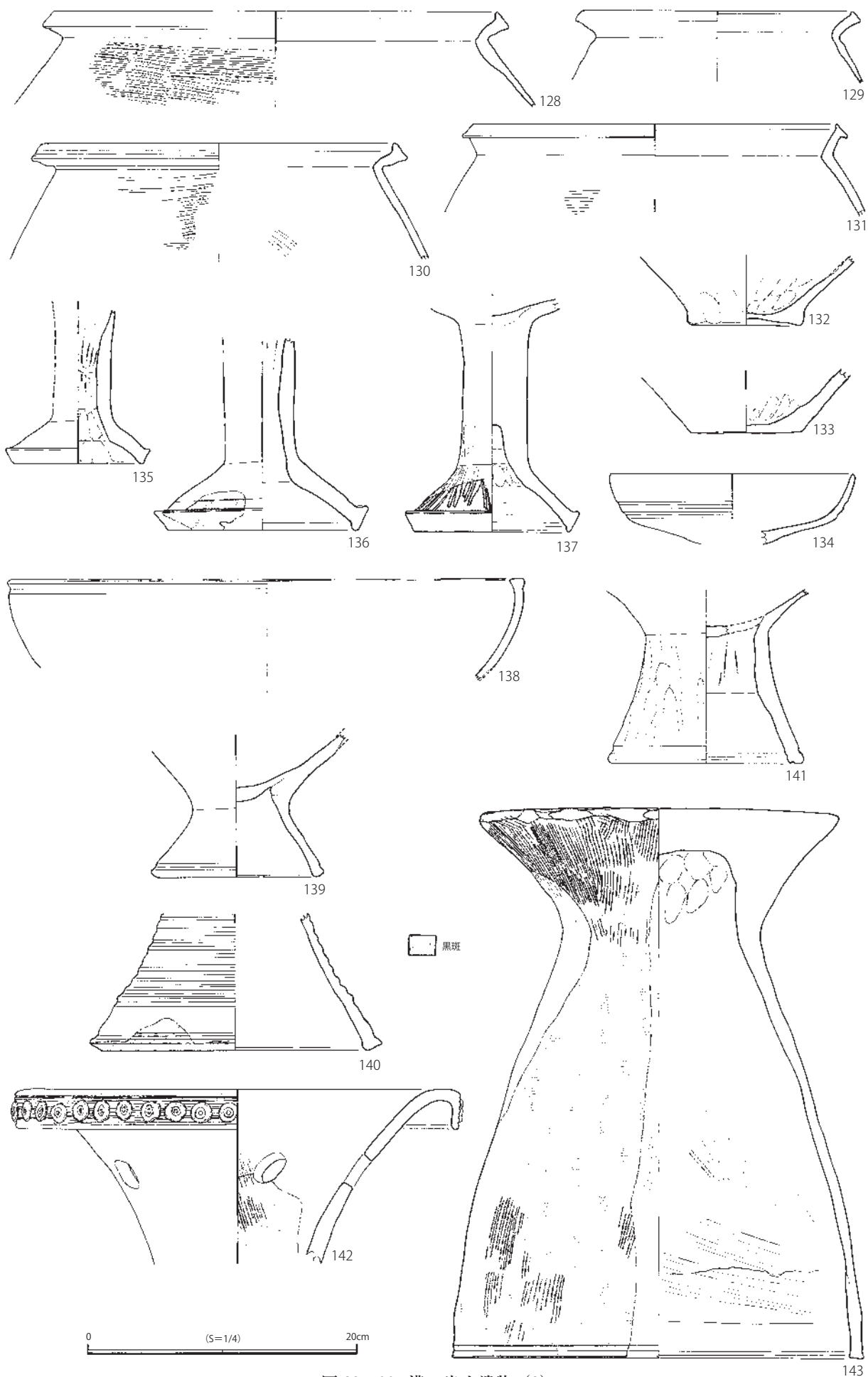


图 28 005 溝 出土遺物 (2)

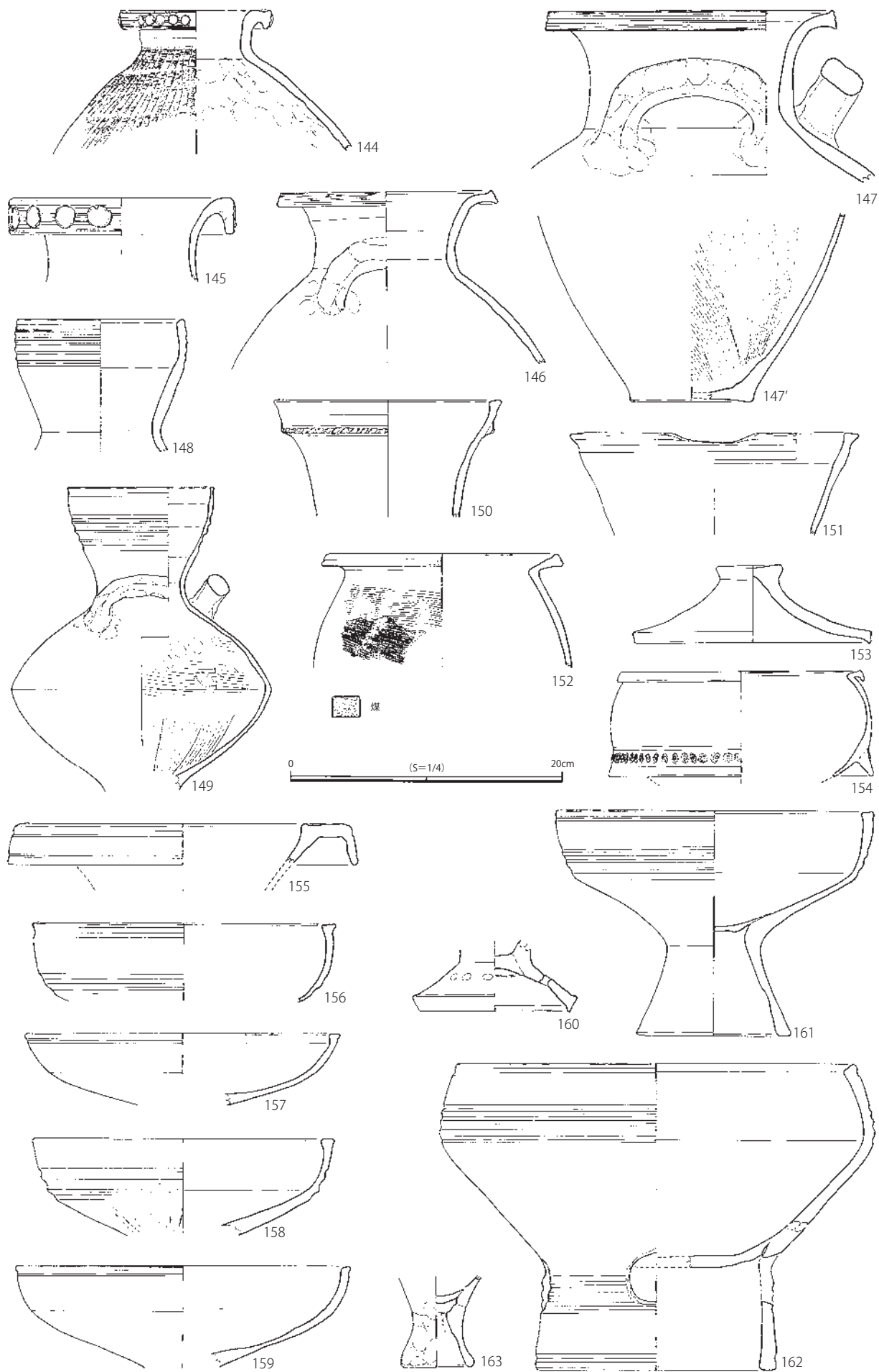


图 29 270 沟 出土遗物



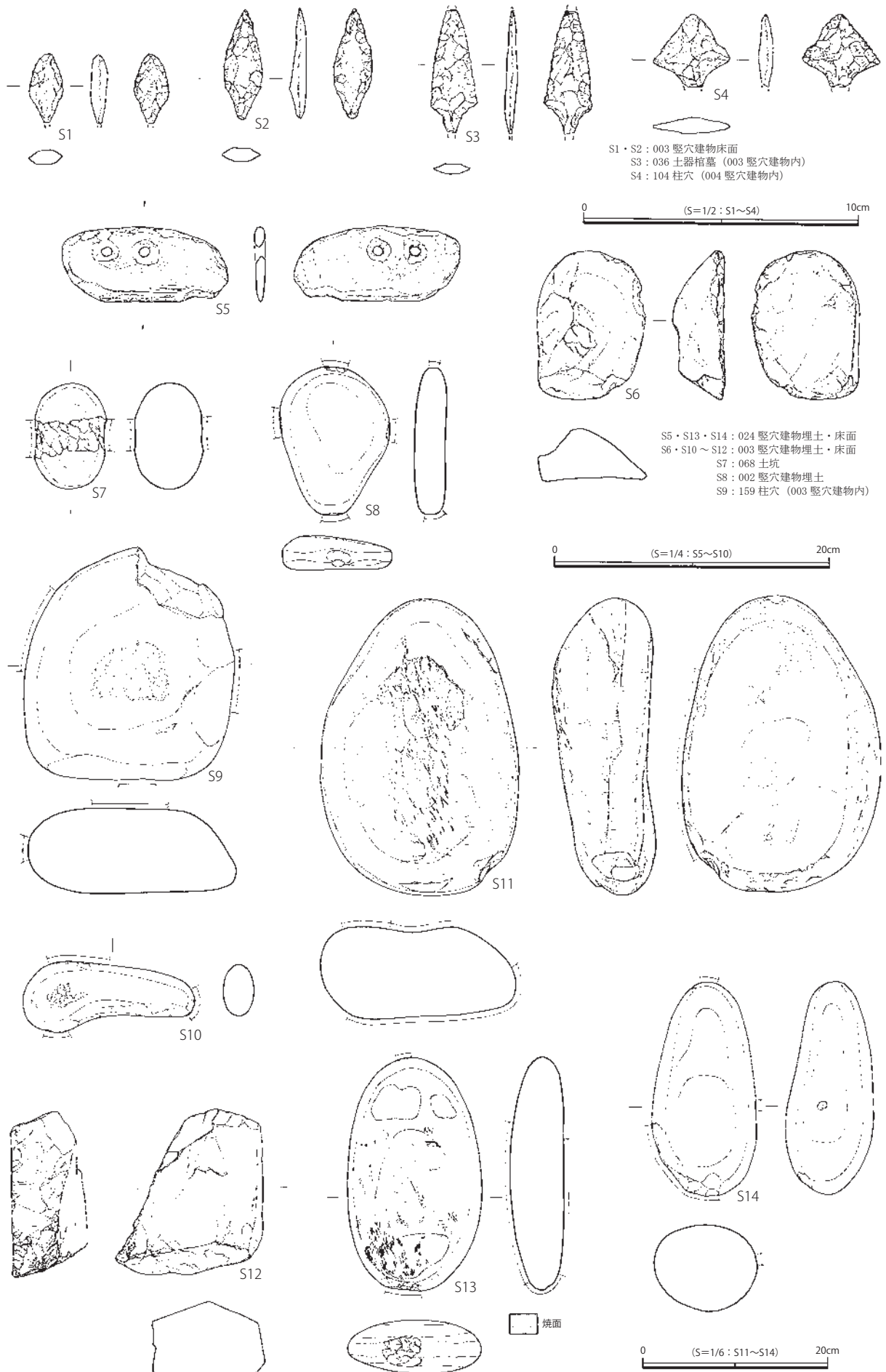


図30 弥生時代の石器（1）

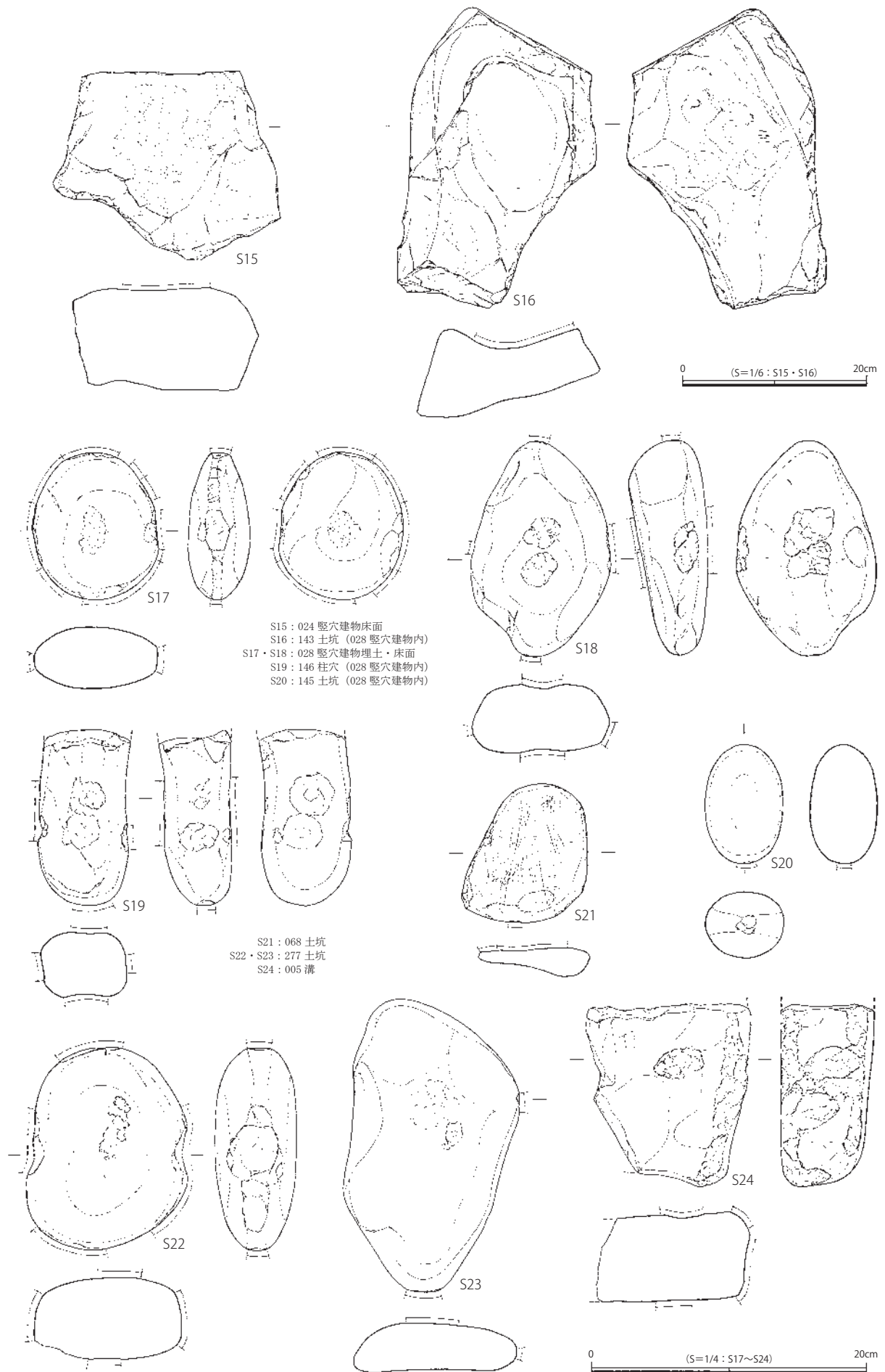


図 31 弥生時代の石器 (2)

甕蓋 (153)、台付無頸壺 (154)、高杯 (155～160)、台付鉢 (161・162) がある。

266 溝は東北東－西南西方向に一直線に伸び、一端は室町時代の 259 堀により削平されるが、さらに東方に伸びていると考えられる。西側は、室町時代の 258 堀により削平され、それより西側は不明であるが、南方に折れて、293 土坑と繋がる可能性も考えられる。断面形状は舟底状を呈し、幅 1.8～2.0 m、深さ 0.2～0.3 m で、長さ 25.0 m 以上伸びている。遺物は弥生土器細片が少量出土している。

二つの溝を境に南東側には弥生時代の遺構が少なく、また地形的には南東方向に徐々に下ることからも、集落を区画する溝であった可能性がある。

### 第3節 古代の遺構と遺物 (図 32)

検出した明確な古代の遺構は、溝 1 条のみである。遺物は、調査区 2 南東部の 260 谷状遺構の底付近から比較的まとまってこの時期の土器や木製品が出土したのをはじめ、後世の遺構へ混入して土器類が出土している。

#### 263 溝 (図 32～34、図版 12・36)

調査区 2 で検出した溝で、北東－南西方向に一直線に伸びる。両端は後世の遺構により削平され、中程でも途切れた状態になっているが、長さ 43.0 m 以上伸び、さらに調査区外に続いていたと考えられる。断面は舟底状を呈し、幅 1.8～2.2 m、深さ 0.2～0.3 m を測る。

遺物は古代の須恵器杯 (164)・甕、土師器皿、製塩土器、蓮華文を有する軒丸瓦 (T 1・T 2)、布目・縄目を有する平瓦 (T 3・T 4)、結晶片岩などが出土する。

#### 260 谷状遺構 (図 34・39、図版 12・36)

調査区 2 の南東部に位置するが、室町時代の 259 堀によって削平され形状等は明らかでない。主に 259 堀底の下部から土師器皿 (165・166)・甕 (167・168)・鍋 (169)・竈 (170)・製塩土器 (171)、須恵器杯・甕 (172)、結晶片岩、木製品 (W 1～W 4) 等が出土している。

#### 原位置を離れた遺物 (図 35、図版 36)

後世の遺構への混入遺物として、土師器杯 (173)、須恵器杯蓋 (174・175)・杯身 (176・177)・壺 (178・179)・甕 (180・181)、平瓦 (T 5～T 9)、丸瓦 (T10)

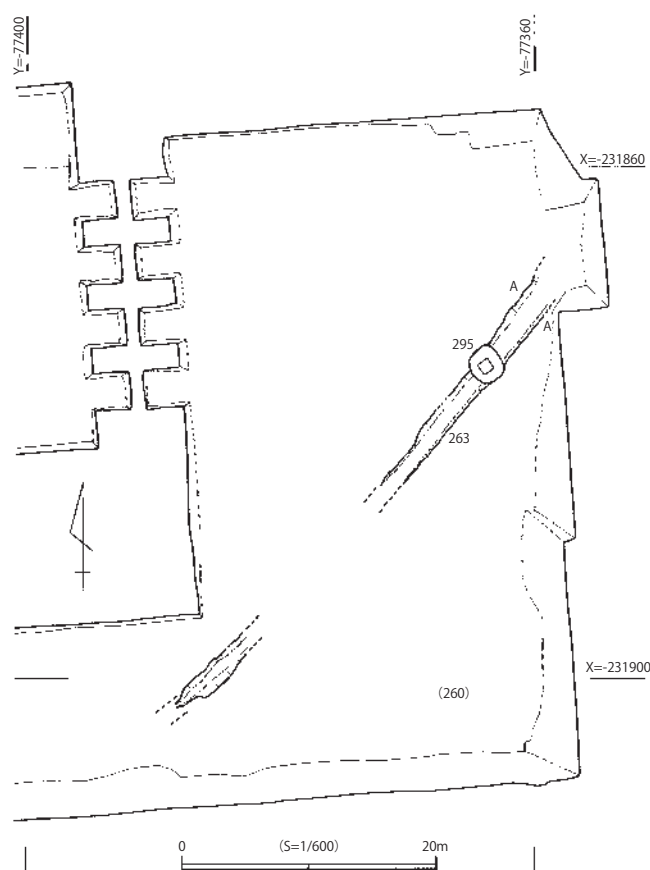


図 32 古代・鎌倉時代の主要遺構

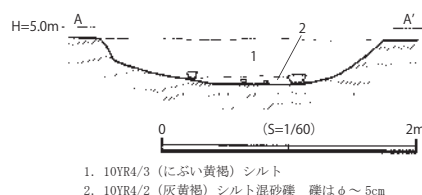


図 33 263 溝断面

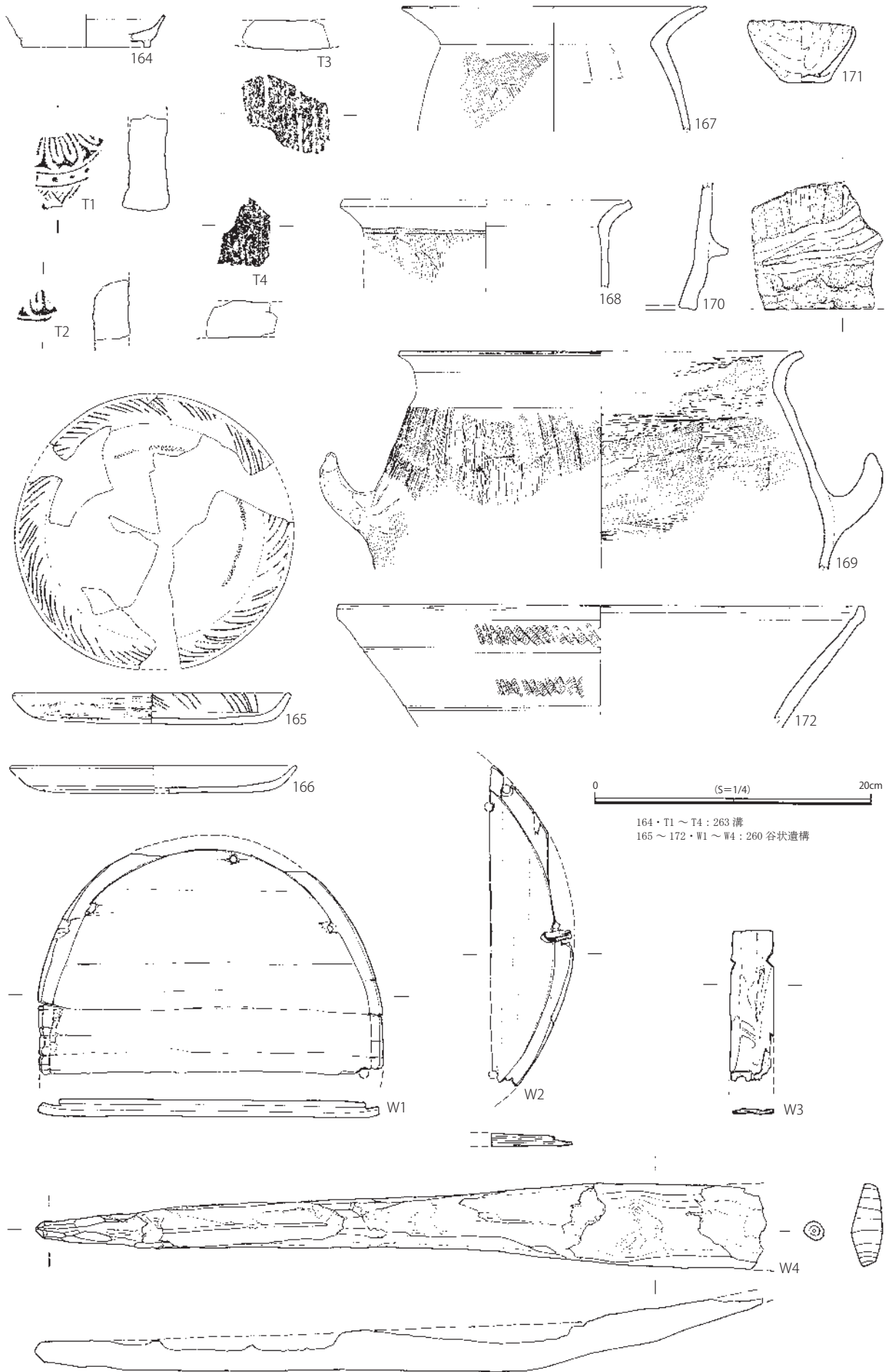


図34 遺構から出土した古代の遺物



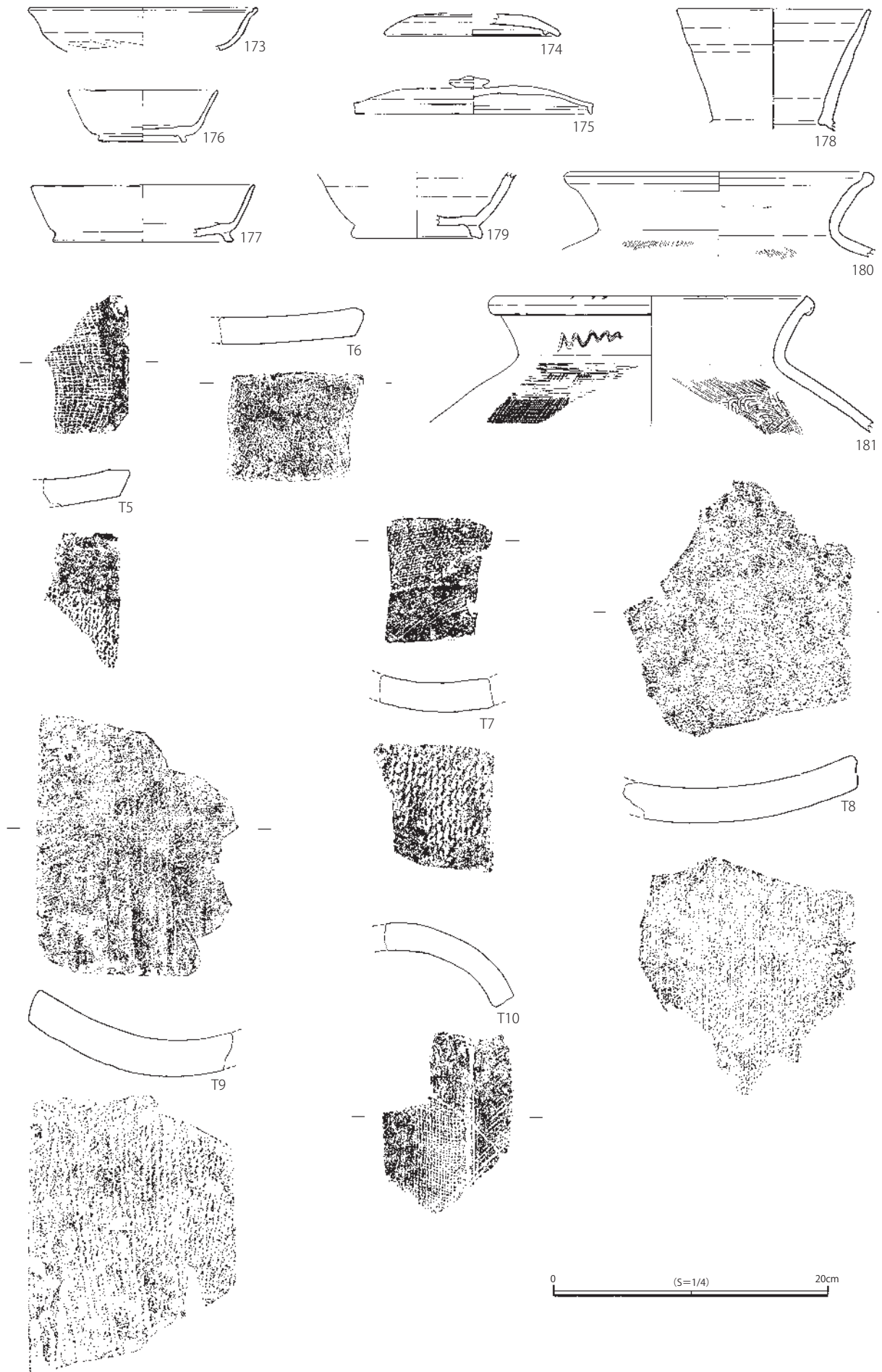


図 35 原位置を離れた古代の遺物

などがある。7世紀から8世紀にかけての遺物である。

#### 第4節 鎌倉時代の遺構と遺物 (図32)

明確な鎌倉時代の遺構は、井戸1基のみである。遺物は調査区2南東部の260谷状遺構の肩部付近から、多量の土器や木製品が出土したのをはじめ、後世の遺構へ混入して土器類が出土している。

##### 295井戸 (図36・37、図版13)

調査区2の北部で検出した板組井戸で、263溝と重複し、それより新しい。井戸側を構築する掘形は平面形状が隅丸方形を呈し、長さ2.65m、幅2.45m、深さ1.9mを測る。井戸側は底付近のみ腐朽した状態で残存していた。構造は幅10～20cm、厚さ1cm程度の板材を立てて一辺0.8mの方形枠を設け、下端(底から0.4m上位)には横方向に角材を当てて固定していた。その下端から下位は枠の幅が一辺0.65mと小さくなり、幅20cm程度の板材を横方向に当てて固定していた。

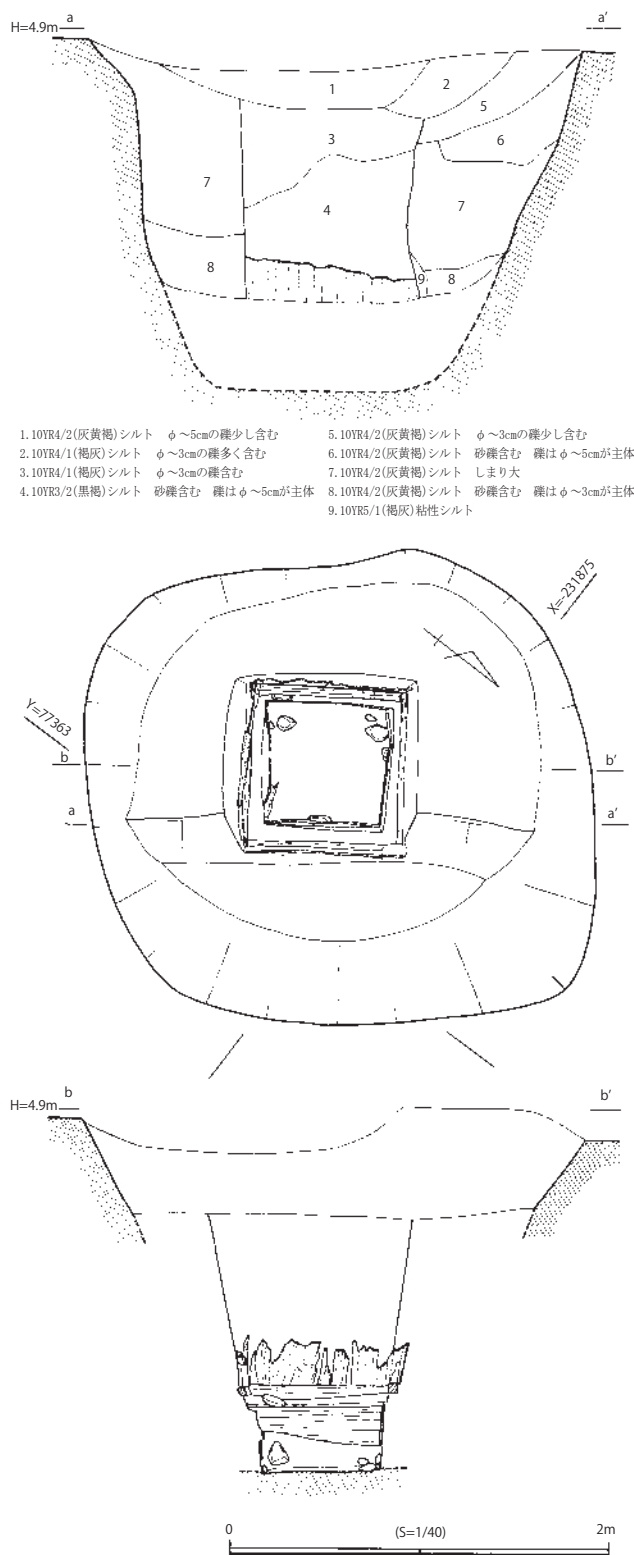
遺物は少なく、掘形や井戸側埋土から瓦器碗(182・183)、土師器の破片が出土している。

##### 260谷状遺構 (図37～39、図版37・38)

調査区2の南東部に位置するが、室町時代の259堀によって大きく削平されている。259堀に削平を免れた西側肩部を中心に土師器小皿(184～196)・皿(197～207)・羽釜、瓦器皿(208～217)・碗(218～229)・小碗(230)、瓦質土器甕(231)、東播系須恵器捏鉢、青磁碗、白磁梅瓶、青白磁杯(232)、砥石(S25)、刀子(M1)、轆の羽口(C1)、木製品折敷(W5・W6)・角塔婆(W7)などが出土している

##### 原位置を離れた遺物 (図37)

後世の遺構への混入遺物として、東播系須恵器捏鉢(233)、滑石製鍋(S26)などが出土している。



- |                    |                 |                     |                 |
|--------------------|-----------------|---------------------|-----------------|
| 1. 10YR4/2(灰黄褐)シルト | φ～5cmの礫少し含む     | 5. 10YR4/2(灰黄褐)シルト  | φ～3cmの礫少し含む     |
| 2. 10YR4/1(褐灰)シルト  | φ～3cmの礫多く含む     | 6. 10YR4/2(灰黄褐)シルト  | 砂礫含む 礫はφ～5cmが主体 |
| 3. 10YR4/1(褐灰)シルト  | φ～3cmの礫含む       | 7. 10YR4/2(灰黄褐)シルト  | しまり大            |
| 4. 10YR3/2(黒褐)シルト  | 砂礫含む 礫はφ～5cmが主体 | 8. 10YR4/2(灰黄褐)シルト  | 砂礫含む 礫はφ～3cmが主体 |
|                    |                 | 9. 10YR5/1(褐灰)粘性シルト |                 |

図36 295井戸

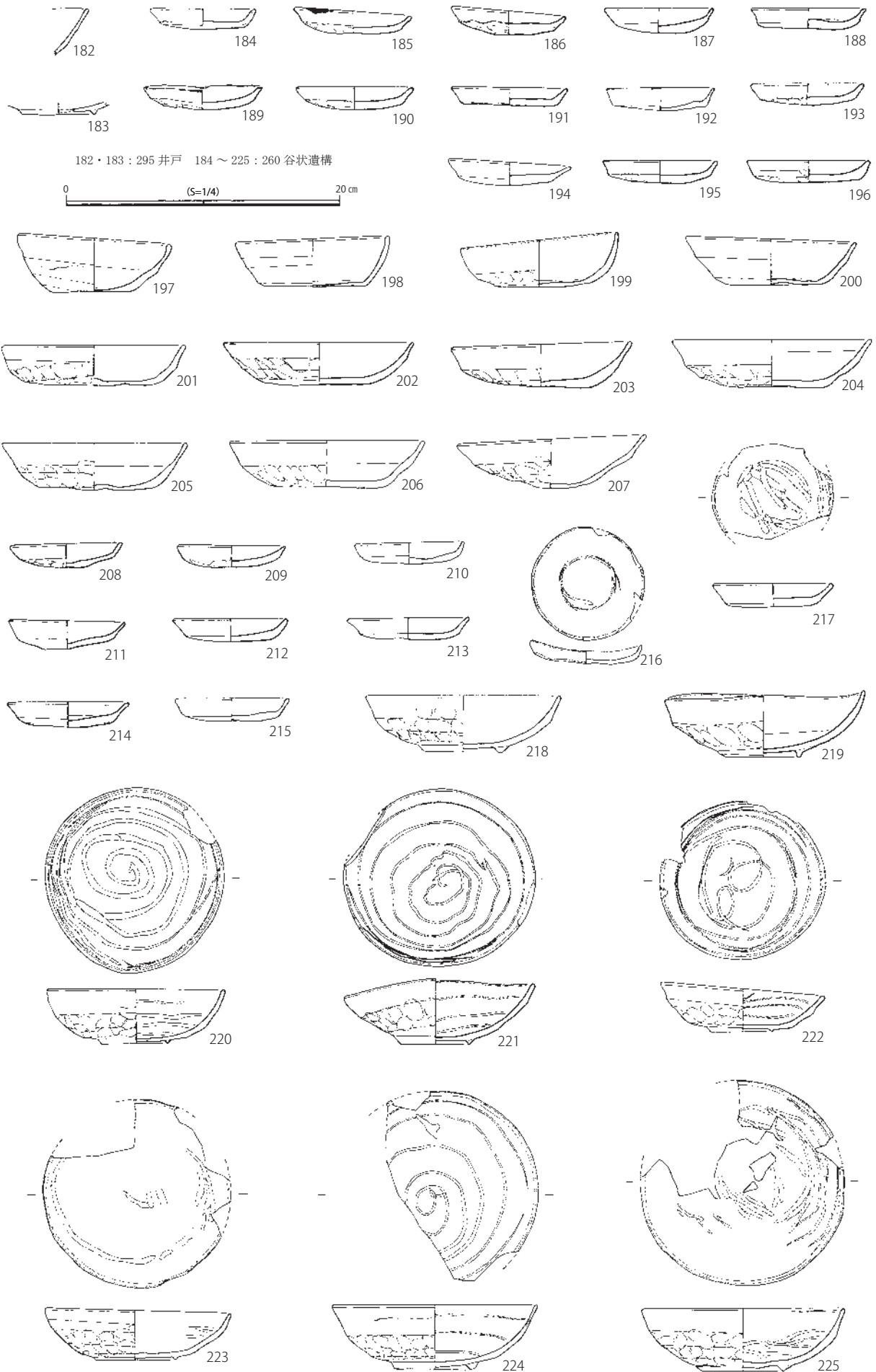


図 37 鎌倉時代の遺物 (1)

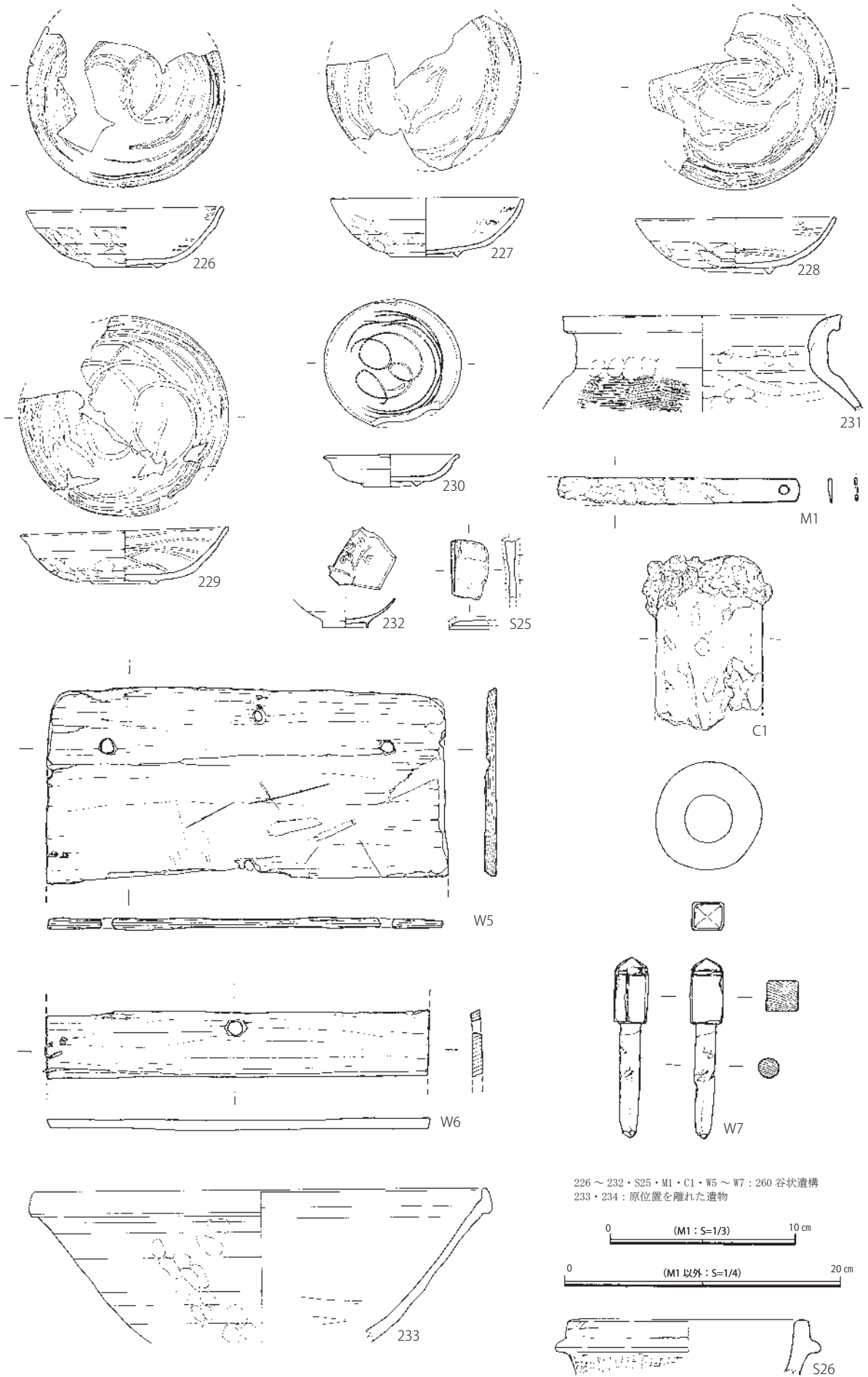
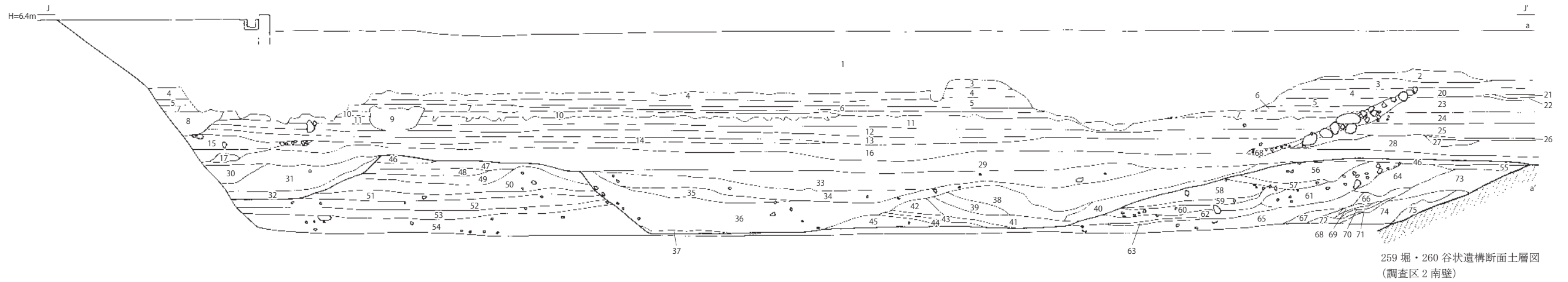


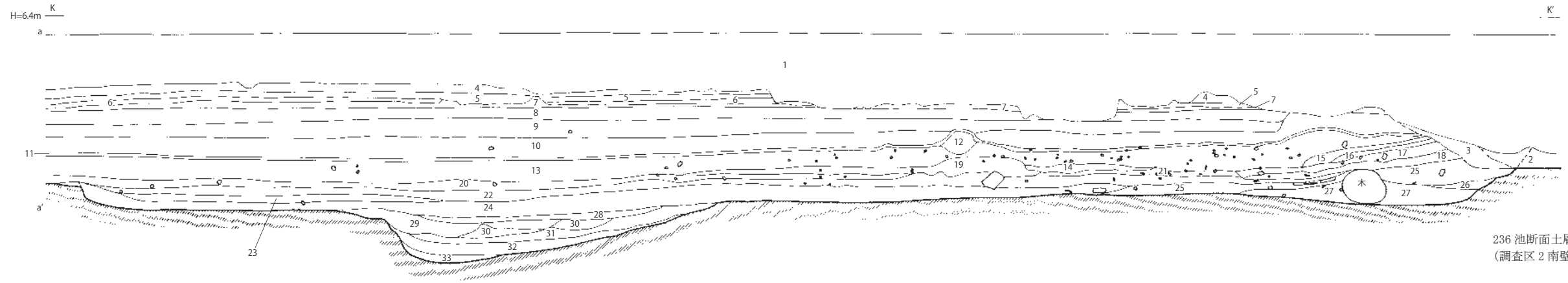
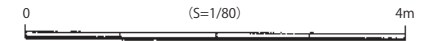
図 38 鎌倉時代の遺物 (2)





259 堀・260 谷状遺構断面土層図  
(調査区 2 南壁)

- |  |   |  |   |   |
|--|---|--|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 盛土</li> <li>2. 7.5YR4/1(褐灰) シルト</li> <li>3. 10YR5/1(褐灰) 細砂混シルト</li> <li>4. 10YR5/2(灰黄褐) 細砂混シルト</li> <li>5. 10YR5/1(褐灰) 細砂混シルト</li> <li>6. 10YR5/2(灰黄褐) 細砂混シルト</li> <li>7. 10YR5/2(灰黄褐) シルト混細砂</li> <li>8. 10Y4/1(灰) シルト</li> <li>9. 砂礫</li> <li>10. 10Y4/1(灰) 細砂</li> <li>11. 2.5Y4/1(黄灰) シルト</li> <li>12. 10Y4/1(灰) シルト</li> <li>13. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト 鉄分沈殿多い</li> <li>14. 10Y4/1(灰) シルト φ~2cmの礫多い</li> <li>15. 2.5Y4/1(黄灰) シルト 1~10cm大の礫多い</li> <li>16. 5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>17. 5GY4/1(暗オリーブ灰) 細砂混シルト</li> <li>18. 2.5Y4/1(黄灰) シルト φ~5cm前後の礫非常に多い<br/>石垣の下部に流れ込んだ層位</li> <li>19. 2.5Y4/1(黄灰) シルト 石垣間の層位</li> <li>20. 5Y5/1(褐灰) 細砂混シルト</li> <li>21. 5Y5/1(褐灰) 細砂混シルト 20層より細砂の混入多い</li> <li>22. 5Y4/1(灰) シルト</li> <li>23. 5Y4/1(灰) シルト 鉄分沈殿多い</li> <li>24. 2.5Y4/1(黄灰) シルト</li> <li>25. 10YR4/1(褐灰) シルト φ~10cmの礫・焼土多い</li> <li>26. 7.5YR(明褐) シルト φ~2cmの礫多い 鉄分沈殿多い</li> <li>27. 10YR4/1(褐灰) シルト</li> <li>28. 5Y4/1(灰) シルト 焼土・炭・φ~20cmの礫多い</li> <li>29. 5Y4/1(灰) +7.5Y5/2(灰オリーブ) シルトのブロック 10%</li> <li>30. 5B4/1(暗青灰) シルト</li> <li>31. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) 粘性シルト</li> <li>32. 5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト 有機物多い</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>33. 10Y4/1(灰) シルト</li> <li>34. 5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>35. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>36. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト 細砂含む 有機物多い</li> <li>37. 5GY3/1(暗オリーブ灰) シルト混細砂</li> <li>38. 7.5GY4/1 (暗緑灰) シルト 7.5Y4/2(灰オリーブ) シルトのブロックあり</li> <li>39. 5G4/1(暗緑灰) シルト</li> <li>40. 5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>41. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>42. 5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト 有機物多い</li> <li>43. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) 細砂混シルト</li> <li>44. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰) 細砂混シルト</li> <li>45. 5GY3/1(暗オリーブ灰) 細砂混シルト</li> <li>46. N4(灰) シルト</li> <li>47. 5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>48. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) 細砂混シルト</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>49. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰) 細砂混シルト 有機物多い</li> <li>50. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>51. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>52. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>53. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>54. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰) シルト φ~20cmの礫多い</li> <li>55. 5GY4/1(暗オリーブ灰) 砂礫混シルト 礫はφ~3cm</li> <li>56. 7.5Y4/1(灰) 粗・細砂混シルト</li> <li>57. 10Y3/1(オリーブ黒) シルト混細砂</li> <li>58. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰) シルト混細砂 φ~3cmの礫・有機物多い</li> <li>59. 5GY4/1(暗オリーブ灰) 粗砂混シルト</li> <li>60. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰) シルト混砂礫 礫はφ~10cm</li> <li>61. 10Y4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>62. 5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>63. 5GY4/1(暗オリーブ灰) 細砂混シルト</li> <li>64. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>65. 10Y3/1(オリーブ黒) 細砂混シルト 木片等有機物・土器類多い</li> <li>66. 5GY4/1(暗オリーブ灰) 細砂混シルト</li> <li>67. 5GY3/1(暗オリーブ灰) 細砂とシルトが細かく互層になる</li> <li>68. N3/(灰) 細砂</li> <li>69. 5Y4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>70. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト混細砂</li> <li>71. 5G4/1(暗緑灰) シルト</li> <li>72. 5GY4/1(暗オリーブ灰) シルト</li> <li>73. 7.5GY3/1(暗緑灰) 細砂混シルト</li> <li>74. 2.5GY2/1(黒) 粘性シルト</li> <li>75. 10Y5/2(灰オリーブ) 粘性シルト</li> </ul> <p>46層以下が260谷状遺構 67層までが鎌倉時代以降</p> |
|--|---|--|---|---|



236 池断面土層図  
(調査区 2 南壁)

- |   |  |   |  |
|---|--|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 盛土</li> <li>2. N4/(灰) 粘性シルト 昭和期の池底堆積土</li> <li>3. N4/(灰) 砂礫混シルト 昭和期の池斜面堆積土</li> <li>4. 5Y5/2(灰オリーブ) 細砂</li> <li>5. 5Y5/1(褐灰) 細砂混シルト</li> <li>6. 5Y5/1(褐灰) 細砂混シルト 5層より細砂多い</li> <li>7. 5Y4/1(灰) シルト</li> <li>8. 5Y4/1(灰) シルト 鉄分沈殿多い</li> <li>9. 2.5Y4/1(黄灰) シルト</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>10. 10YR4/1(褐灰) シルト φ~10cmの礫・焼土多い</li> <li>11. 7.5YR(明褐) シルト φ~2cmの礫多い 鉄分沈殿多い</li> <li>12. 5Y5/1(灰) シルト</li> <li>13. 5Y4/1(灰) シルト 焼土・炭・φ~20cmの礫多い</li> <li>14. 7.5Y5/2(灰オリーブ) シルト</li> <li>15. 5Y4/1(灰) シルト 10Y4/2(オリーブ灰) シルトのブロックあり<br/>炭・焼土多い</li> <li>16. 5Y3/1(オリーブ黒) シルト</li> <li>17. 10Y4/1(灰) シルト 10Y4/2(オリーブ灰) シルトのブロックあり<br/>φ~10cmの礫・炭・有機物多い</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>18. 10Y3/1(オリーブ黒) シルト 粗砂混シルト 焼土含む 遺物多い</li> <li>19. 5Y4/1(灰) シルト 7.5Y5/2(灰オリーブ) シルトのブロック 10%</li> <li>20. 5Y4/1(灰) シルト</li> <li>21. 7.5Y4/1(灰) 粘性シルト φ~10cmの礫多い</li> <li>22. 10Y4/1(灰) 粘性シルト φ~10cmの礫・木片等有機物多い</li> <li>23. 10Y4/1(灰) 粘性シルト</li> <li>24. 7.5Y4/1(灰) 粘性シルト 木片等有機物多い</li> <li>25. 10Y4/1(灰) シルト 10Y4/2(オリーブ灰) シルトのブロックあり<br/>φ~10cmの礫・粗砂・炭・焼土含む 木片等有機物・土器等多量に含む</li> <li>26. 10Y4/1(灰) シルト φ~3cmの礫・細砂含む</li> <li>27. 2.5GY3/1(暗オリーブ灰) シルト混細砂 木片等有機物含む</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>28. 2.5Y4/1(黄灰) 細砂混シルト</li> <li>29. 2.5Y4/1(黄灰) 砂礫混シルト 礫はφ~3cm</li> <li>30. 2.5GY4/1(暗オリーブ灰) 粘性シルト</li> <li>31. 7.5Y3/1(オリーブ黒) 粘性シルト 木片等有機物多い</li> <li>32. 7.5Y3/1(オリーブ黒) 粘性シルトが数cmと1cm程度の有機物の層が互層となる</li> <li>33. 5Y4/1(灰) シルト+砂礫 礫はφ~3cm</li> </ul> |
|---|--|---|--|

図 39 調査区 2 南壁断面

## 第5節 室町時代の遺構と遺物 (図40)

検出した遺構には、堀5本(001・019・027・258・259)、井戸7基(008・026・048・070・131・261・268)、池1面(236)のほか、027堀内に築かれた石垣、001堀・259堀内の橋脚遺構などがある。また、調査区2の南東隅で検出した遺構262は、極一部で詳細は明らかでないが、堀の可能性も考えられる。

遺物は堀や池などから、土師器をはじめ国産陶器・輸入陶磁器・金属製品・石製品・木製品・瓦などが多量に出土している。

なお、遺構の名称で、溝と堀とは区別せず、幅、深さなどの規模にかかわらずすべて堀の名称を使用している。

### 1. 堀

#### 001堀(図41～49・80～82、図版14・15・39～44・53)

調査区1南西部・調査区2西部で検出した堀で、019堀と重複し、それより新しい。また、027堀と繋がっているが、併存時期はあったと考えられるものの、消長は同じでない。再掘削されることで大きく新(001-b)・旧(001-a)の2時期に分かれる。ただ、屈曲部から南側では、再掘削の状況が明確でない。基本的には古い時期の堀の方が幅が広く、逆に新しい堀の方がやや深く掘削されている。調査区1内で屈曲し西方は調査区域外に延び、南は調査区2で236池と繋がる。総延長60m以上にわたって検出した。規模は001-aで幅5.0～6.0m、001-bで約4.0m、

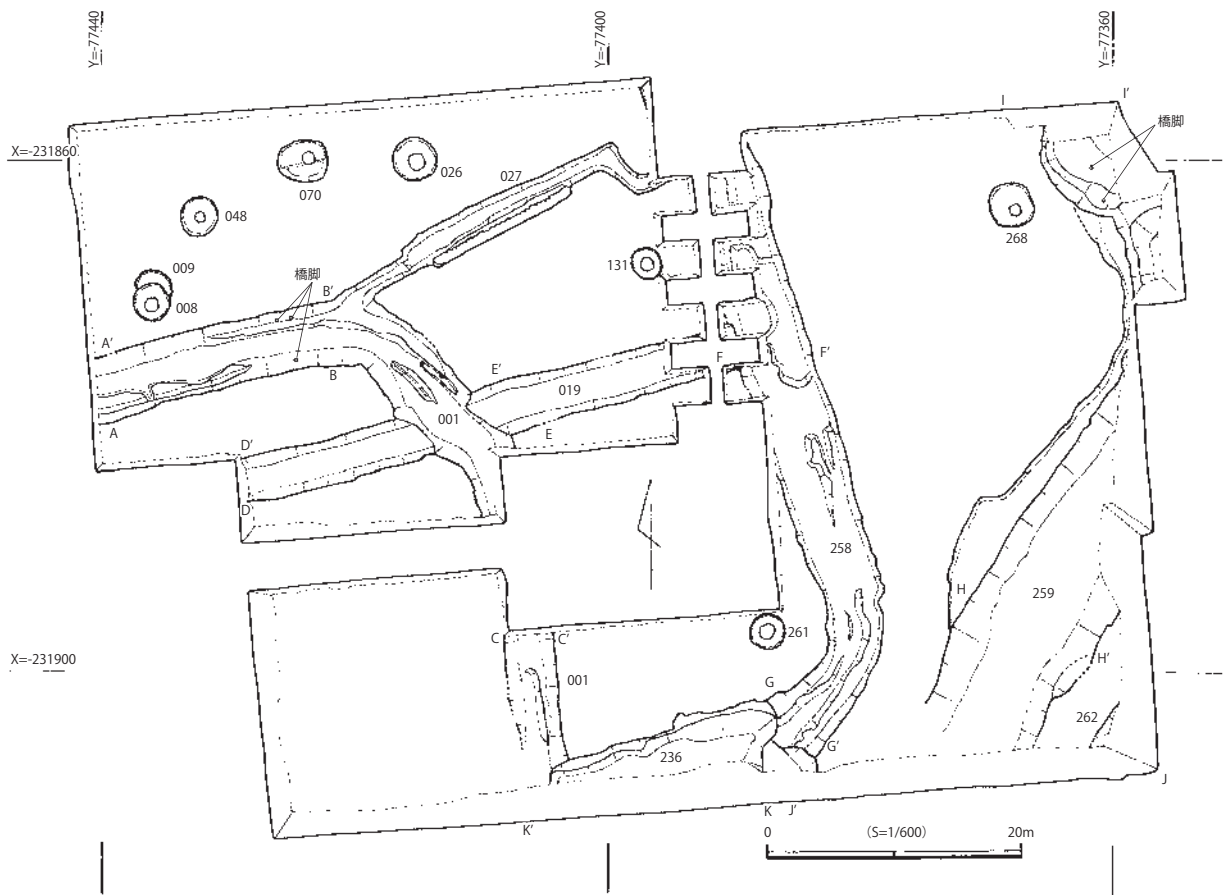


図40 室町時代の主要遺構

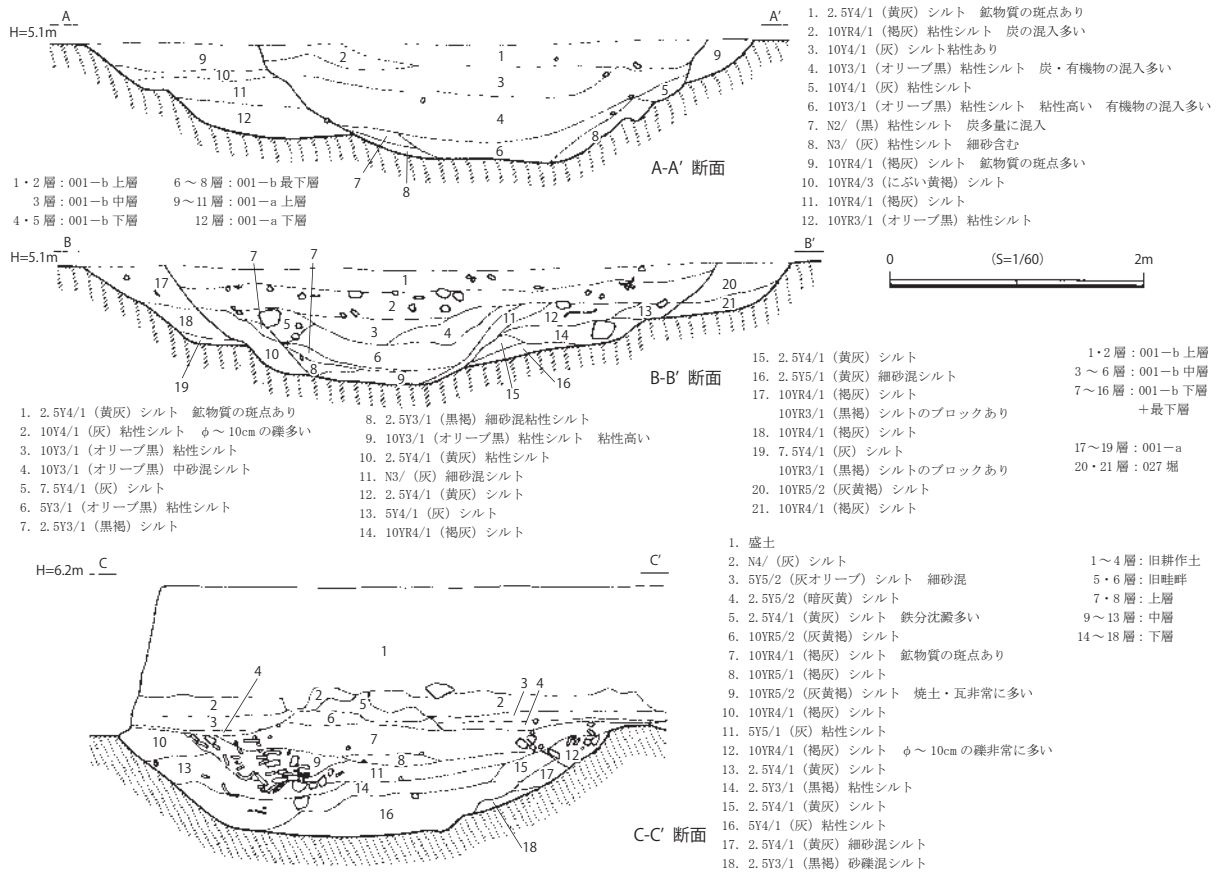


図 41 001 堀断面

深さ 0.8 ~ 1.2 m である。1986 年度調査の III 区で検出された SD001、1987 年度調査の I 区で検出された溝、1995 年度調査で検出された堀 22 などと遺物や堆積状況が似通っていることから一連の堀であると考えられ、それらの位置関係から方形区画を巡る堀であった可能性が高い。

調査区 1 の屈曲部西側付近の堀内南壁では直径 20cm の柱が残り、それと対応する北壁にも柱穴 2 個が検出できた。南壁には 1 個しか確認できないものの、堀と直交する方向で位置していることから橋脚であると判断でき、方形区画内に渡る橋が架けられていたと考えられる。また、屈曲部付近では直径 10 cm 程度の杭が乱杭状に 10 数本打ち込まれていたが、用途は明らかでない。

このほか、調査区 1 の北肩付近からは、多量の土師器皿が出土しており (図 43)、完形

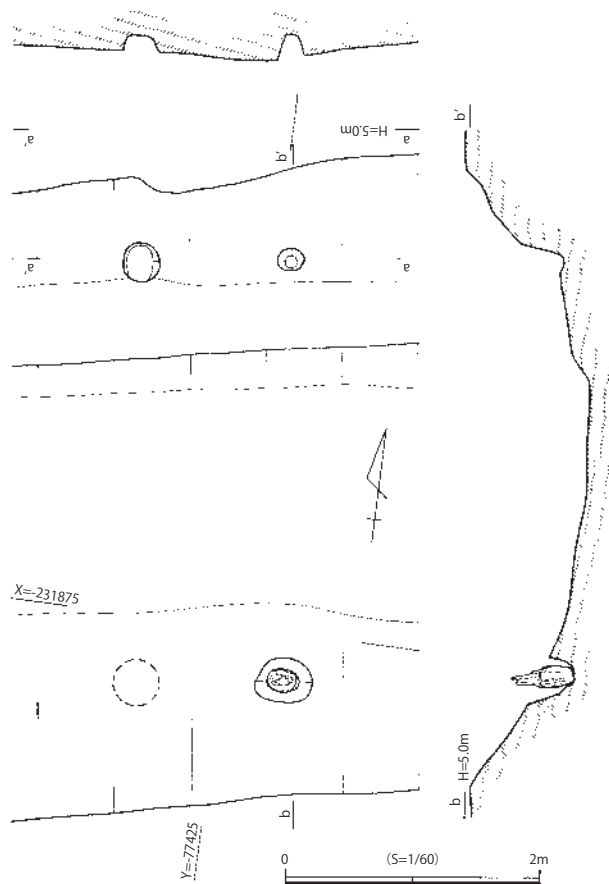


図 42 001 堀内橋脚遺構

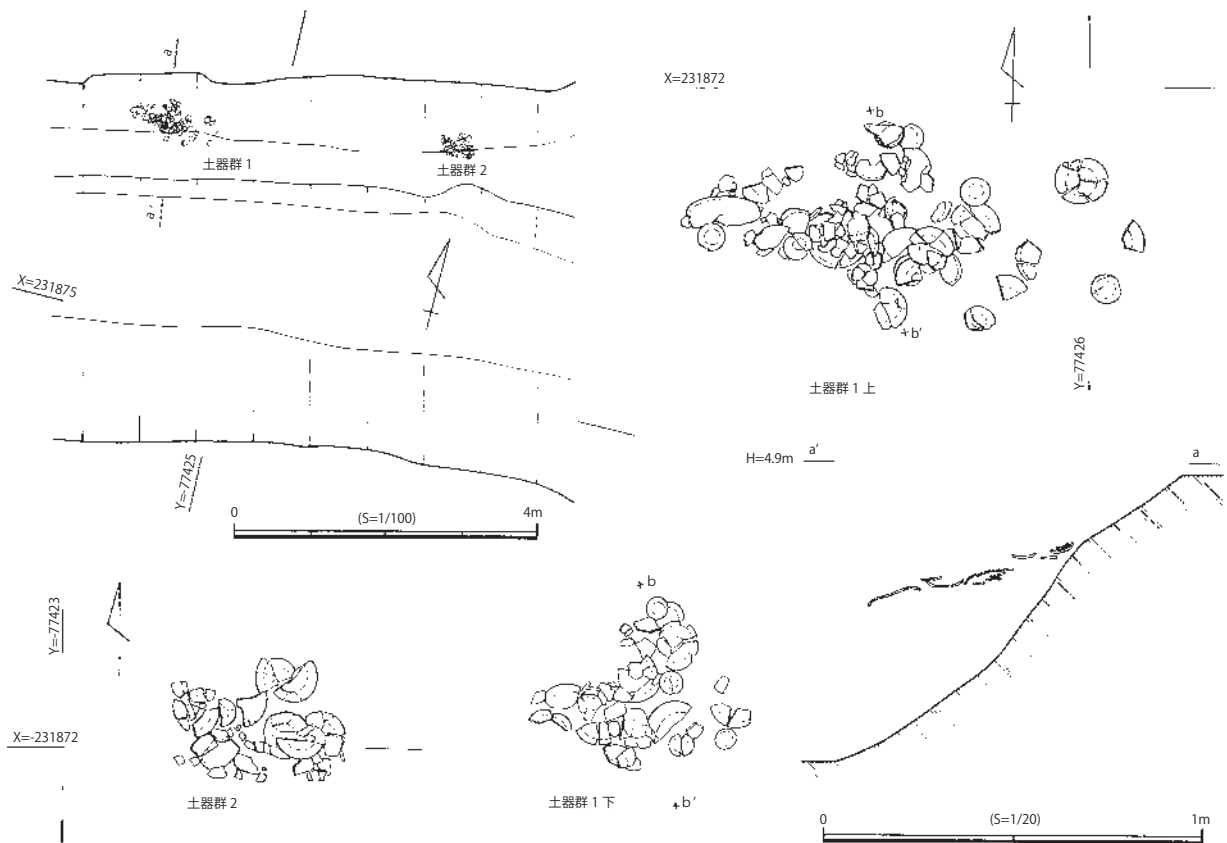


図 43 001 堀内土師器皿出土状況

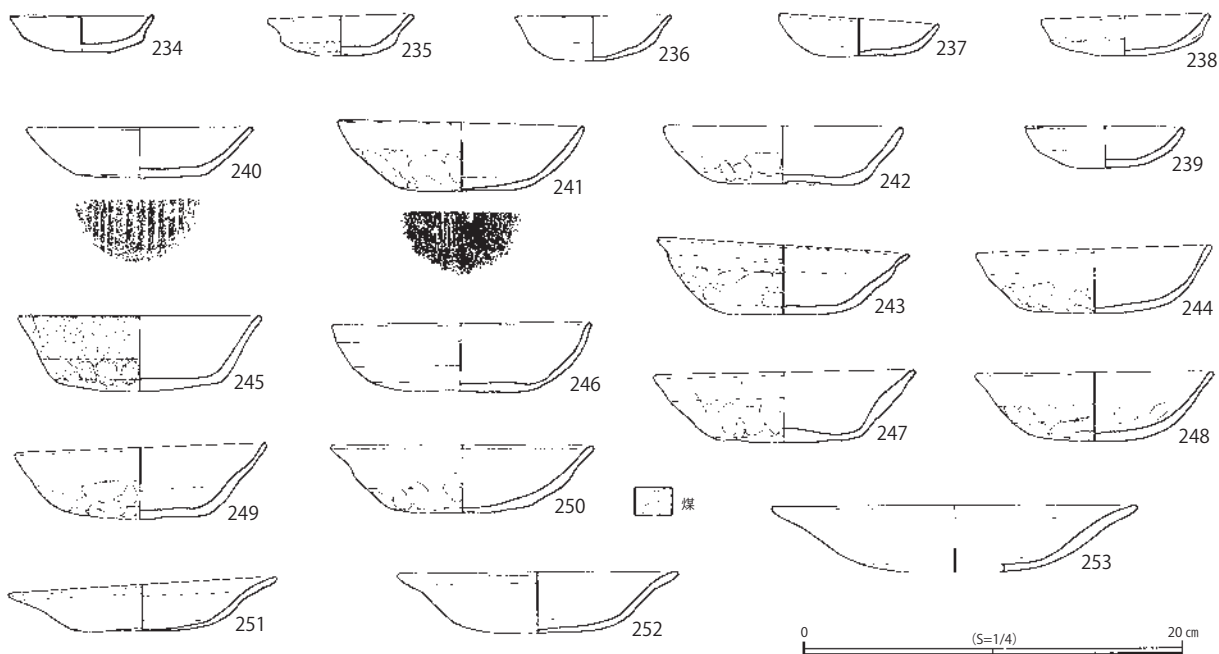


図 44 001 堀 出土遺物 (1)

品が多いことなどからも、儀式などに使ったあとで一括投棄された可能性がある。

遺物のうち土器類には、土師器皿 (234 ~ 324)・土釜 (325 ~ 329)・焙烙 (330・331)、瓦質土器羽釜 (332・333)・甕 (334)・火鉢 (335 ~ 337)、瀬戸美濃系陶器天目茶碗 (338 ~ 341)・灰釉皿 (342 ~ 344)・灰釉花瓶 (345)、備前焼播鉢 (346 ~ 351)・甕 (352 ~ 357)・壺、朝鮮製焼締陶器小壺 (358)、中国製青磁碗 (359 ~ 370)・皿 (371・372)・盤 (373・374)、鉢 (375)、



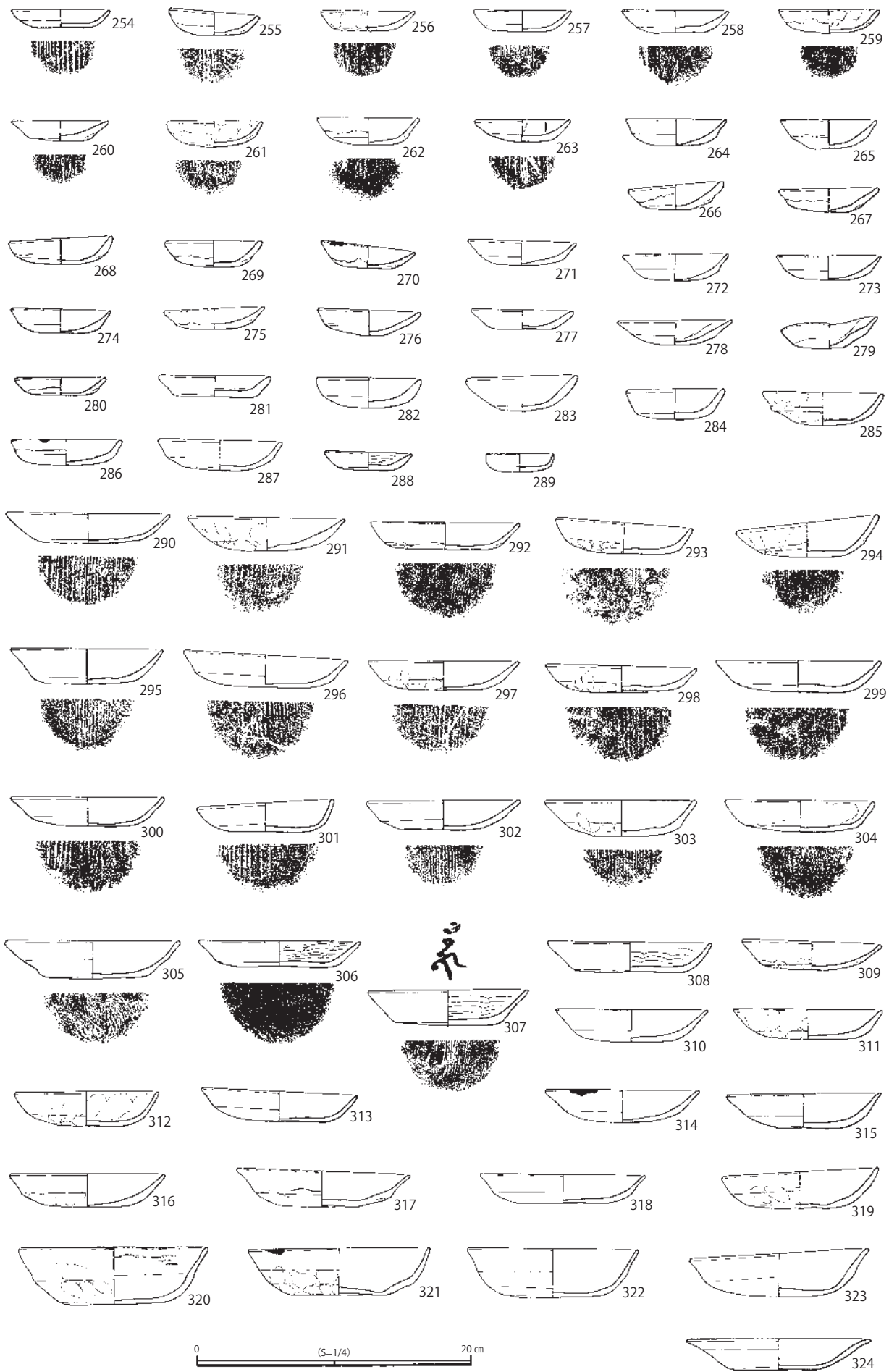


图 45 001 掘 出土遺物 (2)

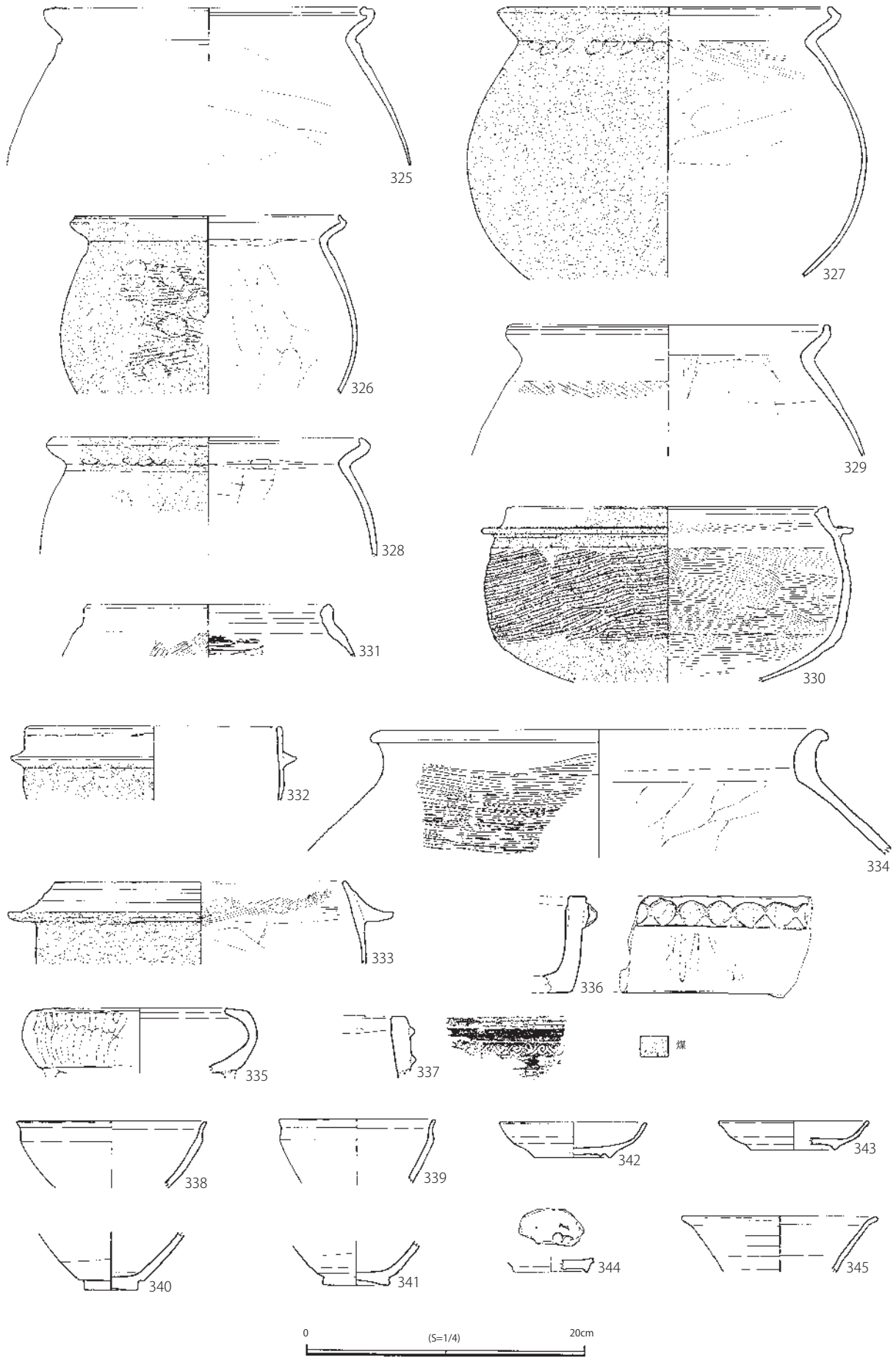


图 46 001 堀 出土物(3)

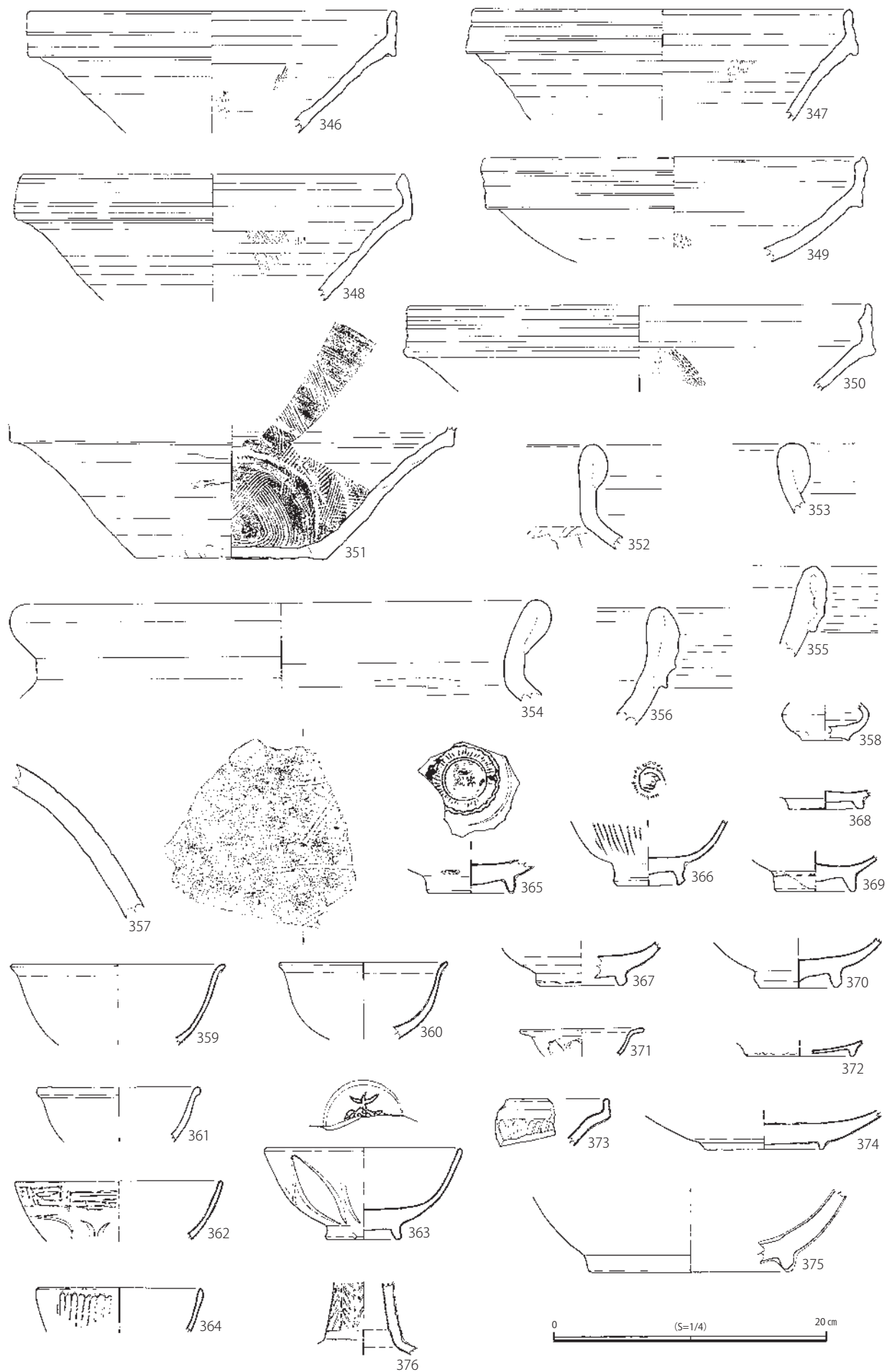


图 47 001 掘 出土遺物 (4)

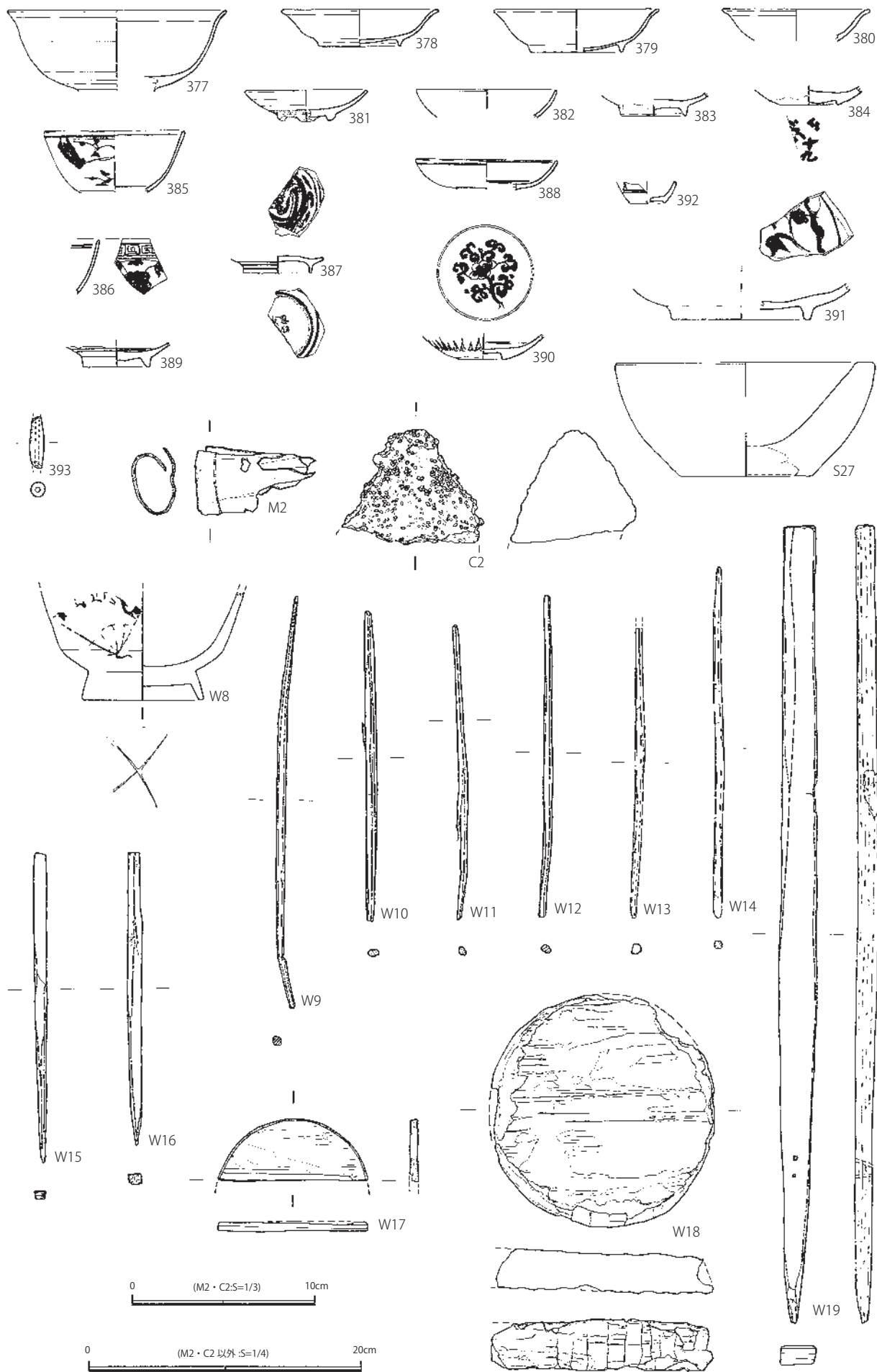


图 48 001 掘 出土遺物 (5)

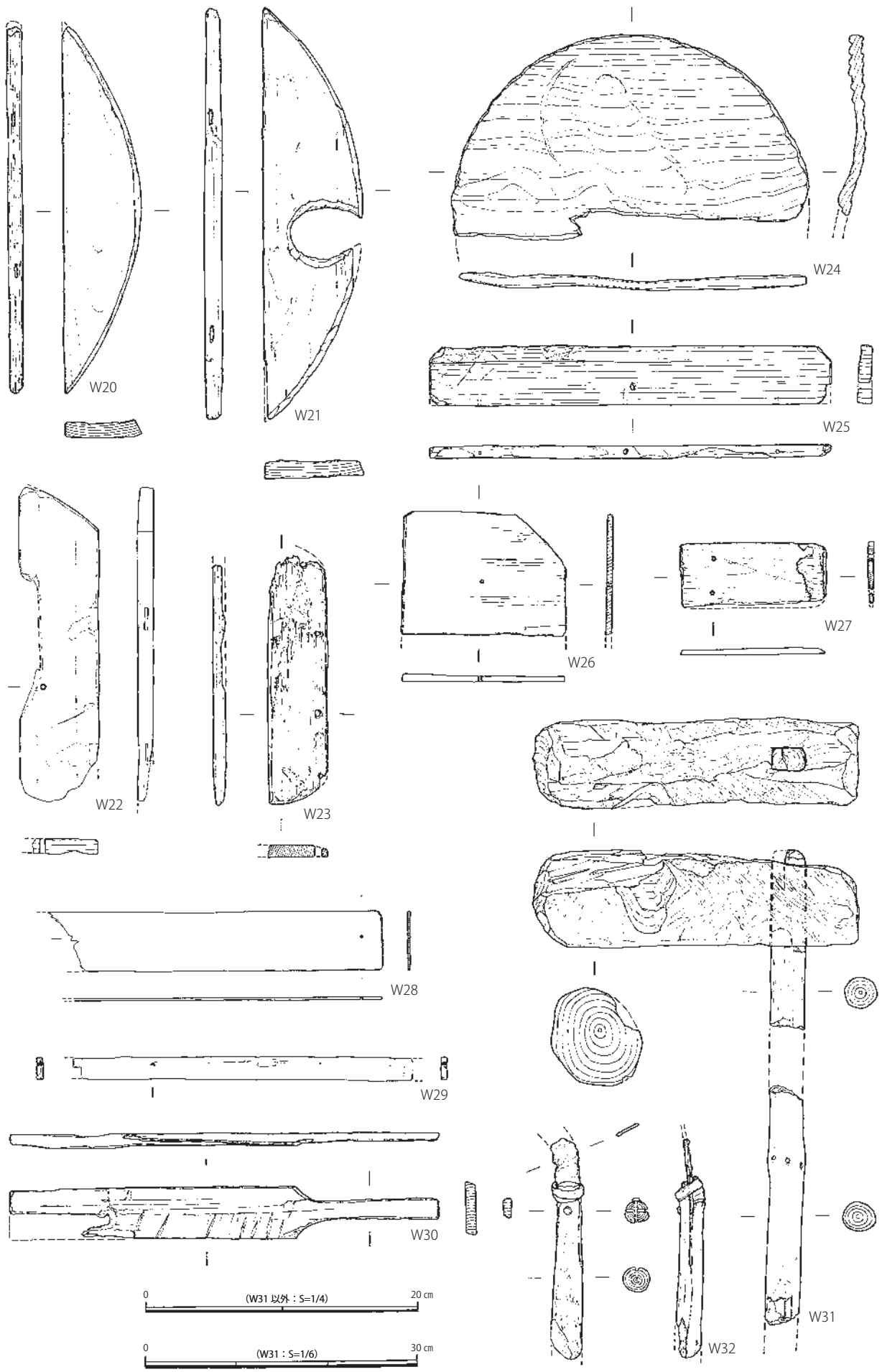


图 49 001 堀 出土遺物 (6)



壺 (376)・香炉、中国製白磁碗 (377)・皿 (378～384)、中国製染付碗 (385～387)・皿 (388～390)・鉢 (391)・杯 (392)のほか、土製品として土錘 (393)がある。また、金属製品では刀装具 (M2)、刀子、銭貨 (M9・M10)が、石製品では臼 (S27)がある。木製品では漆椀 (W8)・箸及び箸状木製品 (W9～W16)、柄杓 (W17・W19)、曲物底 (W18)、桶蓋または底 (W20～W24)、用途不明の部材 (W25～W28)、折敷 (W29)、羽子板状木製品 (W30)、横杵 (W31)、刃部の基部が残る鎌柄 (W32)などがある。このほか、軒丸瓦 (T11・T15・T16)・軒平瓦 (T17・T19～T22)・丸瓦 (T24～T28)・平瓦 (T29～T32)・鬼瓦 (T34・T35)などの瓦類や炭化米 (C2)、鉄滓 (C3・C4)などが出土している。

遺物の多くは001-bから焼けた建築部材・焼土とともに出土しており、火災を物語っている。また、方形区画側から流入したものが多。

### 019堀 (図50・51、図版16・45)

調査区1の南部で検出した堀で、001堀と重複し、それより古い。東北東-西南西方向に一直線に延び、西方は調査区域外となる。東方は調査区2で258堀と繋がる。平面・断面から見た新旧関係では258堀の方が新しいが、019堀が258堀より東側に延びずに終わっていることから、一時期併存した時期があり、その後、258堀以前に埋戻しが行われたと推定できる。規模は幅3.5～4.0m、深さ0.6～0.8mで、底が平坦であり断面形状は逆台形を呈する。底付近には流

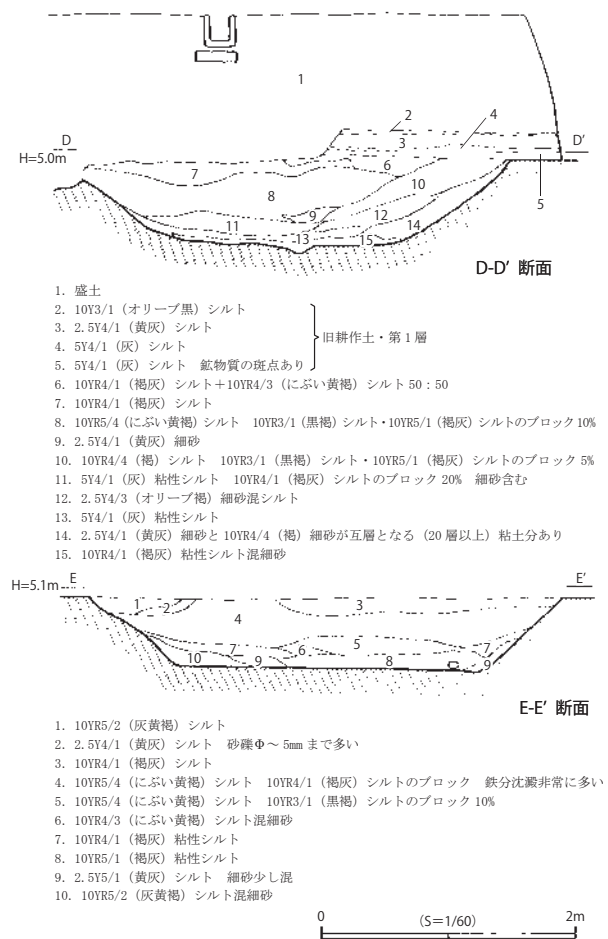


図50 019堀断面

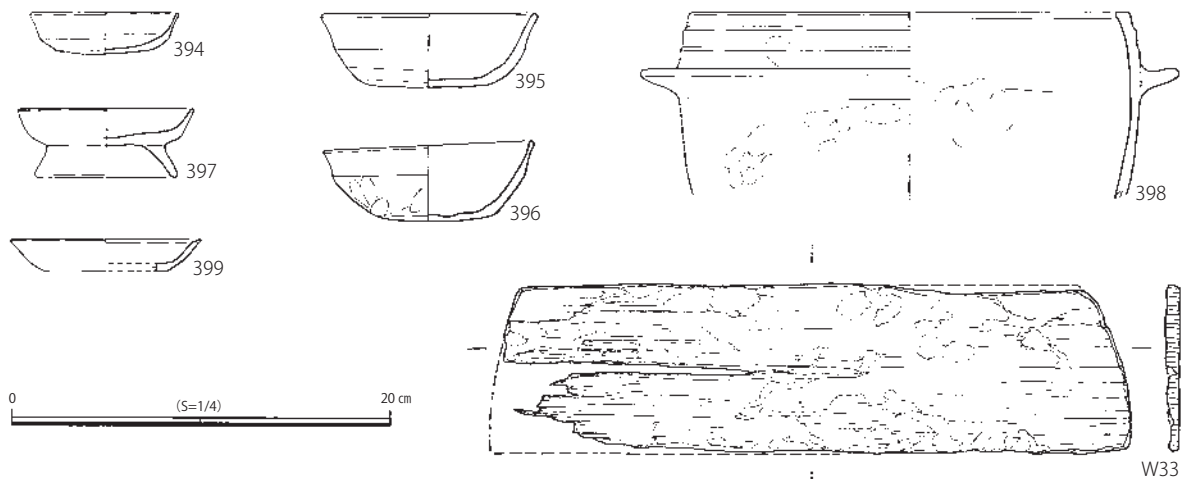
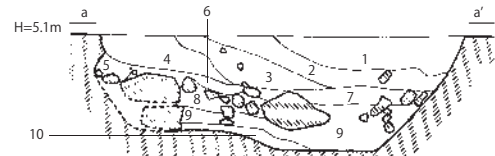
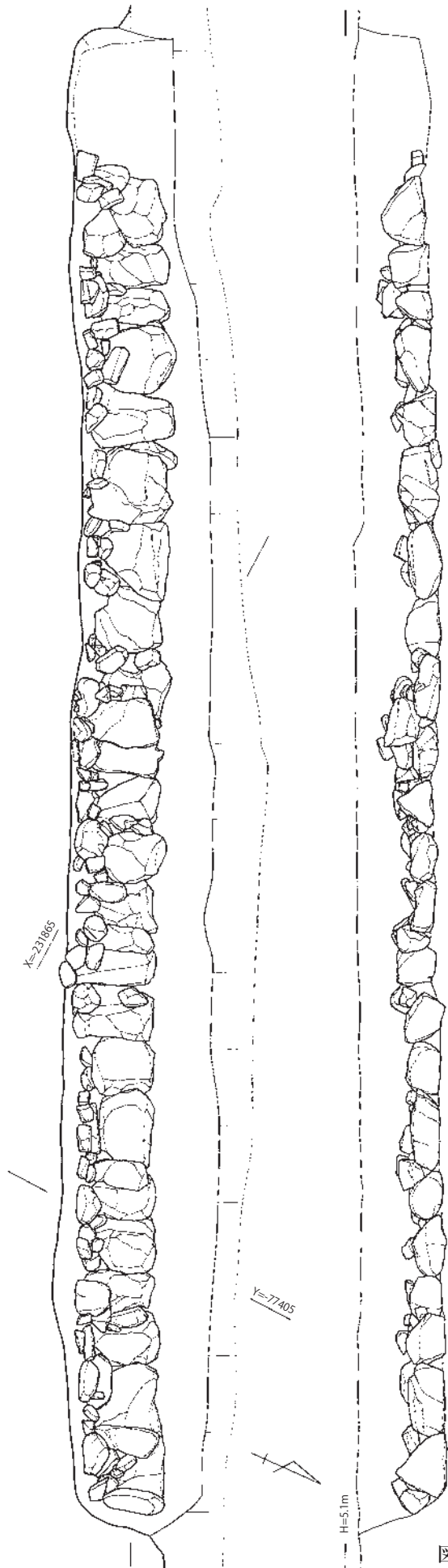
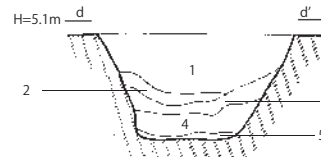
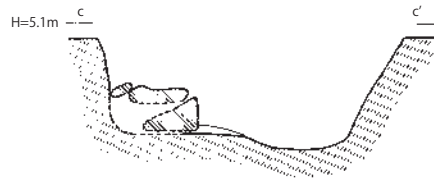
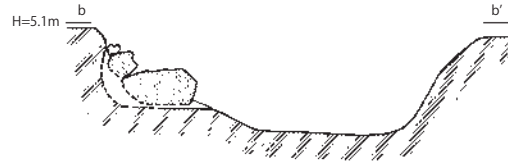


図51 019堀 出土遺物



1. 5Y4/1 (黄灰) シルト 10YR3/1 (黒褐) シルト+10YR5/3 (にぶい黄褐) シルトのブロック 20%
2. 10YR5/3 (にぶい黄褐) シルト 10YR4/1 (褐灰) シルトのブロック 30%
3. N5/ (灰) シルト 10YR3/2 (黒褐) シルト+10YR5/3 (にぶい黄褐) シルトのブロック 30%
4. 2.5Y4/1 (黄灰) シルト 10YR5/3 (にぶい黄褐) シルトのブロック 30%
5. N5/ (灰) シルト 10YR5/3 (にぶい黄褐) シルトのブロック 20%
6. N5/ (灰) シルト
7. N5/ (灰) シルト 5Y5/2 (灰オリーブ) シルトのブロック 30%
8. 2.5Y4/1 (灰) シルト+20cm 前後の礫 空洞あり 崩れた石垣が一気に埋まったか?
9. N5/ (灰) 粘性シルト
10. 5Y4/1 (灰) 細砂混粘性シルト



1. 2.5Y4/1 (黄灰) シルト 7.5Y5/2 (灰オリーブ) シルトのブロック 20%
2. 2.5Y4/1 (黄灰) シルト
3. 7.5Y5/2 (灰オリーブ) シルト 2.5Y4/1 (黄灰) シルトのブロック 30%
4. 5Y4/1 (灰) 弱粘性シルト
5. 砂礫 φ~30cm 5Y4/1 (灰) 粘性シルト少し混

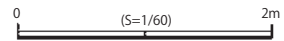


図 52 027 堀

入した砂混り層が堆積する以外、地山土など何種類かのブロック土で埋め戻されていた。

遺物は土師器皿（394～396）・台付皿（397）、瓦質土器羽釜（398）、備前焼甕、中国製青磁碗、中国製白磁皿（399）、桶底（W33）などが出土しているが、量は少ない。

### 027 堀（図 52・53、図版 16・17・45）

調査区 1 の北東部で検出した堀で北東－南西方向に伸び、001 堀と繋がり、北東端はクランク状に屈曲して調査区域外に延びる。調査区 2 では延長部分が確認できないことから、258 堀と繋がる可能性が高い。深さは 0.8 m で、幅は両端付近で約 1.5～2.0 m あるが、中程では南東方向に 1.0 m 程度拡幅し、その箇所には石垣を構築している。

石垣は、堀の南東肩に沿うように 0.5～1.0 m のやや角のある石を長さ 12 m に亘って積んだものであるが、部分的に 2 段分残るものの基底石が残存する程度である。高さは最も残りの良い箇所でも 0.4 m であるが、石垣前面の堀内には多量の石材が詰まっていたことから、元々は数段以上に積み上げていたことが窺える。石垣裏込めは幅が狭く、壁を抉るような状態で 0.1～0.3 m 程度のやや角の有る礫や円礫を詰めていた。

遺物は土師器皿（400～402）、瓦質土器火鉢、瀬戸美濃系陶器灰釉皿（403）・灰釉聞香炉（404）、備前焼播鉢（405）・甕（406）、中国製青磁碗（407）・皿・盤（408）が出土するが、量は少ない。また、石材に混じって茶臼（S28）や板碑（S29）が出土しており、石垣の石材として利用していたものか検討を要する。

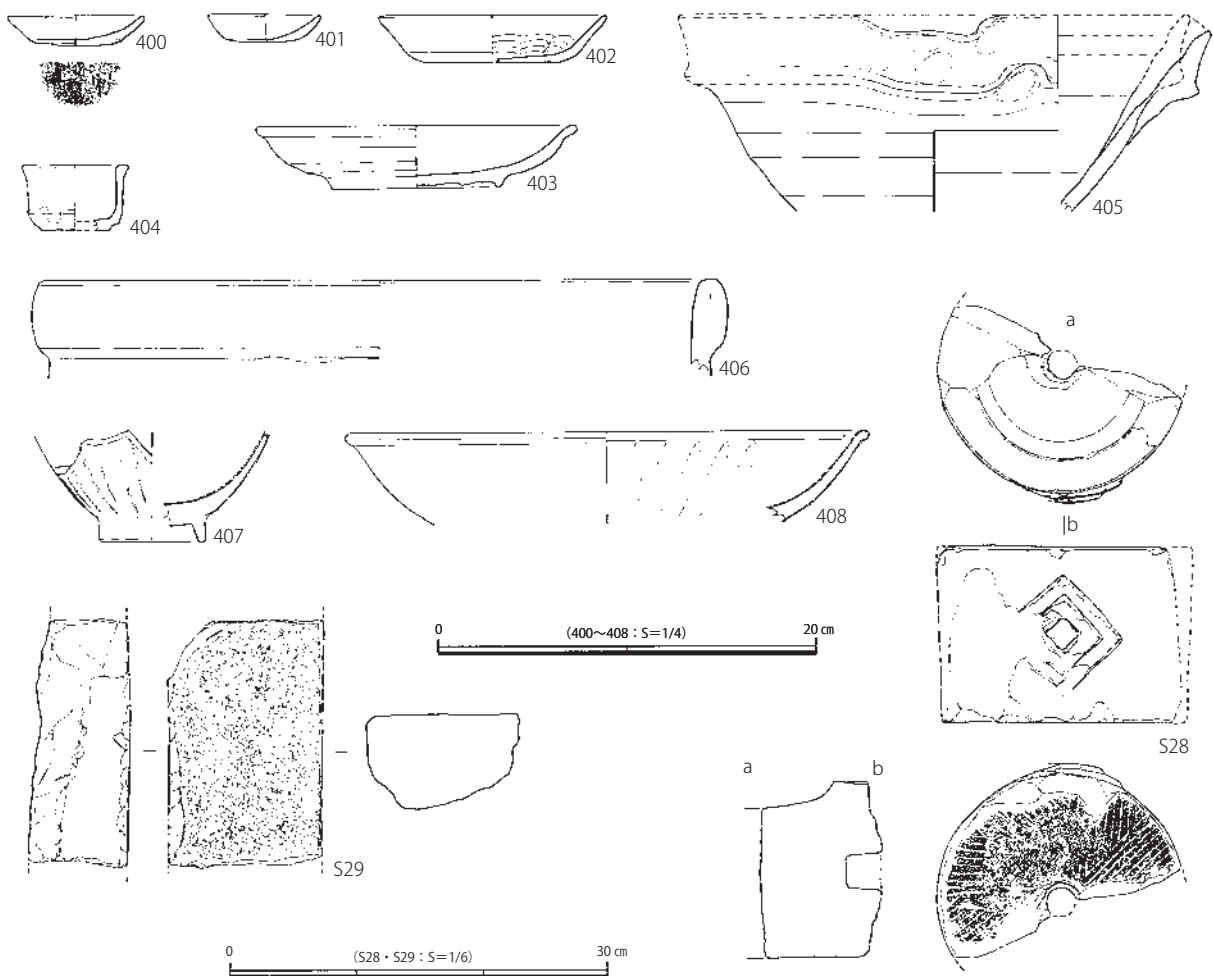


図 53 027 堀 出土遺物

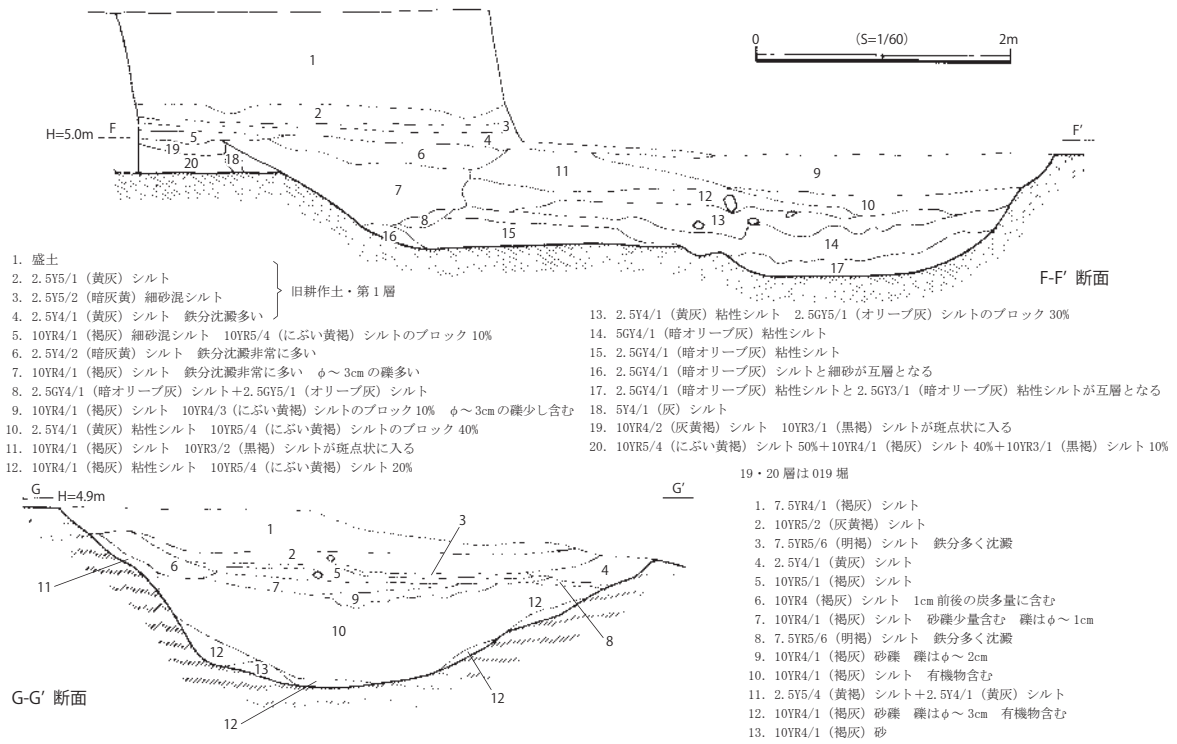


図 54 258 堀断面



図 55 258 堀 出土遺物

## 258 堀 (図 54・55、図版 18・45)

調査区 2 の中程で検出した堀で、調査区 1 の北東隅付近で、その一部を確認している。北北西 - 南南東方向に伸び、南端が屈曲して南西に折れて 236 池と重複し、北方端は調査区域外となる。019 堀・027 堀が 258 堀と併存した時期が想定できる。規模は幅 4.0 ~ 5.5 m、深さ 0.8 ~ 1.2 m で、断面形状は基本的に逆台形を呈する。

遺物は土師器皿 (409 ~ 420)、瀬戸美濃系陶器灰釉碗、備前焼播鉢・甕、中国製青磁碗・盤 (421)、中国製白磁皿 (422) のほか、箸 (W34)・柄杓 (W35)、用途不明の部材 (W36) などの木製品が出土する。土師器皿には内面に墨書が認められるものが多い。瓦や焼土が出土しないことから、館廃絶期にはすでに埋まっていた堀であると考えられ、古い時期の館の東側を画する堀と判断することができる。

## 259 堀 (図 56 ~ 59・80・82、図版 18・19・46・53)

調査区 2 の東端で検出した堀で、南側が北東 - 南西方向に伸び、北側で屈曲して南北方向に伸びている。調査区の北東隅付近では浅くなり、その箇所から C の字状に内側に湾入しているが、東側が調査区域外となることから全容は明確でない。規模は幅 11.0 ~ 12.0 m、深さ 2.0 m を測り、底は平坦で断面形状は逆台形を呈する。南東隅付近は古い時期には谷状地形 (260 谷状遺構) であり、それがある程度埋まった段階で堀を掘削していることが窺え、東側の肩部が低くなっている。堀の位置や規模からも、館の東側を画する外堀であった可能性が高い。

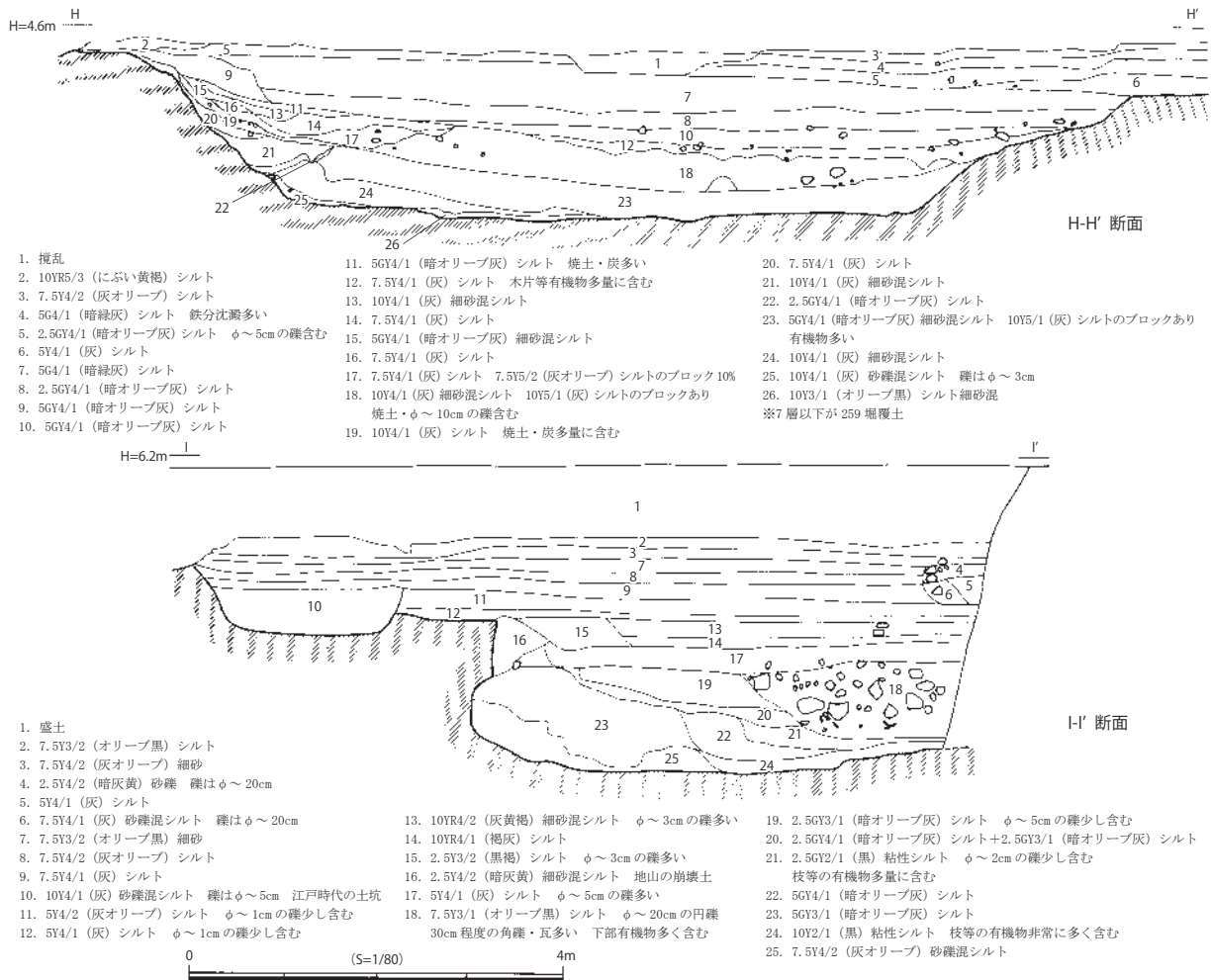


図 56 259 堀断面



北東隅の湾入部底付近には柱が2本存在する。柱は15cm×25cmの角材と、もう一方は直径25cmの周囲を削った丸太材で、約3.0mの間隔をあけてハの字状を呈するように立てており、館の虎口（入口）に架けられた橋に伴う橋脚であると考えられる。橋脚は堀がある程度埋まった段階で設けられたことが窺え、角材の方は先端が尖り打ち込まれているが、丸太材の方は下部が平らで、底面よりやや上位に据え置かれていた。

遺物は土師器皿（423～432）・土釜・焙烙（433）、瓦質土器甕・火鉢、瀬戸美濃系陶器天目茶碗（434）、常滑焼甕（435）、備前焼播鉢（437）・甕・壺、中国製青磁碗・盤、中国製白磁皿、中国製褐釉陶器壺（438）、釘・合釘（M 3～M 5）、刀装具（M 6）、銭貨（M11）、五輪塔地輪（S30）のほか、漆椀（W37～W40）、桶底（W41）、折敷（W42～W44）、工具柄（W45）、楔状木製品（W46）、

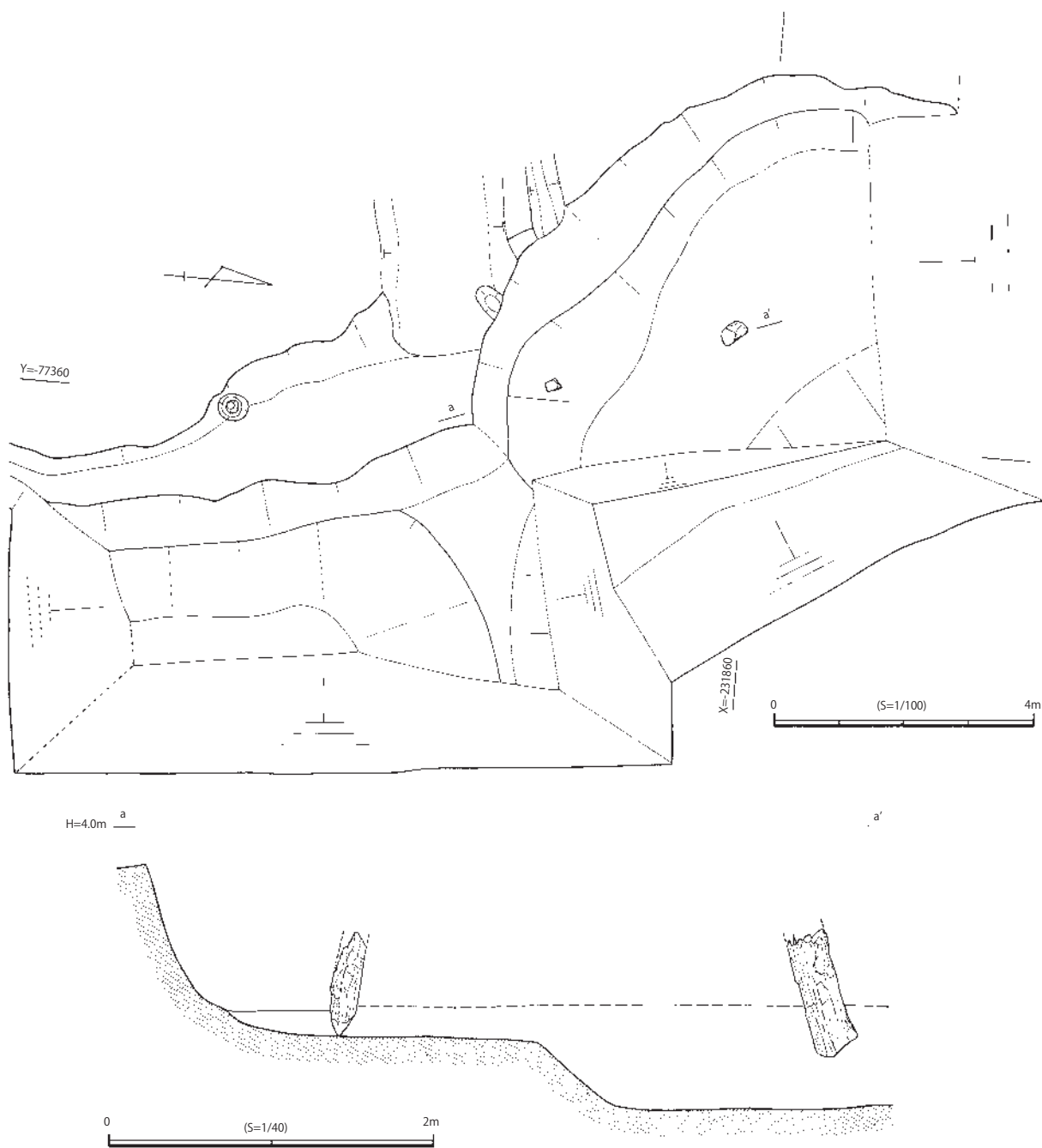


図 57 259 堀内橋脚遺構

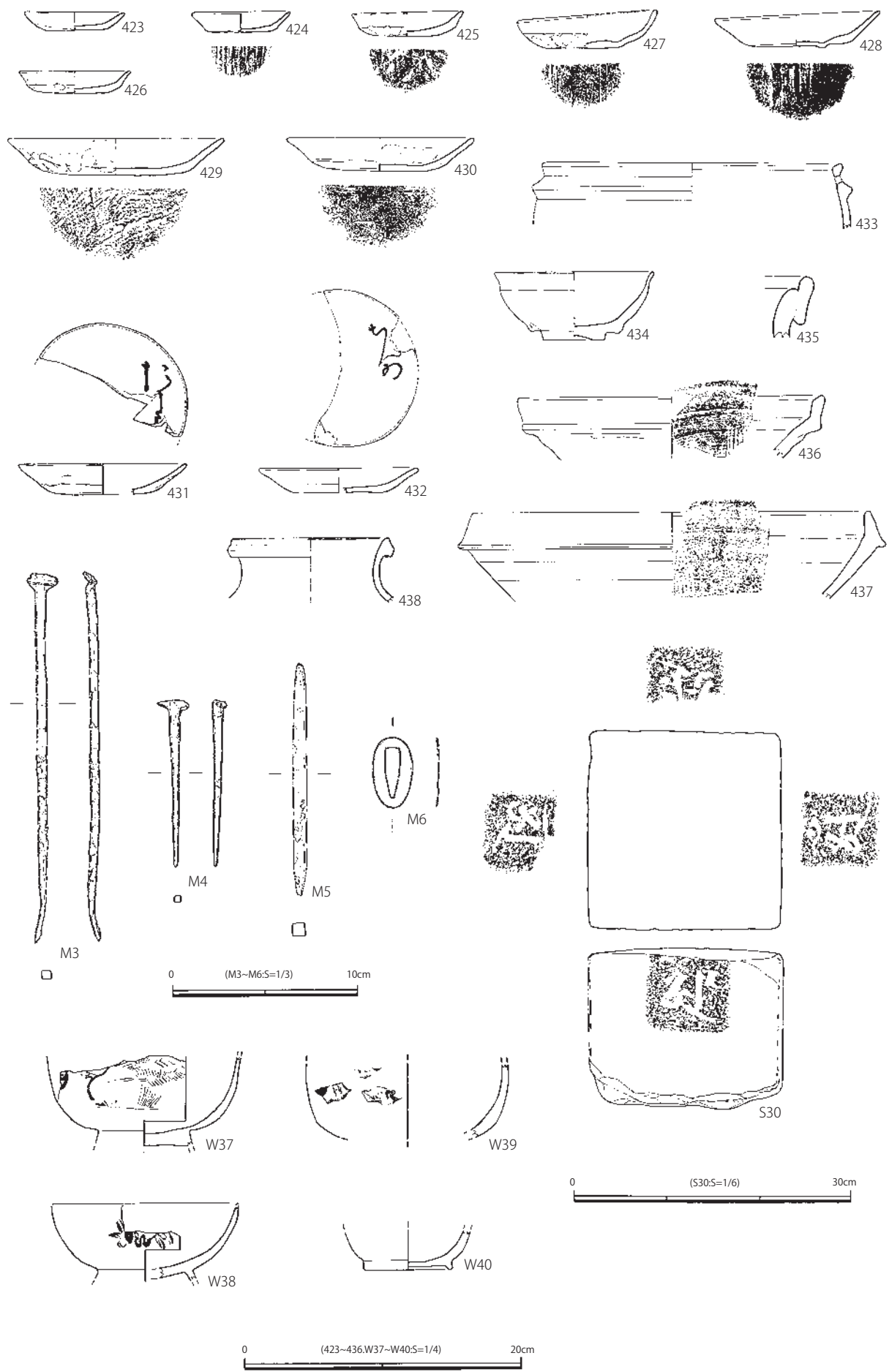


图 58 259 堀 出土遺物 (1)

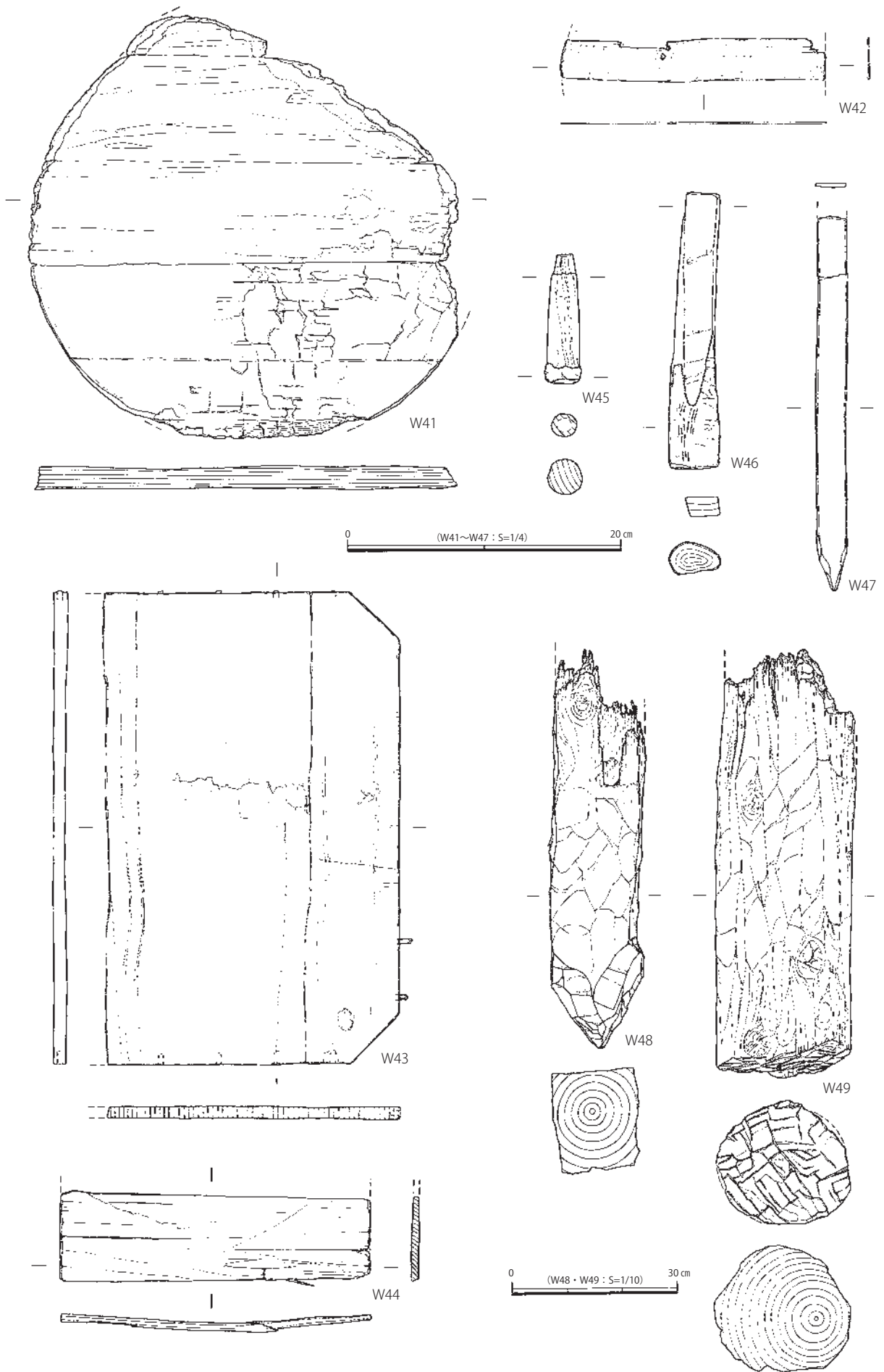


图 59 259 掘 出土遺物 (2)

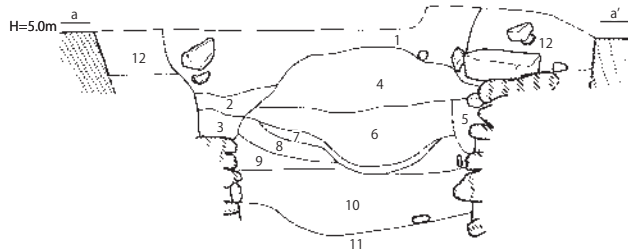
木筒状木製品 (W47)、橋脚 (W48・W49)、建築部材などの木製品、銭貨 (M11)、軒丸瓦 (T12・T14)、軒平瓦 (T23)、平瓦、丸瓦などが出土しているが、量は001堀に比して少ない。これは、館の中心部からやや離れているからであると考えられる。ただ、焼けた建築部材や焼土・瓦が出土することからも、館廃絶期の遺構であることが窺える。

## 2. 井戸

008 井戸 (図 60 ~ 62、巻頭図版 2、図版 20・47)

調査区 1 の西端付近で検出した石組井戸で、009 土坑を切り込む。北東部に位置する 068 井戸とは約 5.0 m、南にある 001 堀とは約 2.0 m の間隔をあけて位置する。

井戸側を構築する掘形は楕円形を呈し、長径 2.85 m、短径 2.7 m、深さ 2.15 m を測る。井戸側は基本的に 10 ~ 30cm の川原石を小口積みしているが、所々に大振りの角が有る石が使用されている。内径は上部で 1.25 m、下部で 0.95 m とやや上方に開いており、高さは 1.25 m 残存していた。



1. 2.5Y4/1 (黄灰) シルト+10YR4/3 (にぶい黄褐) シルトのブロック
2. 10YR4/1 (褐灰) シルト+10YR4/3 (にぶい黄褐) シルトのブロック
3. 10YR4/1 (褐灰) シルト
4. 2.5Y4/1 (黄灰) シルト
5. 2.5Y4/1 (黄灰) シルト+10YR4/3 (にぶい黄褐) シルト 50 : 50
6. 10YR4/1 (褐灰) 粘性シルト
7. N2/ (黒) 粘性シルト
8. 10YR4/1 (褐灰) 粘性シルト
9. 2.5Y4/1 (黄灰) 粘性シルト
10. 10YR4/1 (褐灰) 粘性シルト 炭・1cm 前後の礫・有機物多い 土師器皿多量に含む
11. 2.5Y4/1 (黄灰) 粘性シルト 有機物多い 土師器皿含む
12. 10YR4/2 (灰黄褐) シルト+10YR4/1 (褐灰) シルトのブロック

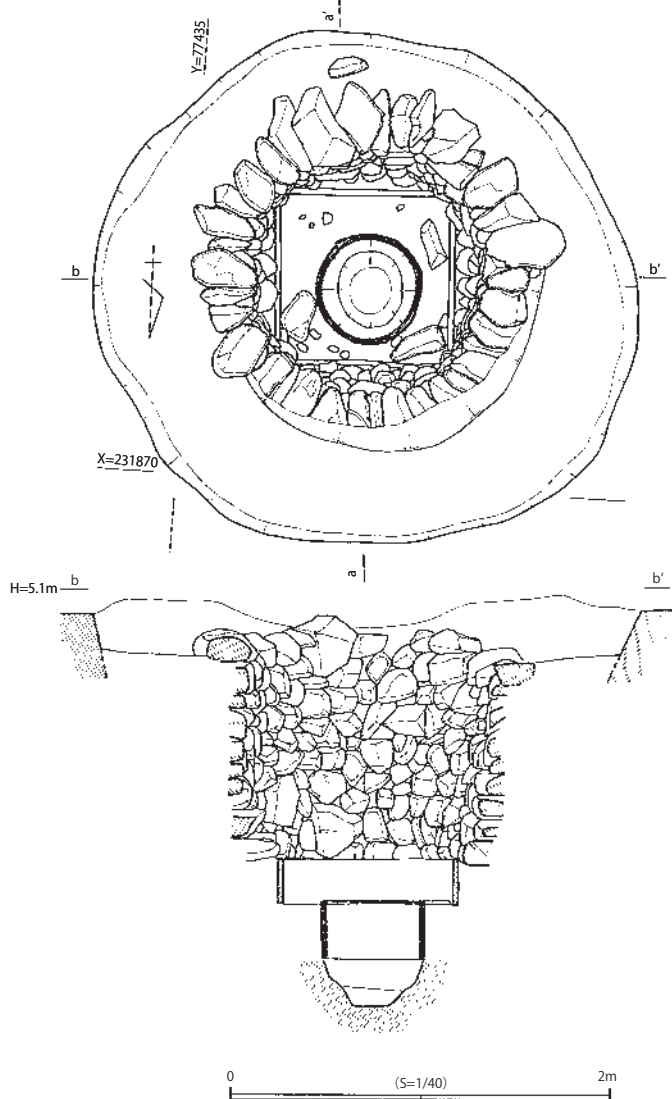


図 60 008 井戸

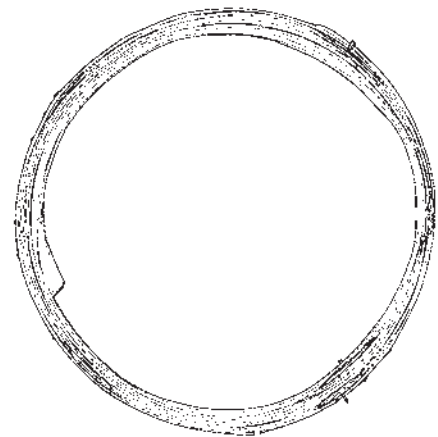


図 61 008 井戸底の曲物

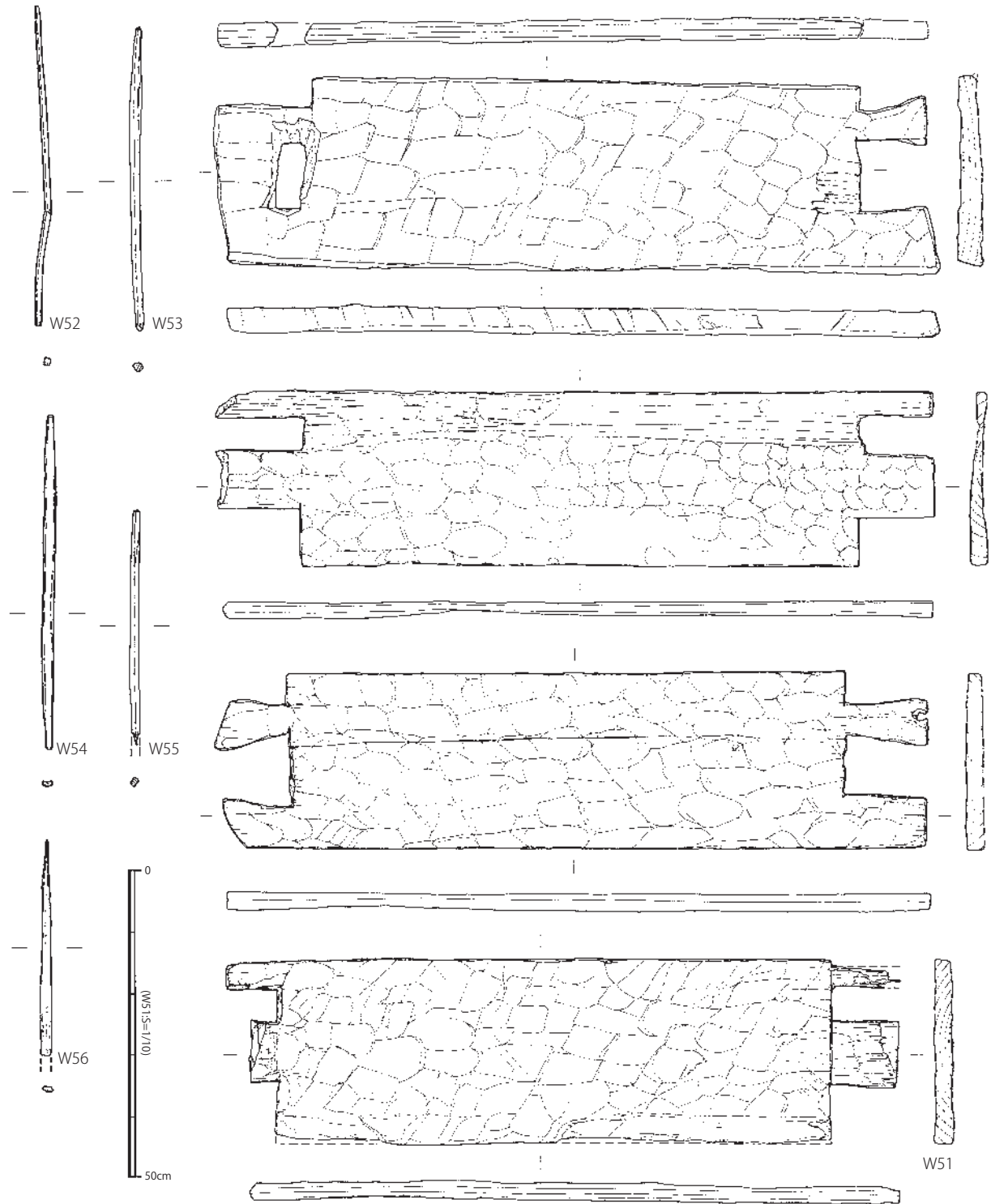
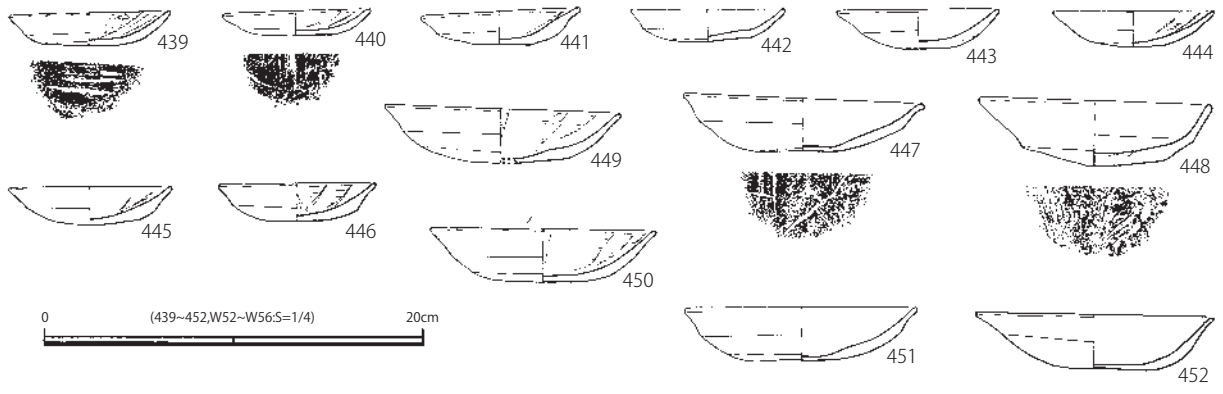


图 62 008 井戸 出土遺物



石積み下部には胴木がなく、幅約30cm、厚さ3.5～4cmの板材4枚(W51)を柄組して一辺0.9m、高さ0.25mの方形枠(W51)を設けている。その中央には、直径55cm、深さ33cmの曲物(W50)を据えており、曲物の内側は更に播鉢状に0.25m程度掘り窪めていた。

遺物は井戸側の埋土から、多量の土師器皿(439～452)、中国製白磁皿、瓦などのほか、箸(W52～W56)などの木製品が出土している。焼土・炭などが多く含まれる状況からも、館廢絶期に機能していた可能性が高い。

### 026 井戸 (図63・64、図版21・47・53)

調査区1の北側中央付近で検出した石組井戸で、西側にある070井戸とは約5.0mの間隔をあ

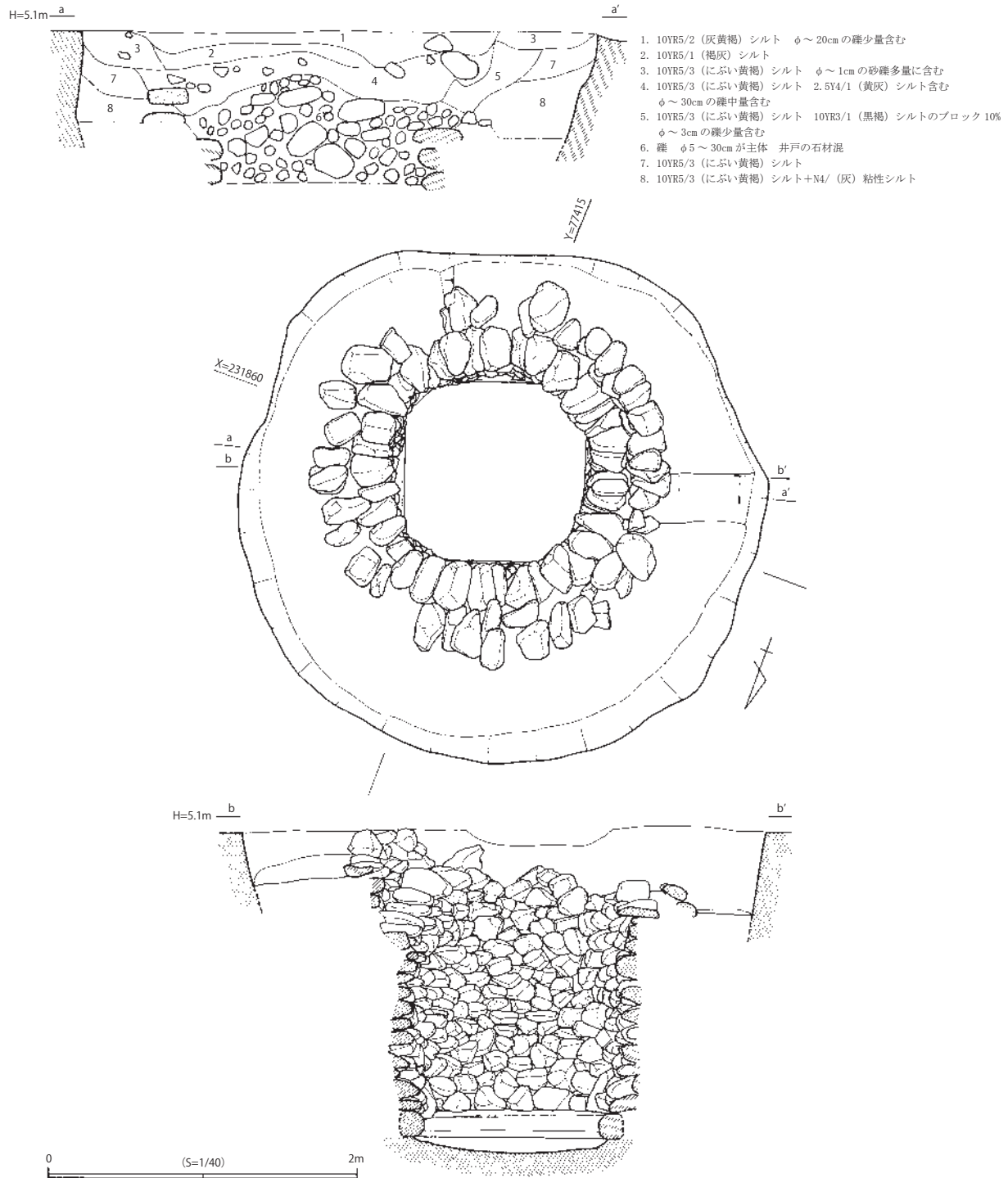


図63 026 井戸

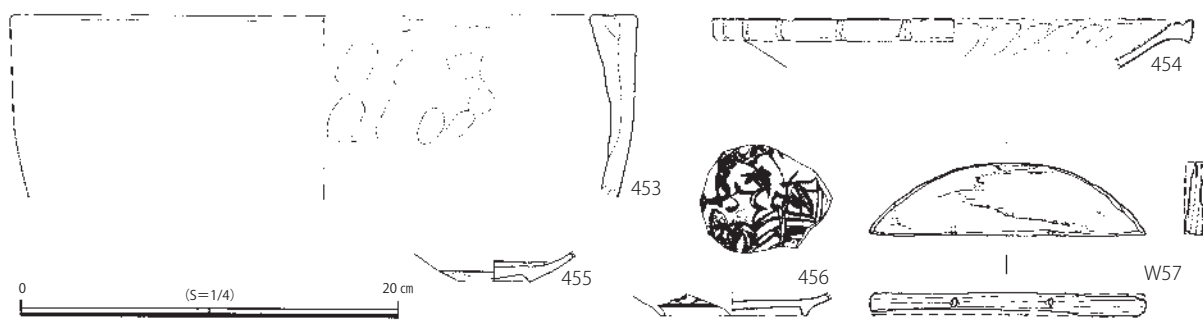


図 64 026 井戸 出土遺物

けて位置する。

井戸側を構築する掘形は円形を呈し、直径 3.5 m × 3.4 m、深さ 2.1 m を測る。井戸側は基本的に 10 ~ 30cm の川原石を小口積みしており、構築に際しては、強度を図るためか外回りにも石積みをおこなっている。石材の大きさは比較的揃っており、001 井戸のように角のある石は使用していない。内径は 1.25 m で、ほぼ垂直に積み上げており、高さは残りの良い箇所では 1.8 m である。

石積みの下部には直径約 20cm の胴木 4 本を地山直上に方形を呈するように組んでおり、内法は一辺 1.15 m である。胴木の枠内は約 0.2 m 程度皿状に窪んでいる。

遺物は井戸側の埋土などから、土師器皿・火鉢 (453)、備前焼播鉢・甕、中国製青磁盤 (454)、中国製白磁皿、中国製染付皿 (455・456) や桶底 (W57)、銭貨 (M13) などが出土しているが、量は多くない。また、埋土内には井戸に使われていたと考えられる多くの石材が投棄されていた。焼土などが伴わない状況からも、館廃絶期以前に井戸を壊して意図的に埋め戻していることが窺える。

#### 048 井戸 (図 65・66、図版 22・47)

調査区 1 の北西部で検出した石組井戸で、北東側にある 070 井戸とは約 6.0 m の間隔をあけて位置する。

井戸側を構築する掘形は楕円形を呈し、長径 3.1 m、短径 2.8 m、深さ 2.05 m 以上を測る。井戸側は基本的に 10 ~ 30cm の円礫を小口積みしているが、所々にやや大振り石材が使用されている。内径は 0.8 m で、ほぼ垂直に積み上げており、高さは残りの良い箇所では 1.5 m を測る。

石積みの下部には直径約 15cm の胴木 4 本を方形に組んでおり、内法は一辺 0.8 m である。胴木の内側には大きな石が落ち込んで下部の構造は明確でないが、胴木の下部から底まで 0.3 m 程度あることから、131 井戸のように胴木の下に板材で方形枠を設けていた可能性がある。

遺物は井戸側の埋土などから、土師器皿、備前焼播鉢 (457)・壺・甕 (458)、常滑焼、中国製青磁碗 (459) などが出土しておるが、量は多くない。また、埋土内には井戸側に使われていたと考えられる多くの石材が投棄されていた。焼土などが伴わない状況からも、館廃絶期以前に井戸を壊して意図的に埋め戻していることが窺えるが、備前焼播鉢の特徴から、埋戻し時期は館廃絶期に近い 16 世紀後半代であると考えられる。

#### 070 井戸 (図 67・68、図版 23・47・48)

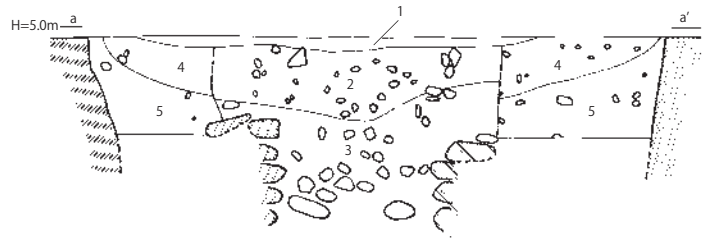
調査区 1 の北側中央付近で検出した井戸で、南東には 048 井戸が西側には 026 戸が近接する。

井戸側を構築する掘形は楕円形を呈し、長径 3.9 m、短径 3.3 m、深さ 2.3 m を測る。井戸側は掘形中央より北東側に寄った位置に設けられている。板材を桶状に組んで直径 0.95 m の井戸側

としていたと考えられるが、部分的にしか残存しないことから明確でない。ただ、残存状況から窺うと、幅10cm前後、厚さ2cm程度の板材を垂直に立てて、下端は小さな杭で固定していたと考えられる。板材には、長さ1.5m以上のものがある一方で、それ以下のものは途中で重ねるように継ぎ足しており、一般的な桶のように密着するように板材を組み合わせたものでなかったことが窺え、また、タガ状のものも確認していない。

井戸の下部構造は、方形枠(W64)の内側に底のない結桶(W63)を据えたものである。方形枠は幅14.5～22.0cm、厚さ3.5～4.0cmの板材を柄組したもので、内法は一辺約0.5mである。枠は安定を図るため井戸側との間に10～25cm程度の礫を詰めていた。板材は他の部材であったものを再利用したものか、小さな柄穴が2箇所認められる。桶は方形枠の天端より8cm程度下がった位置に据えられる。土圧により歪んだためか楕円形を呈し、直径は上部で45cm、下部で38cmを測る。桶は撥形を呈する側板22枚からできており、竹でできたタガ3段で結われていた。桶の下部は約0.07m程度皿状に窪んでいる。

遺物は、井戸側の裏込め土から土師器皿(460・461)、備前焼播鉢(462)・甕が、井戸側埋土から土師器皿、瀬



1. 2.5Y4/1 (黄灰) シルト
2. 10YR4/2 (暗灰黄) シルト φ～20cmの礫多量
3. 10YR4/1 (褐灰) シルト φ～30cmの礫多量 井戸の石材混
4. 10YR5/1 (褐灰) シルト φ～5cmの礫多い 鉱物質の沈澱多い
5. N4/ (灰) シルト+10YR4/3 (にぶい黄褐) シルト 60:40 φ～10cmの礫多い

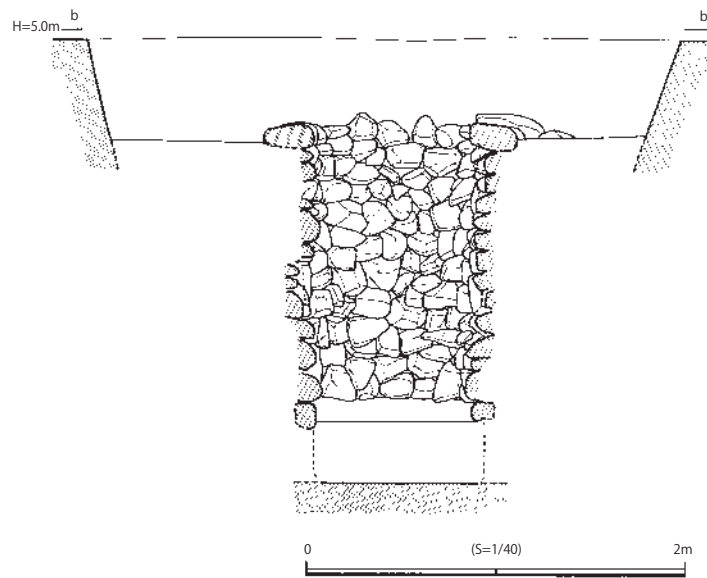
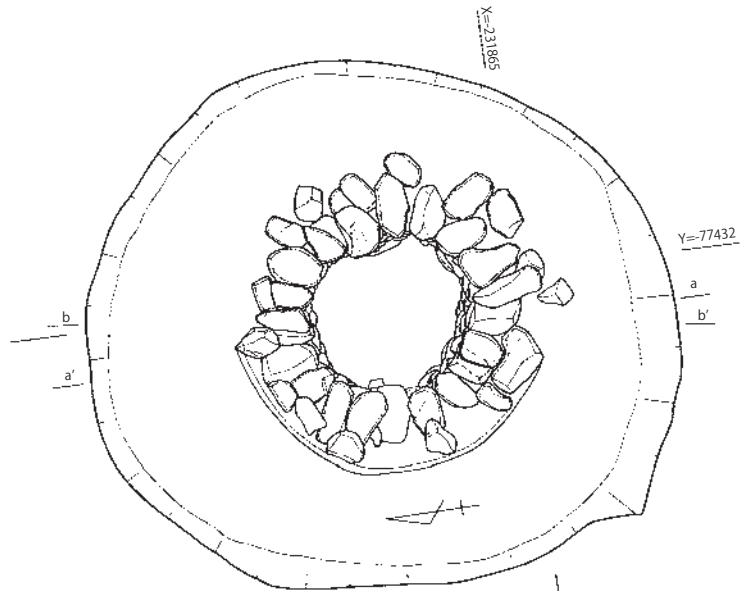


図65 048井戸



図66 048井戸 出土遺物

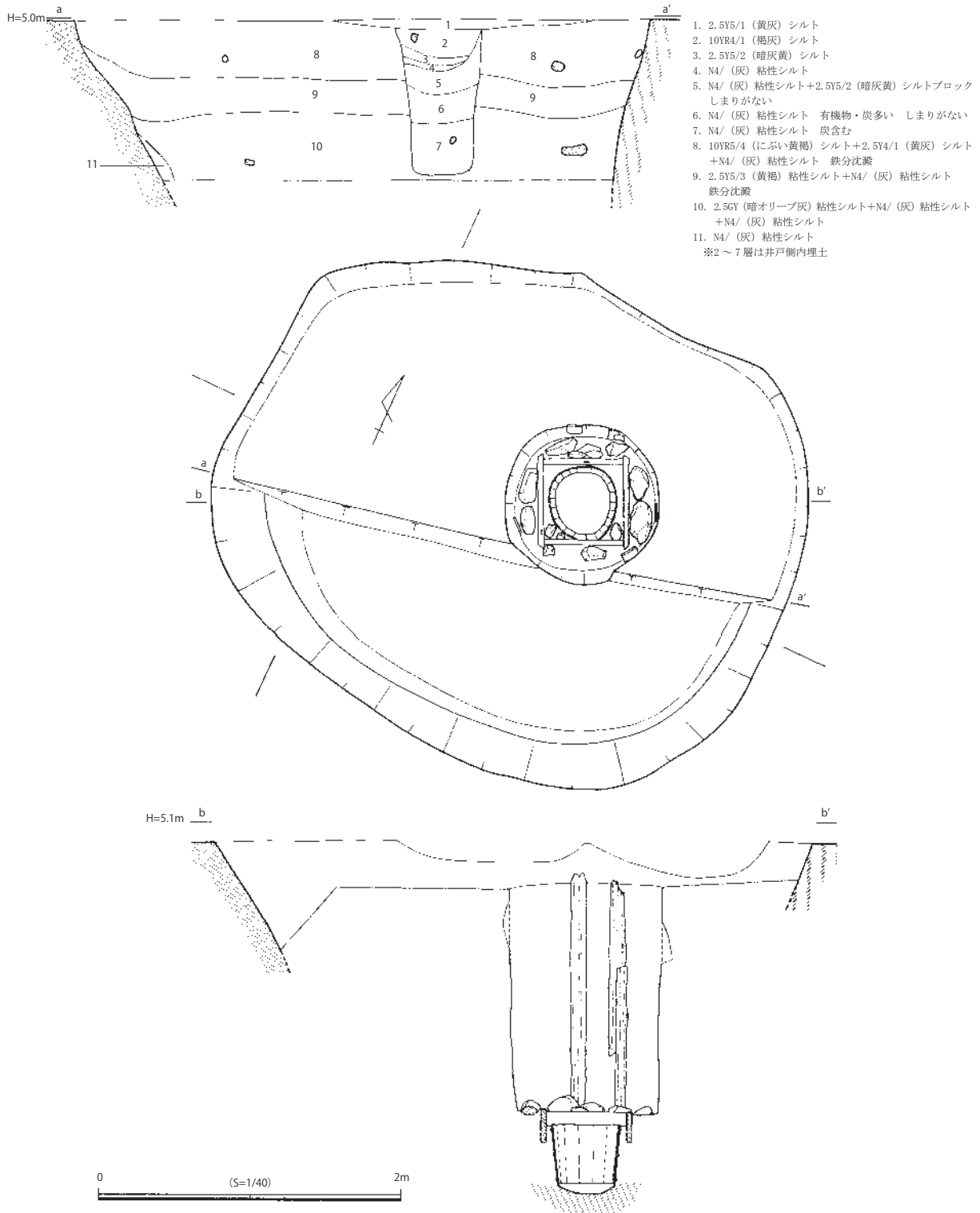


図 67 070 井戸

戸美濃系陶器鉄釉鉢 (463)・灰釉卸皿、備前焼甕、青磁碗 (464) などとともに、折敷 (W58・W59)、部材 (W60～W62)、箸など多くの木製品が出土している。また、木端・枝葉などとともにサンゴ (ヤギ目) が出土しているが、その性格については明らかでない。土器などの特徴から、井戸の掘削時期は最も古く、その後 15 世紀末頃から 16 世紀初め頃まで機能していたと考えられる。

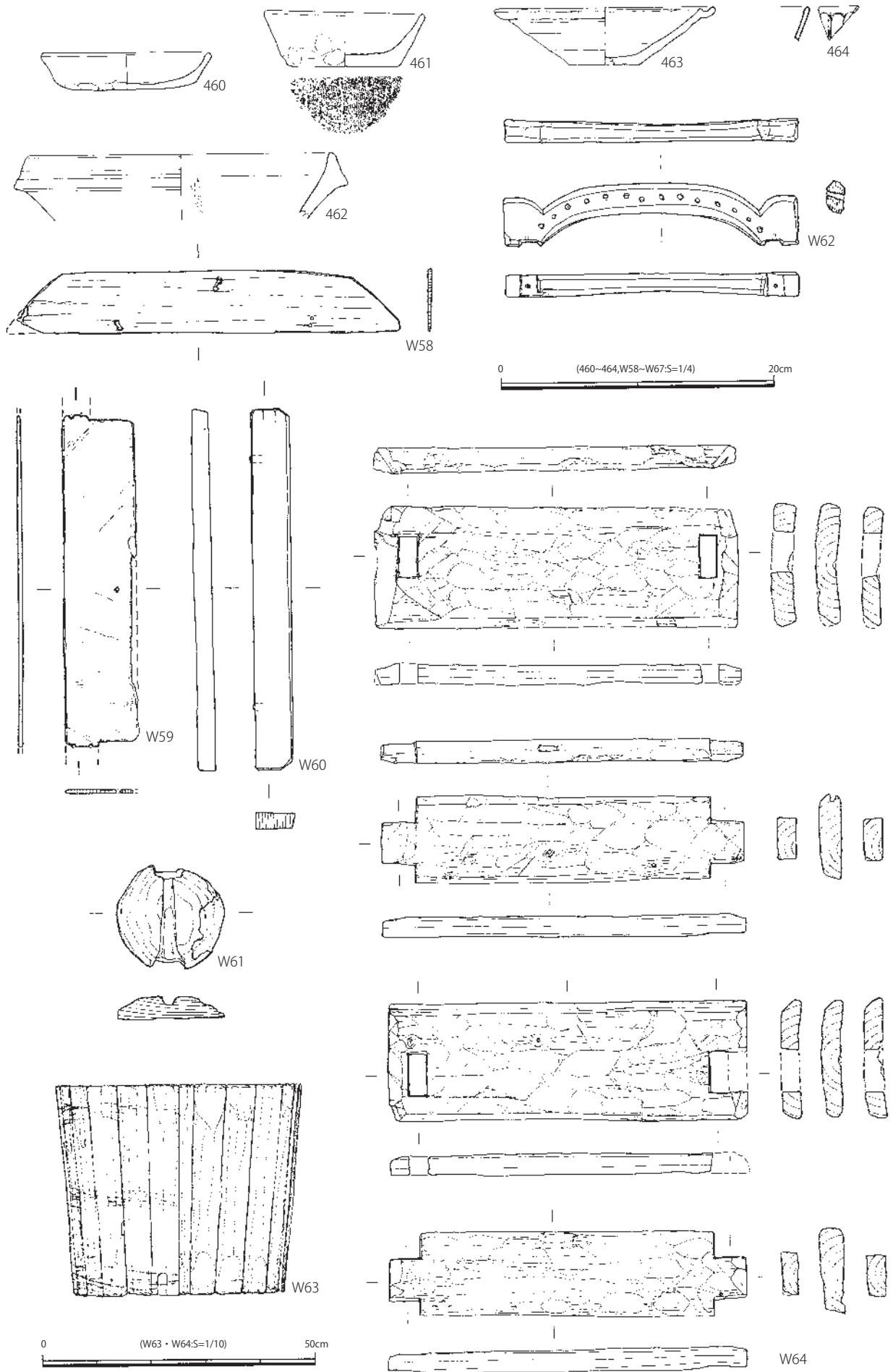


图 68 070 井戸 出土遺物



### 131 井戸 (図 69・70、図版 24・48・49)

調査区 1 の東端付近で検出した石組井戸で、027 堀や 258 堀と近接する。

井戸側を構築する掘形は円形を呈し、直径 2.45 m × 2.3 m、深さ 2.4 m を測る。井戸側は基本的に 10 ~ 30cm の円礫や角のある礫を小口積みしているが、所々にそれ以上の石材が使われている。内径は 1.05 m、下部で 0.8 m と上方に広がっており、高さは残りの良い箇所まで 1.8 m を測る。

石積みの下部には部分的に面取りを施した 15 ~ 20cm の胴木 4 本を方形に組んでおり、さらに胴木の下部に幅 40cm、厚さ 5 cm 程度の板材を柄組して方形枠を設けている。胴木部の内法は一辺 0.65 m、方形枠の内法は一辺 0.9 m である。

遺物は井戸側の埋土などから土師器皿 (465 ~ 473)、瓦質土器火鉢 (474)、瀬戸美濃系天目茶碗 (475)、中国製青磁碗・皿、中国製白磁皿 (477)、中国製染付碗・盤 (478)、「大福浪介」の銘がある小柄 (M 7) や折敷 (W65)、柄杓柄 (W68)、部材 (W66・W67、W69・W70)、扇骨 (W71) などが出土している。埋土に焼土が多く、破棄に伴う破壊も行われていないことから、008 井戸などとともにも館の廃絶期に使用されていた井戸であると考えられる。

### 261 井戸 (図 72・73・80、図版 25・49・53)

調査区 2 の中程で検出した石組井戸で、東にある 258 堀や南にある 236 池とは約 3 m 隔てて位置する。

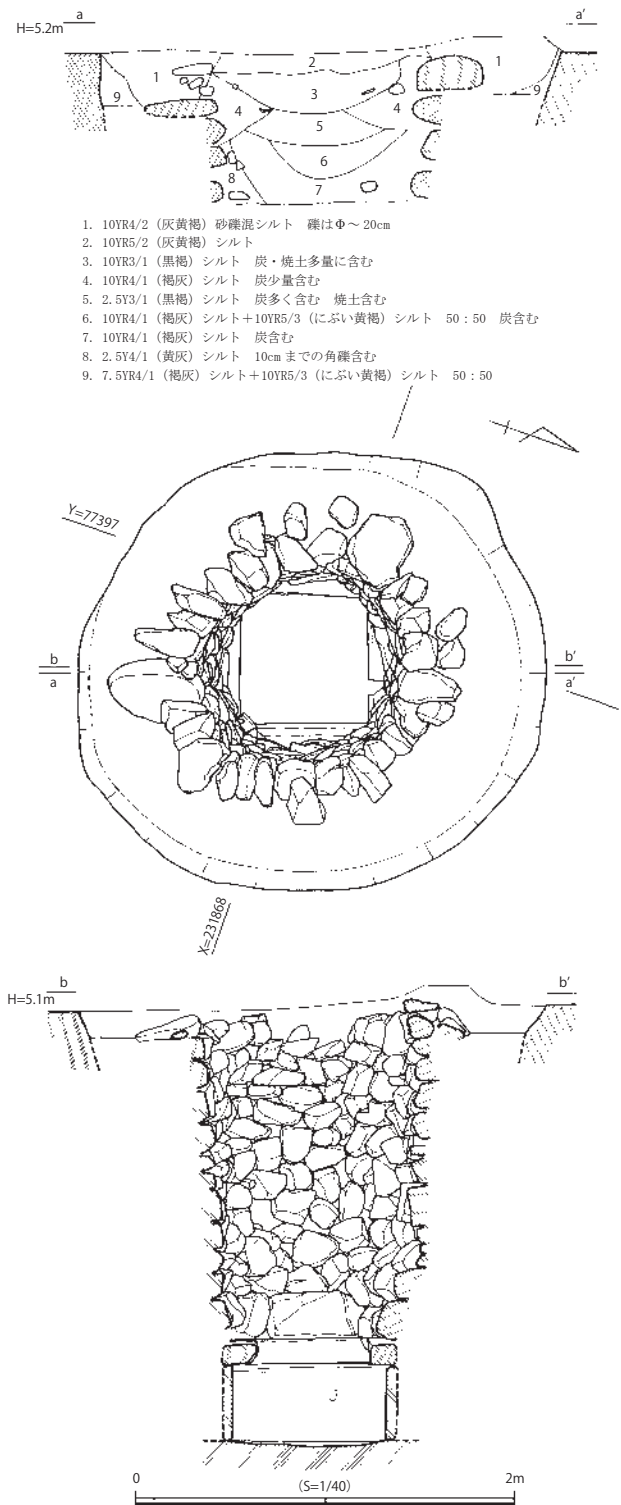


図 69 131 井戸

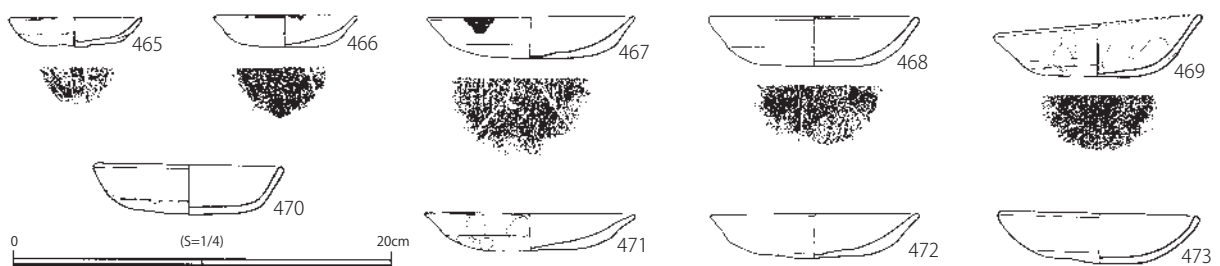


図 70 131 井戸 出土遺物 (1)

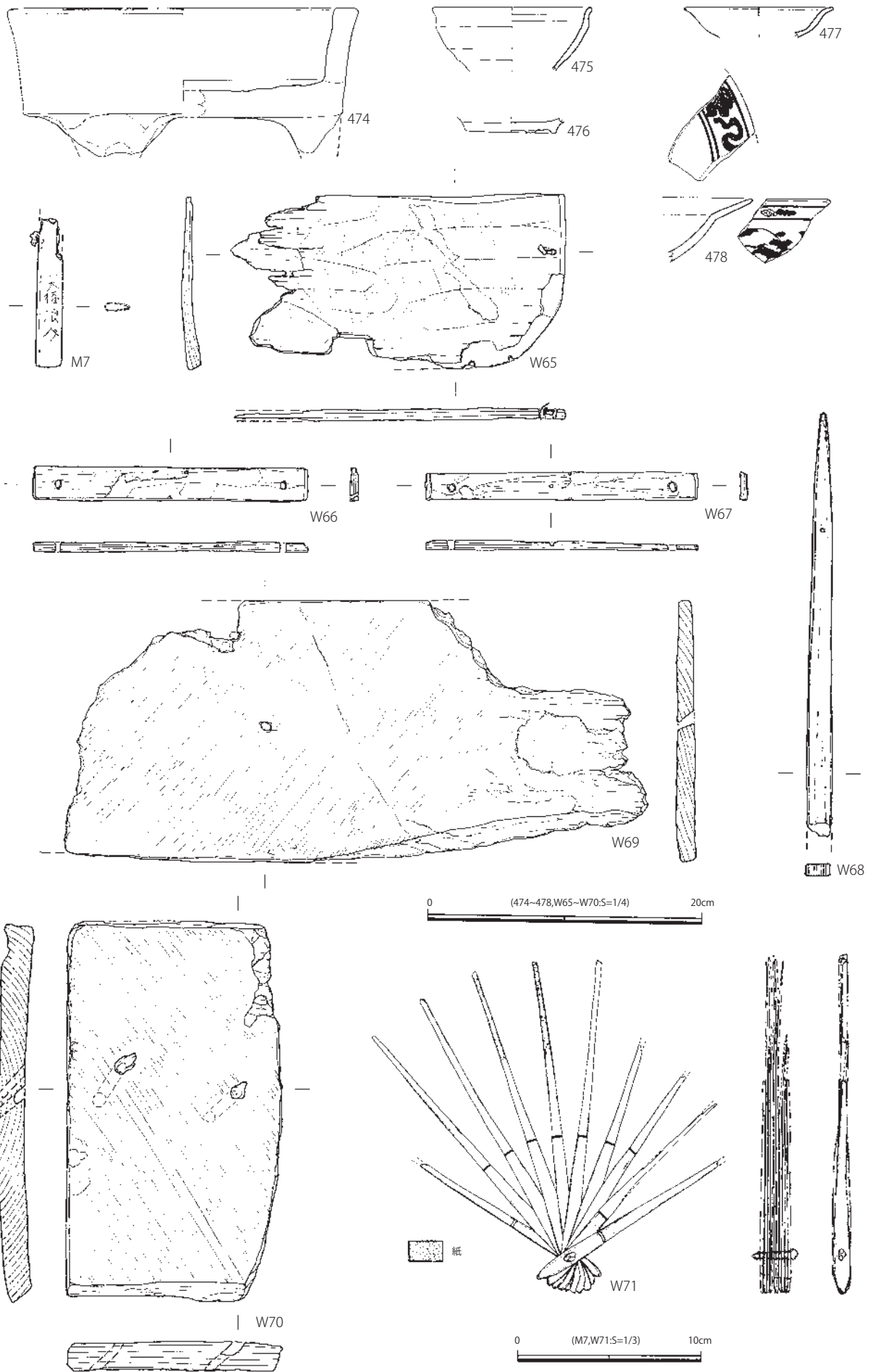


图71 131井戸 出土遺物 (2)

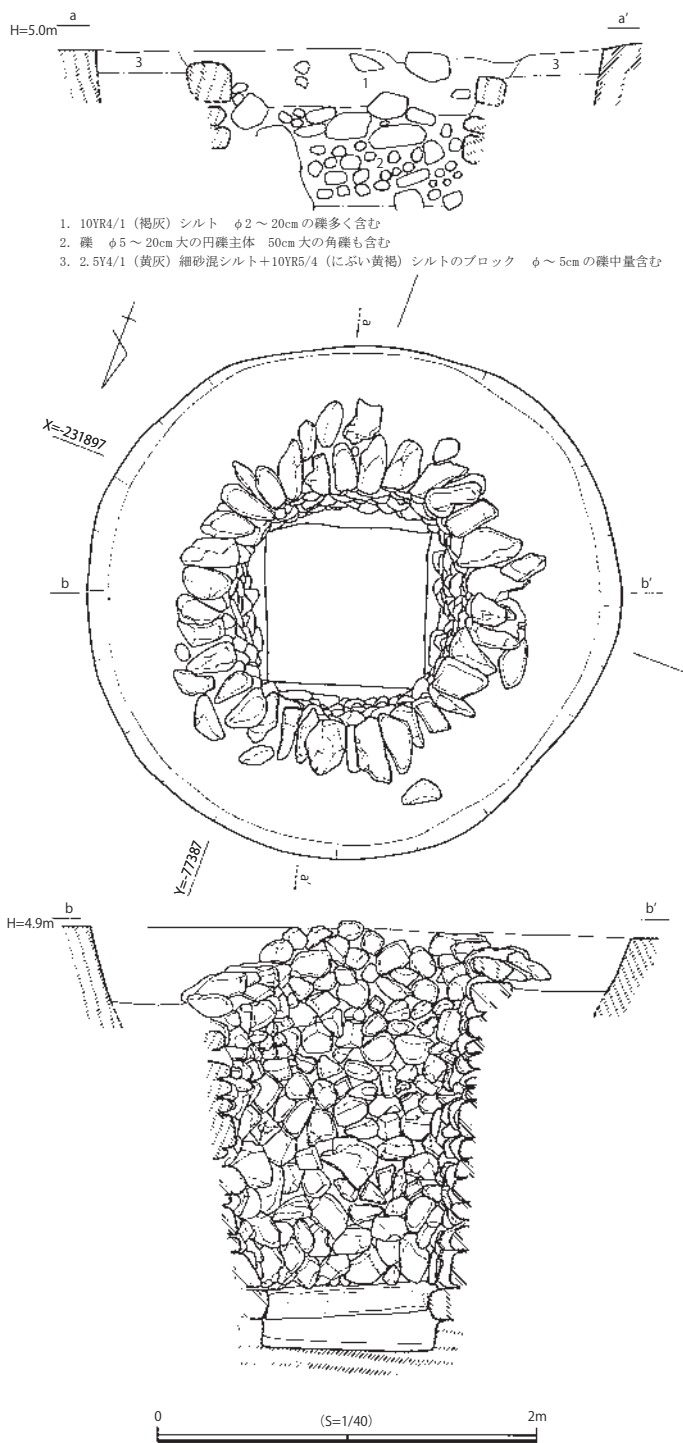


図72 261井戸

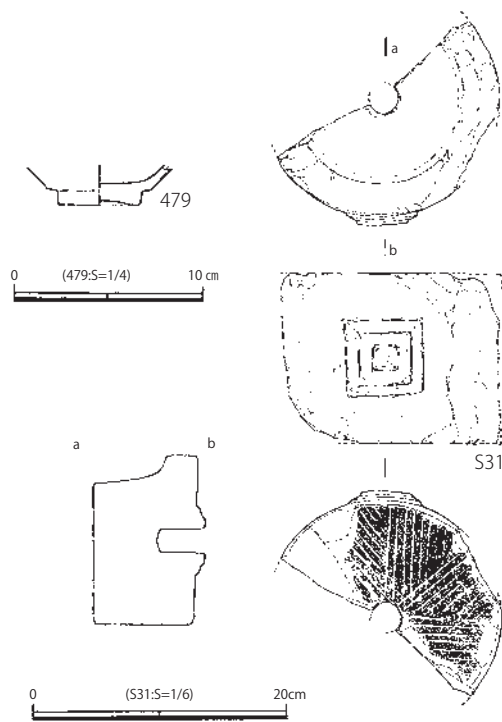


図73 261井戸 出土遺物

井戸側を構築する掘形は円形を呈し、直径2.8m×2.7m、深さ2.3mを測る。井戸側は基本的に10～30cmの円礫を小口積みしているが、所々にやや角のある石材を使用している。内径は上部で1.2m、下部で1.0mと上方に広がっており、高さは残りの良い箇所では1.9mを測る。

石積みの下部には部分的に面取りを施した直径約15cmの胴木4本を方形に組んでいる。胴木の内法は一辺0.85mで、内側は0.15m程度窪んでいる。

遺物は井戸側の埋土などから瓦質土器火鉢、瀬戸美濃系陶器天目茶碗(479)、軒丸瓦(T13)、丸瓦、平瓦、鬼瓦、茶臼(S31)

などが出土する。井戸側の石材が全体に詰まる状態であったが、焼土や炭が入り混じっていることや瓦が出土していることを根拠にすれば館廢絶期に機能していた井戸であると考えられる。

### 268井戸 (図74・75、図版26・49)

調査区2の北部で検出した石組井戸で、西にある259堀とは約2.5m間隔をあけて位置する。

井戸側を構築する掘形は、上面が攪乱されることから不整円形となっているが、元来は直径3.4mの円形プランに復元でき、深さは1.85mを測る。井戸側は掘形中央よりやや南寄りに築かれ、基本的に10～30cmの円礫を小口積みしているが、所々にやや角のある石材を使用している。内

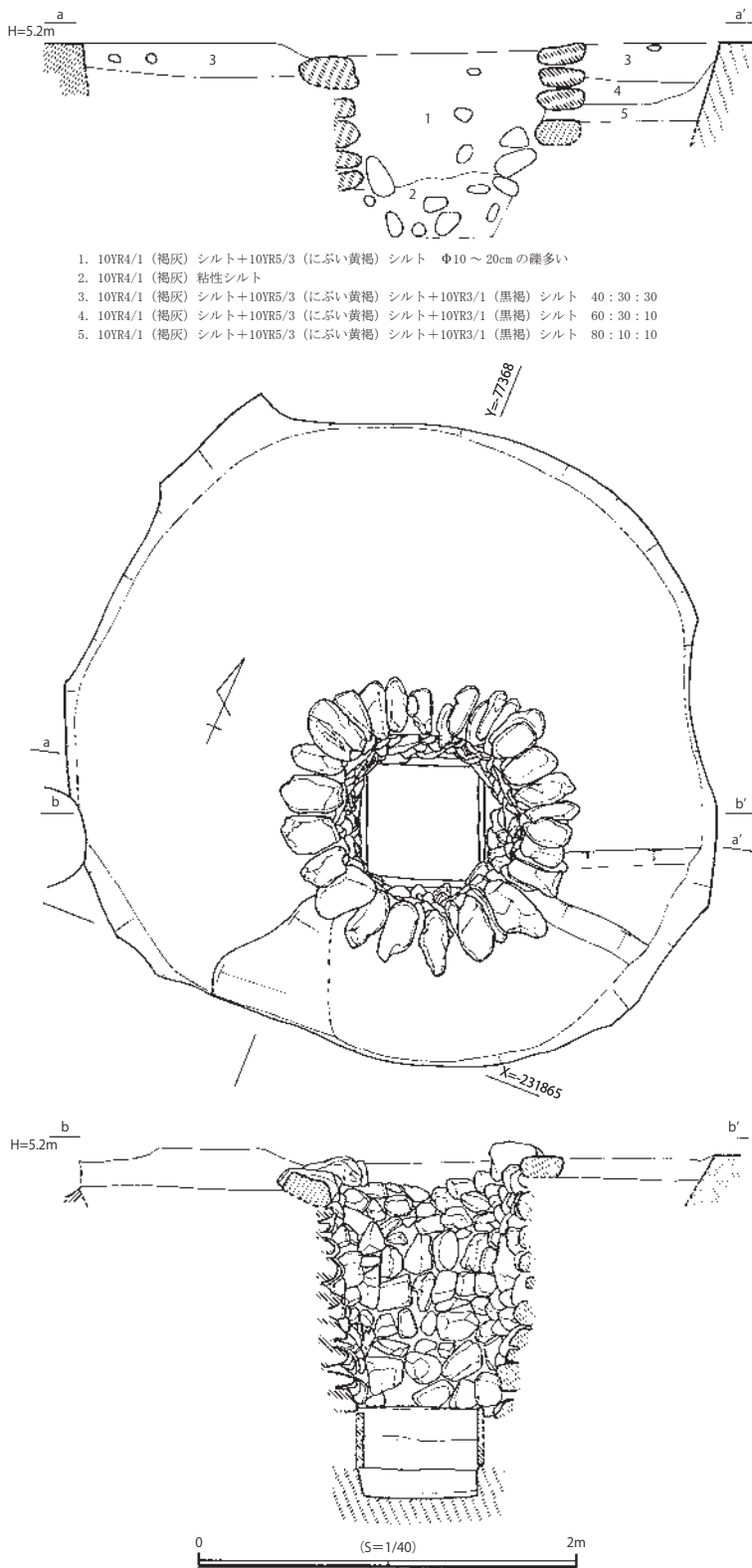


図 74 268 井戸

径は上部で 0.95 m、下部で 0.7 m と上方に広がっており、高さは残りの良い箇所では 1.4 m を測る。井戸側の規模に比して、堀形が大きいのが特徴で 131 井戸とは対照的である。

桐木はなく、石積みの下部に幅 30cm 前後、厚さ 4cm 程度の板材を柄組して方形枠を設けている。枠の内法は 0.6 m 四方で、枠内は 0.15 m 程度窪んでいた。

遺物は井戸側の埋土などから、土師器皿 (480・481)、瓦質土器風炉 (482)、備前焼播鉢 (483)・甕、常滑焼甕、中国製青磁碗 (483～485) などが出土するが、量は少ない。

焼土が出土しないことや、259 堀の虎口正面に位置することからも、最終段階には埋め戻されていたと考えられる。

### 3. 池

236 池 (図 39・76～79・81・82、図版 27・49～53)

調査区 2 の南部で、北肩の一部を検出した。258 堀と重複し、それより新しい。また、001 堀と繋がり、遺物内容からも同時期のものであると判断できる。検出した大きさは、長さ 24.0 m、幅 5.0 m であるが、南方・西方に拡がり現在の湯川神社の社殿前にある池や 1977・78 年度に行なわれた紀央

館高校 (旧御坊商工) 校舎建築に伴う発掘調査で確認している池に繋がることが予想でき、ほぼ湯川神社の社殿が建つ高台を巡っていたと考えられる。深さは一定でなく、1.4～2.5 m を測る。

遺物は 001 堀と接する底付近を中心に土師器皿 (487～506)、瓦質土器火鉢 (507)、瀬戸美濃系陶器天目茶碗・灰釉皿 (508～516)・灰釉碗、備前焼播鉢 (517)・大甕 (518～520)・水屋甕

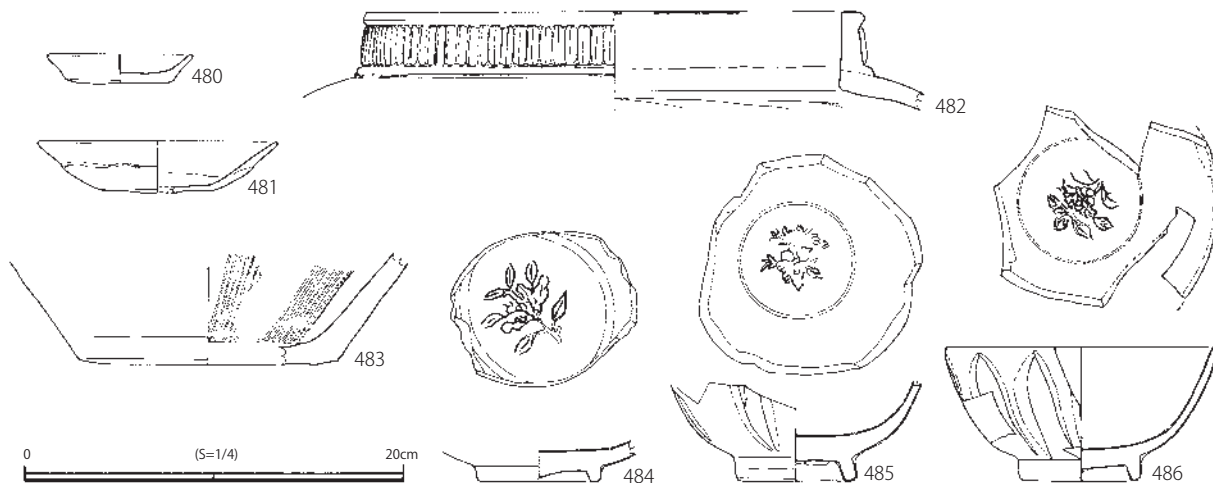


図 75 268 井戸 出土遺物

(521)、朝鮮製と考えられる焼締陶器小壺 (522)、中国製青磁碗 (523 ~ 525)・皿 (526)・香炉 (527)、中国製白磁碗・皿 (528 ~ 531)・聞香炉 (532)、中国製染付碗 (533 ~ 535)・皿 (536 ~ 539)・盤 (543 ~ 545)・杯 (540 ~ 542)などの土器類が出土している。このほか金属製品として刀子 (M 8)、石製品として硯 (S32)、砥石 (S33) がある。木製品としては漆椀 (W72)、箸 (W73・W74)、折敷 (W75・W76)、柄杓 (W77・W78)、曲物 (W79)、桶底 (W80)、アカトリ (W81)、下駄 (W82)、各種部材 (W83 ~ W86)、不明木製品 (W87) ほか、建築部材 (W88・W89) などが多量に出土している。瓦では丸瓦や平瓦のほか雁振瓦 (T33) が出土している。木製品のなかには、W88 などのように炭化したものが多く、館の焼失を物語るものである。

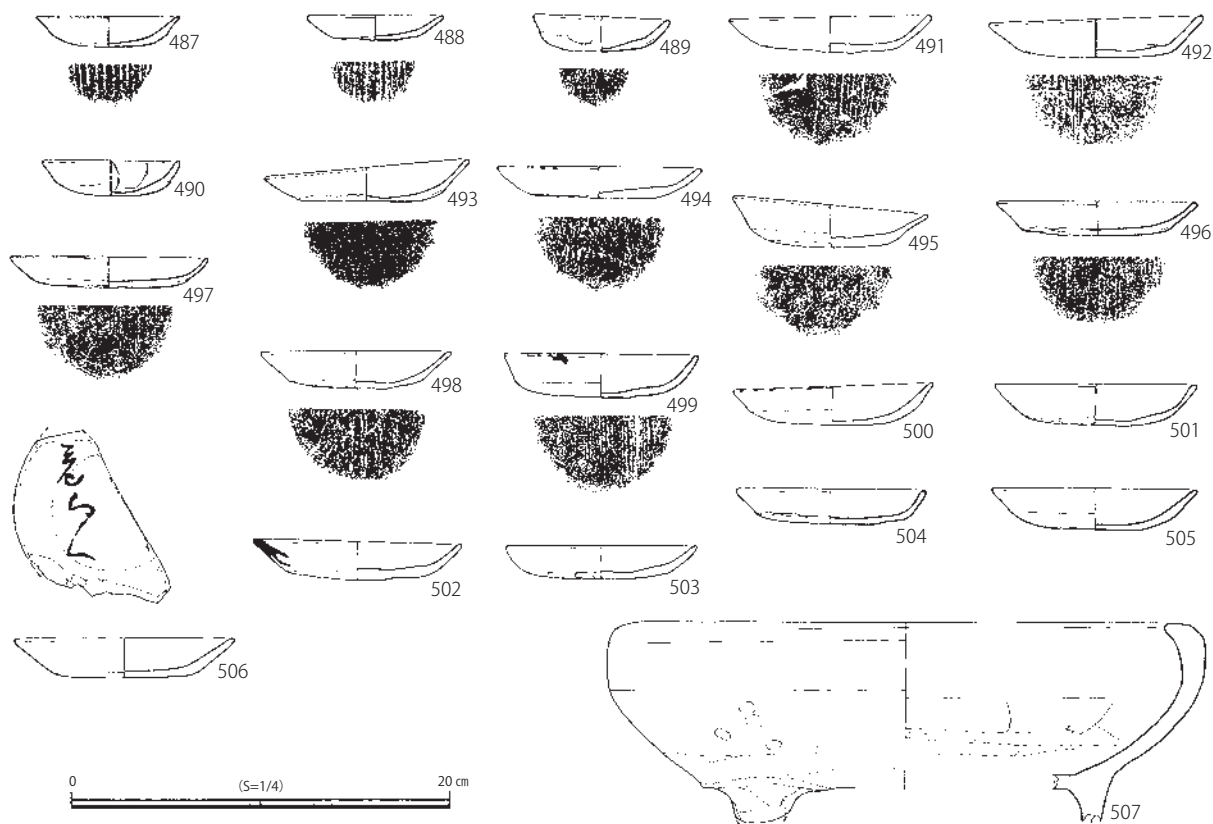
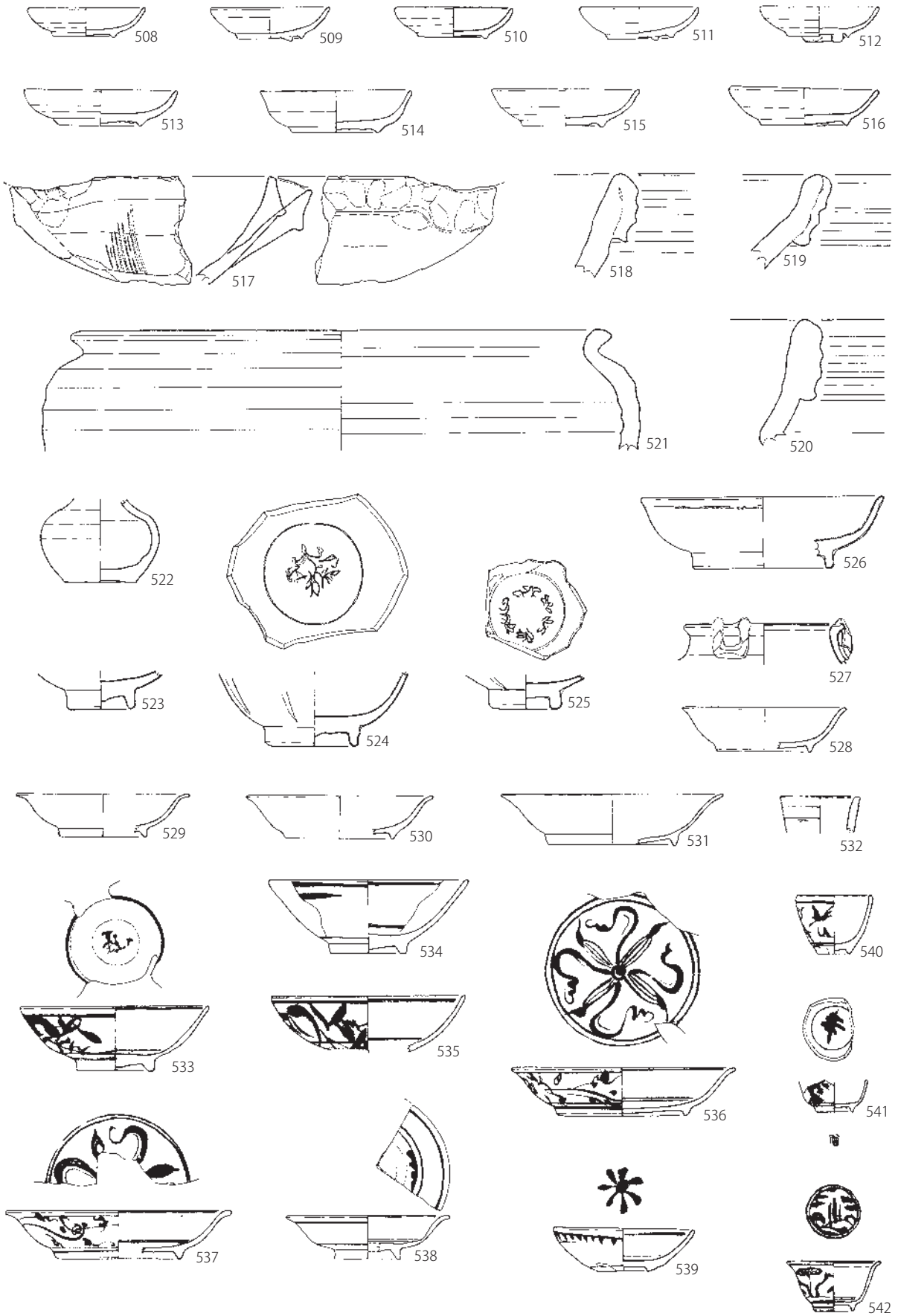


図 76 236 池 出土遺物 (1)





0 (S=1/4) 20 cm

景文  
英抄

图 77 236 池 出土遺物 (2)

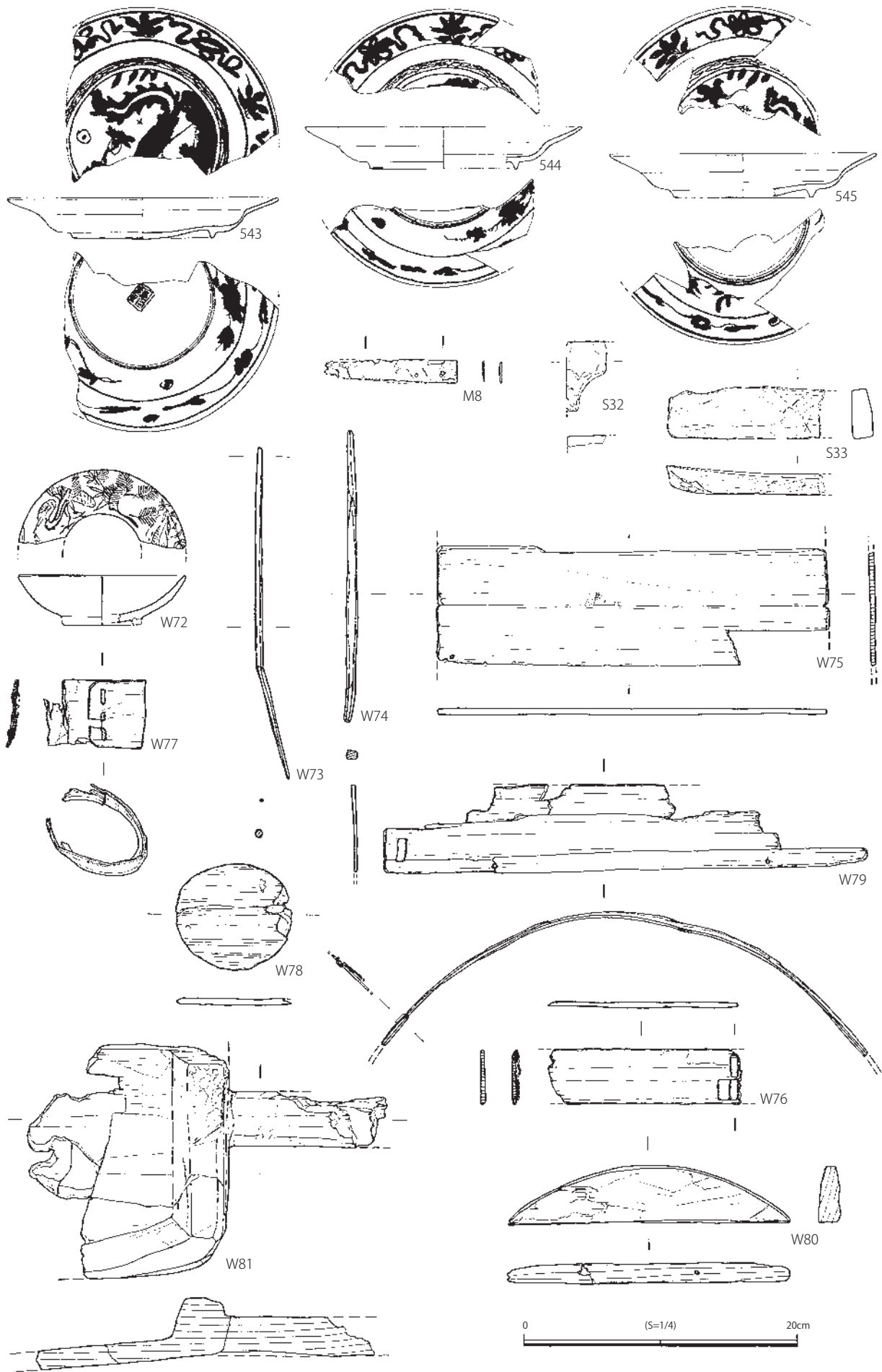


图 78 236 池 出土遺物 (3)

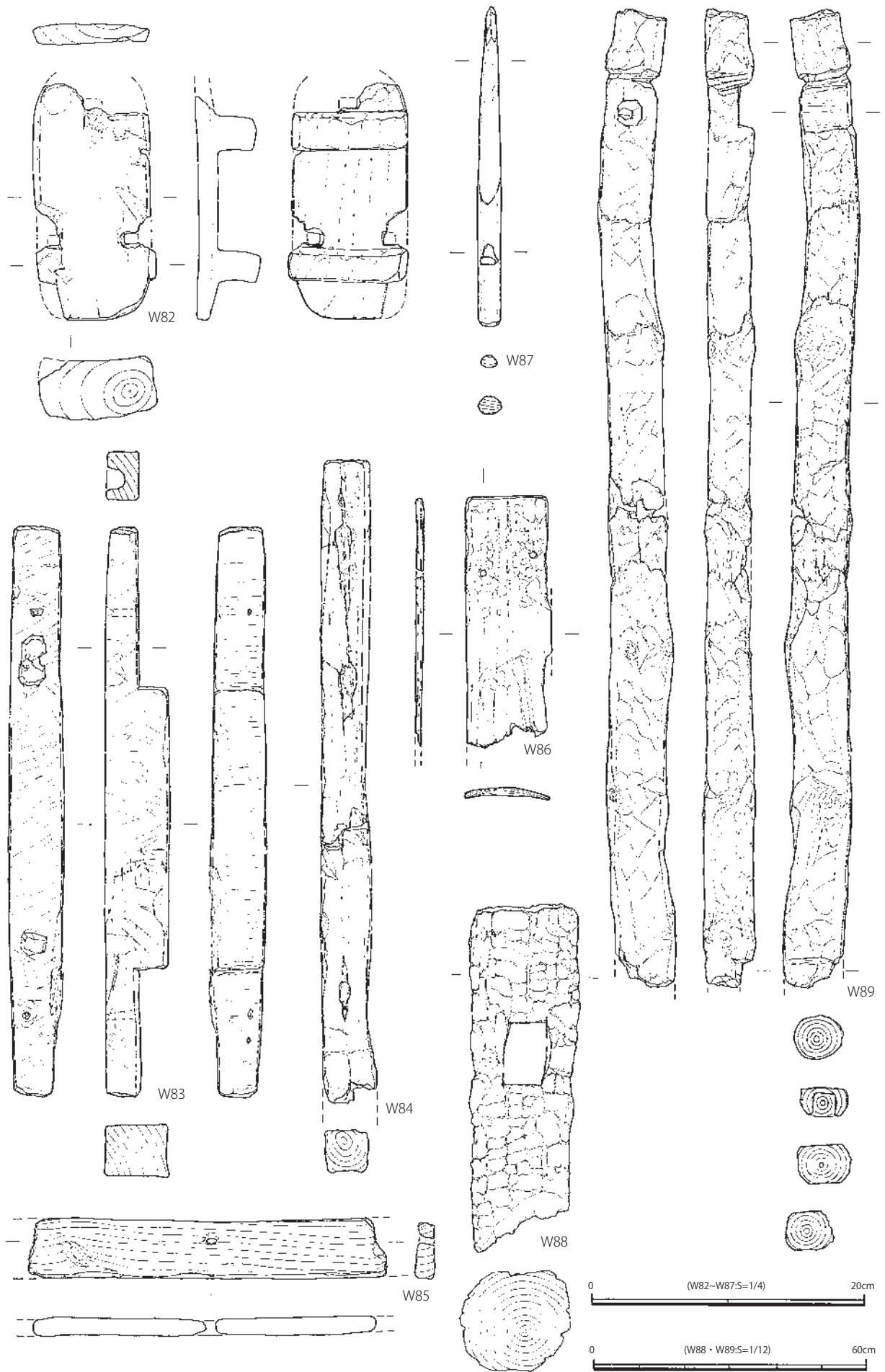


图 79 236 池 出土遺物 (4)

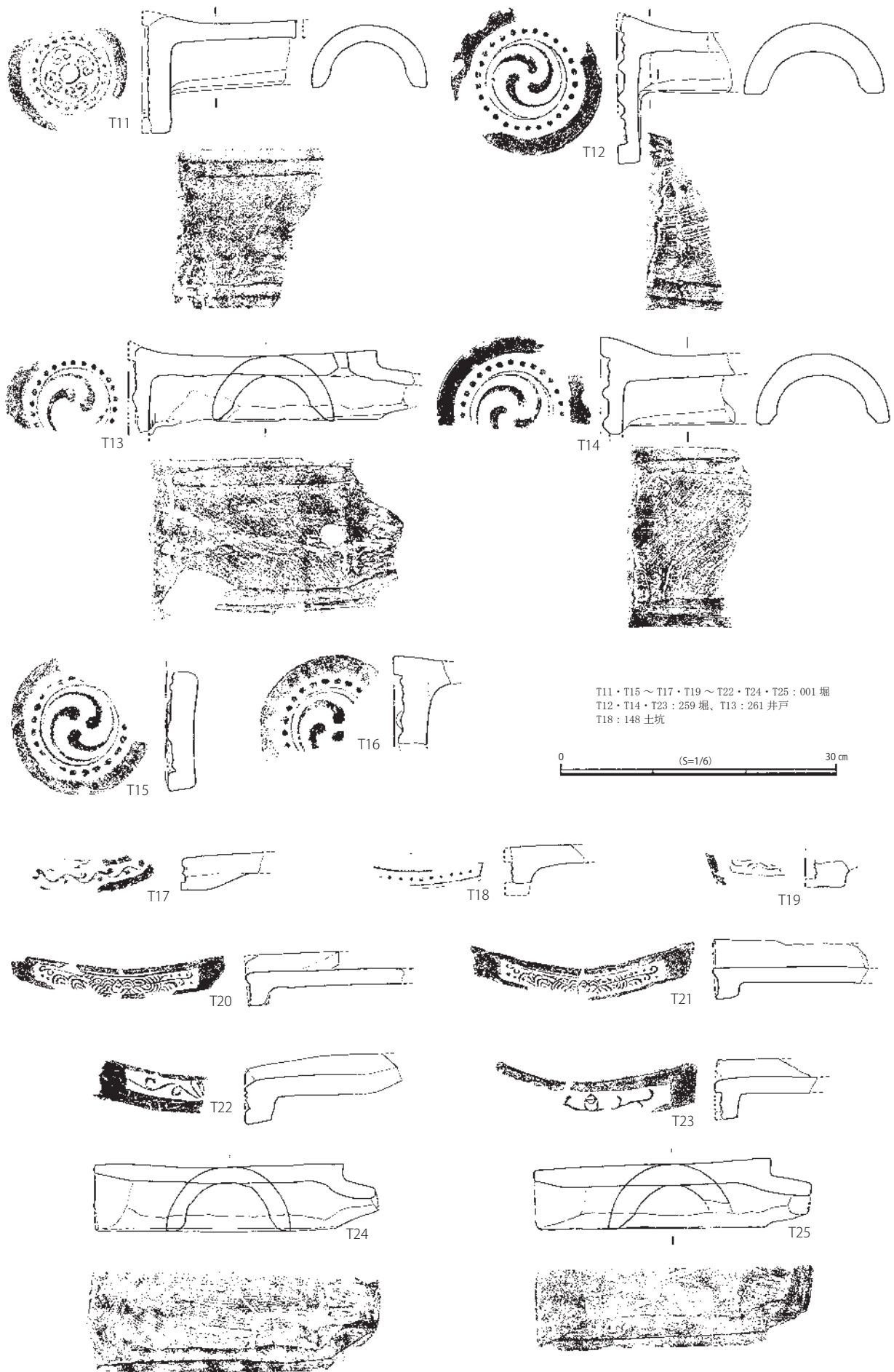


図 80 室町時代の瓦 (1)

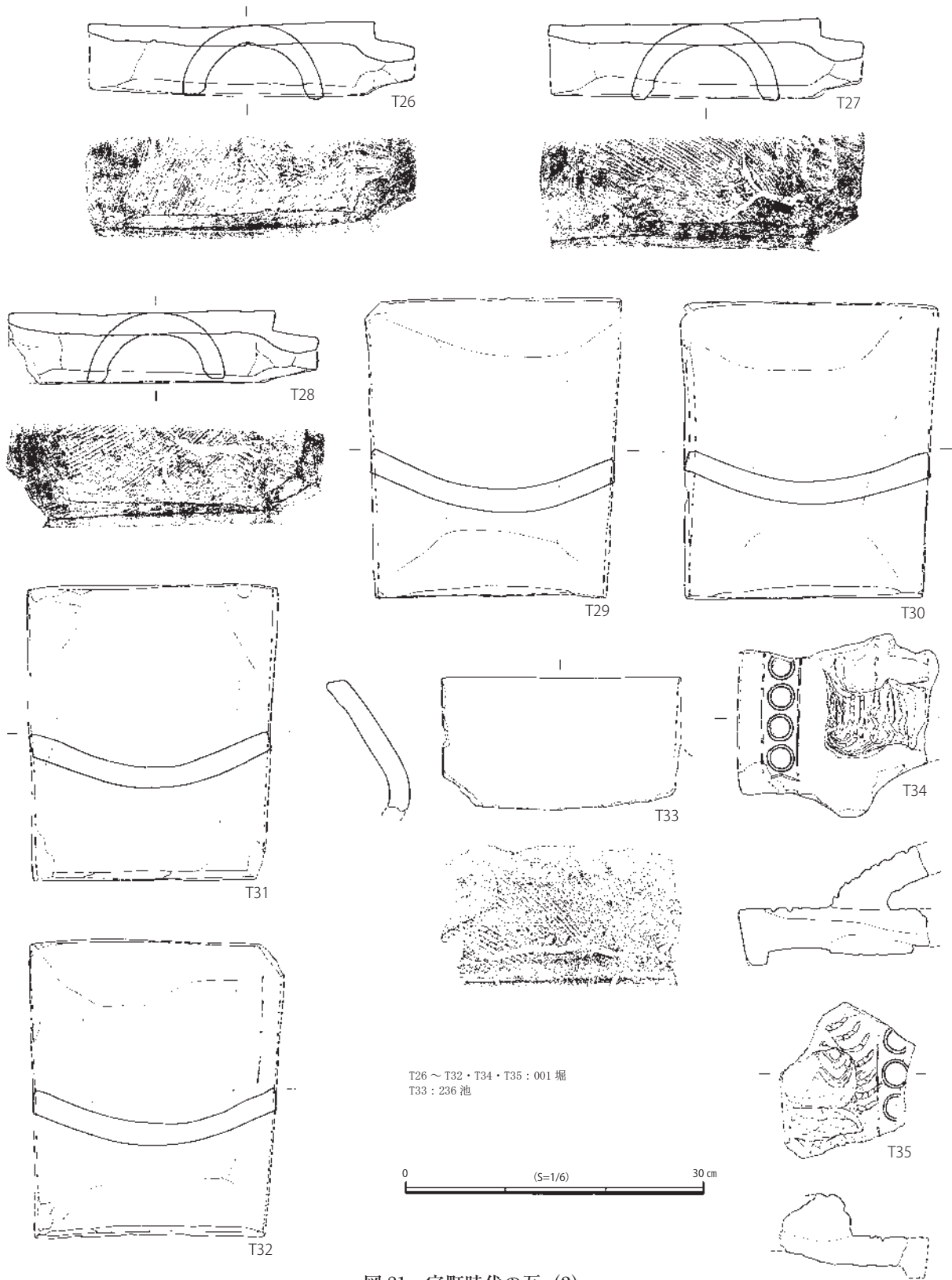


図 81 室町時代の瓦 (2)

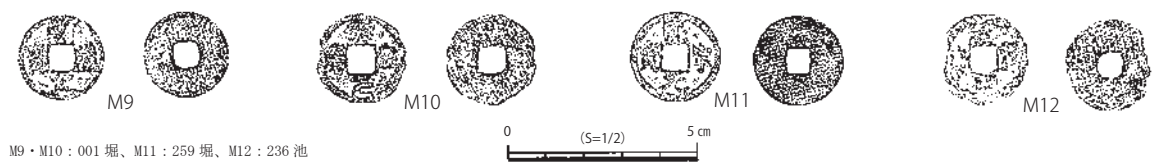


図 82 銭貨



## 第6節 近世の遺構と遺物 (図83・84、図版27・28)

調査区1と調査区2の西側部分で、江戸時代に掘削された大小多数の土坑を検出している。規模は1.0～7.0 m、深さ0.1～1.0 mと様々で、場所によっては、重複しないように土坑間に狭い掘り残しを意図的に設けている。また、同様な土坑が、紀央館高校の敷地でも多数みつまっている。このような掘削状況は、各地で見られる粘土採掘土坑と同様であることから、これらの土坑群もすべてでないにしろ同じ性格を考えておきたい。埋土は、地山土などを含むブロックや礫などで埋め戻された状況を示す。

遺物はほとんど含まないものや、多量の弥生時代から室町時代の遺物が出土するものがあるが、それらの中に少量の近世陶磁器が含まれている。土坑の時期は、陶磁器の特徴から江戸時代の後期頃であると考えられる。

### 037 土坑

調査区1の西端で検出した土坑で、一部が調査区域外となる。形状は長楕円形を呈し、規模は長さ6.8 m以上、幅2.4 m、深さ0.65 mを測る。断面形状は舟底状で、埋土からは弥生時代から室町時代にかけての土器類のほかに、近世の陶器などが出土している。

### 042 土坑 (図84、図版28)

調査区1の西端で検出した土坑で、楕円形を呈する。規模は長さ3.6 m、幅2.5 m、深さ0.55 mで、断面形状は箱状である。埋土には弥生土器から室町時代の土器類を多量に含み、近世の遺物として染付(546)等が数点出土している。

### 057 土坑 (図84、図版28)

調査区1の西側で検出した土坑で、不整楕円形を呈する。規模は長さ2.3 m、幅1.85 m、深さ0.55 mで、断面形状は舟底状を呈する。埋土には礫とともに弥生時代から室町時代にかけての土器類を大量に含み、近世の遺物として染付(547)等が数点出土している。

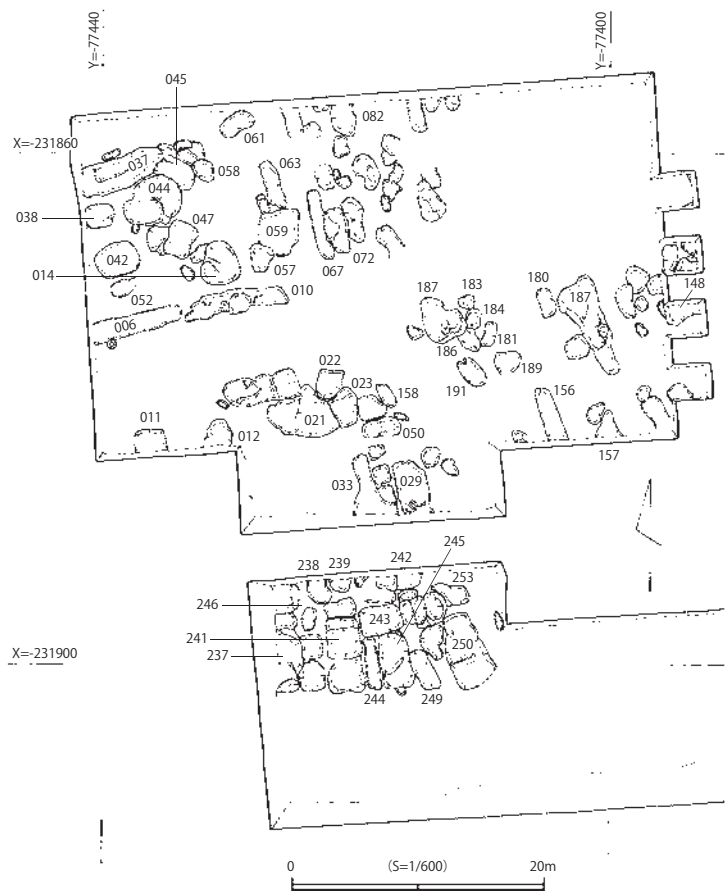


図83 近世の主要遺構

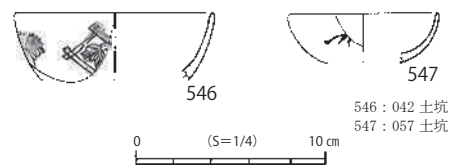


図84 近世の遺物

## 第6章 まとめ

### 第1節 弥生時代 (図85・86)

弥生時代中期の竪穴建物は、5棟検出した。今回の調査区に北接し、1980年度に湯川中学校特別校舎改築工事に伴う発掘調査でも1棟検出されており、削平が著しいものの建物と判断できる218溝も建物とすると、近接して7棟の建物が存在したことになる。また、西隣の紀央館高校の敷地では、同時期の土坑や溝・土器棺墓などが見つっている。これらの成果からも調査区1より北西側に集落が展開していたことが窺える。また、調査区2で検出した266・270溝が集落の内外を区画する溝とすれば、今回、集落の南東部の様子が明らかになったことになる。002竪穴建物と003竪穴建物は、接し過ぎることから同時併存は考えられず、003竪穴建物には2時期の壁溝が認められる。同様に1980年度検出の竪穴建物と004竪穴建物が同時併存しない距離にあり、前者には2時期の壁溝が認められることから、大きく3時期を想定することができる。各建物の併存関係は明らかにできないが、少なくとも中期後半(畿内第4様式)を中心とした時期に集落の消長があると考えられる。

同時期の建物や方形周溝墓などは、西250mにある御坊駅周辺のほか、北東300mにある富安I遺跡でも見つっている。御坊駅前では2棟の竪穴建物(図85のB・C)が検出されており、その南西側には幅3m前後の溝が弧状を描くように延びていることが既往の調査から窺うことができる。溝を挟んですぐ西側に方形周溝墓が2基存在し、南西側では竪穴建物は見つっていない

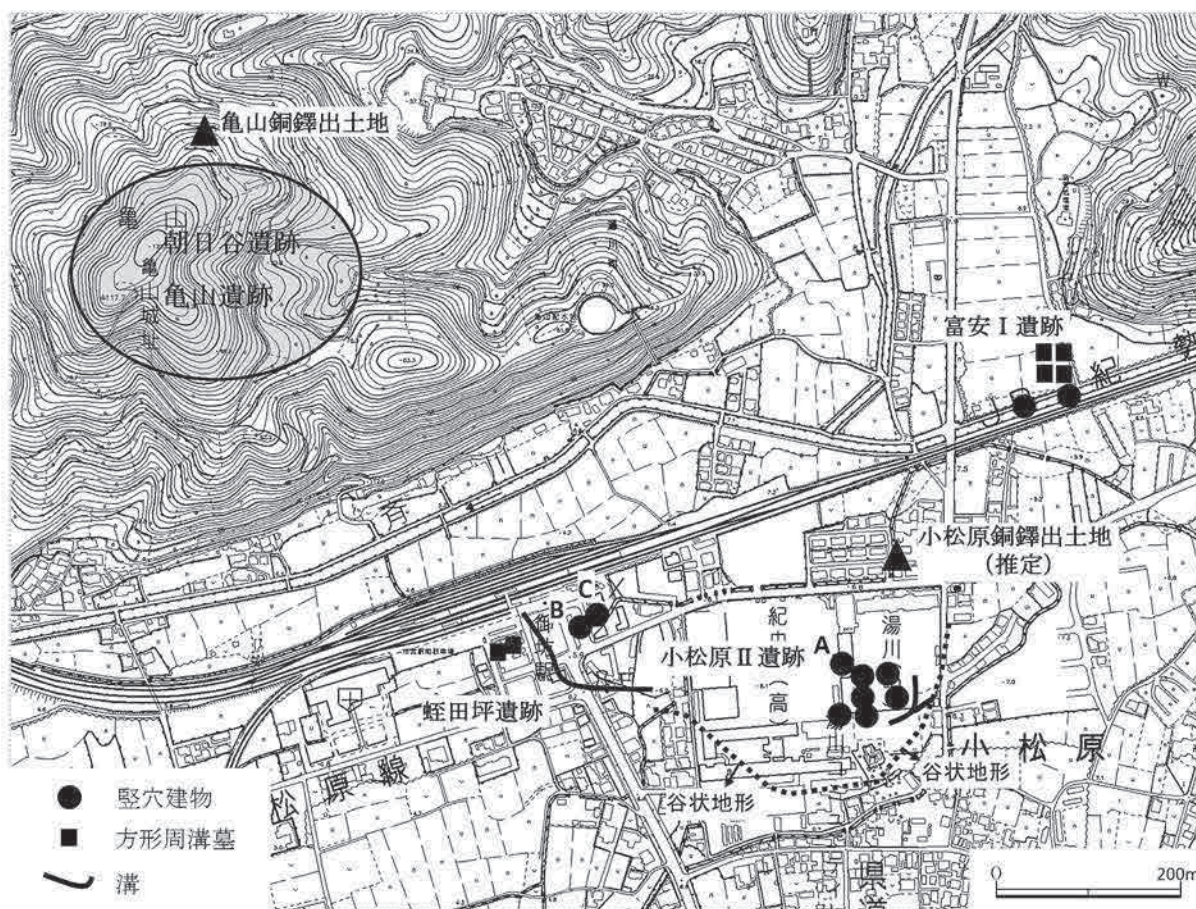
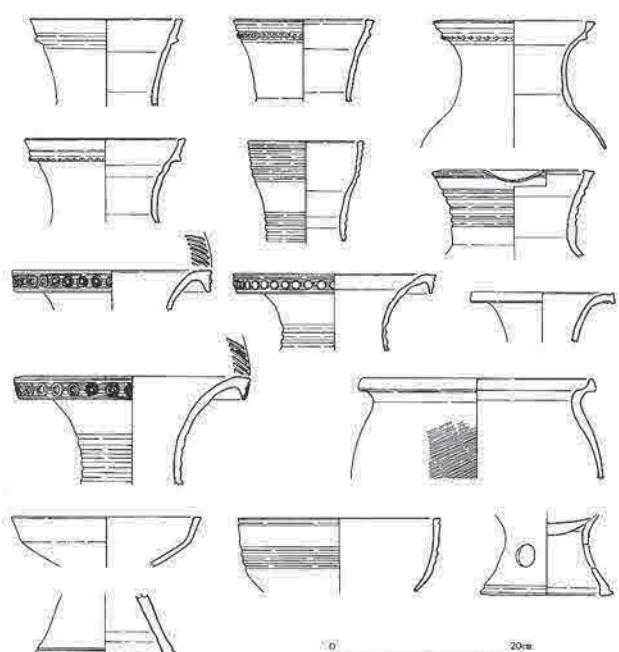


図85 弥生時代中期の小松原II遺跡周辺

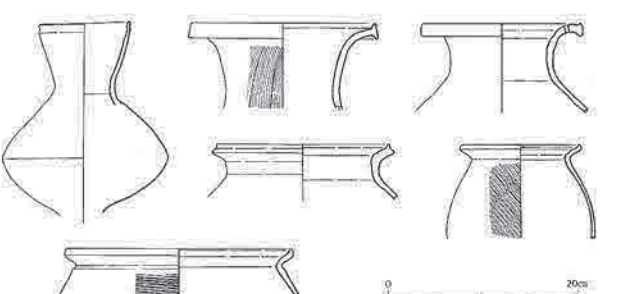




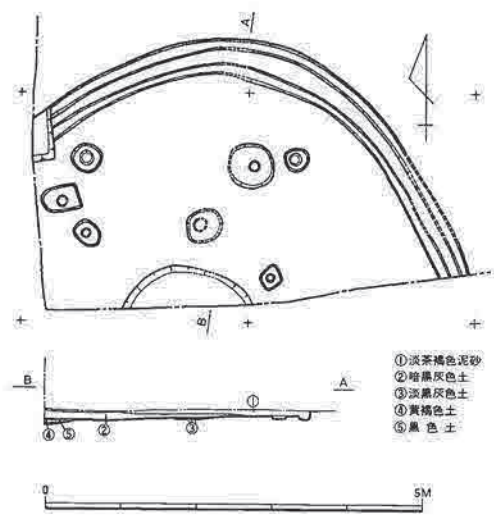
1980年度検出の竪穴建物出土遺物 (未報告)



1989年度検出の竪穴建物出土遺物 (未報告)



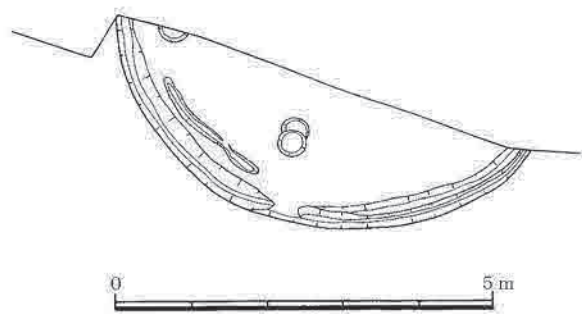
1995年度検出の竪穴建物出土遺物 (未報告)



A. 1980年度検出の竪穴建物 (表1の3)



B. 1989年度検出の竪穴建物 (表2のG)



C. 1995年度検出の竪穴建物 (表2のK)

図86 小松原Ⅱ遺跡検出の竪穴建物と出土遺物

い。これらのことから、弧状を描く溝は、集落の南西側を区画するもので、今回の調査で見つかった266・270溝に対応する可能性もある。また、集落の西に接しては、方形周溝墓などからなる墓域が存在したことも想定することができる。一方、富安Ⅰ遺跡との間には谷状地形が存在したと考えられ、同じ集落を構成していたか否かは判断し難いが、小松原Ⅱ遺跡周辺は多くの人々が集住する日高平野のなかでも拓けた地域であったことが想像できる。

弥生時代後期前半～中頃にかけて、小松原Ⅱ遺跡や富安Ⅰ遺跡では集落が途絶え、その後再び集落が営まれるのは後期後半～末頃になってからである。これと連動するように高地性集落である亀山遺跡や朝日谷遺跡が出現することからも、遺跡の関係が注目される。

## 第2節 古代 (図87)

奈良時代の263溝から出土した軒丸瓦(T1)は、内区が複弁八葉蓮華文で外区外縁が線鋸齒文を配し、8世紀初頭とされる道成寺創建時のものと同形式である。以前より紀央館高校の改築に伴う調査などで古代に遡る平瓦の破片が多く出土しており、小松原Ⅱ遺跡付近に古代寺院が存在することは予想されていた。今回出土した瓦から、寺の創建が白鳳時代に遡ると判断できる。また、その寺は、日本最古の仏教説話集である「日本霊異記」に登場する「別寺」である可能性も考えられる。日本霊異記の内容から、奈良時代後半に別寺は僧坊を備え、単なるお堂ではなかったと考えられる。また、郡衙の近くにあったと解釈でき、薬師如来をまつる寺であったことも想像できる。

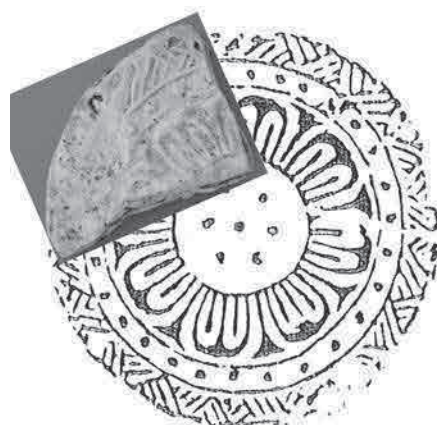


図87 道成寺創建期の瓦  
(写真は小松原Ⅱ遺跡出土)

ところで、日高郡の郡衙は、日高振興局付近の堅田遺跡で見ついている(図3)。規則正しく配列された大きな側柱の掘立柱建物や、正税などを蓄えたと考えられる倉跡も検出されている。ただ、堅田遺跡付近にあった郡衙の遺構は、奈良時代前半頃までのものであり、奈良時代後半以降は、他所に移っていることが出土した遺物から窺える。日高平野で、奈良時代の遺物が多く出土するのは、小松原Ⅱ遺跡のほか蛭田坪遺跡・富安Ⅰ遺跡・津井切遺跡で、すべて小松原Ⅱ遺跡に隣接する。小松原Ⅱ遺跡では、大きな掘形をもつ奈良時代の掘立柱建物とともに、硯なども見ついている。これらのことから、日高郡の郡衙は奈良時代後半においては小松原Ⅱ遺跡周辺に移っていたと考えることができる。以上から、奈良時代後半に小松原Ⅱ遺跡付近に郡衙があり、その近くに別寺があった可能性がある。たいていの場合、郡衙に隣接して郡寺が存在する例も多いことから、別寺が郡寺であったと想像することも可能であろう。

さて、別寺については、これまで、日高地方には奈良時代に遡る寺院が道成寺以外に分かっていなかったことから、別寺が道成寺であるとの説もあったが、郡衙と道成寺の距離が遠いことになり、道成寺が千手観音を仏像とすることなどからも、道成寺を別寺とするには難があり、別寺はやはり小松原Ⅱ遺跡付近にあったと解釈する方が妥当であろう。

### 第3節 鎌倉時代

#### 1. 浄土宗系寺院 (図88・89)

鎌倉時代の遺構は井戸のみであるが、南東部の谷状遺構からは多くの瓦器や土師器、角塔婆(位牌)など鎌倉時代の遺物が出土している。これらは1990年度の紀央館高校の改築工事に伴う発掘調査で見つかった六字名号(南無阿弥陀仏)を書いた笹塔婆や角塔婆(位牌)、あるいは、「・・無量寿命経」と書かれた経箱の蓋、文永五年(1268)銘の扇骨などと同じ13世紀中頃から後半代のものである。遺物内容から、湯川中学校から紀央館高校にかけて浄土宗(系)の寺が存在したことが窺え、浄土宗の布教が地方に早い段階で行なわれていたことが窺える。また、これまで出土した瓦の中には、鎌倉時代から南北朝時代の特徴をものが出土しており、14世紀代まで寺が存在していた可能性がある。また、1995年度の調査で出土している「道徳禅門」妙心禅尼などの戒名を刻んだ鳥衾瓦や、今回の調査でしている板碑や五輪塔などもこのお寺に伴うものであったと考えられる。

有田川町の野田地区遺跡でも、13世紀代後半代に帰属する多量の土器とともに仏教関係の遺物が出土している。笹塔婆・位牌など時期・内容とも小松原Ⅱ遺跡と同じで共通性が窺え、野田地区遺跡の場合、同時期にあったとされる観音寺との関連が考えられている。ここでは、小松原Ⅱ遺跡でも出土している宝相華文軒丸瓦(T11)と同形式のものが出土し、より強い繋がりが窺える。

天皇・公家・武家・僧など有力層の過去帳である「常楽記」では、康暦二年(1380)に小松原宿で亡くなった僧の妻室を九品寺に荼毘したとの記述がある。九品寺は現在も小松原にある寺で、古くは時宗であったものが慶長年間(1596～1643)に浄土宗になったとされる。宗派はともかくとして、小松原に九品寺があったことは間違いのないことから、鎌倉時代から南北朝期にかけて、紀央館高校・湯川中学校付近にあった寺が九品寺であった可能性も考えておきたい。

#### 2. 土器 (表3)

260 谷状遺構からは、多くの瓦器・土師器が出土している。日高地方の鎌倉時代の土器編年を



図88 鎌倉時代の木製品  
(1990年度・表1の12)

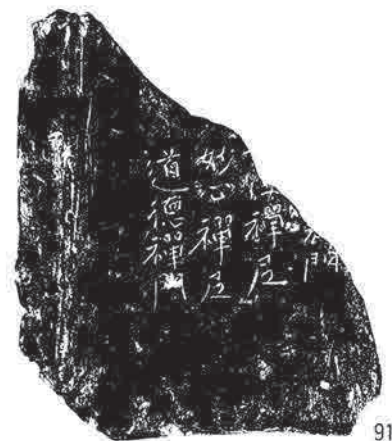


図89 戒名を刻んだ鳥衾瓦  
(1995年度・表1の13)



表3 260 谷状遺構出土器の組成・鎌倉時代

土師器		瓦器(瓦質土器)				東播系	青磁		青白磁	白磁	常滑	計
皿	釜	椀	皿	鉢	甕	鉢	碗	皿	杯	梅瓶	甕	
700	27	581	33	1	6	1	8	1	1	1	1	1361

語る場合、13世紀前半までは有田川町野田地区遺跡の資料を引用することができる。地域差が顕著になる13世紀半ば以降は、1990年の調査で紀年銘をもつ扇骨から絶対年代が明らかにされており、それらから260谷状遺構出土の土器群は13世紀中頃から後半にかけての土器群として抑えることができる。破片計算では瓦器と土師器の数は拮抗しており、瓦器が多いとされる他地域とはやや異なり、日高地方の特色として捉えることができる。

また、瓦器と土師器は形態・調整・技法が似通っており、明らかに両者の形態が違う有田地方などとは異なっている。瓦器椀には浅いものが多く、土師器皿に高台を付した器形を呈し、また、土師器皿・瓦器皿とも同形態である。しかも十分に燻されていない瓦器皿には、土師器皿と峻別できないようなものが存在し、土師器・瓦器が同じ人々(工人)によって製作されていることが窺える。

## 第4節 室町時代

### 1. 湯川氏について

湯川氏は、室町幕府の奉公衆で、戦国時代に日高地方を中心に有田・牟婁地方に影響を及ぼした。系図などでは甲斐武田氏を祖とし、鎌倉時代に熊野道湯川に居を構え、その後、功をたてて芳養内羽位に移り、そして日高地方に進出したとされる。江戸時代以降に書かれたものを根拠としていることから、全てを肯定できないものの、その後も、道湯川と芳養は湯川氏の一族が拠点としていることから一方的に否定できない。

湯川氏が歴史に登場するのは南北朝時代以降で、当初は北朝方につき、南朝方に移り、最終的には北朝方となり幕府との繋がりを強くする。系図では戦国時代の湯川当主として政春 - 直光 - 直春となっているが、政春と直光の間にはブランクがあり、光春を充てることもできる。光春は16世紀前半代に文書の発給など活躍がみられるものの、系図から消された人物である。とにかく、湯川氏は戦国時代以降、歴史の表舞台に頻出するようになり、政春は連歌に通じ飯尾宗祇とも親交をもち、直光や直春は紀州勢を引き連れて河内へ出陣するなど文字通りの紀中・紀南の旗頭となるが、直光は河内教興寺で戦死する。また、直春は天正十三年(1585)の秀吉の紀州攻めで抵抗するが、最終的には紀州における実権を失うことになる。

### 2. 土器組成(図90、表4～6)

調査では、多量の室町時代の土器が出土している。当期の遺構以外にも、近世の土坑などからも混入遺物として多量に出土しており、総破片数は約10,000点となる。表4は遺構出土の遺物で、土師器の比率が非常に高い傾向にある。土師器では皿が大勢を占め、これらは燈明皿や日常雑器としての用途が考えられるが、それらを考慮しても尚多い出土量と言える。これは、儀礼用として使用したからであると考えられ、全国の守護館や、それに準じるような館などでも同様に土器全体量に占める土師器皿が多い傾向にある。

図90は、湯川氏館跡をはじめ、各遺跡から出土した土器の組成である。一乗谷遺跡朝倉氏館(註1)とするのは、越前の戦国大名である朝倉氏領主館の組成で、湯川氏館と非常によく似た組成

表4 室町時代の遺構の土器組成

種類	土器							国産陶器								
	土師器				瓦質土器			備前			常滑	瀬戸美濃				
器種	皿	土釜	焙烙	火鉢	甕	羽釜	火鉢・香炉	甕	壺	挿鉢	甕	皿	碗	天目	盤	香炉
破片点数	6401	88	19	4	44	11	30	228	26	47	6	67	7	16	9	1
占有率	6512				85			301			6	100				
	0.877				0.011			0.041			0.001	0.013				

種類	輸入陶磁器																
	青磁					白磁				染付				褐釉	朝鮮王朝	倣建寧天	
器種	碗	皿	盤・鉢	壺	香炉	碗	皿	杯	香炉	碗	皿	盤	杯	壺	小壺	目碗	
破片点数	48	5	14	1	2	9	59	1	1	90	65	103	12	6	2	1	
占有率	70					70				270				6	2	1	
	0.009					0.009				0.036				0.001	0.000	0.000	

合計  
7423

表5 236池の土器組成

種類	土器							国産陶器								
	土師器				瓦質土器			備前			常滑	瀬戸美濃				
器種	皿	土釜	焙烙	火鉢	甕	羽釜	火鉢・香炉	甕	壺	挿鉢	甕	皿	碗	天目	盤	香炉
破片点数	590	1	0	0	0	0	7	44	3	7	0	52	5	5	0	0
占有率	591				7			54			0	62				
	0.586				0.007			0.054			0.000	0.061				

種類	輸入陶磁器																
	青磁					白磁				染付				褐釉	朝鮮王朝	倣建寧天	
器種	碗	皿	盤・鉢	壺	香炉	碗	皿	杯	香炉	碗	皿	盤	杯	壺	小壺	目碗	
破片点数	5	0	0	0	1	4	36	0	1	81	54	101	11	0	1	0	
占有率	6					41				247				0	1	0	
	0.006					0.041				0.245				0.000	0.001	0.000	

合計  
1009

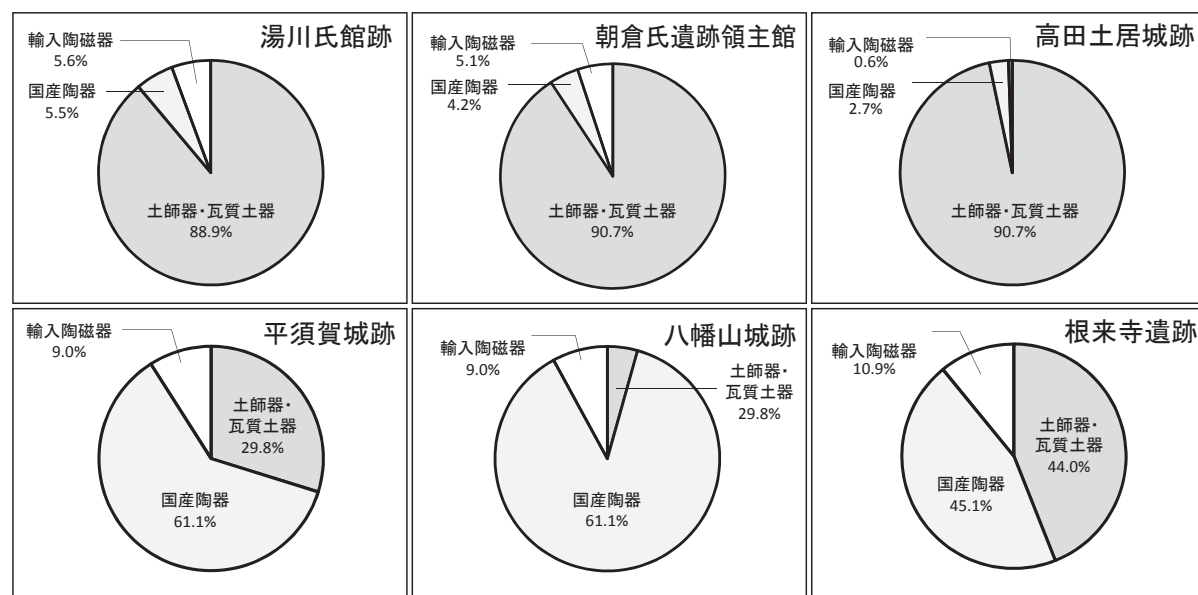


図90 各遺跡の土器組成

となっている。朝倉氏は幕府とは近い関係にあり、幕府の武家儀礼に則って式三献などを行った結果であると考えられている。一乗谷朝倉氏遺跡では、町屋や武家屋敷の土器組成も提示されているが、土師器皿の割合は多くない。

高田土居城跡（註2）はみなべ町にある方形居館で、紀伊国奥郡の守護所的な性格が考えられ、紀伊国守護であった畠山氏の影響下で、奥郡小守護代の中村氏や野辺氏が関わった城であると考えられる。ここでは輸入陶磁器や国産陶器などは極端に少なく、圧倒的に土師器皿が占め、やはり武家儀礼を行っていたと考えている。

表6 各遺跡の土器組成

	土師器・瓦質土器	国産陶器	輸入陶磁器
湯川氏館跡	6597	407	419
朝倉氏遺跡領主館	3636	168	203
高田土居城跡	13039	369	77
平須賀城跡	1894	3884	574
八幡山城跡	141	2851	258
根来寺遺跡	8629	8841	2143

一乗谷朝倉氏遺跡領主館のみ個体換算数、他は破片点数

一方、周辺部のみなべ町平須賀城跡（註3）・白浜町八幡山城（註4）や岩出市根来寺遺跡（註5）の土器組成を見てみると、国産陶器の占める割合が多く、土師器皿は、半分にも満たない組成となっている。これらのことから、湯川氏館の土器組成は、守護館など同様に位置づけることができ、幕府との強い繋がりを考えることができる。

ところで、守護館などでは、儀式に京の皿に倣い京都系土師器と呼ばれる手捏ね成形の皿が使用されることが多く、和歌山県中・南部地域の中世遺跡でも少ないながら出土する。今回の調査では、001 堀の古い段階の埋土から出土がみられ、一様に金雲母が含まれ搬入品であることが窺える。ただ、16 世紀後半代に帰属すると考えられる 236 池や 001 堀に一括投棄された土師器皿のなかには、京都系土師器は含まれず、在地の皿で占められる。これらには、大・小のサイズはあるが、大で 10～11cm 前後、小で 7cm 前後とかなり小さく、形態も京都系土師器とは異なっている。

一方、高田土居城跡は 15 世紀から 16 世紀前半頃まで機能するが、京都系土師器は一定量あるものの、京都系土師器を模倣する在地土師器、通有の在地系土師器があり、儀式を京都系土師器のみで行っていないと考えられる。湯川氏館においても、早い段階では京都系土師器を含む土師器皿を用いて儀式をおこなうものの、16 世紀後半に至っては、在地系土器のみで執り行ったと解釈することができる。

### 3. 湯川氏館とその周辺

湯川氏館は、小松原館とも呼ばれ、文献などでは小松原城の名前でも登場している。山城である亀山城とは対になり、戦いなど非常時に立て籠もるのが亀山城、日常的な生活をしていたのが湯川氏館である。また、館跡の南側には城下町が形成されており、小松原周辺に湯川氏の拠点が集まっていたことになる。

湯川氏が、小松原に拠点を構えた大きな理由は、紀中・紀南地方では最大規模である日高平野の穀倉地帯を背後に、熊野街道と日高川渡河を控えた小松原宿を抑える位置にあることであろう。

**亀山城跡** JR 御坊駅の北側にある亀山（標高約 122 m）に築かれた山城で、山上からは、日高平野を一望でき、平野の向こうには太平洋を望むことができる。

城跡は、畑の開墾により一部破壊されているが、比較的良好に曲輪などが残存している。構造は、亀山の頂上部に大規模な土塁や高い切岸を巡らした 2 段からなる主郭部を置き、頂上部からひだ状に派生する幾つもの小尾根部や斜面地に、山を取り巻くように長く延びる曲輪を階段状に配している。その範囲は、玉置氏の居城である日高川町の手取城跡やみなべ町の平須賀城跡とともに県下最大規模と言える。また、周辺の山城では、曲輪を頂上と尾根筋を中心に線状に配し、尾根筋に大規模な堀切を用いて敵の進入を遮断するのが通例とするが、亀山城跡では小規模な堀切はあるものの、遮断は主に山腹に長く延びる曲輪に頼るものである。城の周囲は 2km 以上あるが、これは必然的に動員できる兵が多かったことの証左であり、湯川氏の家臣の多さ・兵力を物語るものと言える。

亀山城跡の周辺では、東側の尾根伝いにある標高 83 m の小ピークに出丸が築かれており、鳳生寺の裏山にも出城とされる富安城跡が、東側の八幡山にも八幡山城跡があり、これらが湯川氏の拠点を守る山城と理解することができる。

亀山城跡からは、これまで城に係る遺物が 1 点も採集されていない。発掘された日高地方以南の



山城では、日常雑器をはじめとする遺物が多く出土している。また、手取城跡や地域の拠点となる平須賀城跡、日置川流域の安宅八幡山城跡では、多種多様の日常雑器のほかに茶道具なども見つかり、一時的に立て籠もるだけでなく、恒常的に生活していたことが分かっている。また、前述した山城では、投弾として用意された多量の川原石が出土し、臨戦的な状況が窺えるものの、亀山城跡ではほとんど確認できない。城の性格上、少なからず兵は詰めていたと考えられ、最低限の日常雑器は使用していたと考えるが、亀山城跡から遺物が見つからないのは特異なことと言える。嚴重な構造であるものの、籠城はしておらず戦いの場とはなっていない可能性がある。

**城下町** 湯川氏館の南側にあった城下町は、館以前からのあった熊野街道の宿場町でもあり、おおよそ現在の小松原集落の範囲に相当することが、館廃絶から間もない慶長六年（1601）の検地帳からも窺うことができる。城下には東道・豎道・東道と南北に延びる3本の道路があり、こうち東道が熊野街道とされている。ただ、現在も残る地割が城下町当時のものとする、湯川氏館南辺中央を付近に取りつく豎道を中心に町割りがなされていることが窺え、城下町があった時



図91 湯川氏館とその周辺



代には堅道が熊野街道であった可能性が考えられる。また、城下の区画は比較的小規模なものであり、直属の家臣が居住したとは考えられず、城下は町屋的な空間であったと思われる。湯川氏の家臣は、紀中・紀南の海岸沿いを拠点として、領域ごとに城・館を構えていることから、城下町に屋敷を持たなかったと想像することもできる。

城下町の南側には川原畑坪の地名が残り、それより南側には田の畦畔から河川の痕跡を読み取ることができる。またその南には島の地名も残り、日高川の三角州が存在したことが窺える。

これらのことから、城下の南側には、日高川から派生する河川があり、湊があったと想定することも可能である。

#### 4. 湯川氏館の規模

既往の調査では、各所で館を区画すると考えられる堀が検出されているが、これらは同時期のものではなく、何時期かあったことが想定できる。館は最終段階で火災に遭っていることが窺え、埋土に焼土や瓦・焼けた建築部材などを含むものが最終段階の遺構とすることができる。その解釈から、これまで西限と北限の堀、内部を区画する堀など明らかになっており、今回の調査で東限を区画すると考えられる 259 堀が検出されたことで、館の規模がほぼ想定できるようになった。西限の堀は二重になっており、内堀と外堀の間には土塁も存在する。内堀は幅約 15.0 m で、深

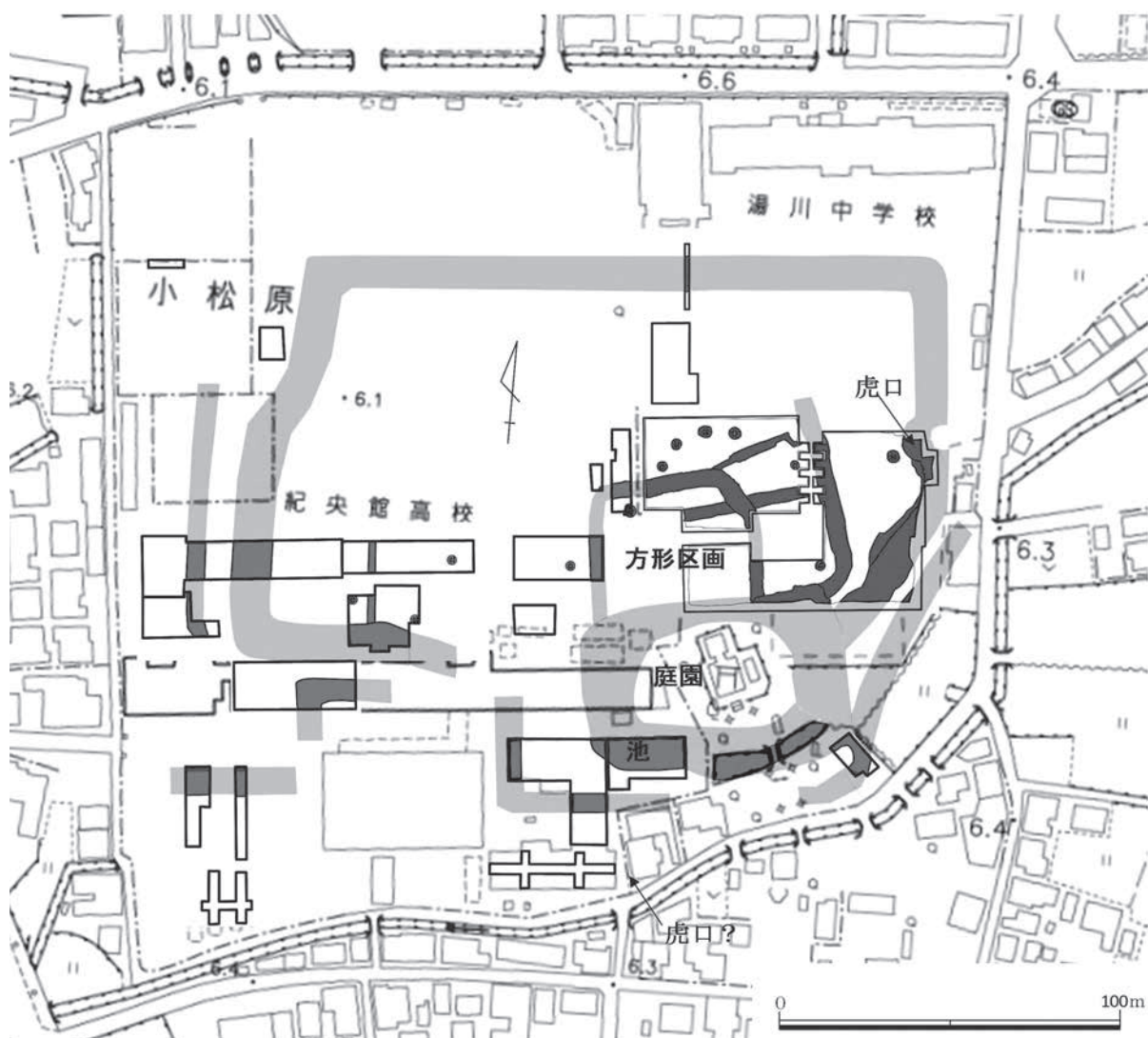


図 92 湯川氏館推定復元図



さ2.7 m、外堀は幅6.0～7.0 m、深さ2.6 mを測り、外側に柵列を設けている。北限の堀は幅約11.0 m、深さ1.6 mで、南限は現在も館の南を東西に流れる用水路（財部川）付近であったと考えられ、おおよそ東西約225 m、南北約200 mの規模をもつ方形居館であると推定できる。これは、周防にある大内館など各地の守護館に匹敵するか、凌駕する規模をもつ。小松原城の名でも記されていることから、最終段階は平城に近い内容・構造であった可能性が高い。先にも記したように亀山城跡に生活の痕跡がないのは、湯川氏館がかなり防御に優れたものであったことを裏付けるものと言えるかもしれない。

## 5. 庭園と方形区画

湯川中学校の南隣にある湯川神社は館の庭園の名残で、神社前に残る池は、社地（築山）を巡るように存在したことが、これまでの発掘調査から窺うことができ、今回の調査でもその一部の236池を検出した。湯川神社には樹齢1000年とされるクスノキもあり、庭園の木であった可能性も考えられる。湯川氏は室町幕府の奉公衆を勤め、館の構造も幕府の室町第同様の方形居館となるが、これらを意識した守護館では庭園を館の南東部に築くことが多く、湯川氏館でも、まさにその場所に庭園が位置していることになる。

001堀の続きは、紀央館高校の敷地内の3箇所調査区で確認されており、池の北側にある東西約40 m×南北約30 mの方形区画を巡っていたと考えられる。

守護館では庭園に面して会所があり、それに接して主殿が設けられ、武家儀礼が行われたことが知られている。主殿ではカワラケ（土師器皿）などを多量に用いる式三献が、会所は接客空間で饗宴が行われ、そこでは威信財といえる高級な中国製陶磁器などが多用された。

001堀から出土する遺物を地点別に概観すると、北側部分では土師器皿が多量に出土し、中国製陶磁器が少ないのに比して、南側部分やそれと接する236池では土師器皿が少なく、逆に中国製陶磁器が多い傾向にある（表5）。また、これらの中国製陶磁器には染付盤や碗・皿、瀬戸美濃系陶器皿がセットで出土するのをはじめ青磁や白磁の香炉なども出土している。

北側部分の土師器皿の出土状況を綿密にみると、堀の北側から投棄された状態で出土しており、土器には完形品が多い特徴がある。これらの土師器皿と同じものが、001堀の北側に接する008井戸や、その周辺の近世土坑の混入遺物として多量に出土しており、001堀の北側に異常に土師器皿の出土が多い空間が存在することになる。これらの事から、土師器皿を一度だけ使用して廃棄する、多量の土師器皿を必要とする儀礼を行う主殿が001堀の北側に存在したことが想像できる。ただ、儀式に用いる土師器皿には京都系土師器が用いられることが多いが、湯川氏館では在地型の土師器皿が用いられていることになり、このことについては検討課題である。

一方、方形区画内の南側では、威信財と言える陶磁器が出土し、またそれらがセットで出土していることから、饗宴などが行われた会所が存在したと考えることができる。また、001堀からは多量の瓦が出土するが、それらは区画内から流れ込むような状況を示すことから、少なくとも最終段階の会所は瓦葺であったと想定することもできる。

## 6. 虎口

259堀は調査区北東付近で直線的に伸びず、内側に湾入させるなど所謂「横矢掛かり」の構造をもっている。湾入部には橋脚が存在することからも、この箇所に館への虎口（入口）があり橋

が架けられていたことが窺える。地籍図ではこの虎口付近から西に向かい 001 堀の外を巡るように里道があったことが窺える。里道は、調査でも検出しているが、館の導線がそのまま踏襲されていた可能性がある。

館の大手に相当する虎口は、南側の城下町中央の堅道が突き当たる付近にあったと想定することができる。館の構造を考えると、西側に二重の堀を掘削し、その堀の規模が最も大きいことから、西側の防御が厳重になっていることがわかる。これは敵が攻めてくる方向を西側と想定し、西方を防御正面としているからであると考えられる。このことから、東側にある虎口（入口）は退却も考えての捌手的な役割をもっていると考えられる。なお、亀山城跡の登り口は、東側にあったことが窺え、湯川氏館から北に向かつては馬場があったとの言い伝えも残るように、東側の虎口から北に向かい亀山城へ詰めることを想定していた可能性がある。

## 7. 館の消長

湯川氏館は、16 世紀中頃に亀山城が寒風の時期には住みにくいとの理由で亀山の麓に築かれたとの伝承も残るが、亀山城では生活の痕跡がないことや、館で 16 世紀中頃以前の遺物も出土することからも事実とは異なることが明らかである。

先にも記したように、館の位置には少なくとも鎌倉時代から南北朝時代に浄土系の寺院が存在したことが窺える。遺跡から出土する瓦は、鎌倉時代から南北朝期のものと 16 世紀のものに 2 分することができ、前者がお寺に係る瓦であると判断できる

また、中世の土器類をみると、13 世紀中頃～16 世紀末頃のものがあり、17 世紀の遺物は皆無と言って良い。室町時代に限ると最も多いのが 16 世紀代で、15 世紀代の遺物はやや少ない傾向にある。

幕府での地位を得た 14 世紀中頃が湯川氏館を築く契機であると考えられるが、瓦や寺の存在を考えると 14 世紀後半以降であることになる。少なくとも、寺のあとに館が築かれた可能性が高い。

既往の調査で検出した遺構は、最終段階のもの以外は時期決定が難しい状況にあるが、2013 年の調査で検出した堀や井戸の時期は、大きく I～III の 3 時期に分けることができる。

最も古い I 期の遺構としては、017 堀・258 堀・070 井戸があり、出土遺物からこれらは 15 世紀後半から 16 世紀初め頃に埋め戻されたと考えられる。258 堀は館の南東部を画する堀で、017 堀はその内

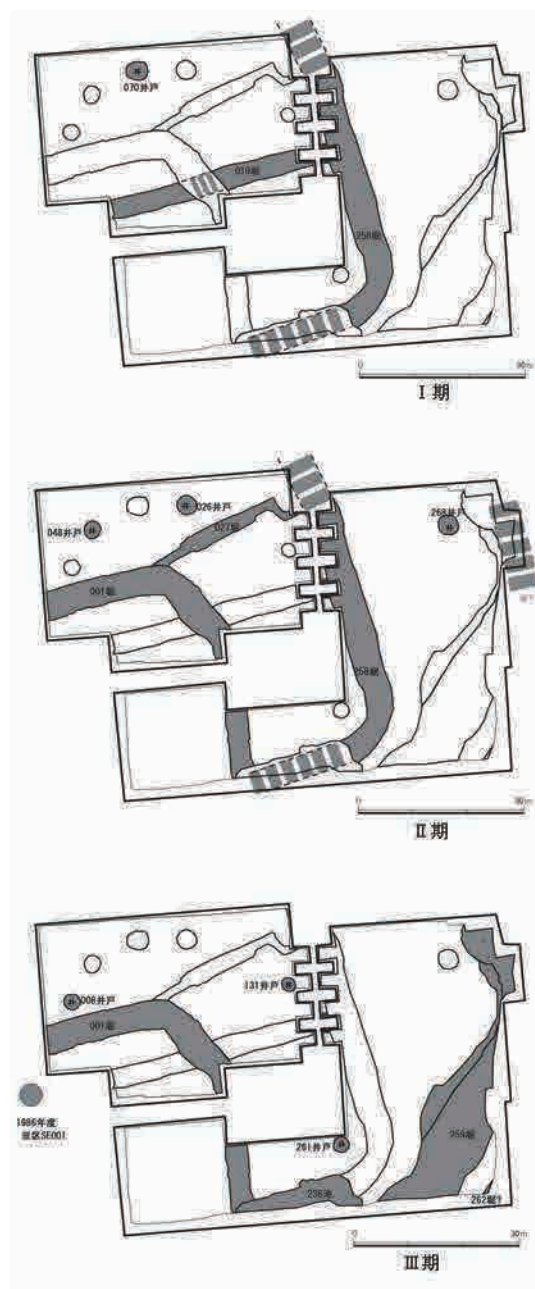


図 93 湯川氏館推定変遷図

部を区画するものであった可能性がある。017 堀と 258 堀は新旧関係が認められ、出土遺物も 017 堀の方が古く位置づけられるものの、017 堀が 258 堀と軸方位を同じくし、258 堀より東に伸びないこと、また 258 堀に再掘削が認められ、新旧 2 時期あることから同時併存した時期があったと判断した。この時期の遺構の埋土には、焼土や瓦は含まれていない。

Ⅱ期の遺構には、001 堀（古）・027 堀・258 堀（新）・026 井戸・048 井戸・268 井戸ある。出土遺物から 16 世紀後半頃に埋め戻されたと考えられる。001 堀は再掘削を行っており、新旧 2 時期ある。この時期の遺構埋土からは、瓦の細片がわずかに出土するものの焼土は含まれていない。また、258 堀の東側に 268 井戸が存在することからも、258 堀が館の東側を区画する堀ではなく、更に東側に館の内外を区画する堀が存在した可能性は十分考えられるものの、調査では明らかにできなかった。

Ⅲ期の遺構には 001 堀（新）・259 堀、008 井戸・131 井戸・261 井戸・236 池があり、これらには焼土や焼けた瓦・建築部材が含まれている。これは天正十三（1585）年の羽柴秀吉の紀州攻めの折の火災に遭った遺構であると捉えることができ、館最終段階のものと判断できる。

瓦の出土は、基本的にⅢ期の遺構に限られ、Ⅰ・Ⅱ期には瓦葺の建物はなかったと捉えることができる。全国各地の守護館は、幕府の室町第に倣い檜皮葺であることから、湯川氏館でも当初は瓦葺を採用せず、Ⅲ期になってはじめて瓦葺の建物を建てたと考えることができる。Ⅲ期の初めは、Ⅱ期の遺構に 16 世紀後半代の遺物が含まれることから、おおよそ天正期であると考えられ、改修は池や大規模な堀の掘削など大掛かりな土木工事であったことが窺える。1986 年度の調査では、天正四年（1576）銘の平瓦が出土しているように、この時期に改修があったと想定することもできる。天正四年は織田信長が安土城を築城する年でもあり、湯川氏も幕府から決別したことで、檜皮葺をやめて瓦葺を採用した可能性がある。



図 94 「天正四年」銘の平瓦  
(1986 年度・表 1 の 9)

## 註

- 註 1 宇野隆夫 1997「中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民俗博物館』第 71 集国立歴史民俗博物館に掲載された表から作成。
- 註 2 川崎雅史 2006「高田土居城跡・徳蔵地区遺跡」『高田土居城・徳蔵地区遺跡・大塚遺跡』財団法人和歌山県文化財センター
- 註 3 川崎雅史 2004「平須賀城跡の土器組成」『和歌山城郭研究』第 3 号 和歌山城郭調査研究会
- 註 4 川崎雅史 2005『八幡山城跡』日置川町教育委員会
- 註 5 岩出市根来寺遺跡 NG80 地区（谷テラス、13 世紀末～16 世紀中頃）の土器組成。（上田秀夫 1984「根来寺坊院跡における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』No.4）を原典とした（宇野隆夫 1997「中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民俗博物館』第 71 集国立歴史民俗博物館）に掲載された表から作成。

## 参考文献

- ・小野正敏 2003「威信財としての貿易陶磁と場」『戦国時代の考古学』萩原三雄・小野正敏編 高志書院
- ・服部実喜 2003「かわらけ」『戦国時代の考古学』萩原三雄・小野正敏編 高志書院
- ・菅原正明 2012「第 3 章 道成寺の歴史」『道成寺調査報告書』和歌山県教育委員会
- ・1985『和歌山県』角川日本地名大辞典 30 角川書店
- ・渋谷高秀・川崎雅史 1996「集落形成にみる中世から近世への転換」『関西近世考古学研究 4』関西近世考古学研究会
- ・1981『御坊市史』第三巻史料編 I 御坊市
- ・新谷和之 2015「奉公衆湯河氏の本拠の景観－小松原館周辺の空間構造－」『和歌山地方紙研究 第 67 号』和歌山地方史研究会



遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
1	図10 図版29	弥生土器 広口壺	1 E9j21	002	(24.0)	3.6 以上	—	口縁部 20%	口縁部は外反 端部は下方に拡張 ・外方に面 端面に3条の凹線文	内外: 橙・灰白 断: 灰白	1mm以下の灰・褐色粒を多く含む	反転復元
2	図10 図版29	弥生土器 高杯	1 E9j21	002	(21.4)	4.9 以上	—	口縁部 25%	口縁部は屈曲して上方に伸びる 端部は上方に面 屈曲部に2条 の凹線文	内外: 橙 断: 灰白	3～10mm大の赤色酸化粒を 少量、1mm以下の灰・褐色粒 を多く含む	反転復元
3	図10 図版29	弥生土器 高杯	1 E9j21	002	—	4.2 以上	10.8	裾部 90%	裾部はハの字に開く 端部を上下 にわずかに拡張 円穴不規則に8 箇所	内外: にぶい黄橙 断: 浅黄・灰	10mm以下の赤色酸化粒を少量、 2mm以下の灰・白色粒を多く含む	反転復元
4	図10	弥生土器	1 E9j21	002	—	4.8 以上	(9.0)	底部 20%	黒斑あり	内: 橙 外: にぶい橙・黄灰 断: 橙	1mm以下の白・灰色粒を多く含む	反転復元
5	図10 図版29	弥生土器 脚台	1 E9j21	002 上面	—	6.9 以上	(11.8)	脚部 20%	脚部はほぼ直立する 端部は下方 に面 下方に間隔をあけて3条 の凹線文 中位に円形透かし	内: 灰白 内: 灰白・浅黄橙 断: 浅黄橙	7mm大の灰色礫1個、2mm以下 の灰・褐色粒を多く含む	反転復元
6	図12 図版29	弥生土器 広口壺	1 E9h21	003	21.4	7.6 以上	—	口縁部 70%	口縁部は外反し端部を垂下 上方 に面 外端面3条の凹線文上に 4・5個一単位の円形浮文を5方向 に貼付 頸部に2条以上の凹線文	内: 灰・灰オリーブ 外: 灰・橙 断: 灰	5mm以下の赤色酸化粒を少量、 1mm以下の灰色粒を多く含む	一部反転復元
7	図12 図版29	弥生土器 広口壺	1 E9i21	003 床面	(22.8)	6.8 以上	—	口縁部 20%	口縁部は強く外反し端部を垂下 外端面上4条の凹線文上に4個 一単位の円形浮文	内断: 灰 外: 黄橙	2mm以下の白・灰・黒色粒 を多く含む	反転復元
8	図12 図版29	弥生土器 広口壺	1 E9	003d 床面	(22.4)	6.3 以上	—	口縁部 25%	口縁部は強く外反し端部を垂下 外端面に4条の凹線文	内: にぶい黄橙・橙 外: 浅黄橙・橙 断: 暗灰黄	5～7mm大の褐色礫少量、1 mm以下の灰・黒・褐色微粒 を多く含む	反転復元
9	図12	弥生土器 広口壺	1 E9i21	003 床面	(13.0)	5.9 以上	—	口縁部 20%	口縁部は強く外反し端部を上下に 拡張 外方に面	内外断: 灰白・浅黄橙 ・にぶい黄橙	2mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒・石英を多く含む	反転復元
10	図12 図版29	弥生土器 段状口縁 壺	1 E9i21	003 床面	(16.2)	8.1 以上	—	口縁部 50%	口縁部は強く外反し屈曲して斜め 状に立ち上がる 端部は上方に面 端部下に1条・屈曲部に3条 の凹線文	内断: 灰白・橙 外: 橙	3mm以下の灰・白・黒色粒 を多く含む	反転復元
11	図12	弥生土器 把手付壺	1 E9i21	003 床面	—	5.5 以上	—	把手部 100%	広口壺の肩部にアーチ状の把手	内断: 浅黄橙 外: 浅黄橙・にぶい橙	1mm以下の灰・白色粒を多く含む	反転復元
12	図12 図版29	弥生土器 把手付壺	1 E9i21	003 床面	—	5.9 以上	—	把手部 100%	広口壺の肩部にアーチ状の把手	内: にぶい黄橙 外: 橙 断: 橙・灰白	4mm大の灰色粒少量 3mm以下 の灰・白色粒を多く含む	反転復元
13	図12	弥生土器 甕	1 E9	003c 上層	(33.4)	5.8 以上	—	口縁部 10%	口縁部の屈曲は弱く上方に立ち上 がる 端部は外上方に面	内: 浅黄橙・にぶい黄橙 外断: 浅黄橙	2mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を多く含む	反転復元
14	図12 図版29	弥生土器 甕	1 E9i21	003 床面	(18.4)	8.1 以上	—	口縁部 15%	口縁部は強く外反 端部は肥厚し て外方に面	内: 灰・にぶい橙 外: 灰白 断: にぶい黄橙	2mm以下の灰・黒色粒を多く含む	反転復元
15	図12	弥生土器 甕	1 E9i21	003b 上層	(23.6)	5.7 以上	—	口縁部 10%	口縁部はくの字に屈曲 端部は外方 に面 体部外面横方向平行タタキ	内: 灰白 外断: にぶい黄橙	8mm大の赤色酸化粒1個、4 mm以下の灰・白色粒を中量 含む	反転復元
16	図12	弥生土器 甕	1 E9i21	003 床面	(19.4)	4.7 以上	—	口縁部 20%	口縁部は強く外反 端部は大きく 肥厚し外方に面	内: 灰白 外断: 浅黄橙	1mm以下の灰・白色微粒を 多く含む	反転復元
17	図12 図版29	弥生土器 甕	1 E9i21	003 床面	(16.4)	5.2 以上	—	口縁部 25%	頸部はほぼ直線的に立ち上がり、 口縁部はくの字に屈曲 端部は外 方に面	内: 灰白・灰黄 外: 浅黄橙 断: 灰黄	2mm以下の灰・白色粒を多く含む	反転復元
18	図12	弥生土器	1 E9	003a	—	4.3 以上	6.2	底部 100%		内: 灰白 外: にぶい黄橙・浅黄橙 断: にぶい黄橙	2mm以下の灰色粒を多く含む	一部反転復元
19	図12	弥生土器	1 E9i21	003 床面	—	7.6 以上	5.4	底部 100%		内外断: 灰白・浅黄橙	3.5mm大の灰色粒、2mm以下 の灰・白色粒・赤色酸化粒 を多く含む	一部反転復元
20	図12	弥生土器	1 E9i21	003 床面	—	3.5 以上	3.8	底部 100%		内: 灰白 外: 灰白・浅黄橙 断: 灰白	1mm以下の灰色粒を多く含む	一部反転復元
21	図12	弥生土器	1 E9h21	003 床面	—	5.0 以上	4.6	底部 100%	黒斑あり	内: 灰 外: にぶい黄橙・オリーブ黒 断: にぶい黄橙	1mm以下の灰・白色粒を多く含む	一部反転復元
22	図12	弥生土器 高杯	1 E9i21	003b 上層	(25.6)	3.2 以上	—	口縁部 10%	口縁部は横方向に開く 端部は下 方に垂下	内外: 橙 断: 灰	3mm以下の石英1個 2mm以下 の石英・白・灰色粒を多く含む	反転復元
23	図12 図版29	弥生土器 高杯	1 E9i21	003 床面	—	16.4 以上	12.0	脚部 95%	脚柱部は円筒状で中空 裾部は内 湾気味にハの字に開く 端部は上 下に拡張し外下方に面 円穴9個	内: 灰白 外: 灰白・明褐灰 断: 浅黄	2mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を多く含む	一部反転復元
24	図12	弥生土器 高杯	1 E9i21	003 床面	—	5.1 以上	7.8	裾部 80%	ハの字に開く裾部から脚柱部にゆる やかに続く 脚柱部は中空 端 部は外下方に面 端面に1条の 凹線文 脚柱部に4条以上の凹 線文 円穴6箇所	内: 灰 外断: 浅黄橙	1mm以下の白・灰色粒を多く含む	一部反転復元
25	図12 図版29	弥生土器 高杯	1 E9i21	003	—	15.1 以上	8.8	脚部 95%	脚柱部は中空で円筒状 裾部はハ の字に開く 端部は上方に拡張し外 方に面 裾部の4方向に小さな円穴	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙・にぶい橙 断: 灰黄	1mm以下の灰・黒色粒・赤 色酸化粒を多く含む	一部反転復元
26	図12 図版29	弥生土器 段状口縁 壺	1 E9i21	172 上層	(16.5)	10.0 以上	—	口縁部 25%	口縁部は強く外反し屈曲して斜め 状に立ち上がる 端部は上方に面 端部下と屈曲部に1条ずつの 凹線文 頸部に(櫛) 刺突文	内: にぶい黄橙・灰 外: にぶい橙・灰 断: 灰	2mm以下の石英・白色粒を 多く含む	反転復元 003竪穴建 物内中央土 坑
27	図12 図版29	弥生土器 直口壺	1 E9i21	159	12.3	24.8 以上	—	50%	口縁部は外反 端部は外上方に面 外面に断面三角形の突帯	内断: 灰白 外: 橙・淡橙	3mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を少量 1mm以下の灰色粒 ・赤色酸化粒を多く含む	一部反転復元 003竪穴建 物内柱穴
28	図12 図版29	弥生土器 高杯	1 E9i21	159	—	14.7 以上	14.6	脚部 80%	脚柱部は円筒状で中空 裾部はハ の字状に開く 端部は上下に拡張 し外方に面 裾部に円穴2段 17 箇所 裾・脚柱部境に4条のへ ラ描直線文	内外: 灰白・浅黄橙 断: 灰白	2mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を多く含む	一部反転復元 003竪穴建 物内柱穴
29	図12	弥生土器 高杯	1 E9i21	159	—	12.4 以上	(11.4)	脚部 70%	脚柱部は円筒状で中空 裾部はハ の字状に開く 端部は外下方に面 裾部に円穴2個一単位で計4個	内外: 灰白・にぶい橙 断: 灰黄	2mm以下の灰色粒を多く含む	一部反転復元 003竪穴建 物内柱穴

遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
30	図 12 図版 29	弥生土器 高杯	1 E9i21	159	—	9.8 以上	12.6	100%	脚柱部は円筒状で中空 裾部はハの字状に開く 端部は外下方に面 端面と端部に1条ずつの細い直線文 裾部に円穴5箇所	内:にぶい橙・淡赤褐 外:にぶい橙・浅黄橙 断:灰白	2mm以下の灰色粒を多く含む	003竪穴建物内柱穴
31	図 12 図版 29	弥生土器 高杯	1 E9i21	159	—	8.1 以上	11.8	90%	脚柱部は円筒状で中空 裾部はハの字状に開く 端部は上方に拡張、外方に面 裾部に円穴6箇所	内:橙 外:橙・灰 断:灰	2mm以下の灰色粒を多く含む	一部反転復元 003竪穴建物内柱穴
32	図 14 図版 29	弥生土器 台付鉢	1 E9i20	036	(22.0)	12.5 以上	—	鉢部 50%	体部から口縁部にかけて内湾して立ちあがる 端部は上方に面 端部下1条、体部・口縁部境付近に5条の凹線文 縦方向の把手剥落痕あり	内:浅黄橙・浅黄 外:橙 断:オリーブ黒	1mm以下の石英・黒・灰色粒を多く含む	反転復元 土器棺蓋 脚部・把手は打ち欠く
33	図 14 図版 29	弥生土器 甗	1 E9i20	036	(14.7)	(25.0)	6.5	70%	口縁部はくの字に屈曲し内湾気味に開く 端部は外上方に面 底部端は外方に突出し上げ底 体部上半平行タタキ	内:にぶい黄橙・橙 外:灰黄褐・にぶい橙 断:にぶい橙	2mm以下の灰・白・褐色粒を中量含む	上部反転・ 下部一部反 転復元 土器棺
34	図 14 図版 29	弥生土器 高杯	1 E9i20	036	—	11.7 以上	(6.7)	60%	脚柱部は中実 裾部はハの字に短く開く 端部は丸い 円穴	内外断:浅黄橙	2mm以下の白・灰色粒を多く含む	一部反転復元
35	図 16 図版 30	弥生土器 広口壺	1 E9h15	004 黒色土	(23.8)	12.7	—	口縁部 33%	口縁部は外反し端部を下方に拡張 外上方に面 外端面上にキザミ目 頸部に5条以上の凹線文	内:淡橙・浅黄橙 外:灰黄・にぶい橙 断:浅黄橙	2mm以下の灰・白色粒を多く含む	反転復元
36	図 16	弥生土器 広口壺	1 E9h15	004 黒色土	(25.8)	3.5 以上	—	口縁部 25%	口縁部は外反し端部を垂下 外端面上には5条の凹線文上に竹管文を押し円形浮文	内:浅黄橙・橙 外断:橙	2mm以下の灰色粒を多く含む	反転復元
37	図 16	弥生土器 広口壺	1 E9h15	004 黒色土	(21.0)	4.4 以上	—	口縁部 10%	口縁部は外反し端部を垂下 外端面上に5条の凹線文 内面に櫛連続刺突文	内:にぶい黄橙・黄灰 外:にぶい橙 断:浅黄橙	2mm以下の灰・黒色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
38	図 16 図版 30	弥生土器 広口壺	1 E9h15	004 黒色土	(11.4)	6.4 以上	—	口縁部 25%	口縁部は外反し端部を下方に拡張 外端面上には3条の凹線文上に円形浮文 頸部に4条以上の凹線文	内:浅黄橙・灰 外:浅黄橙・にぶい橙 断:灰	1mm以下の白・灰色微粒を多く含む	反転復元
39	図 16	弥生土器 広口壺	1 E9h15	004アゼ 下層	(16.4)	4.0 以上	—	口縁部 25%	口縁部は強く外反 端部は上方に揃み上げ外方に面	内外:にぶい黄橙 断:灰白	2mm以下の黒・白・褐色粒を多く含む	反転復元
40	図 16 図版 30	弥生土器 細頸壺	1 E9h15	004 上面	(12.0)	6.5 以上	—	口縁部 15%	口縁部は内湾する 端部は上方に面 外面全体に9条以上の凹線文・端部下に竹管文を押し円形浮文	内:灰白 外:橙・にぶい橙 断:浅黄橙	2mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
41	図 16	弥生土器 細頸壺	1 E9	004 黒色土	(14.4)	4.7 以上	—	口縁部 10%	口縁部内湾する 端部は上方に面 外面全体に8条以上の凹線文 端部下に竹管文を押し円形浮文	内:灰 外断:浅黄橙・暗灰黄	1mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
42	図 16 図版 30	弥生土器 直口壺	1 E9h15	004 黒色土	(15.2)	11.5 以上	—	口縁部 25%	口縁部は外反した後、内湾気味に斜め上方に開く 端部は上方に面 変曲点付近に貼付突帯 端部下に4条の凹線文	内:浅黄橙・浅黄橙 外断:灰・浅黄橙	1mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
43	図 16 図版 30	弥生土器 直口壺	1 E9h15	004 黒色土	(18.0)	9.3 以上	—	口縁部 15%	口縁部は外反した後、内湾気味に斜め上方に開く 端部は上方に面 端部から頸部にかけて凹線文3条・キザミ目突帯・波状文・キザミ目突帯・波状文・直線文2条	内:灰白 外:灰黄 断:灰黄	1mm以下の石英・灰・黒色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
44	図 16 図版 30	弥生土器 直口壺	1 E9	004	(16.6)	6.1 以上	—	口縁部 20%	口縁部は内湾気味に外傾する 端部は上方に面 端部下に断面三角形の突帯1条	内:橙 外:浅黄橙・にぶい黄橙 断:黄灰	1mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
45	図 16	弥生土器 段状口縁壺	1 E9h15	004 黒色土	(19.8)	7.2 以上	—	口縁部 10%	口縁部は強く外反し屈曲して上方に立ち上がる 端部は上方に面 屈曲部より上に4条の凹線文	内:にぶい橙・橙 外:黄灰・にぶい黄橙 断:灰黄	1mm以下の灰色粒を中量含む	反転復元
46	図 17 図版 30	弥生土器 甗	1 E9h15	004アゼ 黒色土	(27.2)	11.75 以上	—	口縁部 15%	口縁部強く外反し端部を上下に拡張 体部外面横方向平行タタキ黒斑	内:灰白 外:灰白・灰 断:灰白	2mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む 5mm以下の赤色酸化粒1個	反転復元
47	図 17	弥生土器 甗	1 E9h15	004アゼ 床面	(29.6)	6.4 以上	—	口縁部 15%	口縁部はくの字に強く屈曲 端部は上下に拡張 下端部にキザミ目 体部外面横方向平行タタキ	内:にぶい黄橙・橙 外:黄橙 断:灰	1mm以下の石英・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
48	図 17 図版 30	弥生土器 甗	1 E9h15	004アゼ 黒色土	(25.4)	7.5 以上	—	口縁部 20%	口縁部は強く外反 端部は上下に拡張し外方に面 外端面上に3条の凹線文 体部外面横方向平行タタキ 黒斑	内:浅黄橙・黄橙 外:浅黄橙・灰 断:浅黄橙	2mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
49	図 17	弥生土器 甗	1 E9h15	004 黒色土	(28.2)	5.3 以上	—	口縁部 15%	口縁部はくの字に屈曲 端部は上方に拡張し外上方に面 体部外面横方向の平行タタキ	内:浅黄橙・にぶい黄橙 外:灰白・灰 断:浅黄橙	1mm以下の白・灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
50	図 17 図版 30	弥生土器 甗	1 E9h15	004 黒色土	(25.2)	7.7 以上	—	口縁部 10%	口縁部は短くくの字に屈曲 端部を上下に拡張し外上方に面 外端面上に2条の凹線文 体部外面横方向平行タタキ	内:浅黄橙・にぶい橙 外:橙・灰 断:にぶい橙	1mm以下の白・灰色粒・赤色酸化粒を中量含む	反転復元
51	図 17 図版 30	弥生土器 甗	1 E9h15	004 床面・下層	(24.6)	6.2 以上	—	口縁部 10%	口縁部はくの字に屈曲 端部は上方に拡張し外方に面 外端面上に1条の凹線文 体部外面横方向の平行タタキ・縦方向の櫛目	内:にぶい橙・橙 外:にぶい黄橙・暗灰黄 断:灰	2mm以下の白・灰色粒を中量含む	反転復元
52	図 17	弥生土器 甗	1 E9h15	004アゼ 下層	(22.4)	5.1 以上	—	口縁部 5%	口縁部はくの字に屈曲し強く外傾 端部は外方に面	内:にぶい橙・橙 外:浅黄橙・灰 断:浅黄橙	1mm以下の白・灰色粒を多く含む	反転復元
53	図 17 図版 30	弥生土器 甗?	1 E9h15	004アゼ 床面	(10.8)	5.7 以上	—	口縁部 15%	口縁部はくの字に屈曲 端部は丸く収める	内:にぶい黄橙 外:橙・にぶい橙 断:灰	2mm以下の灰・褐色粒を中量含む	反転復元
54	図 17	弥生土器 手捏ね土器	1 E9h15	004 黒色土	(4.6)	4.05 以上	—	25%	口縁部は短くわずかに外反する	内外:灰白・灰黄・灰 断:灰白	3mm以下の灰色粒を多く含む	反転復元
55	図 17	弥生土器	1 E9h15	004アゼ 下層	—	7.7 以上	9.4	底部 70%		内:灰・オリーブ黒 外:橙・にぶい黄橙 断:灰	2mm以下の灰・黒色粒を多く含む	一部反転復元
56	図 17	弥生土器 高杯	1 E9h15	004アゼ 黒色土	(22.6)	5.3 以上	—	口縁部 5%	口縁部は屈曲して上方に立ち上がる 端部は上方に面 屈曲部に3条の凹線文	内:灰黄・暗灰黄 外:浅黄橙 断:灰黄	1mm以下の灰色粒・石英を中量含む	反転復元



遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書番号	図・図版番号	種類	調査地区	遺構層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
57	図 17 図版 30	弥生土器 高杯	1 E9h15	004 床面～下層	(18.4)	6.8 以上	—	口縁部 20%	口縁部は屈曲して上方に立ち上がる。端部は上方に面。端部下と屈曲部に1条ずつの凹線文	内外: 橙 断: 灰	1mm以下の灰色粒を多く含む	反転復元
58	図 17	弥生土器 高杯	1 E9h15	004 床面	—	7.1 以上	—	脚柱部 80%	脚柱部は中空。裾部との境に円盤充填。外面裾部にかけて全面に凹線文18条以上。裾部との境付近に円穴	内外: にぶい黄橙 断: 灰	1mm以下の褐・灰・白色粒を中量含む	反転復元
59	図 17 図版 30	弥生土器 高杯	1 E9h15	004 黒色土	—	10.2 以上	7.0	脚部 80%	脚柱部は中空。裾部ハの字に開く。端部は丸みを帯びる	内: 橙・浅黄 外: 浅黄・浅黄橙 断: 淡黄	2mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	一部反転復元
60	図 17	弥生土器 (台付) 鉢	1 E9h15・ii15	004 下層～床面	(44.6)	11.1 以上	—	口縁部 5%	口縁部は屈曲して上方に立ち上がる。端部は上方に面。端部下に1条と屈曲部に2条の凹線文	内: にぶい黄橙・オリブ黒 外: 浅黄橙 断: 灰	3mm以下の灰・茶・白色粒を中量含む	反転復元
61	図 17 図版 30	弥生土器 (台付) 鉢	1 E9h15	004 黒色土	(37.6)	8.1 以上	—	口縁部 5%	口縁部は内湾気味に直立。端部は上方に面。端部外に粘土を貼付して拡張し外面に5条の凹線文	内: にぶい黄橙 外: 灰 断: 淡黄	1mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
62	図 17 図版 30	弥生土器 (台付) 鉢	1 E9h15	004 黒色土	(26.2)	4.6 以上	—	口縁部 20%	口縁部は内湾気味に上方に立ち上がる。端部外に粘土を貼付して拡張し上方に面。端部下に細い2条の凹線文	内: 灰白・浅黄橙 外: 浅黄橙・にぶい橙 断: 灰	1mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を中量含む	反転復元
63	図 17 図版 30	弥生土器 脚台	1 E9h15	004 黒色土	—	6.4 以上	(14.4)	脚台部 20%	脚台部はほぼ直立する。端部は下方に面。外面端部より上方に5条の凹線文	内: 灰白・灰黄 外: 浅黄橙 断: にぶい黄橙	1mm以下の灰色粒を中量含む	反転復元
64	図 17 図版 30	弥生土器 器台	1 E9	004 黒色土	—	7.9 以上	(10.8)	脚台部 30%	脚台部はハの字に開き緩やかに外反。端部は外方に面。体部下に円形の透かし(6箇所か?)	内: 灰白・灰 外: 浅黄橙・にぶい黄橙 断: 灰	1mm以下の灰色粒を多く含む	反転復元
65	図 17 図版 30	弥生土器 (台付) 鉢	1 E9h15	004 床面	—	13.1 以上	15.7	脚台部 85%	脚台部は外反して開く。端部は下方に面。全体に不規則に施した円穴多数。鉢部底は円盤充填	内: にぶい黄橙 外: 浅黄橙・にぶい黄橙 断: 灰	2mm以下の灰色・黒色・赤色酸化粒を多く含む	一部反転復元
66	図 19 図版 30	弥生土器 広口壺	1 E9f15	024	(22.3)	8.0 以上	—	口縁部 40%	口縁部は外反し端部を垂下。上方に面。外面には3条の凹線文上に竹管文を押す円形浮文。頸部に2条以上の凹線文	内: にぶい黄褐・浅黄橙 外: 浅黄橙・にぶい黄褐・淡黄 断: 淡黄	2mm以下の灰色・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
67	図 19 図版 30	弥生土器 広口壺	1 E9e15	024	21.4	13.2 以上	—	口縁部 80%	口縁部外反し端部を垂下。外面には3条の凹線文上に竹管文を押す円形浮文。上面に櫛刺突列点文。頸部に5条以上の凹線文	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙・にぶい黄橙 断: 浅黄橙	3～4mm大の灰・白色粒・赤色酸化粒を微量、1mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を中量含む	一部反転復元
68	図 19 図版 30	弥生土器 広口壺	1 E9e15	024	(20.2)	9.4 以上	—	口縁部 75%	口縁部は外反し端部を垂下。外面には3条の凹線文上に竹管文を押す円形浮文。上面に2列の櫛刺突列点文。頸部に6条以上の凹線文	内外断: 浅黄橙・にぶい黄褐	2mm以下の灰色・黒色・石英・赤色酸化粒を多く含む	一部反転復元
69	図 19 図版 31	弥生土器 広口壺	1 E9e15	024	20.6	5.9 以上	—	口縁部 80%	口縁部は外反し端部を垂下。外面には4条の凹線文上に竹管文を押す円形浮文を上下2段に貼付。上面に櫛刺突列点文	内外断: 浅黄橙	1mm以下の灰色・石英粒を含む	一部反転復元
70	図 19 図版 31	弥生土器 甕	1 E9e15	153	(14.2)	7.6 以上	—	口縁部 25%	口縁部く字に強く屈曲。端部をわずかに上方に摘み上げる。体部外面粗いハケ。器壁は薄い	内: にぶい黄橙 外: にぶい橙・橙 断: 浅黄橙	2～3mm大の灰色・黒色粒を微量、1mm以下の灰・黒・白色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元 028 堅穴建物内中央土坑
71	図 19 図版 31	弥生土器 器台?	1 E9e15	024 西	—	11.6 以上	(11.2)	脚台部 15%	脚部は内湾気味に外傾。下方に向かって肥厚し端部は下方に面。端部より上に3条の凹線文-円穴8方向? - 5条以上の凹線文。端部付近黒斑あり	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙・灰 断: 浅黄橙	1mm以下の白・灰色粒を多く含む	反転復元
72	図 21	弥生土器 甕	1 D9y16	028 北西	—	(6.2)	—	—	口縁部はく字に屈曲。端部を上下に拡張し外方に面。体部外面横方向の平行タタキ	内: にぶい黄橙・灰黄 外: 灰 断: にぶい黄橙	2mm以下の黒・灰・褐色粒を多く含む	
73	図 21 図版 31	弥生土器 ?	1 D9y15・16	028 北	—	4.5 以上	3.3	底部 100%	底部に5個、側面に6個以上の円穴	外: 浅黄橙 内断: 灰白	1mm以下の黒・灰色粒を多く含む	一部反転復元
74	図 21 図版 31	弥生土器 広口壺	1 D9y16	145 1層	(18.6)	8.8 以上	—	口縁部 15%	口縁部は強く外反。端部を上下に拡張。外面面に2条の凹線文	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙・にぶい黄橙 断: 浅黄橙	1mm以下の白・灰色粒を中量含む	反転復元 028 堅穴建物内中央土坑
75	図 21 図版 31	弥生土器 甕	1 D9y16	145 1層	(15.0)	3.5 以上	—	口縁部 10%	頸部は長く直立。口縁部は横方向に開く。端部は上方に拡張し外方に面。頸部タテ方向のハケ	内: 浅黄橙 外: オリブ黒・浅黄橙 断: にぶい橙	2mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元 028 堅穴建物内中央土坑
76	図 21 図版 31	弥生土器 高杯	1 D9y16	143	(17.5)	4.3 以上	—	口縁部 5%	口縁部は屈曲して外上方に開く。端部は上方に面。端部下に1条・屈曲部に2条の凹線文	内: 浅黄橙 外: 灰白 断: 灰白	2mm以下の褐色・灰色粒を多く含む	反転復元 028 堅穴建物内貯蔵穴
77	図 21 図版 31	弥生土器 広口壺	1 D9y16	139	(18.8)	6.8 以上	—	口縁部 10%	口縁部は外反する。端部を上下に拡張。外面面に2条の凹線文	内外断: 灰白	2mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元 028 堅穴建物内貯蔵穴
78	図 25	弥生土器 甕	1 E9	025	(15.8)	4.7 以上	—	口縁部 10%	口縁部はく字に屈曲。端部は上方に摘み上げ外方に面	内: 浅黄橙 外: にぶい橙・橙 断: 灰	1mm以下の石英・灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
79	図 25 図版 31	弥生土器 高杯	1 E9e17	025	—	13.5 以上	12.8	脚部 80%	脚柱部は中空で円筒状。裾部は脚柱部から外反してハの字に開く。裾部・脚柱部の境と脚柱部上位に連続するへろ描直線文	内: 浅黄橙・にぶい橙 外: 浅黄橙 断: 浅黄・黄灰	2mm以下の石英・長石・灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	一部反転復元
80	図 25 図版 31	弥生土器 手捏ね土器	1 E9	025	(6.5)	7.1	(4.0)	50%	底部は外方に突出。体部は球形。口縁部は短く外方に折れる	内: 浅黄橙 外: にぶい黄橙・浅黄橙・灰 断: にぶい黄橙	2mm以下の灰・褐色粒を多く含む	反転復元
81	図 25	弥生土器 広口壺	1 E9h16	067	(23.0)	5.6 以上	—	口縁部 5%	口縁部は強く外反。端部を上下に拡張。外面面に3条の凹線文	内: 灰白 外断: 浅黄橙	3mm以下の灰・茶褐色粒を中量含む	反転復元

遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備 考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
82	図 25 図版 31	弥生土器 大口壺	1 E9	068	(22.4)	9.1 以上	—	口縁部 25%	口縁部は外反し端部を下方に垂下 外面に4条の凹線文のち円形 浮文を貼付 頸部に6条以上の 凹線文	内外断: 灰白・浅黄橙	2mm以下の灰・白色粒を多 く含む	反転復元
83	図 25 図版 31	弥生土器 大口壺	1 E9	068	(25.8)	34.6 以上	—	20%	頸部は長く、口縁部は外反 端部 は垂下 外面には4条の凹線 文上に竹管文を押す円形浮文 頸 部から体部上半にかけて櫛描麻状 文4段	内外断: 橙・浅黄橙	3mm以下の灰・黒色粒を多 く含む	反転復元
84	図 25 図版 31	弥生土器 大口壺	1 E9	068	(19.6)	7.4 以上	—	口縁部 40%	口縁部は強く外反 端部を上下に 拡張 外面面に2条の凹線文	内: 浅黄橙・灰白 外: 灰黄・浅黄橙 断: 浅黄橙	1mm以下の石英・白・灰色 粒を多く含む	反転復元
85	図 25 図版 31	弥生土器 把手付広 口壺	1 E9	068	(13.6)	7.0 以上	—	口縁部 40%	口縁部は外傾したのち横方向に開 く 端部を下方に拡張 外面面に 2条の凹線文 肩部に横位のアー チ状把手	内外断: 浅黄橙	1mm以下の灰・白色粒・赤 色酸化粒を多く含む	反転復元
86	図 25 図版 31	弥生土器 把手付広 口壺	1 E9	068	(10.4)	12.9 以上	—	10%	口縁部は上方に立ちあがった後横方 向に開く 端部はわずかに上方に拡 張 肩部に横位のアーチ状把手	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙・灰・にぶい 橙 断: 浅黄橙	1mm以下の灰・白色粒・赤 色酸化粒を多く含む	反転復元
87	図 25 図版 31	弥生土器 大口短頸 壺	1 E9	068	(24.2)	8.2 以上	—	口縁部 25%	口縁部は外反 端部を上下に拡張 外面面に3条の凹線文	内: 橙・にぶい 橙 外断: 橙	3mm以下の灰・白色粒・赤 色酸化粒を多く含む	反転復元
88	図 25 図版 31	弥生土器 細頸壺	1 E9	068	9.2	18.6 以上	—	60%	口縁部は内湾して立ち上がる 端 部は上方に面 口縁部下に7条 の凹線文 頸部に4条の凹線文 体部内面ハケ 外面ハケ・ヘラ ミガキ	内: 黄灰・にぶい 黄橙 外: にぶい 黄橙・浅黄 断: 明黄褐	1mm大の黒・灰色粒・赤 色酸化粒を中量含む	一部反転復元
89	図 25 図版 31	弥生土器 直口壺	1	068	(16.2)	10.1 以上	—	口縁部 20%	口縁部は内湾気味に外傾 端部を 内方拡張 上方に面 口縁部下に 断面三角形の突帯	内: 灰赤・橙・にぶい 橙 外: にぶい 橙・橙 断: 黄灰・灰黄	5mm大の白色礫1個 1mm以 下の灰・白色粒・赤色酸化 粒を多く含む	反転復元
90	図 25 図版 31	弥生土器 直口壺	1	068	(16.6)	9.1 以上	—	口縁部 30%	口縁部は内湾気味に外傾 端部を 内方拡張 上方に面 口縁部下に 断面三角形の突帯	内: にぶい 黄橙・明黄 褐 外: にぶい 橙 断: 橙・黄灰	5mm大の赤色酸化粒2個 1 mm以下の白・褐色粒を多く 含む	反転復元
91	図 25 図版 31	弥生土器 直口壺	1 E9	068	(16.4)	8.6 以上	—	口縁部 50%	口縁部は内湾気味に外傾 端部を 外方拡張 上方に面 口縁部下に 断面三角形の突帯	内: 浅黄橙 外: にぶい 黄橙・浅黄 断: 灰白	5mm大の赤色酸化粒を1個、 1mm以下の灰色微粒を中量 含む	一部反転復元
92	図 25 図版 32	弥生土器 直口壺	1 E9	068	(18.0)	9.5 以上	—	口縁部 20%	口縁部は内湾気味に外傾 端部を 外方拡張 上方に面 口縁部下に 断面三角形の突帯	内: 浅黄橙・にぶい 橙 外: にぶい 橙・灰黄褐 断: にぶい 黄橙	5mm大と8mm大の灰色礫各1 個 1mm以下の灰色粒を中 量含む	反転復元
93	図 25 図版 32	弥生土器 直口壺	1 E9	068	(14.3)	8.9 以上	—	口縁部 25%	口縁部は内湾気味に外傾 端部を 内外に拡張 上方に面 口縁部下 にキザミ目を有する断面三角形 の突帯	内: 橙・灰黄 外: にぶい 橙・にぶい 黄橙 断: 灰黄	1mm以下の石英・灰・白色 粒を多く含む	反転復元
94	図 25 図版 32	弥生土器 直口壺	1 E9	068	(12.6)	9.9 以上	—	口縁部 35%	口縁部は内湾気味に外傾 端部は 外上方に面 片口状の突起 口縁 部下にキザミ目を有する断面三角 形の突帯	内外: にぶい 黄橙 断: 黄灰	1mm以下の黒色粒・赤色酸 化粒を多く含む	反転復元
95	図 25 図版 32	弥生土器 直口壺	1	068	(18.8)	11.3 以上	—	口縁部 33%	口縁部は内湾気味に外傾 端部は 内方に拡張して上方に面 口縁部 下に2条の断面三角形の突帯 その下に1条の櫛描波状文	内: 灰 外: 黄灰・にぶい 黄橙 断: 灰黄	3～5mmの白色・赤色酸化 粒を少量、2mmまでの灰色・ 灰色・白色・赤色酸化粒を 多く含む	反転復元
96	図 25 図版 32	弥生土器 直口壺	1 E9	068	(12.8)	9.7 以上	—	口縁部 15%	口縁部はほぼ直線的に外傾 端部は 外上方に面 口縁部下に断面三角 形の突帯 突帯上に1条の櫛描波状 文 突帯から頸部にかけて櫛描の直線 文・波状文・直線文・波状文	内: にぶい 黄橙・灰黄 外: 灰黄 断: にぶい 黄橙	1mm以下の灰色・黒色粒を 多く含む	反転復元
97	図 25 図版 32	弥生土器 段状口縁 壺	1 E9	068	(22.0)	10.2 以上	—	口縁部 50%	口縁部は鈍く屈曲して外上方に伸 びる 端部は上方に面 屈曲部に 2条の凹線文	内外断: 灰白	1mm以下の白・灰色微粒・ 赤色酸化粒を多く含む	反転復元
98	図 26 図版 32	弥生土器 甗	1 E9	068	(22.0)	6.8 以上	—	口縁部 10%	口縁部はくの字に屈曲 端部上方 に拡張 外上方に面 体部外面横 方向平行タキ	内: 灰白・灰 外: 浅黄橙・にぶい 黄橙 断: 灰白	3mm以下の白・褐色粒・赤 色酸化粒を中量含む	反転復元
99	図 26 図版 32	弥生土器 甗蓋	1 E9	068	摘み径 5.75	7.0	口径 14.4	70%	摘み部外傾 端部上方に面 天井 部傘状 口縁部は横方向に開き、 端部を下方に折り曲げる	内: にぶい 橙・淡黄 外: 淡黄 断: 淡黄	2mm以下の灰・黒色粒を多 く含む	一部反転復元
100	図 26	弥生土器 高杯	1 E9	068	(18.0)	4.1 以上	—	口縁部 20%	体部と口縁部の境で屈曲 端部は 外上方に面 屈曲部に2条の凹 線文	内: にぶい 橙 外: にぶい 黄橙・にぶい 橙 断: 浅黄橙	1mm以下の灰・白色粒・赤 色酸化粒を多く含む	反転復元
101	図 26 図版 32	弥生土器 高杯	1 E9	068	—	6.4 以上	7.4	脚部 75%	脚部は円筒状で中空 裾部との 境を粘土充填 裾部は短くハの字 に開く 端部は丸い	内: 灰白 外: にぶい 黄橙・にぶい 橙 断: 浅黄橙	2mm以下の灰・黒色粒・赤 色酸化粒を中量含む	一部反転復元
102	図 26 図版 32	弥生土器 高杯	1 E9	068	—	10.4 以上	8.0	脚部 100%	脚部は円筒状で中空 裾部はハ の字状に開く 端部は肥厚し外下 方に面 脚柱部15条のヘラ描直 線文 裾部円穴6箇所	内外断: 灰白	1mm以下の灰色粒を多く含む	一部反転復元
103	図 26	弥生土器 高杯	1 E9	068	—	7.7 以上	(12.8)	裾部 25%	裾部はゆるやかに広がる 端部 は肥厚し上方に拡張 外面面に3 条の細い直線文	内: 橙 外: 明赤褐・灰 断: 橙	8mm大の白色礫1個 5mm大 の長石1個 1mm以下の白 色微粒を少量含む	反転復元 搬入品か?
104	図 26 図版 32	弥生土器 台付鉢	1 E9	068	(30.4)	14.3 以上	—	鉢部 25%	口縁部は体部からわずかに屈曲 して立ち上がる 端部は上方に 面 (凹線状にくぼむ) 端部下に 1条・屈曲部に3条の凹線文	内: 橙 外: にぶい 橙 断: 黄灰	2mm以下の灰・白色粒を多 く含む	反転復元
105	図 26 図版 32	弥生土器 台付鉢	1 E9	068	(25.8)	9.1 以上	—	杯部 50%	口縁部は屈曲して上方に立ち上 がる 端部は上方に面 端部下に 1条・屈曲部に2条の凹線文	内外: 橙 断: 橙・にぶい 橙	3mm以下の赤色酸化粒と2mm 以下の灰色粒を多く含む	反転復元
106	図 26 図版 32	弥生土器 台付壺	1 E9	068	—	15.5 以上	12.0	40%	脚部はハの字に開く 端部は外下 方に面 円穴2段・6箇所ずつ	内: 黄灰・にぶい 橙 外: にぶい 橙 断: 灰・にぶい 橙	1mm以下の灰色粒を多く含 む 5mm大の赤色酸化粒を1 個含む	一部反転復元

遺物観察表 (土器類)

法量の () 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書番号	図・図版番号	種類器種	調査区地区	遺構層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径cm	高さcm	底径cm					
107	図 26 図版 32	弥生土器 台付鉢	1 E9	068	—	10.2 以上	18.2	脚台部 75%	脚台部はハの字に開く 端部は下方に面 中位に 2 条の凹線文 上位の 4 方向に凹透かし	内外断: 浅黄橙・にぶい橙・橙	13mm 大の灰褐色礫 1 個 3mm 大の赤色酸化粒を微量 1mm 以下の白色微粒・赤色酸化粒を多く含む	一部反転復元
108	図 26 図版 32	弥生土器 脚台	1 E9	068	—	10.9 以上	16.8	脚台部 80%	鼓状の形状 端部は下方に面 中位に凹透かし 6 箇所? その下に 6 条の凹線文 上に 5 条以上の凹線文	内: 灰白・灰 外断: 灰白	2mm 以下の灰・褐色粒を多く含む	一部反転復元
109	図 26	弥生土器 脚台部	1 E9	068	—	8.9 以上	(17.8)	脚台部 35%	脚台部はハの字に開く 端部は外下方に面 下方に 6 条、上方に 4 条以上の凹線文	内外断: 浅黄橙	2mm 以下の灰・白・褐色粒を多く含む	反転復元
110	図 26 図版 32	弥生土器 脚台部	1 E9	068	—	7.5 以上	(15.6)	脚台部 10%	脚台部はハの字に開く 端部は内外に肥厚し下方に面 端部上に 1 条、中位に 4 条の凹線文	内: 灰・にぶい黄橙 外: 橙・にぶい橙 断: 灰	1mm 以下の白・灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
111	図版 26 図版 32	弥生土器 鳥形土器?	1 E9	068	—	—	—	—	胴部の大半とくちばし部分欠 尾部に口縁	内外: 灰白・灰 断: 灰白	2mm 以下の灰・黒色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
112	図 26	弥生土器 甕	2	277	(11.2)	4.3 以上	—	口頸部 30%	口縁部はくの字に強く屈曲 端部を上方にわずかに拡張 体部横方向の平行タタキ	内: 灰黄・浅黄 外: にぶい黄橙 断: にぶい黄橙	1mm 以下の灰色粒・赤色酸化粒を中量含む	反転復元
113	図 26 図版 32	弥生土器 把手付細頸壺	2	293	8.2	20.7 以上	—	25%	口縁部は内湾気味に直立 端部は尖り気味 口縁部下に 4 条の凹線文 肩部にアーチ状の把手 体部は算盤形	内: 浅黄橙・灰白 外: 橙 断: にぶい黄橙	2mm 以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
114	図 26 図版 32	弥生土器 広口太頸壺	2	293	(18.4)	12.9 以上	—	口縁部 45%	頸部は直立 口縁部は短く外反 端部は上方に拡張 外方に面	内外断: 浅黄橙	5mm 以下の灰色礫 1 個 2mm 以下の灰・白色粒を多く含む	反転復元
115	図 26	弥生土器	2	293	—	8.0 以上	6.2	底部 50%	やや上げ底	内: 灰白 外: 浅黄橙・淡黄・オリブ黒 断: 灰白	2mm 以下の褐・灰色粒を多く含む 黒斑	一部反転復元
116	図 26 図版 33	弥生土器 高杯	2	293	(11.7)	5.4 以上	—	杯部 30%	口縁部は体部から湾曲して上方へ立ち上がる 端部は尖り気味	内外断: 浅黄橙	2mm 以下の灰・褐色粒を多く含む	反転復元
117	図 26 図版 33	弥生土器 高杯	2	293	—	5.1 以上	15.0	裾部 90%	裾部はハの字状に開く 端部上下に拡張 外下方に面 円穴 8 箇所	内: 浅黄橙・暗灰黄 外: 灰黄・浅黄橙 断: 浅黄橙	2mm 以下の灰・白・褐色粒を多く含む	一部反転復元
118	図 26	弥生土器 把手付壺	2 D9	300	—	6.3 以上	—	—	肩部にアーチ状の把手	内: 灰黄・淡赤橙 外: 浅黄橙 断: 灰白	1mm までの灰・褐色粒を多く含む	
119	図 27	弥生土器 広口壺 (器台?)	1 E9j15	005	(31.4)	3.1 以上	—	口縁部 15%	口縁部は強く外傾し端部は下方に垂下 外端面に 5 条の凹線文のち円形浮文を貼付	内外: 灰白・浅橙・灰 断: 浅黄	2mm 以下の灰・褐色粒を多く含む	反転復元
120	図 27 図版 33	弥生土器 広口壺	1 E9h16	005	13.8	7.0 以上	—	口縁部 65%	口縁部は外傾したのち強く外反し、端部を下方に垂下 外端面に 5 条の凹線文のち円形浮文を貼付	内: 浅黄橙・灰白 外断: 浅黄橙・灰白	1mm 以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	一部反転復元
121	図 27 図版 33	弥生土器 広口壺	1 E9h17-g17	005	(18.0)	9.4 以上	—	口縁部 25%	口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部近くで横方向に開く 端部は肥厚し外方に面 頸部にヘラ状工具による列点文	内: 灰白・灰黄 外: 浅黄橙・灰白 断: 灰白	2mm 以下の灰色・黒色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
122	図 27 図版 33	弥生土器 広口壺	1 E19h17-g17	005	(19.6)	7.6 以上	—	口縁部 10%	口縁部は強く外反 端部を上下に拡張し外方に面 外端面に 3 条の凹線文 頸部付近に板状工具による籬状文 2 段	内: 橙 外: 橙 断: 橙	5mm 大の赤色酸化粒 1 個 3mm 以下の白・灰色粒を多く含む	反転復元
123	図 27 図版 33	弥生土器 広口壺	1 E9h15-17, g17	005	12.6	6.0 以上	—	口頸部 100%	口縁部は外反したのち横に開く 端部は上下に拡張し外方に面 端面に櫛描波状文 頸部に櫛描直線文	内: 浅黄橙・灰 外: 浅黄橙 断: にぶい橙	2mm 以下の灰色・褐色・石英粒・赤色酸化粒を多く含む	
124	図 27	弥生土器 広口壺	1 E9i16	005	(7.0)	3.7 以上	—	口縁部 15%	口縁部は強く外反する 端部は外方に粘土を貼付し拡張 玉縁状になる	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙 断: 黄灰	3mm 大の褐色粒 2 個 1mm 以下の白色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
125	図 27 図版 33	弥生土器 把手付壺	1 E9h17-g17	005	15.8	13.9 以上	—	—	口縁部は内湾気味に立ち上がる 端部は上方に面 外面端部下に 5 条の凹線文 頸部に櫛刺列点文 肩部に横位の把手 (欠落)	内外断: 灰白・浅黄橙	1mm 以下の灰・褐色粒を多く含む	一部反転復元
126	図 27 図版 33	弥生土器 直口壺	1 E9h16	005	(17.0)	9.5 以上	—	口縁部 15%	口縁部は外傾し端部は上方に面 外面端部下に断面三角形の突帯	内: 橙 外: 暗灰黄・にぶい橙 断: 橙	1mm 以下の灰・褐色粒を多く含む	反転復元
127	図 28 図版 33	弥生土器 直口壺	1 E9h16	005 アゼ	(19.0)	11.6 以上	—	口縁部 20%	口縁部は外湾し、屈曲して上方に立ち上がる 端部は上方に面 屈曲部より上に 4 条の凹線文 頸部に櫛刺列点文 口縁部に黒斑	内: にぶい橙・にぶい黄橙 外: にぶい橙・浅黄橙 断: 浅黄橙	2mm 以下の石英・灰・黒色粒を多く含む	反転復元
128	図 28 図版 33	弥生土器 甕	1 E9h16	005	(32.6)	7.1 以上	—	口縁部 5%	口縁部はくの字に屈曲 端部を上方に揃み上げ外方に面 体部外面横方向の平行タタキ	内: 灰白 外: 橙 断: 灰白	4mm 大の黒色礫 1 個 3mm 以下の灰・黒・白色粒を多く含む	反転復元
129	図 28 図版 33	弥生土器 甕	1 E9i16	005	(20.0)	5.3 以上	—	口縁部 15%	口縁部はくの字に屈曲 端部を上方にわずかに揃み上げ外上方に面	内: 淡赤橙・橙・浅黄橙 外: 暗灰黄・黄灰 断: 浅黄橙	2mm 以下の黒・灰色粒を多く含む	反転復元
130	図 28	弥生土器 甕	1 E9j15	005	(26.0)	8.7 以上	—	口縁部 5%	口縁部はくの字屈曲し強く外傾 端部は上下に肥厚し外上方に面 外端面に 1 条の凹線文 体部外面横方向の平行タタキ	内: 明黄褐 外: にぶい黄橙 断: 橙	5mm 大の褐色礫 1 個 2mm 以下の灰・白色粒・赤色酸化粒を多く含む	反転復元
131	図 28 図版 33	弥生土器 甕	1 E9h16	005	(27.0)	6.8 以上	—	口縁部 12%	口縁部はくの字に屈曲 端部を上下に拡張 外上方に面 体部外面横方向の平行タタキ	内: 浅黄橙 外: 灰白・黄灰 断: 灰白	反転復元 胎土: 1mm 以下の灰色・白色粒を多く含む	反転復元
132	図 28	弥生土器	1 E9h16	005	—	5.1 以上	8.2	底部 100%	やや上げ底	内: 灰 外: 灰白・灰黄 断: 灰白	3mm 以下の灰・白色粒を多く含む	一部反転復元
133	図 28	弥生土器	1 E9h16	005	—	4.7 以上	8.2	底部 75%	平底	内: 灰 外: 浅黄橙・にぶい橙 断: 浅黄橙	2mm 以下の石英・白・灰色粒を多く含む 赤色酸化粒を微量含む	一部反転復元



遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
134	図 28 図版 33	弥生土器 高杯	1 E9i16	005	(18.0)	5.2 以上	-	口縁部 15%	口縁部は内湾気味に外上方に開く 端部は丸い 体部・口縁部の境 に2条の凹線文	内: 浅黄橙・淡黄 外: にぶい黄橙・にぶい黄 断: 灰黄	反転復元 胎土: 2mm以下の 灰色・褐色粒を多く含む	反転復元
135	図 28 図版 33	弥生土器 高杯	1 E9i16	005	-	12.0 以上	9.6	脚部 85%	脚縁部は中空で円筒状 裾部はハ の字に開く 端部は上下に拡張し 外方に面	内: 浅黄橙 外: 灰白 断: 浅黄	2mm以下の灰・白・赤色酸 化粒を多く含む	
136	図 28 図版 33	弥生土器 高杯	1 E9h17・ g17	005	-	14.2 以上	13.8	脚上部 100%	脚縁部は中空で円筒状 裾部はハ の字に強く開く 端部は上下に大 きく拡張し外方に面 端部付近に 黒斑	内: 浅黄橙・にぶい黄橙 外: 浅黄橙・灰 断: 淡黄・灰	2mm以下の灰・褐色粒を多 く含む	
137	図 28 図版 33	弥生土器 高杯	1 E9h16	005	-	17.1 以上	(11.6)	脚部 60%	脚縁部は中空で円筒状 裾部はハ の字に開く 端部は上下に拡張し 外方に面 端部付近に黒斑	内: 灰白・浅黄橙 外: 灰白・灰 断: 灰白	2mm以下の灰・黒・褐色粒 を多く含む	一部反転復元
138	図 28 図版 33	弥生土器 鉢	1 E9h16	005	(38.0)	7.5 以上	-	口縁部 15%	口縁部は内湾して上方に伸びる 端部は内方に拡張して上方に面 端部下に1条の凹線文	内外断: 灰白・浅黄橙 ・灰白	1mm以下の褐・灰色粒・赤 色酸化粒を多く含む	反転復元
139	図 28 図版 33	弥生土器 台付壺?	1 E9h17・ g17	005	-	10.1 以上	(11.6)	脚上部 30%	脚上部はハの字に開く 端部は外 下方に面 端部上に1条の凹線文	内: 灰白・灰 外: 灰白・にぶい黄 断: 灰白	2mm以下の石英・灰・黒色 粒・赤色酸化粒を多く含む	一部反転復元
140	図 28 図版 33	弥生土器 器台?	1 E9h16	005	-	10.1 以上	(19.6)	脚上部 30%	脚部はハの字に開く 端部は内外 に拡張し外方に面 端部上に1 条・やや間隔をあけて上部に連続 する10条以上の凹線文	内: 灰 外: 灰白・灰 断: 灰白	1mm以下の灰色粒を多く含む	反転復元
141	図 28 図版 33	弥生土器 器台?	1 E9j15	005	-	12.9 以上	(14.0)	脚部 75%	脚部はハの字に弱く開く 端部は 下方に面 端部と端部上に1条 ずつの凹線文	内外: 浅黄橙・にぶい黄 断: 浅黄	3mm以下の灰・褐・黒色粒・ 赤色酸化粒を多く含む	一部反転復元
142	図 28 図版 33	弥生土器 器台	1 E9h17・ g17	005	(31.0)	12.9 以上	-	口縁部 25%	口縁部は外反したのち端部近くで 横方向に開く 端部は下方に垂下 端部に6条の凹線文の竹管 文も押す円形浮文を密に貼付 口 縁部中に円形透かし5箇所か?	内: 灰白・浅黄橙・灰 外: 灰白・浅黄橙 断: 灰白	2~4mm大の灰色礫を微量、 1mm以下の灰・褐色粒・赤 色酸化粒を多く含む	反転復元
143	図 28 図版 34	弥生土器 台形土器	1 E9h17 ・g17ほ か	005 068	台部径 26.6	(40.5)	(30.4)	70%	台部は外方に大きく拡張 脚部は 内湾気味に長く伸びる 端部は下 方に面 外部ハケ調整	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙・灰 断: 浅黄橙	2mm以下の灰・黒・褐色粒・ 赤色酸化粒を多く含む	一部反転復元
144	図 29 図版 34	弥生土器 広口壺	2 D9u19 ・u19西	270	11.0	10.5 以上	-	口縁か ら肩部 70%	口縁部は直立する頸部から短く横 方向に開く 端部は上下に拡張 外端部には4条の凹線文上に5~ 7個一単位の円形浮文 頸部から 体部上半に櫛描縞状文5条以上	内: オリーブ黒 外: 橙 断: にぶい黄	2mm以下の灰・褐色粒・赤 色酸化粒を多く含む	一部反転復元
145	図 29 図版 34	弥生土器 広口壺	2 D9u19 西	270	(16.0)	6.2 以上	-	口縁部 45%	口縁部は直立する頸部から外反す る端部は大きく垂下 外端部には 4条の凹線文上に円形浮文	内外: 明黄褐・オリーブ黒 断: 黒	3~6mm大の石英・長石を 少量 2mm以下の結晶片岩・ 石英・長石を多く含む	反転復元 搬入品
146	図 29 図版 34	弥生土器 把手付広 口壺	2 D9i19 東	270	15.6	12.8 以上	-	口頸部 50%	口縁部は強く外反 端部を上下に 拡張 外方の端部に2条の凹線 文 肩部アーチ状の把手	内: 灰・淡黄 外: 淡黄 断: 灰白	2mm以下の白・灰色粒を多 く含む	一部反転復元
147	図 29 図版 34	弥生土器 把手付広 口壺	2 D9i19 ・t19東 側	270	(21.0)	12.5 ・ 13.8 以上	(8.9)	30%	口縁部は外反 端部を上下に拡張 外端部に3条の凹線文 肩部 にアーチ状の把手	内: 灰・暗灰 外: 浅黄橙 断: 灰白	2mm以下の灰・白色粒・赤 色酸化粒を多く含む	上部一部反 転復元 下部反転復元
148	図 29 図版 34	弥生土器 細頸壺	2 D9u19 西	270	(12.0)	9.7 以上	-	口縁部 20%	口縁部は内湾気味に立ち上がる 端部は内上方に面 端部下に6 条の凹線文	内: 灰白・浅黄橙 外: 浅黄橙・にぶい黄橙 断: にぶい黄橙	2mm以下の灰・褐・黒色粒 を多く含む	反転復元
149	図 29 図版 34	弥生土器 台付把手 付細頸壺	2 D9u19 ・t19ほ か	270	(10.6)	22.3 以上	-	壺部 50%	口縁部は内湾気味に立ち上がる 端部は上方に面 肩部にアーチ状 の把手 体部は算盤形	内: 橙・灰 外: 橙 断: 灰オリーブ	3~4mm大の灰色粒・赤色 酸化粒を少量含む 2mm以 下の灰色粒・赤色酸化粒を 多く含む	反転復元
150	図 29 図版 34	弥生土器 直口壺	2 D9u19 西	270	(16.4)	8.6 以上	-	口縁部 35%	口縁部は内湾気味に外傾 端部は 上方に面 口縁部下にキザミを有 する断面三角形の突帯	内: 浅黄橙 外: 浅黄橙 断: 浅黄橙	1~2mm大の褐・黒色粒を 少量、1mm以下の褐・黒・ 灰色粒を多く含む	反転復元
151	図 29 図版 34	弥生土器 直口壺	2 D9u19 西	270	(19.6)	7.6 以上	-	口縁部 20%	口縁部は直線的に外傾 端部は上 方に面 端部下に1条の凹線文 片口状に扱れる	内: 灰白 外断: 浅黄橙	2mm以下の灰・褐色粒・赤 色酸化粒を多く含む	反転復元
152	図 29 図版 34	弥生土器 甗	2 D9u19 西	270	(16.8)	8.5 以上	-	口縁部 25%	口縁部はく字に強く屈曲 端部 は肥厚し外方に面 端部に1条の 凹線文 体部横方向の平行タタキ	内: 淡黄・浅黄 外: にぶい黄橙・黒褐 断: 灰黄	2mm以下の褐色・黒色粒を 多く含む スス付着	反転復元
153	図 29 図版 34	弥生土器 甗蓋	2 D9i19	270	天井部 4.8	5.7	口径 (17.2)	60%	天井部は平坦・端部は外方に拡張 体部・口縁部はスカート状に開 く 端部は外方に面	内外断: 浅黄橙 灰黄	1mm以下の灰・黒色粒を多 く含む 赤色酸化粒を微量 含む	一部反転復元
154	図 29 図版 34	弥生土器 台付鉢 (無頸壺)	2 D9u19 西	270	(17.6)	7.7 以上	-	鉢部 5%	体部は扁球形 下位に付した垂下 部外面に円形浮文・竹管文 口縁 部は横方向に折れる 端部は下方 に拡張	内: 橙 外: 灰黄・暗灰黄 断: 灰オリーブ	2mm以下の石英を少量含む 搬入品?	反転復元
155	図 29 図版 34	弥生土器 高杯	2 D9u19 西	270	(23.6)	3.0 以上	-	口縁部 25%	口縁部は横方向に開き、端部は大 きく垂下 外端部の上下に1条 ずつの凹線文	内外: 橙 断: 浅黄	2mm以下の灰・褐色粒・赤 色酸化粒を多く含む	反転復元
156	図 29 図版 34	弥生土器 高杯	2 D9u19 西	270	(22.0)	5.7 以上	-	口縁部 40%	口縁部は内湾気味に立ち上がる 端部は上方に面 上面に2条 端部下に1条 口縁部と体部と の境に2条の凹線文	内外断: 浅黄橙・淡黄	2mm以下の灰・白色粒・赤 色酸化粒を多く含む	反転復元
157	図 29 図版 34	弥生土器 高杯	2 D9i19 東	270	(23.0)	5.2 以上	-	杯部 30%	口縁部は体部から湾曲して外上方 へ立ち上がる 端部は上方に面 上端部に2条、端部下に1条の 凹線文	内: 橙 外: 浅黄橙・にぶい黄橙 断: 淡黄	2mm以下の灰・褐色粒を多 く含む	反転復元
158	図 29 図版 34	弥生土器 高杯	2 D9u19 西	270	(21.8)	7.1 以上	-	杯部 25%	口縁部は体部から湾曲して上方へ 立ち上がる 端部は上方に面 体 部・口縁部の境に3条の凹線文	内: 淡黄・灰 外: にぶい黄・橙 断: 灰	3mm以下の赤色酸化粒を中 量、1mm以下の灰色粒を多 量に含む	反転復元
159	図 29 図版 34	弥生土器 高杯	2 D9u19 西	270	(24.4)	7.5 以上	-	杯部 30%	口縁部は体部から湾曲して上方へ 立ち上がる 端部は上方に面	内: にぶい黄・灰白 外: にぶい黄 断: 灰白	4mm大の赤色酸化粒1個 2 mm以下の灰・褐色粒・赤色 酸化粒を多く含む	反転復元



遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
160	図 29	弥生土器 高杯	2 D9u19 西	270	—	5.2 以上	11.0	裾部 100%	裾部はハの字に開く 端部はわず かに上下に拡張 端部は外方に面	内:にぶい黄橙・明黄褐 外:にぶい橙 断:浅黄	1mm以下の白・灰色粒を多 く含む 2~7mm大の赤色 酸化粒を少量含む	一部反転復元
161	図 29 図版 34	弥生土器 高杯	2 D9t19	270	(23.0)	16.5	(11.3)	30%	口縁部は体部からわずかに屈曲し て外上方へ立ち上がる 端部は上 方に面 上端面に1条、端部下 に2条、屈曲部に3条の凹線文 脚部はハの字状に開く 端部は 下方に面	内外断:灰白・浅黄橙	2mm以下の灰・褐・黒色粒 を多く含む	一部反転復元
162	図 29 図版 34	弥生土器 台付鉢	2 D9t19・ t19 東側	270	(29.0)	22.3 以上	(17.2)	30%	口縁部は体部からわずかに屈曲し て内方に折れる 端部は内上方 に面 端部下に1条、屈曲部に 4条の凹線文 脚部は直立し、 端部は下方に面 端部上に1条、 上位に3条の凹線文 上位に円 形透かし	内外:浅黄橙・にぶい橙 断:浅黄橙	3mm大の赤色酸化粒を1個、 2mm以下の褐・灰色粒・赤 色酸化粒を多く含む	反転復元
163	図 29 図版 34	弥生土器 台付鉢	2 D9u19 東	270	—	6.7 以上	5.0	脚台部 100%	粗製 脚台部はハの字状に開く 端部は丸みを帯びる 体部は外上 方に開く 底部は凹盤充填	内外断:浅黄橙	1mm以下の灰・褐色粒を多 く含む	一部反転復元
164	図 34	須惠器 杯身	2 D9p18	263	—	2.4 以上	(9.2)	底部 10%	底部端に高台 下方で接地する	内外断:灰	1mm以下の白色粒を微量含む	反転復元
165	図 34 図版 36	土師器 皿	D9 g23・ 24	260 下層 (底)	19.4	1.3	12.0	75%	底部は平坦 外底面ヘラケズリの ちへラミガキか? 内面体部斜め 方向細いヘラミガキ 見込部小さ な花弁状の線刻	内:明黄褐・灰黄・にぶい黄橙 外:灰黄 断:灰黄	1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を中量含む	一部反転復元
166	図 34	土師器 皿	D9 g23・24	260 下層 (底)	(20.2)	2.0	13.8	40%	底部は平坦	内:にぶい橙・浅黄橙 外:橙・にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を少量含む	反転復元
167	図 34 図版 36	土師器 甃	D9 g23・ 24	260 下層 (底)	(22.0)	9.0 以上	—	口縁部 10%	口縁部は強く外反して長く伸びる 端部は尖り気味 体部外面斜め ハケ	内:灰黄・にぶい黄橙 外:灰黄・黄灰 断:灰黄	1mm以下の黒色微粒を少量 含む	反転復元
168	図 34 図版 36	土師器 甃	D9 g23・ 24	260 下層 (底)	(20.6)	6.4 以上	—	口縁部 15%	口縁部は外反 端部が外方に面 体部外面縦方向ハケ	内外:暗灰黄・にぶい橙 断:にぶい赤褐	1mm以下の石英・灰色微粒、 1mm前後の結晶片岩を多く 含む	反転復元
169	図 34 図版 36	土師器 鍋	D9 g23・ 24	260 下層 (底)	(29.0)	15.7 以上	—	10%	口縁部は外反 端部は外方に面 外 端面に浅い沈線 肩部に上方を向く 把手 体部外面縦方向・体部内面横 方向のハケ 把手付近粗いハケ	内:浅黄橙・にぶい橙 外:浅黄橙・灰白 断:にぶい黄橙	3mm以下の石英を少量含む	反転復元
170	図 34 図版 36	土師器 甃	D9 g23・ 24	260 下層 (底)	—	9.1 以上	—	—	外面縦方向のハケのち突帯を付す 内面横方向のハケ	内:黒褐 外:黒褐・暗灰黄 断:灰黄	1mm以下の白色微粒を微量 含む	反転復元
171	図 34 図版 36	製塩土器	2 D9g23・ 24	260 下層	7.4	4.5	2.7	50%	手捏ね成形 鉢形 端部わずかに 内傾	内:にぶい黄橙・灰黄褐 外:灰白・にぶい黄橙 断:灰黄	1mm以下の白色・灰色微粒 を多く含む	一部反転復元
172	図 34 図版 36	須惠器 甃	D9g23	259 肩 中・下 層	(38.0)	8.8 以上	—	5%	口縁部は外傾 端部をわずかに上方 に揃み上げる 端部下より波状文 凹線文一波状文一凹線文 軟質	内外:灰白 断:にぶい黄橙	1mm以下の白色微粒を多く 含む	反転復元
173	図 35	土師器 杯	1 E9c18	183	(16.4)	3.1 以上	—	口縁部 10%	口縁部は外反 端部内面に溝 外 面体部下半から底部ヘラケズリ	内:浅黄 外断:橙	1mm以下の白色微粒を少量 含む	反転復元
174	図 35	須惠器 壺	2 g1	237	(12.5)	1.6 以上	—	10%	口縁部内面に小さい返り	内外断面:灰白	1mm以下の白色微粒・黒色 粒を少量含む	反転復元
175	図 35	須惠器 杯蓋	E9g17	059 北	17.0	2.8	揃み径 2.9cm	45%	天井部は平ら 中央に擬宝珠様の 揃み 口縁部屈曲して下方に折れる 端部は丸い	内外断:灰	4mm以下の長石を少量含む	一部反転復元
176	図 35	須惠器 杯身	E9g18	057 南	(10.7)	3.75	6.2	40%	底部端より内側に高台・端部は下 方で接地 体部はほぼ直線的に外 傾 口縁部は丸い	内外:灰 断:灰白	3mm以下の石英を少量含む	反転復元
177	図 35	須惠器 杯	1 E9h20	001-a 上層	(16.0)	4.15	13.0	10%	底部端にハの字型に開く高台	内外:灰白	砂粒はほとんど含まない	反転復元
178	図 35	須惠器 壺	1 E9f22	019 上層	(13.8)	8.9 以上	—	口縁部 25%	口縁部は逆ハの字に開く	内断:灰白・灰 外:灰	1mm以下の黒色粒を中量含 む	反転復元
179	図 35	須惠器 壺	2 g1	237	—	4.8 以上	(9.7)	底部の 25%	底部端に外方で接地する大きい高台	内:灰白 外:灰白・灰 断:灰白・灰黄	1mm以下の白色微粒を少量 含む	反転復元
180	図 35	須惠器 甃	E9g17	059 北	(21.4)	6.2 以上	—	口縁部 10%	口縁部は外傾 端部付近でやや上 方に折れる 端部は外上方に面 体部外面タタキ方向・内面同心円の タタキ 自然釉付着	内:灰 外:灰白・灰 断:灰白	1mm以下の黒色微粒を中量 含む	反転復元
181	図 35	須惠器 甃	1 E9c18	183	(32.4)	22.6	9.9	口頸部 10%	口頸部はく字に屈曲 端部折り 返して玉縁状 端部内側キザミ 頸部外面波状文 体部外面縦方向 平行タタキのちカキメ 内面同心 円タタキ	内外:灰白・灰	2mm以下の白色粒を多く含む	反転復元
182	図 37	瓦器 椀	D9	295 井戸側 内	—	3.4 以上	—	—	磨滅著しい	内:灰 外:オリーブ黒 断:浅黄橙・灰白	0.5mm以下の白色微粒を微量 含む	反転復元
183	図 37	瓦器 椀	D9	295	—	0.9 以上	(5.4)	底部 25%	磨滅著しい	内外:灰 断:灰白	砂粒をほとんど含まない	反転復元
184	図 37 図版 37	土師器 小皿	2 D10t2	260 下層	7.5	1.6	—	95%	底部は平坦気味	内外断:灰白	1mm以下の灰色微粒を微量 含む	反転復元
185	図 37 図版 37	土師器 小皿	2 D10t2	260 下層	8.3	2.0	—	95%	底部はやや丸みを帯びる 口縁部 の一部スス付着 燈明皿	内:にぶい褐・にぶい橙 外:にぶい褐・にぶい黄橙 断:にぶい橙	1mm以下の灰色微粒を微量 含む	反転復元
186	図 37 図版 37	土師器 小皿	2 D10t2	260 下層	8.2	2.2	—	90%	底部は丸みを帯びる 口縁部短い	内:暗灰黄 外:灰黄・暗灰黄 断:灰黄	1mm以下の灰色微粒を少量 含む	反転復元
187	図 37 図版 37	土師器 小皿	2 D10t2	260 下層	7.8	2.0	—	85%	口縁部は薄く短い	内断:灰白 外:灰白・灰	1mm以下の灰色微粒を多く 含む	反転復元

遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備 考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
188	図 37 図版 37	土器 小皿	2 D10t2	260 下層	8.15	1.6		90%	口縁部は薄く短い 見込部コビオサエ	内断:灰白 外:灰白・灰黄	1mm以下の白・灰色微粒を 少量含む	
189	図 37 図版 37	土器 小皿	2 D10t2	260 下層	8.6	1.9		95%	底部はやや丸みを帯びる 口縁端 部に細い沈線	内外:灰白・淡黄 断:浅黄	1mm以下の灰色微粒を中量 含む、2mm大の石英 1個含 む 鎌倉時代	
190	図 37 図版 37	土器 小皿	2 D10t2	260 下層	8.3	1.7		95%	底部はやや丸みを帯びる	内外断:灰白	1mm以下の灰色微粒を中量 含む	
191	図 37 図版 37	土器 小皿	2 D10t2	260 下層	8.3	1.9		100%	底部は平坦 口縁部は短い 全体 的に歪が著しい 見込部にスス? 板状工具による六角形状の圧痕	内:灰黄褐・にぶい橙 外:暗灰黄・にぶい黄橙	1mm以下の灰色微粒を少量 含む	
192	図 37 図版 37	土器 小皿	2 D10t2	260 下層	7.7	1.8		75%	底部平坦気味 口縁部薄い 内面 強いヨコナデ	内:にぶい黄橙・にぶい橙 外断:にぶい橙	0.5mm以下の褐色微粒を微量 含む	
193	図 37 図版 37	土器 小皿	2 D10t2	260 下層	8.0	1.75		75%	底部は平坦気味・コビオサエ 内 面・口縁端部の一部スス	内:浅黄・灰黄・にぶい黄 外:にぶい黄・にぶい黄褐	0.5mm以下の黒・褐色微粒を 微量含む	燈明皿
194	図 37 図版 37	土器 小皿	2 D10t2	260 下層	8.6 × 8.8	2.0		98%	底部は平坦気味 歪・冷め割れあり	内:浅黄・にぶい黄褐 外:浅黄	1mm以下の白・褐色微粒を 微量含む	
195	図 37 図版 37	土器 小皿	2 D10t2	260 下層	8.2	1.7		90%	底部はやや丸みを帯びる 口縁部 は短い	内:黄褐 外:にぶい黄・にぶい黄橙 断:灰白	5mm大の灰色礫 1個、1mm以 下の灰・白色粒を中量含む	
196	図 37 図版 37	土器 小皿	2 D10t2	260 下層	8.8	1.8		85%	底部は平坦気味・コビオサエ・ヘ ラ状工具ナデ	内:灰黄 外:灰白・灰黄・浅黄橙 断:灰白	1mm以下の灰・白色粒を少 量含む	
197	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10	260 下層	10.8	4.4		90%	底部は平坦 粘土紐巻き上げ成形 か? 外底部板目圧痕	内外断:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を微量 含む	
198	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10	260 下層	11.0	3.7		75%	底部は平坦・板目圧痕 見込部ハ ケ状のナデ	内:灰白・淡黄・灰 外:淡黄 断:灰	0.5mm以下の褐色微粒を微量 含む	
199	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10t2	260 下層	11.4	4.0		98%	底部は平坦気味 底部部の境コビ オサエ 外底部板目圧痕	内:灰白・浅黄橙 外:淡黄 断:灰白	1mm大の赤色酸化粒 1個 1 mm以下の灰色粒を少量含む	
200	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10t2	260 下層	12.2	3.6		80%	底部は平坦	内:灰黄・浅黄・明褐 外:浅黄・にぶい黄橙・灰白 断:黄褐	2mm大の黒色粒 1個 1mm以 下の黒・灰色粒を中量含む	
201	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10t2	260 下層	13.0	3.0		70%	底部は平坦 体部コビオサエ	内外断:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を微量 含む	
202	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10t2	260 下層	13.7	3.25		80%	体部下平板状工具による小刻みな ナデ	内:橙・にぶい橙 外:にぶい黄橙 断:灰黄・浅黄	6mm大の灰色礫 1個 1mm以 下の灰色微粒を少量含む	
203	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10t2	260 下層	12.9	3.4		85%	底部は小さい 体部下平板状工具 による小刻みなナデ	内外断面:にぶい黄橙	1mm以下の灰色・白色微粒 を中量含む	
204	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10t2	260 下層	14.2	3.5		85%	底部は平坦気味 弱い板目圧痕 体部コビオサエ	内:灰黄 外:灰黄・暗灰黄 断:にぶい黄橙	0.5mm以下の灰色微粒を微量 含む	
205	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10t2	260 下層	13.2	3.5		80%	底部は平坦気味 体部コビオサエ	内外:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を微量 含む	
206	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10t2	260 下層	13.9	3.55		75%	底部は平坦 体部コビオサエ	内:灰黄・浅黄 外:灰黄・にぶい褐 断:灰黄	0.5mm以下の灰色微粒を中量 含む	
207	図 37 図版 37	土器 皿	2 D10t2	260 下層	13.5	4.0		90%	底部は丸みを帯びる 体部から底 部コビオサエ 歪が著しい	内:灰黄・浅黄 外:にぶい黄橙・灰黄	0.5mm以下の灰色微粒を中量 含む	
208	図 37 図版 37	瓦器 皿	2 D10t2	260 南壁ト レンチ	8.0	1.8		100%	底部はやや丸みを帯びる いぶし が一様に行き渡らず斑になる 暗 文なし	内外:灰白・暗灰	1mm以下の白色・灰色微粒 を極微量含む	
209	図 37 図版 37	瓦器 皿	2 D10t2	260 下層	7.6	1.8		90%	底部は丸みを帯びる 一部いぶし 不足 暗文なし	内外:灰黄・灰白・灰 断:灰白	1mm以下の灰・白色微粒を 微量含む	
210	図 37 図版 37	瓦器 皿	2 D10t2	260 南壁ト レンチ	7.8	1.7		75%	体部はやや丸みをおびる 体部口 縁部は短い 暗文なし	内外:灰・暗灰 断:灰白	0.5mm以下の白色微粒を少量 含む	
211	図 37 図版 38	瓦器 皿	2 D10	260 南壁ト レンチ	8.4	2.2		100%	底部はやや丸みを帯びる 外底部 板目圧痕のちナデ 見込部全体ス ス付着 暗文なし	内:黒・灰 外:灰 断:灰白	1mm以下の白色微粒を微量 含む	
212	図 37 図版 38	瓦器 皿	2 D10t2	260 下層	8.0 × 7.7	1.7		95%	底部はやや丸みを帯びる 焼歪に よる割れ有り 暗文なし	内外:灰・暗灰 断:灰	砂粒ほとんど含まない	
213	図 37 図版 38	瓦器 皿	2 D10t2	260 下層	8.7	1.7		98%	底部は平坦気味 口縁部外面布目 暗文なし	内断:暗灰 外:灰	砂粒ほとんど含まない	
214	図 37 図版 38	瓦器 皿	2 D10t2	260 下層	8.8	1.85		100%	底部はやや丸みを帯びる いぶし が60%程度しかされていない 暗文なし	内外:灰白・灰・暗灰	砂粒ほとんど含まない	
215	図 37 図版 38	瓦器 皿	2 D10t2	260 下層	8.2	1.6		75%	底部はやや丸みをおびる 体部口 縁部は器壁が薄い 暗文なし	内外:灰 断:灰白	砂粒ほとんど含まない	
216	図 37 図版 38	瓦器 皿	2 D10t2	260 下層	8.0	1.7		90%	底部は平坦気味 体部・口縁部は 器壁が薄くみじかい見込部同心円 状の暗文 歪著しい 焼むらによ る変色有	内:灰・灰白 外:灰・灰白・暗灰 断:灰白	1mm以下の黒色微粒を少量 含む	
217	図 37 図版 38	瓦器 皿	2 D10t2	260 下層	8.5	1.7		60%	底部は平坦気味 明面不規則な暗文	内:灰 外:灰・暗灰 断:灰白	0.5mm以下の白色微粒を少量 含む	
218	図 37 図版 38	瓦器 椀	2 D10t2	260 下層	14.0	4.1	5.6	90%	断面三角形の高台 体部外面コビ オサエ・ナデ 二次焼成受ける 暗文なし	内外:灰白・灰・黒褐	0.5mm以下の灰色微粒を少量 含む	
219	図 37 図版 38	瓦器 椀	2 D10t2	260 下層	14.4 × 13.1	4.9	5.4	98%	断面台形の高台 一部いぶし不足 口縁部の歪著しい 暗文なし	内:灰 外:灰・暗灰・黒 断:灰白	1mm以下の白・灰色微粒を 極微量含む	
220	図 37 図版 38	瓦器 椀	2 D10t2	260 下層	12.7	4.0	4.8	95%	断面三角形の高台 体部外面コビ オサエ・ナデ 内面渦巻き状の暗文	内外:灰 断:灰白	砂粒ほとんど含まない	

遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備 考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
221	図 37 図版 38	瓦器 椀	2 D10t2	260 下層	13.7	4.8	5.0	90%	断面台形の高台 体部外面ユビオ サエ顯著 内面見込部ループ状・ 体部同心円状の疎らな暗文	内: 灰白・灰 外: 灰・暗灰 断: 灰白	1mm以下の白・灰色微粒を 微量含む	
222	図 37 図版 38	瓦器 椀	D10t2・ u2	260 下層	11.8	3.6	4.6	95%	断面三角形の高台 体部外面ユビ オサエ・ナデ 体部内面同心円状・ 見込部ループ状の暗文	内: 灰・暗灰・灰白 断: 灰白	0.5mm以下の白・灰色微粒を 微量含む	
223	図 37 図版 38	瓦器 椀	D10t2	260 下層	13.4	3.8	5.8	80%	断面三角形の高台 体部外面ユビ オサエ・ナデ 内面部分的な不規 則な暗文	内外: 黒・灰・灰白 断: 灰白	0.5mm以下の灰白微粒を微量 含む	
224	図 37 図版 38	瓦器 椀	D10t2	260 下層	(14.8)	4.7	(5.2)	50%	断面台形の高台 体部外面ユビオ サエ・ナデ 体部内面渦巻き状の 暗文	内: 灰・暗灰 外: 暗灰・灰 断: 灰白	砂粒ほとんど含まない	反転復元
225	図 37 図版 38	瓦器 椀	D9s25	260 下層	14.5	4.6	6.0	75%	断面三角形の高台 体部外面ユビ オサエ・ナデ 内面不規則な暗文	内: 暗灰 外: 灰・暗灰 断: 灰白	0.5mm以下の白色微粒を微量 含む	一部反転復元
226	図 38 図版 38	瓦器 椀	D10t2	260 下層	14.1	4.35	4.6	60%	断面台形の高台 体部外面ユビオ サエ・ナデ 体部内面同心円状・ 見込部ループ状の暗文	内: 灰・暗灰・灰白 外: 暗灰・灰白 断: 灰白	4mm大の黒色粒 1個 1mm以 下の黒色粒を少量含む	一部反転復元
227	図 38 図版 38	瓦器 椀	D10t2	260 下層	13.8	4.25	4.8	50%	断面三角形の高台 体部外面ユビ オサエ・ナデ 内面不規則な暗文	内: 灰・オリブ黒 外: 暗灰・灰白 断: 灰白	0.5mm以下の白色微粒を微量 含む	
228	図 38 図版 38	瓦器 椀	D10t2	260 下層	14.3	4.1	4.8	60%	断面三角形の高台 体部外面ユビ オサエ・ナデ 体部内面同心円状・ 見込部不規則な暗文	内: 暗灰 外: 灰・暗灰 断: 灰白	0.5mm以下の白色微粒を微量 含む	一部反転復元
229	図 38 図版 38	瓦器 椀	D10t2・ u2	260 下層	14.8	4.1	4.5	75%	断面半球形の高台 体部外面ユビ オサエ・ナデ 体部内面同心円状・ 見込部ループ状の暗文	内: 灰・暗灰 外: 暗灰・灰白 断: 灰白	1mm以下の白色微粒を微量 含む	
230	図 38 図版 38	瓦器 小椀	2 D10t2	260 下層	9.5	2.4	3.8	85%	断面三角形の高台 高台内へラ先 のよる圧痕 見込部ループ状暗文 歪が著しい	内外: 灰 断: 灰白	1mm以下の白色微粒を少量 含む	
231	図 38	瓦質土器 甃	2 D10t2	260 下層	(20.0)	7.0 以上	—	口縁部 20%	口縁部は直立したのち外反 端部 は外方に面 体部外面平行タタキ	内外: 暗灰・黒 断: 灰黄	1mm以下の白色粒を多く含 む	反転復元
232	図 38 図版 38	青白磁 杯	2 D10t2	260 下層	—	2.2 以上	3.4	30%	見込部に花文	釉: 明緑灰 露胎: 灰白	緻密	反転復元 景徳鎮窯 13世紀
233	図 38	須恵質土 器 捏鉢	E9g18	057	(32.8)	11.0 以上	—	5%	体部外傾 口縁部上下に拡張	内外断: 灰白	4mm大の白色礫 1個 1mm以 下の黒・灰色粒を中量含む	反転復元 東播磨須恵器
234	図 44 図版 39	土師器 小皿	1 E9d20・ e20	001-a	7.4	2.0		75%	底部はやや丸みを帯びる 内外底 部ナデ	内外: 橙・浅黄橙・に ぶい黄橙	1mm以下の白色微粒を多く 含む	一部反転復元
235	図 44 図版 39	土師器 小皿	1 E9d21	001-a 中層	7.5	2.2		75%	底部は丸みを帯びる 口縁部は強 く外反	内: 橙 外: 橙・灰黄	0.5mm以下の白色微粒を微量 含む	
236	図 44 図版 39	土師器 小皿	1 E9c21	001-a 中層	8.0	2.25		50%	底部は丸みを帯びる	内: にぶい橙・橙 外: にぶい橙・灰白	0.5mm以下の灰色微粒を少量 含む	一部反転復元
237	図 44 図版 39	土師器 小皿	1 E9i20	001-a 上層	8.3	2.3		85%	底部は平坦気味 外底部板目圧痕	内断: にぶい橙 外: 橙・灰白	1mm以下の灰・黒・褐色粒 を少量含む	
238	図 44 図版 39	土師器 小皿	1 E9j20	001-a 上層	8.7	2.3		90%	底部は丸みを帯びる 口縁部・体 部境に粘土接合痕	内外: 浅黄橙	1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を中量含む	
239	図 44 図版 39	土師器 小皿	1 E9i20	001-a 上層	8.2	2.3		75%	底部は丸みを帯びる 口縁部ス ス付着	内外: 灰白 断: にぶい橙	0.5mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を微量含む	燈明皿
240	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9c21	001-a 中層	11.7	2.75		90%	底部は平坦・板目圧痕・ユビオサ エ・ナデ	内外: にぶい橙・にぶい黄橙 断: にぶい橙	3～5mm大の白色礫、1mm以 下の白色粒を少量含む	
241	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9d20・ e20	001-a	12.7	3.9		90%	底部は小さく深い 外底部櫛状工 具によるナデ	内: 淡黄 外: 淡黄・黄褐	1mm以下の白色微粒を少量 含む	
242	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9i20	001-a 上層	(12.3)	3.1		75%	底部は平坦気味 外面体部から底 部ユビオサエ・ナデ	内断: 灰白 外: 灰白・にぶい黄橙	2mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を少量含む	一部反転復元
243	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9h20	001-a 上層	12.9	4.1		55%	底部は平坦 外面体部から底部ユ ビオサエ・ナデ	内: 灰白・浅黄橙 外: 灰黄・にぶい黄橙 断: にぶい黄橙	4mm大の赤色酸化粒 1個、1 mm以下の灰色粒・赤色酸化 粒を中量含む	
244	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9d21	001-a 中層	12.05	3.6		75%	底部はやや丸みを帯びる 外面 ユビオサエ・板状工具ナデ・ナデ	内断: 灰白・橙・灰黄褐 外: 橙・にぶい黄橙	0.5mm以下の灰色微粒を中量 含む	
245	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9d20・ e20	001-a	(12.5)	4.0		50%	底部は平坦気味 外面体部から底 部ユビオサエ・ナデ 外面全体ス ス付着被熱か?	内: にぶい橙 外: 黒褐・黄灰・褐 断: にぶい橙	0.5mm以下の灰色微粒を多く 含む	一部反転復元
246	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9h20	001-a 下層	13.4	3.7		80%	底部は平坦 弱い板目圧痕 体部 外面から底部ユビオサエ・ナデ	内: 淡黄・浅黄 外: 灰黄・浅黄 断: 浅黄	1mm以下の赤色酸化粒を少量 含む	
247	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9j20	001-a 上層	13.4	3.9		95%	底部は平坦 弱い板目圧痕 体部 外面ユビオサエ・ナデ	内: 灰白・浅黄橙・にぶい黄橙 外: 灰白 断: 浅黄橙	1mm以下の灰色微粒・赤色 酸化粒を少量含む	
248	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9c21	001-a 中層	12.3	3.7		75%	底部は丸みを帯びる 弱い板目圧 痕 体部外面ユビオサエ	内: 黄・にぶい橙 外: にぶい黄橙・浅黄 断: にぶい黄橙	1mm以下の灰色粒を多く含む	
249	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9c21	001-a 中層	13.0	4.05		90%	底部はやや丸みを帯びる 弱い板 目圧痕 体部ユビオサエ・ナデ	内: 灰白・橙・黒褐 外: 灰黄褐・にぶい橙 断: にぶい黄橙	0.5mm以下の白・灰色微粒を 多く含む	
250	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9i20	001-a 上層	13.5	3.65		95%	底部はやや丸みを帯びる 外面体 部から底部ユビオサエ・ナデ 内 面スス付着	内: 浅黄橙・にぶい黄橙・黒褐 外: 灰白・にぶい橙・灰黄 断: 浅黄橙	0.5mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を少量含む	
251	図 44 図版 39	土師器 皿	1 E9d21	001-a	14.0	2.9		50%	口縁部大きく外反 器壁薄い	内: 灰白・浅黄橙 外: 浅黄橙	1mm以下の赤色酸化粒・金 雲母を微量含む	一部復元 京都系土師 器皿
252	図 44	土師器 皿	1 E9c21	001-a 中層	(14.6)	3.2		25%	口縁部大きく外反 器壁薄い 見 込部ハケ状工具ナデ	内断: 灰白 外: 灰白・灰黄	3mm大の石英 1個、1mm大の 金雲母 1個含む	反転復元 京都系土師 器皿



遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色粘を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
253	図 44	土師器 皿	1 E9d20・ e20	001-a	(19.0)	3.5		20%	口縁部大きく外反 京都系土師器 見込部ハケ状工具ナデ?	内:灰白 外:灰白・灰黄 断:にぶい黄橙	1mm以下の赤色酸化粒と金 雲母を微量含む	反転復元 京都系土師 器皿
254	図 45 図版 39	土師器 小皿	1 E9c21	001-b 中層		7.0	1.4	100%	底部は平坦 外面底部櫛状工具 によるナデ	内外:灰白・にぶい橙	0.5mm以下の灰色粒・白色微 粒を中量含む	
255	図 45 図版 39	土師器 小皿	2 E10b2	001 中層		6.4	2.0	95%	底部は丸みを帯びる 外面の底 部境に粘土接合痕 外底部櫛状工 具によるナデ	内:にぶい黄橙 外:浅黄橙	1mm以下の褐色・灰色微粒 を微量含む	
256	図 45 図版 39	土師器 小皿	1 E9i20	001 下層		6.7	1.55	100%	底部は平坦 外底部板目圧痕	内外:浅黄橙・にぶい橙	0.5mm以下の赤色酸化粒を少 量含む	
257	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9h19	001-b 下層		7.0 × 7.1	1.6	100%	底部は平坦 外底部板目圧痕	内:灰白 外:灰黄	0.5mm以下の灰色微粒を中量 含む	
258	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9i19	001 下層		7.5 × 7.8	1.7	95%	底部は平坦 外底部板目圧痕	内外:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を微量 含む	
259	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9h19	001-b 下層		7.2	1.8	100%	底部は平坦気味 口縁部・体部境 に粘土接合痕	内:にぶい橙・浅黄橙 外:にぶい黄橙	1mm以下の黒色粒を微量含む	
260	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9h19	001-b 下層		7.0	1.5	100%	底部は平坦気味 口縁端部は尖り 気味 外底部板目圧痕	内:にぶい黄橙 外:にぶい橙	1mm以下の赤色酸化微粒を 微量含む	
261	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9h19	001-b 下層		6.5 × 6.7	1.9	100%	底部は丸みを帯びる 口縁部・体 部境に粘土接合痕 外底部板目圧 痕	内:灰黄 外:灰白・灰	4mm大の橙色粒 1個含む	
262	図 45	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		7.2 × 6.8	2.0	80%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧 痕 口縁部歪しい 体部粘土接 合痕	内断:浅黄橙 外:灰白	1mm以下の灰褐色粒・赤色 酸化粒を中量含む	
263	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9c21	001-b 中層		6.7	1.7	98%	底部は丸みを帯びる 内面へら状 工具による放射状のナデ 外底部 櫛状工具によるナデ	内外:にぶい黄橙	1mm以下の灰色粒、赤色酸 化粒を少量含む	
264	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		7.25	2.0	98%	底部はやや丸みを帯びる 形は 整っている	内外:灰白・淡黄	1mm以下の灰色微粒を多量 に含む	
265	図 45	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		6.8	2.2	80%	底部は凸凹で丸みを帯びる 板目 圧痕?	内外:灰白	1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を少量含む	
266	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		6.8	2.1	100%	底部は丸みを帯びる 外面の底 部境に粘土接合痕 外底部櫛状工 具によるナデ	内:にぶい黄橙 外:浅黄橙	1mm以下の褐・黒色微粒を 少量含む	
267	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		7.0	1.9	100%	底部はやや丸みを帯びる 外面の 底面境に粘土接合痕 外底部板 状工具によるナデ	内:浅灰黄 外:にぶい黄橙	1mm以下の赤色酸化粒を微 量含む	
268	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9d20	001-b 中層		7.4 × 8.0	2.1	98%	底部は丸みを帯びる 全体的に磨 減が激しく調整不明	内外:浅黄橙・にぶい黄橙	1mm以下の白色粒と赤色酸 化粒を多く含む	
269	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9c21	001-b 上層		6.9	2.0	90%	底部は丸みを帯びる 外面の底 部境に粘土接合痕	内:灰黄・灰 外:灰黄	0.5mm以下の灰色微粒・赤色 酸化微粒を少量含む	
270	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		6.7 × 7.2	1.9	100%	底部は平坦気味 外面の底面境 に粘土接合痕 口縁部にスス付着 口縁部歪む	内:灰黄 外:灰白・浅黄橙	1mm以下の灰・褐色微粒を 中量含む	燈明皿
271	図 45	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		7.7	1.8	90%	底部はやや丸みを帯びる 口縁部 歪む	内断:浅黄橙 外:灰白	1mm以下の灰・褐色微粒・ 赤色酸化粒を多く含む	
272	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		7.5	2.1	80%	底部は丸みを帯びる 体部口縁部 の境明瞭	内:浅黄橙 外断:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を少量 含む	
273	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		7.55	1.85	95%	底部はやや丸みを帯びる 口縁端 部尖り気味	内断:灰白 外:灰白・浅黄橙	0.5mm以下の灰色粒を多く含 む	
274	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 中層		7.2	1.8	100%	底部はやや丸みを帯びる 体部内 面櫛状工具によるナデ 外底部櫛 状工具によるナデのちナデ	内外:灰白・浅黄橙・ にぶい黄橙	1mm以下の灰色微粒を多く含 む	
275	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9i19	001 下層		7.0 × 7.2	1.7	100%	底部は丸みを帯びる 口縁部・体 部境に粘土接合痕	内外:灰白	0.5mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を微量含む	
276	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 中層		7.4	2.0	100%	底部は丸みを帯びる 外面の底 部境に粘土接合痕 外底部板状工 具によるナデ 全体的に歪みあり 不定形	内外:灰白・灰黄	1mm以下の褐色微粒を微量 含む	
277	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9e19	001-b 下層		7.3	1.5	90%	底部は平坦気味 口縁部・体部境 に粘土接合痕	内:灰白・浅黄橙 外:にぶい黄橙	3mm大の褐色礫 3個、1mm以 下の灰色粒を少量含む	
278	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 下層		7.3 × 8.2 7.4 × 8.4	1.85	100%	底部は丸い 外面布目 全体的に 歪む	内外:灰白・にぶい黄橙	1mm以下の灰色微粒を微量 含む	
279	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		6.8	2.4	100%	底部は丸みを帯びる 外面の底 部境に粘土接合痕 外底部板状工 具によるナデ 全体的に歪が著し い	内:浅灰黄 外:にぶい黄橙	1mm以下の黒色粒・赤色酸 化粒を多く含む	
280	図 45 図版 40	土師器 小皿	2 E10b1	001 上層		6.4	1.35	100%	底部は平坦気味 外面の底面境 に粘土接合痕 口縁部にスス付着	内外:灰黄	1mm以下の白色微粒・赤色 酸化粒を微量含む	燈明皿
281	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9d21	001-b 中層		8.0	1.6	85%	底部は平坦 焼成時の冷め割れあ り	内:にぶい橙 外:橙・灰・にぶい黄橙	1mm以下の白・灰色粒・赤 色酸化粒を少量含む	
282	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9d20	001-b 中層		7.5	2.2	100%	底部は丸みを帯びる 器壁は厚い 全体的に磨減が激しく調整不明	内外:浅黄橙・灰白・ にぶい橙	1mm以下の灰・褐色微粒を 多く含む	
283	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9c21	001-b 上層		7.9	2.6	75%	底部は丸い 体部肥厚する	内:灰白・浅黄橙 外:浅黄橙	3mm以下の赤色酸化粒と1mm 以下の褐色粒を少量含む	
284	図 45	土師器 小皿	1 E9d21	001-b 中層		6.9	2.3	80%	底部は平坦気味	内:浅黄橙 外断:灰白	1mm以下の赤色酸化粒と0.5 mm以下の灰色微粒を少量含 む	
285	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9c21	001-b 上層		8.5	2.5	95%	底部は丸みを帯びる	内:橙・灰白 外:橙・浅黄橙	1mm以下の赤色酸化粒・白 色粒を微量含む 金雲母1 個含む	
286	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9g19	001-b 下層		7.9	1.9	90%	底部は平坦気味 外底部弱い板目 圧痕 口縁端部スス付着	内:灰黄 外:灰黄・淡黄 断:灰白	1mm以下の白色粒・赤色酸 化粒を微量含む	燈明皿



遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備 考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
287	図 45 図版 40	土師器 皿	1 E9j20	001 下層	8.8	2.35		90%	底部は丸みを帯びる 外底部板目 圧痕	内外:灰白・浅黄橙・ 浅黄橙 断:浅黄橙	8mm大の白色礫1個、0.5mm 以下の灰色微粒を微量含む	
288	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9c21・ 22	001-b 中層	6.3	1.5		100%	底部は平坦 外底部板状工具によ るナデ 体部・口縁部外面布目	内:にぶい橙 外:にぶい橙	胎土:密 砂粒はほとんど みられない	
289	図 45 図版 40	土師器 小皿	1 E9i20	001-b 中層	4.8	1.9		75%	底部はやや丸みを帯びる 体部・ 口縁部はわずかに内湾する	内外断:灰白・灰黄	1mm以下の灰・褐色微粒を 少量含む	
290	図 45 図版 40	土師器 皿	1 E9j20	001 下層	11.8	2.3		90%	底部は平坦気味 板目圧痕 外面 体部布目圧痕?	内外断:灰白	1mm以下の灰色粒を微量含 む	
291	図 45 図版 40	土師器 皿	1 E9d21	001-b 中層	11.2	2.6		90%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧 痕 器壁は厚い 内面スス汚れ?	内:浅黄橙 外:灰白	0.5mm以下の灰色粒を多量に 含む	
292	図 45 図版 40	土師器 皿	1 E9c21	001-b 中層	10.7	2.0		85%	底部は平坦 板目圧痕 底底部境 粘土接合痕	内外:にぶい黄橙 断:にぶい黄橙	2mm以下の灰色礫1個 1mm 以下の灰色微粒を微量含む	
293	図 45 図版 40	土師器 皿	1 E9n19	001-b 下層	9.7	2.5		85%	底部は平坦気味 板目圧痕 底底 部境ユビオサエ+ナデ	内:淡黄・灰白 外:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を中量 含む	
294	図 45 図版 40	土師器 皿	1 E9n19	001-b 下層	10・0	3.1		100%	底部は平坦気味 板目圧痕 底底 部境粘土接合痕 外面体部布目	内:浅黄橙・にぶい黄橙 外:にぶい黄橙・灰黄褐 断:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を中量 含む	
295	図 45 図版 40	土師器 皿	1 E9i20	001 下層	10.8	2.6		85%	底部は平坦気味 板目圧痕	内外断:灰白	1mm以下の赤色酸化粒を 少々含む	
296	図 45 図版 40	土師器 皿	1 E9e19	001-b 中層	11.7	2.55		95%	底部平坦気味 板目圧痕	内断:灰白 外:灰白・にぶい黄橙	0.5mm以下の灰・褐色粒を多 く含む	
297	図 45 図版 40	土師器 皿	2 E10b1	001 中層	10.8	2.15		90%	底部は平坦気味 板目圧痕	内外:灰白 断:にぶい黄橙	0.5mm以下の灰色微粒を多 く含む	
298	図 45 図版 40	土師器 皿	1 E9c21	001-b 上層	10.8	2.1		95%	底部は平坦 板目圧痕	内:灰白・にぶい黄橙 外:にぶい黄橙 断:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を微量 含む	
299	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9c21・ 22	001-b 中層	11.8	2.4		98%	底部は平坦気味 外底部板状工具 によるナデ 体部・口縁部外面布 目	内外:灰白・灰黄・ 断:淡黄	1mm以下の白・灰色微粒を 微量含む	
300	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9c20	001-b 上・中 層	10.8	2.2		100%	底部は平底気味 外底部櫛状工具 によるナデ	内外:灰白・浅黄橙・灰黄	1mm以下の褐色微粒を微量 含む	
301	図 45 図版 41	土師器 皿	2 E9b25	001 中層	9.8	2.55		100%	底部は平坦気味 外底部は板状工 具によるナデ	内:灰白 外:灰白・灰黄	1mm以下の灰色微粒を微量 含む	
302	図 45 図版 41	土師器 皿	2 E10b1	001 上層	10.9	2.25		100%	底部はやや丸みを帯びる 外底部 は櫛状工具によるナデ 形は整っ ている	内外:淡黄・浅黄橙	1mm以下の灰色微粒を多量 に含む	
303	図 45 図版 41	土師器 皿	2 E10b1	001 上層	10.1 × 10.6	2.7		95%	底部は平坦気味 板目圧痕	内:灰白・浅黄橙 外:浅黄橙・にぶい黄 橙・浅黄橙	1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を少量含む	
304	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9h19	001-b 中層	9.8 × 10.6	2.3		95%	底部平坦気味 外底部板目圧痕	内外:灰白・浅黄橙 断:にぶい黄橙	1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を少量含む	
305	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9e19	001-b 中層	12.5	2.8		85%	底部は平坦気味 静止糸切	内外:灰白・浅黄橙 断:浅黄橙	4mm以下の赤色酸化粒を少 量、1mm以下の黒色粒を少 量含む	
306	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9c21・ 22	001-b 中層	11.6	1.9		98%	底部は平坦 外底部板状工具によ るナデ 体部・口縁部外面布目 体 部内面櫛状工具による波状のナデ	内外:浅黄橙・灰黄・ にぶい黄橙	1mm以下の褐色灰色微粒を 少量含む	
307	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9d20	001-b 上層	11.5	2.7		85%	底日は平坦 外底部板状工具によ るナデ 外面体部布目 内面体部 櫛状工具によるナデ	内:淡黄 外:灰白	1mm以下の褐色微粒を少量 含む	内底部梵字 の墨書
308	図 45 図版 41	土師器 皿	2 E10b1	001 中層	11.7	2.2		100%	底部は平坦 体部内面櫛状工具に よるナデ 外底部ナデのち木節状 工具によるナデ	内:灰白・にぶい橙 外:灰白・灰黄 断:灰黄	1mm以下の白・灰・赤色酸 化微粒を微量含む	
309	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9f19	001-b 下層	9.9	2.3		100%	底部はやや丸みを帯びる 底底部 境粘土接合痕 底部板目圧痕+ユ ビオサエ	内外:灰白・灰黄 断:灰黄	0.5mm以下の灰色微粒を微量 含む	
310	図 45 図版 41	土師器 皿	2 E10b1	001 中層	10.9	2.5		90%	底部平坦気味 板目圧痕	内断:浅黄橙 外:灰白	0.5mm以下の白・灰色微粒を 多く含む	
311	図 45 図版 41	土師器 皿	2 E9b25	001 中層	10.6	2.25		75%	底部は平坦気味	内外断:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を多 く含む	
312	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9i20	001 下層	9.5 × 10.3	2.6		95%	底部は平坦気味 外底部弱い板目 圧痕 雑な調整で歪み著しい	内:灰白・灰黄 外:にぶい黄橙・灰黄 断:にぶい黄橙	1mm以下の赤色酸化粒を微 量含む	
313	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9c21	001-b 中層	11.1	2.4		85%	底部は平坦気味 体部外面布目 外底部櫛状工具によるナデ	内外:灰白・灰黄 断:灰黄	1mm以下の灰色・白色微粒 を多く含む	
314	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9i20	001 下層	10.9	2.4		80%	底部平坦気味 外底部板目圧痕 口縁端部スス付着	内:灰白・にぶい黄・黒 外:浅黄・にぶい黄・黒 断:浅黄橙	0.5mm以下の灰色微粒を含む	燈明皿?
315	図 45 図版 41	土師器 皿	2 E10b1	001 上層	11.0	2.7		90%	底部は平坦気味 調整磨滅により 不鮮明 外底部櫛状工具によるナ デか?	内:灰白・淡黄 外:灰白	1mm以下の灰色・黒色微粒 を多く含む	
316	図 45 図版 41	土師器 皿	2 E10b1	001 上層	11.05	2.5		95%	底部は平坦気味 磨滅が著しい	内:浅黄橙・淡黄 外:灰白・浅黄橙 断:浅黄橙	0.5mm以下の灰色微粒を多 量に含む	
317	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9g19	001-b 中層	(12.4)	2.8		75%	底部は平坦気味 板目圧痕 口縁 部薄い	内:浅黄橙・にぶい黄橙 外:灰白 断:にぶい黄橙	1mm以下の灰・褐色粒・赤 色酸化粒を中量含む	
318	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9g19	001-b 下層	11.8	2.1		95%	底部は平坦気味	内外:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を多 く含む	
319	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9g19	001-b 下層	11.1	3.0		100%	底部は平坦気味 弱い板目圧痕 体部ユビオサエ	内断:灰白 外:灰白・浅黄橙	0.5mm以下の灰色微粒を多 量に含む	
320	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9c21	001-b 上層	13.5	4.2		95%	底部は平坦 弱い板目圧痕 体部 外面ユビオサエ+ナデ	内:灰白 外:灰白・浅黄橙 断:浅黄橙	3mm大の赤色酸化粒1個、 0.5mm以下の白色粒・赤色酸 化粒を微量含む	

遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
321	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9j20	001 下層	13.0	3.6		75%	底部は平坦 口縁端部の一部スス 附着 体部ユビオサエ	内:浅黄橙 外:灰黄 断:浅黄	1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を微量含む	燈明皿
322	図 45	土師器 皿	1 E9c21	001-b 中層	12.2	3.7		85%	底部は平坦気味 板目圧痕?	内外:浅黄橙・灰白	1mm以下の灰色微粒・赤色 酸化粒を少量含む	
323	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9e20	001-b 上層	12.7	3.6		95%	底部は平坦気味	内:浅黄橙 外:灰白・浅黄橙 断:灰白	2mm大の灰色礫1個、1mm以 下の灰色粒を中量含む	
324	図 45 図版 41	土師器 皿	1 E9	001 サブ レ	13.0	2.25		90%	底部は小さく平坦 体部口縁部強 く外反	内外:にぶい黄橙 断:灰黄	1mm以下の金雲母・灰色微 粒・赤色酸化粒を中量含む	京都系土師 器皿
325	図 46 図版 41	土師器 土釜	1 E9d20・ e20	001-a	(22.0)	11.3 以上		口縁部 20%	口縁部はくの字に屈曲 端部を内 方に拡張 外面スス附着	内:橙・黒褐 外:橙・にぶい黄橙 断:橙	3～5mmの片岩微量、5mm以 下の石英1個、1mm以下の 石英・灰色粒・赤色酸化粒 を中量含む	反転復元
326	図 46 図版 41	土師器 土釜	1 E9d20・ e20	001-a	(19.0)	12.8 以上		口縁部 20%	口縁部はくの字に屈曲 端部を内 上方に拡張 外面スス附着	内:浅黄・暗灰黄 外:黄灰・にぶい黄橙 断:にぶい黄褐	1mm以下の灰・黒・褐色微 粒を多く含む	反転復元
327	図 46 図版 41	土師器 土釜	1 E9d20・ e20	001- a・b 下層	23.0 × 23.4	19.5 以上		75%	口縁部はくの字に屈曲 口縁端部 内上方に拡張 外面全体スス附着	内:にぶい橙・黒 外:にぶい赤褐・黒 断:にぶい橙	1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を多く含む	一部反転復元
328	図 46 図版 42	土師器 土釜	1 E9j20	001 下層	(22.0)	8.5 以上		口縁部 15%	口縁部はくの字に屈曲 端部を内 上方に拡張 外面スス附着	内:にぶい黄橙 外:灰黄褐・にぶい黄橙・黒 断:橙	3mm以下の石英を微量 0.5 mm以下の灰色微粒を少量含む	反転復元
329	図 46 図版 42	土師器 土釜	1 E9d21	001-b 上層	(22.8)	9.4 以上		口縁部 10%	口縁部はくの字に屈曲 端部を上 方に拡張 体部外面平行タタキの チナデ 外面スス附着	内:褐灰 外:明赤褐・黒褐 断:にぶい黄橙	1mm以下の白色微粒を少量 含む	反転復元
330	図 46 図版 42	土師器 焙烙	1 E9d20・ e20	001-a	(22.8)	12.5 以上		30%	体部から口縁部にかけて直線的に 内傾 端部は内上方に面 口縁部 下に横方向に開く罫 端部外面平 行タタキ 内面横方向ハケ	内:灰黄褐・黒 外:黒 断:にぶい黄橙・にぶ い黄褐	1mm以下の白色粒・赤色酸 化粒を少量含む	反転復元
331	図 46	土師器 焙烙	1 E9j20	001-b 上層	(17.3)	3.8 以上		5%	口縁部は内傾する体部から上方へ 立ち上がる 体部外面平行タタ キ・内面横方向ハケ	内断:にぶい橙 外:灰黄褐・黒褐	3mm以下の石英・長石・灰 色粒・赤色酸化粒を中量含 む	反転復元
332	図 46 図版 42	瓦質土器 羽釜	1 E9d20・ e20	001-a	(17.8)	5.3 以上		口縁部 10%	体部から口縁部にかけて直線的 に直立 口縁端部下に1条の凹 線文 口縁部下に横方向に開く罫	内:灰・オリブ黒 外:オリブ黒・黒 断:灰白	2mm以下の石英・白・灰色 粒を多く含む	反転復元
333	図 46 図版 42	瓦質土器 羽釜	1 E9c21	001-b 上層	(20.8)	5.9 以上		口縁部 15%	口縁部は内傾 口縁部に段・ヨ コ方向に開く罫	内:灰 外:灰・黄灰 断:灰白	1mm以下の白色微粒を少量 含む	反転復元
334	図 46 図版 42	瓦質土器 甕	1 E9d21	001-a 中層	(31.0)	9.2以 上		口頸部 15%	口頸部は緩やかに外反 端部わず かに外方に拡張 外面頸部から体 部横方向平行タタキ	内外:灰白・灰	1mm以下の白色微粒・1mm前後 の長石・頁岩粒を少量含む	反転復元 15世紀前 半泉州産
335	図 46 図版 42	瓦質土器 火鉢	1 E9i19	001-b 下層	(12.4)	4.7以 上	(14.5)	15%	底部は平坦 脚欠損するが4脚 か? 口縁端部内側に拡張し上方 に面 体部外面縦方向・口縁端部 上面横方向ヘラミガキ	内外:灰・暗灰	緻密 砂粒は殆ど含まない	反転復元 16世紀
336	図 46 図版 42	瓦質土器 火鉢	1 E9c21・ d21	001-b 上・中 層	(60.4)	6.9以 上	(58.6)	5%	底部は平坦 脚は不明 体部直立 口縁部上方に面 口縁部外面に 突帯 突帯上押玉キザミ 体部外 面ヘラミガキ	内外:灰・灰黄	1mm以下の石英・赤色酸 化粒を中量含む	反転復元 16世紀
337	図 46 図版 42	瓦質土器 火鉢	1 E9o19	001-b 中層		4.5以 上			口縁部は直立・上方に面 口縁部 外面突帯間に唐草状のスタンプ文	内外:灰 断:灰黄	1mm以下の灰色微粒を多く 含む	16世紀
338	図 46 図版 42	瀬戸美濃 系陶器 天目茶碗	2 E9b25	001 中層	(13.4)	4.8以 上		15%	鉄釉 口縁部薄く外反	釉:黒褐・オリブ褐 露胎:灰	緻密 砂粒はほとんど含ま ない 漆継の痕跡有	反転復元 16世紀前半
339	図 46 図版 42	瀬戸美濃 系陶器 天目茶碗	1 E9d20	001-b 上層	(11.0)	4.6以 上		5%	鉄釉 口縁部薄く外反 露胎部鬼 板掛け	釉:暗褐・黒褐 露胎:褐灰	緻密 砂粒は殆ど含まない	反転復元 16世紀前半
340	図 46 図版 42	倣建窯 天目茶碗	1 E9c21・ 22	001-b 中層		4.2以 上	3.7	50%	鉄釉二重掛け 高台内わずかに窪 む	釉:黒・黒褐 露胎:灰白・灰	緻密 1mm以下の白色微粒 を少量含む	一部反転復元 15世紀後 半
341	図 46 図版 42	瀬戸美濃 系陶器 天目茶碗	1 E9d20	001-b 中層		3.2以 上		50%	鉄釉 削り出し高台 高台内窪む 底部付近露胎	釉:暗褐・黒 露胎:灰白・にぶい黄 褐	1mm以下の褐色微粒を微量 含む	一部反転復元 16世紀中頃
342	図 46 図版 42	瀬戸美濃 系陶器 皿	1 E9g19	001-b 下層	(10.4)	2.5	(5.5)	30%	灰釉 体部・口縁部内湾気味に開 く 高台内輪トチンの痕あり	釉:オリブ灰・灰オ リーブ 露胎:灰	緻密 砂粒は殆ど含まない	反転復元 16世紀後半
343	図 46 図版 42	瀬戸美濃 系陶器 皿	1 E9d20	001-b 上層	(10.5)	2.1	(6.0)	40%	灰釉 口縁部ゆるやかに外反 基 本的に全釉であるが、釉にむら があり見込部には釉だまりがある	釉:灰オリブ・暗オ リーブ 断:灰白	緻密 砂粒は殆ど含まない	反転復元 16世紀後半
344	図 46 図版 42	瀬戸美濃 系陶器 皿	1 E9d20	001-b 上層		1.0以 上	(5.2)	底部の 33%	灰釉 基本的に全釉 高台内目跡 見込部菊花のスタンプ	釉:暗オリブ・灰オ リーブ 断:灰黄	緻密 砂粒は殆ど含まない	反転復元 16世紀後半
345	図 46 図版 42	瀬戸美濃 系陶器 花瓶	1 E9c22	001-b 上層	(13.8)	4.0以 上		5%	灰釉 口縁部強く外反 体部外面 施釉前に細い沈線を5条以上巡 らす	釉:オリブ黄 断:灰白	緻密 砂粒は殆ど含まない	反転復元 15世紀
346	図 47 図版 42	備前焼 播鉢	1 E9i19	001 下層	(26.6)	8.9以 上		口縁部 5%以 下	口縁部は上方へ大きく拡張 外方 に面 外端面に弱い段	内:褐灰 外:褐灰・灰褐 断:灰褐	3mm以下の黒色粒、1mm以 下の白色粒を微量含む	反転復元 16世紀前半
347	図 47	備前焼 播鉢	1 E9h19	001-b 中層	(27.6)	8.1以 上		口縁部 15%	口縁部は上方へ大きく拡張 外方 に面 外端面に凹線2条	内:褐灰・灰褐 外:赤灰・にぶい赤褐 断:にぶい赤褐	堅緻 1mm以下の白色微粒 を少量含む	反転復元 16世紀前半
348	図 47 図版 42	備前焼 播鉢	1 E9f19	001-b 上層	(27.8)	9.2以 上		口縁部 25%	口縁部は上方へ大きく拡張 外方 に面 上端面に内傾する段 10本/2.8cm	内:にぶい黄褐・灰 外:黄灰・灰 断:にぶい赤褐	0.5mm以下の白色微粒を微量 含む	反転復元 16世紀前半
349	図 47 図版 42	備前焼 播鉢	1 E9c20	00-b 上・中 層	(27.6)	7.6以 上		口縁部 10%	口縁部は上方へ大きく拡張 外方 に面 外端面に凹線2条 面は内傾する段	内外:赤灰・灰赤 断:灰赤	3～5mm大の白色礫を少量、 2mm以下の白色微粒を微量 含む	反転復元 16世紀中頃

遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
350	図 47 図版 42	備前焼 播鉢	1 E9f18	001-b 上層	(33.8)	6.3 以上	—	口縁部 15%	口縁部は上方へ大きく拡張 外方に 面 3 条の波状段 上端面は内 傾する段 播目 9 本 /1.5cm・縦 方向+斜め方向	内:暗赤灰 外断:灰赤	堅緻	反転復元 16 世紀後半
351	図 47	備前焼 播鉢	1 E9d20	001-b 中・下 層	—	9.7 以上	(13.6)	15%	播目 11 本 /2cm 体部縦方向+ 斜め方向 見込部三角形状	内外:灰褐・褐灰 断:灰褐・黒	堅緻 4mm 大の褐色礫 1 個、 1mm 以下の白色微粒を少量 含む	反転復元 16 世紀後半
352	図 47 図版 42	備前焼 甕	1 E9i20	001 下層	—	7.6 以上	—	—	口縁部は直立 端部は折り曲げて 玉緑状	内外:灰黄褐・褐灰 断:褐	1mm 以下の白・黒色粒を少 量含む	15 世紀前半
353	図 47 図版 42	備前焼 甕	1 E9i19	001-b 上層	—	5.2 以上	—	—	口縁部は部折り曲げて玉緑状	内:灰赤・黒褐 外:黒褐・褐灰 断:灰赤	堅緻 4mm 以下の白色礫を 微粒含む	15 世紀前半
354	図 47 図版 42	備前焼 甕	1 E9h19	001-b 中層	(37.8)	7.4 以上	—	口縁部 10%	口縁部はやや外反 端部は折り曲 げて玉緑状 肩部白いゴマ状の自 然釉	内外:灰褐・暗赤褐 断:灰白・灰褐	8mm 大の白色礫 1 個、3mm 以下の白色粒を少量含む	反転復元 15 世紀中頃
355	図 47 図版 43	備前焼 甕	1 E9	001 上層	—	6.6 以上	—	—	口縁部は部折り曲げて玉緑状 外 端面に 2 条の波状段	内:灰赤 外:灰赤・暗赤褐 断:にぶい赤褐・灰白	1mm 以下の白・褐色微粒を 少量含む	16 世紀後半
356	図 47 図版 43	備前焼 甕	1 E9c20	001-b 上層	—	8.6 以上	—	—	口縁部は部折り曲げて玉緑状 外 端面に 3 条の波状段	内外:灰赤 断:灰褐	3 ~ 4mm 大の白色礫を微量、 3mm 以下の白色礫を少量含 む	16 世紀後半
357	図 47	備前焼 甕	1 E9d20	001-b 中層	—	11.8 以上	—	—	肩部に刻印「参石」か?	内:褐灰 外:褐灰・灰褐 断:灰褐	5mm 大の白色礫を微量、1mm 以下の白色粒を多く含む	
358	図 47	焼締陶器 小壺	1 E9d20	001-b 下層	—	2.8 以上	3.5	35%	灰釉 底部回転糸切 外底部付近 露胎	釉:灰オリブ 露胎:灰	緻密 砂粒は殆ど含まない	反転復元 16 世紀 朝鮮王朝
359	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9d20	001-b 下層	(15.4)	5.9 以上	—	8%	口縁部は外反 釉に粗い貫入	釉:オリブ灰 断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 15 世紀前半
360	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9 g 19	001-b 下層	(12.0)	5.6 以上	—	15%	口縁部は外反する	釉:オリブ灰 断:灰	緻密	反転復元 龍泉窯 15 世紀後半
361	図 47 図版 43	青磁 碗	2 E10b2	001 中層	(11.8)	4.0 以上	—	10%	口縁部は肥厚し玉緑状になる釉 は薄い	釉:明オリブ灰 断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 15 世紀後半
362	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9c21・ 22	001-b 中層	(15.0)	4.4 以上	—	口縁部 25%	口縁部外面雷文帯 体部外面ラマ 式蓮弁文	釉:オリブ灰 断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 15 世紀前半
363	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9i19	001-b 下層	(14.3)	6.7	5.4	30%	高台内露胎 体部外面片切彫り蓮 弁文 ヘラの傷が高台に及ぶ 見 込部圏線内に印花文	釉:オリブ灰 露胎・断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 14 世紀後半
364	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9c20	001-b 上層	(12.0)	3.2 以上	—	口縁部 15%	線描蓮弁文 剣頭と蓮弁の単位は ほぼ同じ	釉:オリブ灰・灰白 断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 16 世紀前半
365	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9i19	001-b 下層	—	2.5 以上	6.2	底部 100%	高台内露胎 体部片切彫りの文様 見込部圏線および輪花状の圏線 内にスタンプ文	釉:オリブ灰 露胎・断:灰白	緻密	一部反転復元 龍泉窯 15 世紀前半
366	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9c21	001-b 上層	—	4.9 以上	4.6	50%	線描蓮弁文 高台内露胎 釉は薄 い 貫入生じる 見込部スタンプ 文「富」	釉:灰白 露胎・断:灰白	ざっくりしている	一部反転復元 龍泉窯 15 世紀後半
367	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9h20	001-a 上層	—	3.3 以上	(6.0)	底部 20%	畳付付近の釉は削り取る 高台内 は露胎 見込部圏線巡る	釉:オリブ灰 露胎・断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 14 世紀
368	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9d20	001 上層	—	1.8 以上	(5.4)	底部 50%	畳付から高台内露胎 見込部蛇の 目釉剥ぎ	釉:オリブ灰 露胎:灰黄・灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 15 世紀後半
369	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9 c 21	001-b 上層	—	2.7 以上	5.8	底部 100%	畳付・高台内露胎 見込部圏線巡る	釉:明オリブ灰 露胎:灰白	緻密	一部反転復元
370	図 47 図版 43	青磁 碗	1 E9d20	001 上層	—	3.7 以上	5.6	底部 100%	釉に貫入生じる 畳付付近の釉は 削り取る 高台内は露胎	釉:オリブ灰 露胎:灰	緻密	反転復元 龍泉窯 15 世紀後半
371	図 47 図版 43	青磁 皿	1 E9h20	001-b 上層	(9.0)	2.0 以上	—	口縁部 10%	口縁部強く外反 体部外面片切彫 り蓮弁文	釉:オリブ灰 断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 15 世紀
372	図 47	青磁 皿	1 E9o19	001-b 中層	—	1.2 以上	(7.8)	底部 50%	畳付の釉を削り取る	釉:明オリブ灰・オ リブ灰 断面:灰白	緻密	反転復元 被熱する 龍泉窯 16 世紀中葉
373	図 47 図版 43	青磁 盤	1 E9e19	001-b 下層	—	3.5 以上	—	—	口縁部は外方に屈曲し、端部は上 方に拡張 体部内面丸鑿による幅 広の条文	釉:オリブ灰 断:灰白	緻密	龍泉窯 15 世紀前半
374	図 47 図版 43	青磁 盤	1 E9e19	001-b 下層	—	2.9 以上	(8.6)	底部 50%	釉粗い貫入 高台内中央露胎 焼 台跡	釉:オリブ灰 露胎:灰白・褐灰	緻密	反転復元 龍泉窯 15 世紀後半
375	図 47 図版 43	青磁 鉢	1 E9c21	001-a 中層	—	6.1 以上	(14.0)	—	釉は厚い	釉:オリブ黒 断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 15 世紀後半
376	図 47 図版 43	青磁 瓶	1 E9i19	001-b 下層	—	5.4 以上	—	頸部 30%	頸部に蕉葉文	釉:オリブ灰 断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 15 世紀前半
377	図 48 図版 43	白磁 碗	1 E9e19	001-b 下層	(15.8)	6.0 以上	—	25%	器壁は薄く、口縁部は強く外反	釉:明緑灰 断:灰白	緻密	反転復元 景德鎮 14 世紀 漆継の痕
378	図 48 図版 43	白磁 皿	1 E9f19	001-b 上層	(11.1)	2.7	(6.0)	25%	口縁部は外反する 畳付の釉を削 り取る	釉・露胎部・断:灰白	緻密	反転復元 景德鎮 16 世紀末

遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
379	図 48 図版 43	白磁 皿	1 E9g19	001-b 下層	(12.0)	(3.2)	(6.5)	50%	口縁部は強く外反 畳付の釉を削り取る	釉・断：灰白	緻密	反転復元 景徳鎮 16世紀末
380	図 48 図版 43	白磁 皿	1 E9g19	001-b 下層	(10.8)	2.35 以上	—	10%	口縁部は強く外反	釉・断：灰白	緻密	反転復元 景徳鎮 16世紀末
381	図 48 図版 43	白磁 皿	2 E10b2	001 下層	(8.8)	2.25	(4.4)	50%	割高台・4 箇所 畳付無釉 外面 体部下層目 割れ面 畳付スス付 着	釉・断：灰白	緻密	反転復元 關江中流域窯 15世紀後半
382	図 48 図版 43	白磁 皿	1 E9d21	001-a	(10.2)	2.05 以上	—	5%		釉：貫入生じる 灰白・にぶい黄橙 断：灰白	緻密	反転復元 關江中流域窯 15世紀後半
383	図 48 図版 43	白磁 皿	1 E9h19	001-b 上層	—	1.7 以上	4.7	底部の 100%	高台内露胎 見込部蛇の目釉剥ぎ	釉：明オリーブ灰 露胎：灰・灰白	緻密	一部反転復元 景徳鎮 16世紀前半
384	図 48 図版 43	白磁 皿	1 E9c21	001-b 上層	—	1.4 以上	(4.2)		碁笥底 底部付近露胎 高台内墨 書「・・・十九」胎土	釉：灰白 露胎：灰白	緻密	反転復元 漳州窯 16世紀末
385	図 48 図版 43	染付 碗	2 E9b25	001 中・下層	(10.2)	4.55 以上	—	20%	口縁部内外面と底体部境の内外面 に圈線 体部外面牡丹唐草文	釉：灰白 呉須：明青色 断：灰白	緻密	反転復元 景徳鎮 16世紀前半
386	図 48 図版 43	染付 碗	2 E9b25	001 中層	—	4.1 以上	—	—	口縁部外面圈線間に雷文帯・内面 2重圈線 体部外面花文	釉：灰白 呉須：明青色 断：灰白	緻密	景徳鎮 15世紀後半
387	図 48 図版 43	染付 碗	1 E9h20	001-b 中層	—	1.2 以上	(4.9)	底部の 40%	高台は細く、畳付は露胎 見込は 饅頭心で、二重圈線内に蛟龍文 高台内には 4 字の銘	釉：明青灰 呉須：明青色 露胎・断：灰白	緻密	反転復元 景徳鎮 16世紀後半
388	図 48 図版 43	染付 皿	2 E9b25	001 中・下層	(10.2)	2.2 以上	—	30%	口縁部内外面と底体部境の内外面 に幅広い圈線 見込部文様不明	釉：明緑灰 呉須：暗青色 断：灰白	緻密	反転復元 漳州窯 16世紀末
389	図 48 図版 43	染付 皿	2 E9b25	001 上層	—	1.8 以上	4.8	底部の 100%	高台から高台内露胎 体部下層線 2条以上 見込部圈線 2条 釉薄 い	釉：灰白 呉須：青灰 露胎：灰白	ざっくりしている	2次焼成を受け ける 漳州窯 16世紀末
390	図 48 図版 43	染付 皿	1 E9d20	001 上層	—	1.9 以上	3.0	50%	碁笥底 畳付付近露胎 体部下層 芭蕉文 見込部細い二重圈線内に 花唐草文	釉：明緑灰 呉須：明青色 断・露胎：灰白	緻密	一部反転復元 景徳鎮 16世紀前半
391	図 48	染付 鉢	2 E9b25	001 中層	—	2.7 以上	(10.0)	底部の 12.5%	畳付に離れ砂付着 見込部草花 文?	釉：灰白 呉須：明青色 断：灰白	緻密	反転復元 漳州窯 16世紀末
392	図 48	染付 杯	1 E9c22	001-b 上層	—	1.7 以上	(2.6)	底部の 25%	碁笥底	釉：明緑灰 呉須：暗青色・青白色 断・露胎：灰白	緻密	反転復元 景徳鎮 16世紀
393	図 48	土製品 土鍾	1 E9o19	001-b 中層	長 3.85 以上	径 1.1		90%	管状 紡錘型	外：橙・灰白・灰黄	1mm以下の赤色酸化粒と灰色 微粒を少量含む	
394	図 51 図版 45	土師器 小皿	1 E9f22	019 下層	(7.6)	2.2		35%	底部は丸みを帯びる 口縁部器壁 薄い	内外断：灰白	0.5mm以下の灰色微粒を多く 含む	一部反転復元
395	図 51 図版 45	土師器 皿	1 E9g21	019 下層	10.9	3.95		100%		内：灰黄・橙 外：にぶい黄橙・浅黄橙 断：灰白	1mm以下の白色微粒・赤色 酸化粒を中量含む	
396	図 51 図版 45	土師器 皿	1 E9h21	019 砂層	10.8	4.25		80%	底部は小さく深い	内外：浅黄 断：灰白	1mm以下の灰色・白色・褐色 微粒を多く含む	
397	図 51 図版 45	土師器 台付皿	1 E9f21	019 下層	(9.0)	3.6	(7.3)	40%	ハの字に開く高台 端部は丸い	内外断：浅黄橙	1mm以下の赤色酸化粒を少量 含む	反転復元
398	図 51 図版 45	瓦質土器 羽釜	1 E9b20	019 上層	(23.0)	9.8	—	20%	口縁部は内傾 口縁部下に段・コ コ方向に開く鈎	内：灰黄褐・黒褐 外：黄灰・黒褐 断：灰黄	5mm以下の長石・石英・白色 微粒を多く含む	反転復元
399	図 51	白磁 皿	1 E9g21	019 上層	(9.8)	1.7	(6.4)	20%	口縁部端部の釉を削り取る 口禿	釉：明オリーブ 断：灰白	緻密	反転復元 景徳鎮 13世紀
400	図 53 図版 45	土師器 小皿	1 C16・17	027 上層	7.0	1.7		75%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧 痕 底体部境粘土接合痕	内外：浅黄橙	1mm以下の赤色酸化粒を中 量含む	
401	図 53 図版 45	土師器 小皿	1 E9d17	027 上層	5.8	1.6		100%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧痕	内外：浅黄橙 断：浅黄橙	2mm以下の赤色酸化粒を中 量含む	
402	図 53 図版 45	土師器 皿	1 E9d17	027 下層	(11.8)	2.5		40%	底部は平坦 板目圧痕 内面粗い 櫛状工具ナデ	内外：浅黄橙 断：灰白	1mm以下の白色粒を微量、 0.5mm以下の赤色酸化粒を少 量含む	反転復元
403	図 53 図版 45	瀬戸美濃 系陶器 皿	1 E9d17	027 下層	16.45	3.4	8.8	75%	灰釉・全釉 高台内目跡 3 箇所	釉：浅黄・オリーブ黄 断：灰・灰白	緻密 砂粒はほとんど含ま ない	16世紀後半
404	図 53 図版 45	瀬戸美濃 系陶器 間香炉	1 E9c17	027 上層	(5.5)	3.45	(3.6)	35%	灰釉 底部静止糸切? 口縁部 上方に面 外底部・内面露胎	釉：オリーブ黄 露胎：灰黄	緻密	反転復元 16世紀前半
405	図 53 図版 45	備前焼 掃鉢	1 E9d17	027	(26.6)	10.3 以上	—	20%	端部は上方へ大きく拡張	内：灰褐 外：赤・赤褐 断：褐灰	6mm大の白色礫 1個、3mm以 下の白色粒を少量含む	反転復元 15世紀後半
406	図 53 図版 45	備前焼 甕	1 E9c17	027 下層	(35.6)	5.15 以上	—	口縁部 10%	口縁部端部は折り曲げて玉緑状	内：灰赤・灰白 外：にぶい赤褐・灰赤 断：灰赤	堅緻 4～5mm大の白色礫 を微量、1mm以下の白色粒 を少量含む	反転復元 16世紀前半
407	図 53 図版 45	青磁 碗	1 E9c16・ 17	027 上層	—	5.8 以上	(5.4)	底部 35%	高台細く高い 高台内露胎 線描 蓮弁文	釉：オリーブ灰 露胎・断：灰白	精良 緻密	反転復元 龍泉窯 15世紀後半
408	図 53 図版 45	青磁 盤	1 E9e18	027 上層	(27.2)	4.8 以上	—	口縁部 15%	口縁部端部はわずかに外反 体部内 面丸鑿による浅い花状の文様	釉：明緑灰 断：灰白	精良 緻密	反転復元 龍泉窯 15世紀後半
409	図 55 図版 45	土師器 小皿	2	258 上・中層	6.8	1.9		75%	底部は平坦 器壁厚い	内外：浅黄橙 断：浅黄橙	0.5mm以下の灰色微粒・赤色 酸化粒を微量含む	



遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
410	図 55 図版 45	土師器 小皿	2 D9u25	258 上・中 層	6.8 × 6.4	1.6		100%	底部は平坦気味 磨減著しく調整 不鮮明	内外: 浅黄橙	1mm以下の赤色酸化粒を中 量含む	
411	図 55 図版 45	土師器 小皿	2 D9u25	258 下層	8.7	2.0		98%	歪が著しい 底部は不安定 内面 体部放射状に板状ナデ	内: 灰白 外: 灰白・灰黄 断: 浅黄橙	2mm以下の灰色・黒色小礫 を少量含む	
412	図 55 図版 45	土師器 小皿	2 D10u1	258 中層	8.0	1.5		100%	底部は平坦 外底部板目圧痕 外 面体部布目 内面体部放射状の櫛 状工具ナデ	内外: 灰白・浅黄橙	1mm以下の赤色酸化粒と灰 色粒を少量含む	
413	図 55 図版 45	土師器 皿	2 D10u1	258 中層	11.8	2.4		75%	底部は平坦気味 板目圧痕	内断: 灰白 外: 灰白・にぶい黄橙	1mm以下の灰色微粒・赤色 酸化粒を微量含む	
414	図 55 図版 45	土師器 皿	2 D10u1	258 中層	11.7	2.85		100%	底部は平坦 外底部板目圧痕 外 面体部布目・ナデ	内: 灰白・灰黄 外: 灰白・にぶい黄橙	1mm以下の黒色・灰色微粒 を少量含む	
415	図 55 図版 45	土師器 皿	2 D9u24・ 25	258	12.2	3.0		70%	底部は平坦気味 板目圧痕 剥離 著しい	内外: 灰白・浅黄橙	5mm大の灰白礫1個、1mmま での黒色粒・赤色酸化粒を 中量含む	
416	図 55	土師器 皿	2 D10u1	258 中層	(10.8)	1.9		0.3	底部は平坦 板目圧痕 体部内面 墨に書あり	内断: 灰白 外: 灰白・灰黄	0.5mm以下の灰色微粒・赤色 酸化微粒を微量含む	反転復元
417	図 55	土師器 皿	2 D10u1	258 中層	11.2	2.6		70%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧 痕 体部内面墨に書あり	内: 灰白 外: 灰黄 断: 淡灰	精良	
418	図 55 図版 45	土師器 皿	2 D10u1	258 中層	11.0	2.4		60%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧 痕 体部内面墨に書あり	内外断: 灰白	精良	一部反転復元
419	図 55 図版 45	土師器 皿	2 D10u1	258 中層	(11.5)	1.9		50%	底部は平坦 板目圧痕 体部内面 墨に書あり	内: 灰白 外: 灰白・淡黄 断: 淡黄・灰黄	1mm以下の赤色酸化粒を少 量含む	一部反転復元
420	図 55 図版 45	土師器 皿	2 D10u1	258 中層	(13.0)	1.9 以上	—	10%	体部内面に墨書あり	内: 灰白 外断: 灰白・灰黄	0.5mm以下の灰褐色微粒を微 量含む	反転復元
421	図 55 図版 45	青磁 盤	2 D9	258 中層	—	2.0 以上	(6.0)	底部 10%		釉: オリーブ灰 露胎・断: 灰白	精良 堅緻	反転復元 龍泉窯 15世紀後半
422	図 55 図版 45	白磁 皿	2 D10u1	258 上面	(17.8)	4.1 以上	(9.6)	15%	口縁部外反 畳付の釉を削り取る 珪砂付着	釉・断・露胎: 灰白	精良	反転復元 景德鎮窯 16世紀後半
423	図 58 図版 45	土師器 小皿	2 D9q22	259 肩 中・下 層	7.1	1.45		100%	底部は平坦 外底部板状工具ナデ 体部外面布目	内外: 浅黄橙・灰白・ にぶい黄橙 断: 浅黄	1mm以下の灰色・褐色微粒 を微量含む	
424	図 58 図版 45	土師器 小皿	2 D9q22	259 肩 中・下 層	6.9	1.6		85%	底部は平坦 外底部板目圧痕 体 部外面布目	内: 淡黄 外: 灰白 断: 浅黄橙	1mm以下の灰色微粒を少量 含む	
425	図 58 図版 45	土師器 小皿	2 D9p21	259 肩 中・下 層	7.9	1.9		75%	底部は平坦気味 板目圧痕	内外: 灰黄 断: にぶい黄橙	0.5mm以下の灰色微粒を少量 含む	
426	図 58 図版 45	土師器 小皿	2 D9o20	259 下層	7.9	1.7		50%	底部は平坦気味 板目圧痕	内: 浅黄 外: 淡黄・浅黄 断: 橙	0.5mm以下の灰色粒を微量含 む	
427	図 58 図版 45	土師器 皿	2 D9r25	259	9.8	2.8		90%	底部は平坦 板目圧痕	内外: にぶい黄橙	4mm大の赤色酸化粒を1個、 1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を微量含む	
428	図 58 図版 45	土師器 皿	2 D9q22	259 肩 中・下 層	11.6	2.6		98%	底部は平坦 外底部板目圧痕 体 部外面布目	内外: 灰白・灰黄 断: 灰白	1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を微量含む	
429	図 58 図版 45	土師器 皿	2 D9r25	259 中層	15.1	2.7		60%	底部は平坦 板目圧痕 体部粘土 接合痕	内外: にぶい黄橙	1mm以下の赤色酸化粒を微 量含む	
430	図 58 図版 45	土師器 皿	2 D9r25	259 中層	13.2	2.5		75%	底部は平坦 板目圧痕 底体部境 粘土接合痕	内: にぶい黄橙 外: にぶい黄橙	1mm以下の赤色酸化粒を微 量含む	
431	図 58	土師器 皿	2 D9q22	259 肩 中・下 層	(12.0)	2.2		35%	底部は平坦 外底部板目圧痕 体 部外面布目 内面体部付近に墨書	内: 灰白・淡黄 外: 灰白・にぶい黄 橙 断: 灰白	1mm以下の褐色微粒を少量 含む	反転復元
432	図 58 図版 46	土師器 皿	2 アゼ北	259	11.2	1.75		50%	底部は平坦 板目圧痕 体部内面 墨に書あり	内外: 灰白・淡黄 断: 灰黄	1mm以下の灰色粒・褐色粒 を微量含む	反転復元
433	図 58 図版 46	土師器 焙烙	2 D9p22	259 肩 中・下 層	(21.4)	4.7 以上	—	口縁部 10%	口縁部端部はやや肥厚 端部下断面 三角形の罅 端部下に孔	内: にぶい橙・にぶい 黄橙 外: にぶい橙・黒 断: にぶい橙	1mm以下の白・黒色微粒・ 赤色酸化粒を中量含む	反転復元
434	図 58 図版 46	瀬戸美濃 系陶器 天目茶碗	2 D10	259	(11.3)	4.9	4.4	40%	鉄釉 外底部露胎	釉: 黒・暗オリーブ褐 露胎・断: 灰白・灰	堅緻 0.5mm以下の白色微粒 を微量含む	反転復元 16世紀前半
435	図 58 図版 46	常滑焼 甕	2 D9r23	259-2	—	4.45 以上	—	—	口縁部外反 端部を上下に大きく 拡張 外方に面	内外: 褐灰・黒褐 断面: 灰白・灰	1mm以下の白色微粒を多く 含む	15世紀前半
436	図 58 図版 46	備前焼 播鉢	2	259	(21.8)	4.5 以上	—	口縁部 10%	口縁部上方に大きく拡張 端部は 内上方に面 播目7本/2.0cm以上	内: にぶい橙 外: 灰白・黄灰 断: 灰白・灰	2mm以下の黒色粒を多く含 む	反転復元 15世紀後半
437	図 58 図版 46	備前焼 播鉢	2 D10P1	259	(28.6)	6.3 以上	—	口縁部 5%	口縁部上方に拡張 端部は丸く収 める	内: 灰褐 外: 赤灰 断: 褐灰	3mm以下の黒・白色粒・長 石粒を中量含む	反転復元 15世紀中頃
438	図 58 図版 46	褐釉陶器 壺	2 D9p24	259	(11.0)	4.6 以上	—	口縁部 12.5%	口縁部緩やかに外反 端部外方に 拡張 外面施釉・被熱で釉が変色	釉: 暗オリーブ 露胎: 黒褐・灰白 断面: 灰	緻密	反転復元 福建・広東窯 16世紀
439	図 62 図版 47	土師器 小皿	1 E9j18	008 井戸側 内	8.3	2.0		80%	底部は丸みを帯びる 板目圧痕 体部内面板状工具ナデ	内: 灰白・浅黄橙 外: にぶい黄橙・浅黄橙	1mm以下の灰色微粒を少量 含む	
440	図 62	土師器 小皿	1 E9j18	008 井戸側 内	7.6	1.5		80%	底部は平坦気味 板目圧痕 体部 内面板状工具ナデ	内外: 灰白 断: にぶい黄橙	2mm以下の灰色粒を少量含 む	
441	図 62 図版 47	土師器 小皿	1 E9j18	008 井戸側 内	8.2	2.0		95%	底部は丸みを帯びる 体部内面 板状工具ナデ	内: 灰黄 外: 灰白・灰黄	5mm大の黒褐色礫1個、4mm 大の白色礫1個、1mm以下 の灰・黒色粒を多く含む	

遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備 考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
442	図 62 図版 47	土師器 小皿	1 E9j18	008 井戸側 内	8.0	1.85		95%	底部は丸みを帯びる	内:灰白 外:灰白・浅黄橙 断:にぶい黄橙	1mm以下の白・灰色粒・赤 色酸化粒を微量含む	
443	図 62 図版 47	土師器 小皿	1 E9j18	008 井戸側 内	8.4	2.1		100%	底部は丸い 粘土巻き上げ成形か?	内外:灰白	1mm以下の灰・褐色微粒を 多量に含む	
444	図 62	土師器 小皿	1 E9j18	008 井戸側 内	8.4	1.9		85%	底部は丸みを帯びる 体部内面 板状工具ナデ	内:灰白 外:灰白・にぶい黄橙	1mm以下の赤色酸化粒を少 量含む	
445	図 62 図版 47	土師器 小皿	1 E9j18	008 井戸側 内下層	8.4	2.05		95%	底部は丸みを帯びる 体部内面 板状工具ナデ 粘土巻き上げ成形?	内:灰白 外:灰白・灰黄	2mm大の黒色粒 1個、0.5mm 以下の灰色粒を中量含む	
446	図 62 図版 47	土師器 小皿	1 E9j18	008 井 戸側 上層	8.1	2.1		85%	内面に板状工具による放射状ナ デ	内外断:灰白	1mm以下の灰色微粒を多く 含む	
447	図 62 図版 47	土師器 皿	1 E9j18	008 井戸側 内	12.3	3.0		85%	底部は丸みを帯びる 板目圧痕 体部内面 板状工具ナデ	内外断:灰白	1mm以下の灰色微粒を多量 に含む	
448	図 62 図版 47	土師器 皿	1 E9i16・ 17	008 曲 物外	12.0	3.55		85%	底部は丸みを帯びる 粗い静止条 切か 粘土接合痕顕著 外面被熱 スス付着	内:灰白 外:灰白・灰黄・黄灰	5mm大の灰色礫 1個、1mm以 下の灰色微粒を少量含む	
449	図 62 図版 47	土師器 皿	1 E9j18	008 井戸側 内	12.2	3.05		55%	底部は丸みを帯びる 板目圧痕? 体部内面 板状工具ナデ	内:灰白 外:にぶい黄橙	1mm以下の灰色粒・赤色 酸化粒を少量含む	
450	図 62 図版 47	土師器 皿	1 E9j18	008 井戸側 内	11.6	2.8		60%	底部は丸みを帯びる 板目圧痕? 体部内面 板状工具ナデ	内:灰白 外:灰白・にぶい黄橙	1cm大の灰褐色礫 1個、1mm以 下の赤色酸化粒を少量含む	
451	図 62 図版 47	土師器 皿	1 E9j18	008 井戸側 内	12.0	2.85		60%	底部は丸みを帯びる 体部内面 板状工具ナデ	内:灰黄 外:灰白 断:にぶい黄橙	3mm大の黒褐色礫 1個、2mm 以下の赤色酸化粒を少量含む	
452	図 62 図版 47	土師器 皿	1 E9j18	008 井 戸側 上層	(12.4)	2.85		80%	口縁部は外反 歪が著しく調整が 雑	内外:にぶい橙・にぶい黄橙 断:にぶい橙	1mm以下の赤色酸化粒を多 く含む	一部反転復元
453	図 64 図版 47	土師器 火鉢	1 E9e15・ 16、d15・ 16	026 礫層	(32.8)	9.6 以上	-	口縁部 15%	口縁部は直立する 端部は上方に面	内:にぶい黄橙 外:灰黄・黒 断:灰黄褐	5~7mm大の結晶片岩を微 量、3mm以下の結晶片岩・ 石英・白色粒を多量に含む	反転復元
454	図 64 図版 47	青磁盤	1 E9	026 井戸内 中層	(25.0)	2.6 以上	-	口縁部 5%	口縁部は横方向に開き端部は肥厚 火中する	釉:オリーブ灰 断:灰白	緻密	反転復元
455	図 64 図版 47	染付 皿	1 E9	026 井戸内 中層	-	1.65 以上	(3.8)	底部 50%	基筒底 高台内露胎 内外底部 圏線	釉:明オリーブ灰 露胎:にぶい褐 断:灰白	緻密	反転復元
456	図 64 図版 47	染付 皿	1 E9	026 井戸底	-	1.2 以上	(7.8)	底部 50%	畳付露胎 高台内トビカンナ 見 込部花唐草文	呉須:明青色 露胎:灰白 断:灰白	緻密	反転復元 景徳鎮窯
457	図 66 図版 47	備前焼 播鉢	1 E9h17	048	(26.0)	7.3 以上	-	口縁部 15%	口縁部は大きく上方に拡張 外端 面に波状段	内外灰 断:褐灰	1mm以下の長石・灰色粒を 微量含む	反転復元 16世紀後半
458	図 66 図版 47	備前焼 鉢	1 E9 i16・17	048 石抜き 取り跡	-	6.3 以上	-	-	口縁部は折り返して玉縁状	内:褐灰 外:褐灰・灰褐 断:にぶい赤褐	1mm以下の白色粒を多く含 む	
459	図 66 図版 47	青磁 碗	1 E9i16・ 17	048 裏込め 上層	-	2.9 以上	(5.8)	底部 20%	高台内露胎	釉:明オリーブ・オリーブ灰 露胎・断:灰白	緻密	反転復元
460	図 68 図版 47	土師器 皿	1 E9f15・ 16	070 裏込め 上層	12.0	2.8		50%	底部は平坦 中央部板目圧痕 器 壁厚い	内:橙・浅黄橙 外:にぶい橙 断:橙	砂粒はほとんど含まない	
461	図 68 図版 47	土師器 皿	1 E9f15	070 裏込め 上層	11.4	4.1	7.6	98%	底部は平坦 ハケ状工具ナデ 器 壁厚い 口縁部スス付着	内断:にぶい黄橙 外:浅黄橙	2cm大の灰褐色礫 1個、3mm 大の赤色酸化粒・石英・黒 色粒を多く含む	
462	図 68 図版 47	備前焼 播鉢	1 E9g15	070 裏込め 上層	(22.0)	4.8 以上	-	5%	口縁部はわずかに上方に拡張	内断:にぶい赤褐 外:にぶい赤褐・灰赤	3mm以下の白色礫少量、4mm 大の白色礫を 2 個含む	反転復元 15世紀中頃
463	図 68 図版 47	美濃瀬戸 系陶器 鉢	1 E9	070 井 戸内 上層	(15.8)	4.1	(5.2)	25%	鉄釉 外面体部下半から底部回転 ヘラケスリ 口縁部内面に突帯 色 口縁部端部付近のみ施釉	釉:黒褐 露胎・断:淡黄	2mm以下の白色粒を微量含 む	反転復元 16世紀前半
464	図 68	青磁 碗	1 E9	070 井戸内 上層	-	2.5 以上	-	5%	線描蓮弁文	釉:緑灰 断:灰白	緻密	
465	図 70 図版 48	土師器 小皿	1 D9	131 井戸底	6.8	1.6		75%	底部は平坦気味 板目圧痕	内外:にぶい橙 断:浅黄橙	0.5mm以下の赤色酸化微粒を 微量含む	
466	図 70 図版 48	土師器 小皿	1 D9	131 井戸底	7.3	1.7		75%	底部は丸みを帯びる 布目圧痕? 口縁部にスス	内断:灰白 外:灰白・にぶい橙	0.5mm以下の灰・白色微粒を 中量含む	燈明皿
467	図 70 図版 48	土師器 皿	1 D9	131 井戸底	10.7	2.4		90%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧 痕 口縁部にスス付着	内外:灰白・灰黄・黒褐 断:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を多量 に含む	一部反転復元 燈明皿
468	図 70 図版 48	土師器 皿	1 D9	131 井戸内 中・下層	(10.8)	3.1		50%	底部は平坦気味 板目圧痕	内:浅黄橙 外:浅黄橙・にぶい黄橙	0.5mm以下の赤色酸化粒を多 く含む	一部反転復元
469	図 70 図版 48	土師器 皿	1 D9	131 井戸内 中・下層	10.6	3.3		85%	底部は平坦気味 板目圧痕	内外:灰白・浅黄橙・ 暗灰黄	1mm以下の赤色酸化粒を微 量含む	
470	図 70 図版 48	土師器 皿	1 D9	131 石抜き 取り穴	9.7	2.7		90%	器壁厚い 底部部境に粘土接合痕	内:浅黄 外:浅黄橙・灰白 断:にぶい黄橙	1mm以下の赤色酸化粒を中 量含む	
471	図 70 図版 48	土師器 皿	1 D9	131 井戸内 中・下層	10.9	2.15		80%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧痕	内外:灰白・淡黄・浅 黄橙 断:にぶい黄橙	0.5mm以下の灰色微粒を多量 に含む	

遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
472	図 70 図版 48	土師器 皿	1 D9	131 井戸底	10.8	2.5		85%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧痕	内外:灰白・灰黄 断:灰黄	0.5mm以下の灰色微粒を多量 に含む	
473	図 70 図版 48	土師器 皿	1 D9	131 石抜き 取り穴	10.2	2.7		100%	底部は丸みを帯びる	内外:浅黄橙	1mm以下の灰色・白色・褐色 微粒を多く含む	
474	図 71 図版 48	瓦質土器 火鉢	1 D9	131 井戸底	(23.3)	10.7 以上	(23.2)	15%	口縁部はほぼ直立 端部は上方に 面 三足か?	内:灰 外:灰白・灰 断:灰白	1mm以下の白色微粒を少量 含む	反転復元
475	図 71 図版 48	美濃瀬戸 系陶器 天目茶碗	1 D9	131 井戸内 中・下層	(11.4)	4.6 以上	—	口縁部 30%	鉄釉 外底部露胎	釉:黒・褐 露胎:にぶい 橙 断:灰白・橙	ざっくりしている 5mm前 後の白色粒少量含む	反転復元 16世紀前半
476	図 71 図版 48	美濃瀬戸 系陶器 皿	1 D9	131 井戸内 中・下層	—	1.1 以上	(6.4)	底部 50%	灰釉・全釉 高台内輪トチン痕	釉:オリーブ黄・灰 オ リーブ 断:灰白	ざっくりしている	反転復元 16世紀
477	図 71 図版 48	白磁 皿	1 D9	131 石抜き 取り穴	(10.7)	2.2 以上	—	口縁部 15%	口縁部は強く外反 貫入生じる	釉:灰白 断:灰白・褐灰	緻密	反転復元 漳州窯 16世紀後半
478	図 71 図版 48	染付 盤	1 D9y17・ 18	131 石抜き 取り穴	—	4.2 以上	—	—	口縁部屈曲 外面・口縁部内面に 施文	呉須:薄紺・発色悪い 釉:灰白 断:灰白	緻密	
479	図 73	瀬戸美濃 系陶器 天目茶碗	2	261 井 戸側上層	—	2.1 以上	4.2	底部 100%	鉄釉 外底部鬼板掛け	釉:褐・黒褐 露胎:褐灰・褐灰 断:灰白	ざっくりしている	一部反転復元 16世紀前半
480	図 75	土師器 小皿	2 D9	268 方形枠 内・下層	7.45	1.6		75%	底部は平坦気味 歪が著しい	内外断:にぶい橙	0.5mm以下の白色微粒、赤色 酸化粒を中量含む	
481	図 75	土師器 皿	2 D9	268 方形枠 内	(12.5)	2.7		30%	底部は平坦気味 歪む 体部・口 縁部の境に段	内外:灰白・にぶい黄 橙 断:灰黄	1mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を少量含む	反転復元
482	図 75 図版 49	瓦質土器 風炉	2	268 井 戸側下層	(26.0)	5.2 以上	—	口縁部 10%	口縁部は直立・端部をわずかに外 方に拡張 上方に面 外面に縦 方向のキザミ目状の文様	内:灰 外:暗灰 断:灰白	1mm以下の灰色微粒を少量 含む	反転復元 16世紀前半
483	図 75	備前焼 搦鉢	2 D9	268 方形枠 内	—	5.9 以上	(13.6)		挿り目 9本/2.8cm以上	内:橙・にぶい赤褐 外:灰褐 断:にぶい赤褐・褐灰	4mm以下の白色、褐色粒を 中量含む	反転復元
484	図 75 図版 49	青磁 碗	2	268 方 形枠内	—	2.2 以上	6.2	底部 100%	畳付・高台内露胎 見込部圏線内 に印花文	釉:明オリーブ灰 露胎:灰 断:灰白	緻密	一部反転復元 龍泉窯 14世紀
485	図 75 図版 49	青磁 碗	2 E9	268 井 戸側上層	—	5.2 以上	6.0	55%	高台内蛇の目状に露胎・目跡 外 面片切彫り連弁文 見込部圏線内 に印花文	釉:オリーブ灰 露胎:にぶい褐 断:灰白	緻密	一部反転復元 龍泉窯 14世紀後半
486	図 75 図版 49	青磁 碗	2	268 方 形枠内	(14.0)	7.05	3.0	45%	高台内蛇の目状に露胎 外面片切 彫り連弁文 見込部圏線内に印花 文 貫入	釉:明オリーブ灰 露胎:にぶい橙 断:灰白	緻密	一部反転復元 龍泉窯 14世紀後半
487	図 76 図版 49	土師器 小皿	2 E10b3	236 下層	7.4	1.7		100%	形整っている 外底部櫛状工具ナデ	内外:灰白・にぶい黄 橙・灰黄	1mm以下の灰色微粒を多く 含む	
488	図 76 図版 49	土師器 小皿	2 D10w2	236 下層	7.0	1.4		100%	底部は平坦気味 外底部櫛状工具 ナデ	内:にぶい黄橙 外:にぶい黄橙・灰黄褐	1mm以下の灰色極微粒を少 量含む	
489	図 76 図版 49	土師器 小皿	2 D10w2	236 下層	6.9	1.95		98%	底部は丸みを帯びる 外面の底体 部境に粘土接合痕 外底部板目圧 痕 外面底部から口縁部に布目	内外:にぶい黄橙・灰黄 断:浅黄	1mm以下の灰色・褐色微粒 を微量含む	
490	図 76 図版 49	土師器 小皿	2 D10v2	236 下層	7.0	1.9		100%	底部は丸みを帯びる 外面の底体 部境に粘土接合痕 外面底部から 口縁部に布目 体部内面放射状に 板状工具ナデ	内外:灰黄・黄灰	1mm以下の灰色・褐色極微 粒を少量含む	
491	図 76 図版 49	土師器 皿	2 E10b3	236 下層	10.4	2.1		75%	底部は平坦気味 板目圧痕 体部 外面布目圧痕	内:にぶい黄・浅黄 外:灰黄・暗灰黄 断:浅黄	砂粒をほとんど含まない	
492	図 76 図版 49	土師器 皿	2 D10w2	236 下層	11.0	2.25		90%	底部は平坦気味 板目圧痕 体部 外面布目圧痕	内:浅黄橙・にぶい黄橙 外:灰白 断:淡黄	砂粒をほとんど含まない	
493	図 76 図版 49	土師器 皿	2 E10	236 下層	10.6	2.2		100%	底部は平坦気味 外面体部布目 外底部板目圧痕・ハケ状工具ナデ	内:灰白・浅黄橙 外:灰黄・にぶい黄橙	1mm以下の灰色微粒を少量 含む	
494	図 76 図版 49	土師器 皿	2 E10b2	236 下層	10.5 × 9.8	1.65		85%	底部は平坦気味 板目圧痕 体部 外面布目圧痕 歪む	内:灰白 外:灰黄・灰白	0.5mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を微量含む	
495	図 76 図版 49	土師器 皿	2 E10b2	236 下層	10.1	2.7		75%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧痕 体部外面布目圧痕	内:灰白 外:灰白・黄灰	1mm以下の灰色粒を微量含む	
496	図 76 図版 49	土師器 皿	2 E10b3	236 下層	10.3	1.9		100%	底部は平坦気味 外面体部布目 外底部板目圧痕 外面底体部境粘 土接合痕	内:にぶい黄橙・黒褐 外:灰黄褐・暗灰黄	1mm以下の黒色・灰色微粒 を多く含む	
497	図 76 図版 50	土師器 皿	2 E10	236 下層	10.2	1.6		100%	底部は平坦気味 外面体部布目 外底部板目圧痕	内外:灰白・灰黄	1mm以下の灰色微粒を微量 含む	
498	図 76 図版 50	土師器 皿	2 E10b2	236 下層	9.8	2.1		85%	底部は平坦気味 板目圧痕 体部 外面布目圧痕	内:浅黄橙 外:灰黄 断:灰白	0.5mm以下の灰色粒・赤色酸 化粒を微量含む	
499	図 76 図版 50	土師器 皿	2 E10b3	236 下層	10.0	2.3		100%	底部は平坦気味 外底部板目圧痕 口縁部スス付着	内:灰白 外:灰白・灰黄・にぶ い黄橙	1mm以下の灰色・黒色極微 粒を多く含む	燈明皿
500	図 76 図版 50	土師器 皿	2 E10b2	236 下層	10.2	2.3		85%	底部はやや丸みを帯びる 板目圧 痕	内:灰白・淡黄 外:灰黄 断:灰白	1mm以下の灰色微粒を多く 含む	
501	図 76 図版 50	土師器 皿	2 E10b1	236 下層	10.4	2.3		90%	底部は平坦気味 体部外面布目圧 痕	内:灰白・灰黄 外:灰黄 断:浅黄	0.5mm以下の灰色微粒・赤色 酸化粒を微量含む	
502	図 76 図版 50	土師器 皿	2 E10b2	236 下層	10.8	2.1		80%	底部はやや丸みを帯びる 体部外面 布目圧痕 口縁部付近スス付着	内:灰白 外:灰白・灰黄・黒褐 断:灰白	1mm以下の赤色酸化粒を微 量、0.5mm以下の灰色微粒を 少量含む	燈明皿

遺物観察表 (土器類)

法量の ○ 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
503	図 76 図版 50	土師器 皿	2 E10b3	236 下層	9.9	1.8		95%	底部は平坦気味 体部外面布目圧痕	内:灰白 外:灰黄 断:灰黄	0.5mm以下の灰色微粒を微量含む	
504	図 76 図版 50	土師器 皿	2 E10b2	236-2 下層	9.7	1.9		100%	底部は平坦気味 外面体部布目 外底部板目圧痕 外面底体部境粘土接合痕	内:灰黄・浅黄 外:灰黄・淡黄	1mm以下の白色微粒を微量含む	
505	図 76 図版 50	土師器 皿	2 E10b3	236 下層	10.6	2.25		98%	底部は平坦気味 外面体部布目 外底部板目圧痕	内外断面:灰白・灰黄 断:淡赤橙	1mm以下の黒色・灰色微粒を多く含む	
506	図 76	土師器 皿	2 D10y2	236 中層	(11.4)	2.1		30%	底部は平坦 板目圧痕 体部外面 布目圧痕 内底部墨書	内:灰白・黄灰 外断:灰白	反転1mm以下の褐・黒色粒を少量含む	反転復元
507	図 76	瓦質土器 火鉢	2 D10y2	236 中層	(27.6)	10.1 以上	(21.2)	15%	口縁部は内方に拡張・上方に面 底部は平坦で3足か? 体部は 最大径が上位にある円盤形	内:灰 外:黒 断:灰黄・にぶい黄橙	2mm以下の長石を多く含む	反転復元 16世紀
508	図 77 図版 50	瀬戸美濃 系陶器 皿	2 E10b2	236 下層	8.2	2.1	4.3	85%	全釉 貫入 高台内輪トチ痕	釉:灰白・灰オリーブ 断:灰白	砂粒は殆ど含まない	16世紀後半
509	図 77 図版 50	瀬戸美濃 系陶器 皿	2 E10b2	236 下層	8.3	2.35	4.5	60%	灰釉・全釉 貫入 高台内輪トチ痕	釉:灰白・灰オリーブ	砂粒は殆ど含まない	16世紀後半
510	図 77 図版 50	瀬戸美濃 系陶器 皿	2 E10b2	236 下層	8.2	2.2	4.8	100%	灰釉 貫入 高台は低く 体部から口 縁部にかけて内湾気味に立ち上がる	釉:浅黄・オリーブ黄 ・灰オリーブ 露胎:灰白・灰	緻密	16世紀後半
511	図 77 図版 50	瀬戸美濃 系陶器 皿	2 E10b2	236 下層	8.2	2.3	4.6	95%	灰釉・全釉 粗い貫入 高台内輪 トチ痕	釉:オリーブ灰 断:灰	1mm以下の灰色粒を微量含む	16世紀後半
512	図 77 図版 50	瀬戸美濃 系陶器 皿	2 E10b2	236 下層	8.2	2.15	4.3	70%	灰釉・全釉 貫入 高台内輪トチ がそのまま付着	釉:灰オリーブ・オリーブ灰 断:灰白	砂粒は殆ど含まない	16世紀後半
513	図 77	瀬戸美濃 系陶器 皿	2 E10b2	236-2 (10.7)	2.5	5.6		底部 100%	灰釉・全釉 高台内に輪トチ痕	釉:オリーブ灰 露胎・断:灰	緻密	一部反転復元 16世紀後半 火中する
514	図 77 図版 50	瀬戸美濃 系陶器 皿	2 E10b2	236 下層	10.6	2.95	6.2	75%	灰釉・全釉 貫入 高台内輪トチ痕	釉:浅黄・灰オリーブ 断:オリーブ黒・灰オリーブ	砂粒は殆ど含まない	16世紀後半
515	図 77 図版 50	瀬戸美濃 系陶器 皿	2 E10b3	236 下層	10.3	2.6	5.7	75%	灰釉・全釉 貫入 高台内輪トチ 痕 内底部・高台付近を中心に タール付着	釉:灰白	砂粒は殆ど含まない	16世紀後半
516	図 77 図版 50	瀬戸美濃 系陶器 皿	2 E10b2	236 下層	10.3	2.8	6.0	90%	全釉 高台内に輪トチ痕 灰釉 二重掛け?	釉:オリーブ灰・灰白・灰 断:灰黄	緻密	16世紀後半
517	図 77 図版 50	備前焼 掃鉢	2 D10w2	236 中層	-	7.6 以上	-	10%	口縁部は上方に拡張 掃目9本 /2.7cm	内:灰赤 外:灰赤・赤灰 断:にぶい赤褐	3~9mmまでの白色小礫を 微量、2mm以下の白色・褐色 色粒を中量含む	15世紀中頃
518	図 77 図版 50	備前焼 甃	2 E10a2	236 (57.6)	7.3 以上	-	口縁部 5%	内:灰褐・黒褐 外:黒褐・黒 断:褐灰	口縁部は外傾 端部外面に扁平な 玉緑・外面に幅広い凹線3条	4mm以下の灰褐・白色粒を 少量含む	反転復元 16世紀後半	
519	図 77 図版 50	備前焼 甃	2 E10	236 上層	(64.6)	6.7 以上	-	口縁部 5%	内:灰褐 外:褐灰・灰オリーブ 断:灰白	口縁部は強く外傾 端部外面に 扁平な玉緑・外面に幅広い凹線2 条 自然釉付着著しい	5mmまでの黒色粒を中量、1 mm以下の白色粒を多く含む	反転復元 16世紀後半
520	図 77	備前焼 甃	2 E10a3	236 中層	-	8.9 以上	-	-	内:灰褐 外:黒褐・灰褐 断:灰褐	口縁部は外傾 端部外面に扁平な 玉緑・外面に幅広い凹線3条	1mmまでの白・黒色粒を中 量含む	16世紀後半
521	図 77 図版 50	備前焼 水屋甃	2 E10b3	236 中層	(35.6)	8.5 以上	-	-	内:黒褐・灰褐 外:褐灰・灰オリーブ 断:黄灰	口縁部は短くくの字に屈曲 端部 をわずかに外方に拡張 外面口縁 部・肩部に自然釉	2mm以下の白色粒を中量含む	反転復元 16世紀前半
522	図 77 図版 50	焼締陶器 小壺	2 D9x2	236 中層	-	5.9 以上	5.0	50%	底部は回転糸切 全体的に斑に自然 釉	内外断:灰白・灰・暗 灰黄	1mm以下の白色・黒色粒を 少量含む	一部反転復元 朝鮮王朝?
523	図 77 図版 50	青磁 碗	2 E10a3	236 下層	-	2.75 以上	4.4	底部 100%	高台内露胎	釉:オリーブ灰 露胎:灰 断面:灰白	緻密	一部反転復元 龍泉窯 16世紀前半
524	図 77 図版 50	青磁 碗	2 D9x2	236 中層	-	5.3 以上	6.0	底部 100%	高台内露胎 体部外面片切彫連弁 文 見込部圏線内に印花文	釉:明オリーブ灰 露胎:にぶい橙 断:灰白	緻密	一部反転復元 龍泉窯 15世紀前半
525	図 77 図版 50	青磁 碗	2 D10w2	236 中層	-	2.45 以上	4.8	底部 100%	高台内露胎 体部外面片切彫連弁 文か 見込部圏線内にアラベスク 風の文様	釉:明オリーブ灰 露胎:灰オリーブ 断:灰白	緻密	一部反転復元 龍泉窯 15世紀
526	図 77 図版 50	青磁 碗	2 D10y2	236 中層	(17.0)	5.1	(9.6)	10%	釉は厚く粗い貫入 口縁部わずかに 外反 外面口縁下に段・沈線状 を呈する	釉:明緑灰 断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 14世紀後半
527	図 77 図版 50	青磁 香炉	2 E10b3	236 下層	(11.0)	3.3 以上	-	口縁部 33%	袴腰 口縁部内傾し、端部を外方 に拡張 浮遊環状の把手	釉:灰オリーブ・暗オ リーブ 断:灰白	緻密	反転復元 龍泉窯 15世紀前半
528	図 77 図版 50	白磁 皿	2 E10b2	236 (11.2)	2.1	6.6	20%	口縁部外反 畳付の釉を削り取る	釉:灰白 露胎・断:灰白・灰	緻密	反転復元 景徳鎮窯 16世紀後半	
529	図 77 図版 50	白磁 皿	2 E10b3	236 下層	(12.1)	3.0	(6.0)	30%	口縁部外反 高台付近の一部露胎 埋砂付着	釉・露胎・断:灰白	緻密	反転復元 景徳鎮窯 16世紀後半
530	図 77 図版 50	白磁 皿	2 E10b2	236 下層	(13.0)	3.0	(7.6)	35%	口縁部外反 畳付の釉を削り取る	釉:灰白 露胎・断:灰白	緻密	反転復元 景徳鎮窯 16世紀後半
531	図 77 図版 50	白磁 皿	2 E10b3	236 下層	(15.5)	3.1	(9.0)	30%	口縁部外反 畳付の釉を削り取る	釉:灰白・灰 露胎・断:灰白	緻密	反転復元 景徳鎮窯 16世紀後半
532	図 77 図版 50	白磁 開香炉	2 E10b3	236 下層	(5.4)	2.6 以上	-	口縁部 30%	体部から口縁部は直線的に外傾 端部は上方に面 体部圏線3条 以上	釉:灰白・明緑灰 断:灰白	緻密	反転復元 景徳鎮窯 15世紀
533	図 77 図版 51	染付 碗	2 E10b3	236 下層	13.1	4.6	5.4	75%	高台付近露胎 見込部蛇の目釉剥 ぎ 体部外面草花文	灰須:暗青灰 釉・露胎:灰白	緻密	漳州窯 16世紀末



遺物観察表 (土器類)

法量の ( ) 内は復元した大きさ 色調の内・外・断は「面」を省略している。色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図・ 図版 番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	法量			残存率	形態・技法	色調	胎土	備考
					口径 cm	高さ cm	底径 cm					
534	図 77 図版 50	染付 碗	2 E10b2	236 中 ・下層	(13.8)	5.2	5.3	30%	高台から高台内・見込部露胎 体 部内外面幅広い圏線 火中する	呉須:青灰 釉・露胎・断:灰白	緻密	反転復元 漳州窯 16世紀末
535	図 77 図版 51	染付 碗	2 E10b2	236	(13.5)	3.9 以上	—	75%	高台付近露胎 見込部蛇の目釉剥 ぎ 体部外面草花文	呉須:青灰 釉・露胎:灰白	緻密	一部反転復元 漳州窯 16世紀末
536	図 77 図版 51	染付 皿	2 E10b2・b3	236 下層	15.4	3.4	8.8	80%	口縁部外反 全釉 畳付の釉を削 り取る 体部外面草花文 見込部 十字花文	呉須:青灰 釉:灰白 露胎:にぶい黄橙	緻密	景德鎮窯 16世紀後半
537	図 77 図版 51	染付 皿	2 E10b3	236 下層	(15.6)	3.4	(8.7)	40%	口縁部外反 全釉 畳付の釉を削 り取る 体部外面草花文 見込部 十字花文	呉須:青灰・暗青灰 釉:明オリブ灰 露胎:灰白	緻密	反転復元 景德鎮窯 16世紀後半
538	図 77 図版 50	染付 皿	2 E10b3	236 下層	(11.4)	3.0	(4.6)	25%	口縁部外反 高台内露胎 見込部 蛇の目釉剥ぎ	呉須:暗緑灰 釉・断:灰白 露胎:にぶい橙	緻密	反転復元
539	図 77 図版 51	染付 丸皿	2 E10b2	236 下層	9.8	3.1	3.6	75%	基筒底 外底部露胎 施釉は雑で 貫入生じる 外面口縁部下に鋸歯 状・見込部に花状の文様 底部に 炭の汚れあり	呉須:青灰・暗青灰 釉:灰白 露胎:淡黄・灰黄	ざっくりしている	漳州窯 16世紀末
540	図 77 図版 51	染付 杯	2 E10b2	236 下層	(5.1)	4.15	2.3	75%	基筒底 外面底部付近露胎 体部 外面飛馬文	呉須:青灰色・明青色 釉:明オリブ灰・灰白 露胎:黄灰	緻密	一部反転復元 景德鎮窯 16世紀後半
541	図 77	染付 杯	2 E10b3	236 下層	—	2.3 以上	2.6	底部 100%	全釉 畳付の釉を削り取る 体部 外面樹木文 見込部花文 高台内 「福」?	呉須:明青色 釉:明緑灰 断:灰白	緻密	一部反転復元 景德鎮窯 16世紀後半
542	図 77 図版 51	染付 杯	2 E10b3	236 下層	(6.4)	3.55	2.7	70%	全釉 畳付の釉を削り取る 体部 外面草花文 見込部山水文 高台 内「大明年製」	呉須:明青色・暗青色 釉:明緑灰 露胎:灰白	緻密	一部反転復元 景德鎮窯 16世紀後半
543	図 78 図版 51	染付 盤	2 E10b3	236 下層	(19.5)	3.05	9.8	50%	全釉 口縁部は屈曲 畳付の釉を 削り取る 珪砂付着 高台内鉄カ ンナ痕・中央部「富貴佳器」銘 体部外面草花文 内面口縁部宝 文・花文 見込部鳳凰文	呉須:明青色・暗青色 釉:明緑灰 露胎:灰白	緻密	反転復元 景德鎮窯 16世紀後半
544	図 78	染付 盤	2 E10b2	236 下層	(20.0)	3.1	(10.6)	15%	全釉 口縁部は屈曲 畳付の釉を 削り取る 珪砂付着 体部外面草 花文 内面口縁部宝文・花文	呉須:明青色・暗青色 釉:明緑灰 露胎・断:灰白	緻密	反転復元 景德鎮窯 16世紀後半
545	図 78 図版 51	染付 盤	2 E10b2・ 3	236 下層	(19.2)	3.25	(9.6)	25%	全釉 口縁部は屈曲 畳付の釉を 削り取る 珪砂付着 高台内鉄カ ンナ痕 体部外面草花文 内面口 縁部宝文・花文 見込部鳳凰文	呉須:明青色・暗青色 釉:明緑灰 露胎・断:灰白・白	緻密	反転復元 景德鎮窯 16世紀後半
547	図 84	染付 杯	1 E9	057 北	(7.8)	2.6 以上	—	20%	竹葉文	呉須:明青色 釉:明オリブ灰 断:灰白	緻密	反転復元 肥前系
546	図 84	染付 碗	1 E9	042 西	(10.4)	3.6 以上	—	20%	印判手 井桁文	呉須:青灰 釉断:灰白	緻密	反転復元 肥前系

遺物観察表 (石器・石製品)

2000 g を超す資料は、kg で表示する

報告書 番号	図 図版 番号	種類 器種	調査区	遺構 層位	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g・kg	石材	残存率	備 考
S1	図 30 図版 35	打製石器 石鏃	1 E9	003-c 床面	2.5 以上	1.25	0.55	1.95 g	サヌカイト	90%	有茎 基部一部欠損
S2	図 30 図版 35	打製石器 石鏃	1 E9	003-c 床面	4.0	1.4	0.5	2.91 g	頁岩?	100%	有茎
S3	図 30 図版 35	打製石器 石鏃	1 E9	036	4.5 以上	1.7	0.4	2.92 g	サヌカイト	90%	003 竪穴建物内 有茎 刃部先端、基部一部欠損
S4	図 30 図版 35	打製石器 石鏃	1 E9	104	3.7 以上	2.75	0.6	3.13 g	サヌカイト	90%	004 竪穴建物内 有茎 基部一部欠損
S5	図 30 図版 35	磨製石器 石包丁	1 E9	024	12.0	5.5	0.8	89.20 g	緑泥片岩	98%	刃部等一部欠損 穿孔 2箇所両側から 片面の研磨は一部
S6	図 30 図版 35	礫石器 粗製剥片石 器	1 E9	003-d 上層	10.7	7.8	3.8	375.26 g	細粒砂岩	100%	円礫を半裁して刃部を形成 刃部は潰れる
S7	図 30 図版 35	礫石器 石錘	1 E9	068	7.7	5.3	5.0	281.70 g	砂岩	100%	有溝石錘 溝幅 2.0 ~ 2.6cm
S8	図 30 図版 35	礫石器 敲石	1 E9j21	002 ②	10.7	7.9	2.2	280.30 g	砂岩	100%	両側・両小口：敲打痕 両面：使用痕なし
S9	図 30 図版 35	礫石器 台石	1 E9i21	159	16.8	15.1	6.3	2.56 kg	砂岩	(100%)	003 竪穴建物内 片側の小口使用時に破損か 片面・両側・ 小口に敲打痕
S10	図 30	礫石器 敲石	1 E9	003-d 上層	12.45	3.7 ~ 5.1	2.3	197.70 g	細粒砂岩	100%	片面・側面に敲打痕
S11	図 30 図版 35	礫石器 台石	1 E9	003 床面	32.0	21.2	10.0	10.14 kg	粗粒砂岩	100%	両面敲打痕・磨り面 片側面磨り面 使用顕著 筋状の刃 部痕
S12	図 30 図版 35	石器原材	1 E9	003 床面	17.7	16.0	7.8	2.78 kg	頁岩	100%	一部打ち欠いた痕あり
S13	図 30 図版 35	礫石器 台石	1 E9	024 ⑧ 床面	25.1	14.4	5.8	2.88 kg	砂岩	100%	表面：研磨痕・比熱する 裏面：わずかに敲打痕 小口： 敲打痕・磨り面
S14	図 30 図版 35	礫石器 敲石	1 E9e15	024 床面	22.8	11.2	9.3	3.12 kg	砂岩	(100%)	片側の小口使用時に破損か 片面・片側・両小口にわずかな 敲打痕
S15	図 31 図版 35	礫石器 台石	1 E9	024	24.4	20.3	11.0	8.24 kg	粗粒砂岩		片面に弱い敲打痕 被熱する
S16	図 31 図版 35	礫石器 台石 (石皿)	1 D9	143	32.5	21.5	9.5	8.12 kg	細粒砂岩	100%	028 竪穴建物内 片面大きく窪む・磨り面 片面敲打痕 被熱する
S17	図 31 図版 35	礫石器 敲石	1 E9y15・ 16	028 北 下層	10.7	9.2	4.5	599.20 g	砂岩	100%	両面：敲打痕 側面：ほぼ全体に磨り痕・敲打痕
S18	図 31 図版 35	礫石器 敲石	1 D9y16	028 北西	15.5	10.2	5.0	1111.17 g	砂岩	100%	両面・両側・両小口：敲打痕
S19	図 31 図版 35	礫石器 (敲石)	1 E9x16	146	12.7	6.2 ~ 6.6	4.7	715.84 g	砂岩	(100%)	028 竪穴建物内 片側折損後も使用 両面・側面：敲打痕 顕著 V字状に窪む敲打痕あり、工具としても利用か?
S20	図 31 図版 35	礫石器 磨石	1 D9y16	145 第1層	8.7	5.16	4.9	335.83 g	砂岩	100%	028 竪穴建物内 片側小口：磨面
S21	図 31 図版 36	礫石器 敲石	1 E9	068	10.1	9.1	2.1	217.32 g	細粒砂岩	100%	片面 研ぎ面 筋状の刃部痕 側面敲打痕?
S22	図 31 図版 36	礫石器 敲石	2 D9t15	277	14.7	11.7	6.0	1535.44 g	砂岩	98%	両面・両側・両小口：敲打痕 片面に欠け有
S23	図 31 図版 36	礫石器 敲石	2 D9t15	277	21.3	12.7	3.4	1339.04 g	砂岩	100%	両面・片側・片小口：弱い敲打痕
S24	図 31 図版 36	礫石器 敲石	1 E9h17・ g17	005	13.2	12.0	6.4	2.10 kg	斑レイ岩	(100%)	片面・片側：敲打痕顕著 溝状に窪み、工具として利用か
S25	図 38 図版 38	石製品 砥石	2 D10S1	260	4.3 以上	2.7 以上	0.4 ~ 0.8	9.88 g	粘板岩		両面使用 側に沿って切り込み
S26	図 38	石製品 石鍋	2 D9r17	268 掘形	口径 (15.8)	最大径 (19.0)		151.72 g	滑石		口縁端部は上方に面 口縁部下に断面台形の罫 鑿の製作 痕残る 外面スス付着 反転復元 混入遺物
S27	図 48	石製品 石臼	1 E9d21	001-a	口径 (18.7)	底径 (9.5)	高さ 8.3	711.81 g	粗粒砂岩	25%	口縁端部は上方に面 器壁厚い 反転復元
S28	図 53 図版 45	石製品 茶臼	1 E9b16	027 上層	直径 20.0	高さ 13.7		5.02 kg	和泉砂岩	上臼の 50%	茶臼の上臼 挽木孔に方形(斜め)の装飾 大阪府ミノバ 石切り場
S29	図 53 図版 45	石製品 板碑	1 E9e18	027 上層	19.4 以上	12.0	7.4	3.30 kg	粗粒砂岩	?	平坦な面に梵字を刻むが、意図的に削って消した痕跡あり 石垣の石材として再利用か?
S30	図 58 図版 46	石製品 五輪塔	2 D9p15	259 下層	21.4	20.8	17.8	16.35 kg	粗粒砂岩	地輪 95%	四方に梵字
S31	図 73 図版 49	石製品 茶臼	2	261	直径 18.5	高さ 13.3		3.66 kg	和泉砂岩	上臼 45%	茶臼の上臼 挽木孔に方形(正位)の装飾 大阪府ミノバ 石切り場
S32	図 78	石製品 硯	2 E10b2	236 下層	5.1 以上	3.0 以上	0.8	12.15 g	砂岩?		火中する
S33	図 78 図版 51	石製品 砥石	2 E9b2	236	11.5 以上	3.85	1.55	121.5 g	微粒砂岩		片小口欠損 両面・両側面使用

遺物観察表 (鍛冶関係・炭化物)

報告書 番号 0	図 図版 番号	種類	調査区 地区	遺構 層位	長 cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備 考
C 1	図 38 図版 38	鞆 羽口	2	260 下層	12.7 以上	径 7.6 × 7.75	-	-	円筒形 片端欠損 片端ガラス質の炉壁付着 外面板状工具ナデ 鎌倉時代か?
C 2	図 48 図版 44	炭化米	1 E9d20	001 中層	6.6 以上	7.4	6.2		三角形を呈する おにぎり 一部欠損
C 3	図版 44	鉄滓	1 E9e19	001-b 下層	11.5	10.0	6.5	503.5	椀型
C 4	図版 44	鉄滓	1 サブトレ 2	001 上層	13.0	9.5	7.5	1145.8	

遺物観察表 (木器・木製品)

樹種同定は、保存処理作業をおこなった(株)吉田生物研究所によるものである。

報告書 番号	図 図版	種別	調査区 地区	遺構 層位	樹種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	残存率	備考
W1	図 34 図版 36	曲物 部材	2 D9g23・24	260 下層	アスナロ属	径 25		1.3	65%	孔 4 箇所 木釘 2 箇所残る 片面稀洪塗布 片面刃物傷多い 保存処理
W2	図 34 図版 36	曲物 部材	2 D9g23・25	260 下層	アスナロ属	径 (32.4)		1.1	20%	孔 3 箇所 樺 1 箇所残る 片面刃物傷多い 保存処理
W3	図 34 図版 36	木筒?	2 D9g23・26	260 下層	アスナロ属	11 +	3.2	0.15~0.35		抉り 墨による線? 保存処理
W4	図 34	へら状木製品	D9e23	260 下層	マツ属 (二葉松類)	53.0 以上	1.4 ~ 6.3	1.5 ~ 3.0	70%	全体的に面取りをおこなう 保存処理
W5	図 38 図版 38	折敷 部材	2 D10s2	260 下層	アスナロ属	29.1	13.7 以上	0.6 ~ 0.8		孔 4 箇所 樺 片面刃物傷 保存処理
W6	図 38 図版 38	折敷 部材	2 D10p25	260 下層	ヒノキ属	27.8	4.9 以上	0.8		孔 1 箇所 樺 保存処理
W7	図 38 図版 38	位牌 (角塔婆)	2	260 南壁トレンチ	コウヤマキ	13.1	1.0 ~ 2.2	1.0 ~ 2.2	98%	基部円柱状 身部角柱状 頭部三角形で身部との境に 2 本の溝 頭部に墨を塗布 保存処理
W8	図 48 図版 44	漆椀	2 E9b25	001 中・下層	コナラ節	口径 -	器高 8.0 以上	底径 8.8	80%	土圧で歪む 高台内に×印 内朱 外黒・朱で扇文 保存処理
W9	図 48 図版 44	箸	1 E9h20	001 - b 最下層		30.3	0.7	0.7	100%	
W10	図 48 図版 44	箸	2 E9b25	001 中層	スギ	22.8	0.8	0.6	100%	一部炭化 保存処理
W11	図 48 図版 44	箸	1 E9h19	001-b 下層		21.6 以上	0.6	0.5		
W12	図 48 図版 44	箸	1 E9h19	001-b 下層	スギ	23.5	0.7	0.5	100%	保存処理
W13	図 48	箸	2 E9b25	001 中層		21.2 以上	0.7	0.7		欠損
W14	図 48	箸	2 E10b2	001 中層		25.5	0.7	0.6	100%	
W15	図 48 図版 44	箸状木製品	1 E9h20	001 - b 最下層	スギ	22.8	0.9	0.6	100%	保存処理
W16	図 48 図版 44	箸状木製品	1 E9h20	001 - b 最下層	スギ	21.5	1.0	0.7	100%	保存処理
W17	図 48 図版 44	柄杓? 部材	1 E9	001 下層		11.0 以上	4.55 以上	0.5 ~ 0.6		底板
W18	図 48 図版 44	曲物? 部材	1 E9c20	001 - b 中層	マツ属 (二葉松類)	径 17.0		厚さ 3.2 ~ 3.8		底板 保存処理
W19	図 48 図版 44	柄杓 部材	1 E9c21・22	001 - b 中層	スギ	58.5	2.7	1.4	柄 100%	小孔 2 箇所 保存処理
W20	図 49 図版 44	桶 部材	2 E9b25	001 中層		27.0 以上	5.7 以上	1.1	底板 20%	木釘継
W21	図 49 図版 44	桶 部材	2 E9b25	001 中層		30.0 以上	7.3 以上	1.3	蓋板? 20%	大きい孔 1 箇所 木釘継 蓋
W22	図 49	桶 部材	2 E9b25	001 中層		22.9 以上	5.9 以上	1.2	底板? 15%	木釘継 孔 1 箇所・補修孔?
W23	図 49	桶 部材	2 E9b25	001 中層		18.3 以上	4.3 以上	0.9	蓋板? 20%	孔 4 箇所・補修孔?
W24	図 49 図版 44	曲物? 部材	2 E9b25	001 中層		26.2	15.0 以上	0.6 ~ 1.0	底板? 50%	1 枚板
W25	図 49	? 部材	2 E9b25	001 中層		29.6 以上	4.4 以上	0.8 ~ 1.1		木釘孔 3 箇所 蓋の摘みまたは折敷の足か?
W26	図 49 図版 44	? 部材	2 E9 b 25	001 中層	スギ	12.0	9.2	0.5		台形状 孔 1 箇所 保存処理
W27	図 49 図版 44	? 部材	1 E9h19	001 - b 下層		10.8	4.7	0.5		孔 2 箇所
W28	図 49	? 部材	2 E10b2	001 下層		24.5 以上	4.8	0.2		孔 1 箇所
W29	図 49	折敷 部材	2 E10b2	001 下層		25.0 以上	1.7	0.5		孔 2 箇所 両端に罫引あり 側板
W30	図 49 図版 44	不明	1 E9i20	001 下層	ヒノキ属	31.5	1.5・3.9	0.6	90%	羽子板状 保存処理
W31	図 49 図版 44	横杓	1 E9e19	001 - b 下層	マツ属 (二葉松類)	36 19・26+	8 ~ 10 3.5	8 ~ 10 3.5		杓部 保存処理 柄部 3分割 1か所接合不可 保存処理
W32	図 49 図版 44	鎌	2 E10 b 2	001 下層	クリ	5.5+ 13+	1.4 2	0.2 1.7		刃部基部 保存処理 柄部 目釘 口金残る 保存処理
W33	図 51	桶 部材	1 E9 a 21	019 下層		33.1	8.8 以上	0.7		腐朽
W34	図 55	箸	2 D10a1	258 下層	アスナロ属	26.3	0.65	0.5	100%	保存処理
W35	図 55	柄杓 部材	2 D9u23	258 下層	アスナロ属	8.9	7.1	0.7	底板 100%	楕円形 保存処理
W36	図 55	? 部材	2 D9u25	258 下層		58.3 以上	3.2 ~ 5.3	1.6 ~ 2.5		棒状 全体面取り
W37	図 58 図版 46	漆器 椀	2 D9r24	259 下層	コナラ節	口径 -	器高 6.5 以上	底径 -	底体部 30%	内朱 外黒・朱で文様(松葉?) 反転復元 保存処理
W38	図 58 図版 46	漆器 椀	2 D9q22	259 下層	コナラ節	口径 -	器高 5.4 以上	底径 -		内朱 外黒・朱で文様 反転復元 保存処理
W39	図 58	漆器 椀	2 D9p24	259	ニガキ	口径 -	器高 5.3 以上	底径 -		内朱 外黒・朱文様(扇) 反転復元 保存処理
W40	図 58 図版 46	漆器 椀	2 南壁トレンチ	259 下層	モクレン属	口径 -	器高 2.3 以上	底径 5.3		内・外朱 高台黒 反転復元 保存処理
W41	図 59 図版 46	桶 部材	2 D9q22	259 下層	スギ	径 31.3		1.7	底板 80%	炭化 5 枚を木釘で継ぐ 保存処理

遺物観察表 (木器・木製品)

樹種同定は、保存処理作業をおこなった(株)吉田生物研究所によるものである。

報告書 番号	図 図版	種別	調査区 地区	遺構 層位	樹種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	残存率	備考
W42	図 59 図版 46	折敷 部材	2 D9p25	259 下層		19.2	3.0	0.1		樺孔
W43	図 59 図版 46	折敷 部材	2 D9q25	259 中層	ヒノキ属	34.5以上	21.5以上	1.0		底板 木釘継 保存処理
W44	図 59 図版 46	折敷 部材	2 南壁トレンチ	259 下層		22.7	6.6以上	0.5		
W45	図 59 図版 46	工具 部材	2 D9p24	259 下層	シラキ属	9.5	1.8~2.5	1.8~2.5	柄部 95%	鑿柄か? 金具(カツラ)一部残る 保存処理
W46	図 59 図版 46	楔状木製品	2 D9p16	259 下層	アワブキ属	20.1	2.5~4.0	1.5~2.3	100%	樹皮残る 保存処理
W47	図 59	木筒状木製品	2	259 下層		27.2以上	2.3	0.3		先端尖る
W48	図 59 図版 46	橋脚	2 D9p16	259 下層		72.3以上	19.0	15.7		方形 先端尖る
W49	図 59 図版 46	橋脚	2 D9p15	259 下層		77.2以上	24.0	22.6		丸太 周囲・基部は削り痕顕著
W50	図 61 図版 47	曲物	1	008 最下層	アスナロ属	径 55.2	高 32.8			厚さ 0.3cmの板 5枚を 5重に巻き樺で綴じ、更に上下にタガ状の板を巻いて樺・木釘で留める 保存処理
W51	図 62 図版 47	井戸枠	1	008 最下層	ヒノキ属	109.0	30.0	3.0	ほぼ 100%	4枚を仕口加工して方形に組み合わせる 保存処理
						115.9	28.8			
						115.8	28.5			
						118.0	30.5			
W52	図 62 図版 47	箸	1	008 曲物内		20.8	0.5	0.4	100%	
W53	図 62 図版 47	箸	1	008 曲物外		19.8以上	0.8	0.4		
W54	図 62 図版 47	箸	1	008 曲物外	アスナロ属	21.8	0.7	0.4	100%	保存処理
W55	図 62	箸	1	008 曲物外		15.4以上	0.5	0.4		
W56	図 62	箸	1	008 曲物外		14.0以上	0.7	0.3		
W57	図 64	桶 部材	1 E9	026 底		14.5以上	3.8以上	1.15	底板 30%	木釘継
W58	図 68 図版 48	折敷 部材	1	070	アスナロ属	28.2以上	4.6以上	0.1~0.3	底板	樺 樺孔 保存処理
W59	図 68 図版 48	折敷 部材	1	070		24.1以上	5.3以上	0.3	側板	孔 5箇所 両端鍵状になる
W60	図 68	蓋? 部材	1	070	アスナロ属	26.5以上	2.85以上	1.2		摘み? 木釘 2 保存処理
W61	図 68	? 部材	1	070	スギ	7.8	7.6	1.7		円盤状 保存処理
W62	図 68 図版 48	? 部材	1	070	スギ	21.5	2.3~3.6	1.3		14箇所の孔 木釘継 保存処理
W63	図 68 図版 48	桶 (井戸枠)	1	070 底	スギ	口径 44.6	高 38.2	底径 38.0	側板 100%	底は無し タガ3箇所(竹製)は腐敗 厚さ 0.5~0.8cmの撥形の板材を 22枚結わえる 保存 処理
W64	図 68 図版 48	井戸枠	1	070 底	コウヤマキ	66.0	22.5	0.35~0.45		柄組 側面に組み合わない柄穴あり・再利用か? 保 存処理
						65.7	16.0			
						64.9	21.8			
						64.8	16.4			
W65	図 71 図版 49	折敷 部材	1	131 井戸底	ヒノキ属	24.4以上	12.7以上	0.4~0.9	底板	樺 樺孔 刃物傷
W66	図 71 図版 49	? 部材	1	131	アスナロ属	20	2.4	0.6		孔 2 小孔 3 保存処理
W67	図 71 図版 49	? 部材	1	131	スギ	19.9	2	0.6		孔 2 小孔 3 保存処理
W68	図 71 図版 49	柄杓 部材	1	131	アスナロ属	31以上	0.5~1.8	0.9	柄	小孔 1 保存処理
W69	図 71 図版 49	? 部材	1	131		42.5以上	19.2	1.4		炭化 孔 2箇所(斜め)
W70	図 71 図版 49	? 部材	1	131		27.5	15.6	2		斜め方向の孔 2
W71	図 71 図版 49	扇骨	1	131	扇骨・タケ 要・散孔材	幅 0.3~0.8. 厚さ 0.08~0.15、長さ約 18.4の骨を 10枚で綴じる 紙が一部残る 保存処理				
W72	図 78 図版 51	漆器 椀	2 D10x2	236 下層	ニガキ	口径 12.0	3.4以上	-		3分割 朱漆 文様 反転復元 保存処理
W73	図 78	箸	2	236 下層		24.3	0.6	0.45	100%	折れる
W74	図 78	箸	2 E10b2	236 下層	スギ	21.3	0.8	0.7	100%	保存処理
W75	図 78 図版 51	折敷 部材	2 D10y2	236 中層		28.7	8.8以上	0.3~0.5	底板	2分割 孔 1
W76	図 78 図版 51	折敷 部材	2 E10b2	236 下層	アスナロ属	14.1以上	4.0	0.3	側板	破損 樺綴じ 保存処理
W77	図 78 図版 51	柄杓 部材	2 D10y2	236 中層	アスナロ属	径 6	高 5.0	厚さ 0.1を 3重	側板	樺綴じ 保存処理
W78	図 78 図版 52	柄杓 部材	2 E10b2	236 下層	アスナロ属	径 8.5	径 7.8	厚さ 0.5	底板	保存処理
W79	図 78	曲物 部材	2 D10w2	236 下層		径 40.0	高 6.5	厚 0.2	側板	10個の破片に分断 木釘 樺



遺物観察表 (木製品)

樹種同定は、保存処理作業をおこなった(株)吉田生物研究所によるものである。

報告書 番号	図 図版	種別	調査区 地区	遺構 層位	樹種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	残存率	備考
W80	図78 図版52	桶 部材	2 E10b3	236 下層		20.6以上	4.1以上	1.4	底板 20%	釘穴
W81	図78 図版52	アカトリ(拘 具)	2 E10b2	236 下層	クワ属	26.3以上	3.9~17.1	1.5~4.3		破損が著しい 保存処理
W82	図79 図版52	下駄	2 D10w2	236 下層	トネリコ属	17.3	8.7	1.3~4.7		方形孔 保存処理
W83	図79 図版52	? 部材	2	236 下層	コウヤマキ	41.6	2.0~4.8	3.0~4.0		柄孔 釘穴 保存処理
W84	図79 図版52	? 部材	2	236 下層	マツ属 (二葉松類)	47.0	3.5	3.5	垂木?	釘穴 方柱状 保存処理
W85	図79 図版52	? 部材	2 E10b3	236 下層		26.2以上	4.4	1.6		板状 孔1
W86	図79 図版52	? 部材	2 E10b2	236 下層		18.3以上	6.2	0.2~0.6		孔2 炭化
W87	図79 図版52	?	2 E10b2	236 下層		23.4	1.7	1.3		棒状
W88	図79 図版52	建築部材 柱	2 E10b2	236 下層	マツ属 (二葉松類)	76.1以上	24.0	22.9		方形 柄穴 炭化 保存処理
W89	図79 図版52	建築部材 ?	2 D10w2・x2	236 下層	マツ属 (二葉松類)	217.4	11.7	8.8		切欠き 柄穴 保存処理

遺物観察表 (金属製品・銭貨)

報告書 番号	図 図版番号	種類	調査区 地区	遺構 層位	長 cm	幅 cm	厚 cm	重さ g	備考
M1	図38 図版38	鉄製品 刀子	2 D10t2	260 下層	13.1 以上	1.4	0.2	23.8	刃部先端部破損 柄部に目釘孔
M2	図48 図版43	銅製品 鞘金具?	1 E9i20	001 下層	6.65	3.7	2.4	28.4	厚さ0.1cmの板を輪状に合わせる 剣頭状・ハート形の装飾文様
M3	図58 図版46	鉄製品 釘	2 D9q24	259 下層	19.7	0.55	0.45	24.0	断面方形 頭部捶い折れ
M4	図58 図版46	鉄製品 釘	2 D9q24	259 下層	8.9	0.5	0.5	9.1	断面方形 頭部捶い折れ
M5	図58 図版46	鉄製品 合い釘	2 D9q24	259 下層	12.35	0.7	0.7	32.1	断面方形 朱?付着
M6	図58	銅製品 切羽	2 D9q25	259 下層	3.7	2.1	0.05	2.2	楕円形 薄い板を切り抜く 孔は縦2.7cm・幅0.8cm
M7	図71 図版49	合金製 小柄	1	131 底	8.1	1.4	0.45	10.0	厚さ0.05mmの板を袋状にする 片面に「大福浪介」の銘 合金(真鍮?)製
M8	図78	鉄製品 刀子	2 E10b2	236 下層	7.2以上	1.25	0.15	3.2	刃部先端部破損 柄部に目釘孔2箇所 1箇所は釘残る
M9	図82 図版53	銭貨 開元通寶	2 E10b2	001 下層	2.27	2.29	0.10	2.8	鑄上がり悪く銭文不鮮明 裏の縁はほとんどない 模鑄銭? 初鑄621年
M10	図82 図版53	銭貨 熙寧元寶	1 E9h20	001-a 上層	2.43	2.42	0.11	1.5	篆書 鑄上がり悪く銭文不鮮明 裏の縁はほとんどない 模鑄銭? 初鑄1068年
M11	図82 図版53	銭貨 熙寧元寶	2 D9o17	259 下層	2.40	2.39	0.11	3.71	真書 裏の縁は全くない 模鑄銭? 初鑄1068年
M12	図82 図版53	銭貨 元豐通寶?	2 D10x2	236 下層	2.43	2.27 以上	0.10	1.93	篆書 鑄上がり悪く銭文不鮮明 裏の縁はほとんどない 模鑄銭? 初鑄1078年~1085年
M13	図版53	銭貨	1 D9	026 礫層				8.89	4~5枚が付着

遺物観察表 (瓦)

色調は土色帖を基にし、マンセル記号を省略している

報告書 番号	図 版 番号	種類	調査区 地区	遺構 層位	長 cm	幅 cm	厚 cm	技 法	色 調	胎 土	備 考
T1	図 34 図版 36	軒丸瓦	2	263	直径 (14.2)		3.4	外区:線鋸歯文 中区:珠文 内区:複弁蓮華文	内外断:灰白	0.5mm以下の灰色微粒を少量含む	白鳳時代
T2	図 34	軒丸瓦	2	263	直径 6.7以上		2.5	内区:複弁蓮華文	内外断:灰白・灰黄	1mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を微量含む	白鳳時代
T3	図 34	平瓦	2	263	5.8 以上	6.3 以上	2.2	凸面縄目 凹面ナデ?	内外:灰白・にぶい橙 断:灰白・黄橙	0.5mm以下の灰色粒・赤色酸化粒を多く含む	
T4	図 34	平瓦	2	263	6.9 以上	5.3 以上	2.6	凸面ナデ? 凹面布目	内外:浅黄橙・にぶい橙 断:にぶい橙	1mm以下の赤色酸化粒を少量含む	
T5	図 35 図版 36	平瓦	1	042 東	10.6 以上	6.3 以上	2.0	凸面縄目 砂付着 凹面布(網)目	内外断:灰白	3mm大の白色礫1個、1mm以下の黒・白色粒を多く含む	硬質 混入遺物
T6	図 35	平瓦	2	289	8.4 以上	10.8 以上	2.0	凹凸面:板状工具ナデ	内外:灰 断:灰褐	緻密 砂粒をほとんど含まない	須恵質 混入遺物
T7	図 35 図版 36	平瓦	2	295	9.3 以上	9.0 以上	2.2	凸面縄目 凹面布目	内外断:灰白・淡黄	1mm以下の灰・黒色粒、赤色酸化粒を多量に含む	混入遺物
T8	図 35 図版 36	平瓦	1 E9f15	082	19.2 以上	17.0 以上	2.5	凸面細かい縄目 凹面布目	内外断:灰白	3mm以下の黒色粒を多く含む	混入遺物
T9	図 35 図版 36	平瓦	1 E9i19	001 上層	19.5 以上	14.7 以上	2.7	凸面縄目 凹面布目	内外:灰 断:灰白	1mm以下の白色微粒を中量含む	混入遺物
T10	図 35	丸瓦	1 E9	057 北	14.0 以上	10.6 以上	2.0	凸面ナデ? 凹面布目 縦方向1条の縄目	内外断:灰白	0.5mm以下の灰色微粒と赤色酸化粒を多く含む	混入遺物
T11	図 80 図版 53	軒丸瓦	1 E9e19	001-b 上層	瓦当径 13.4		長さ 20.5 以上	内区:宝相華文 外区:二重圏線内に珠文 24個	外:灰白・灰 断:灰白	3mm以下の灰色粒を中量含む	混入遺物か 鎌倉～南北朝時代
T12	図 80 図版 53	軒丸瓦	2 D9p15	259 下層	瓦当径 16.5		長さ 12.5 以上	三巴 尾は長く繋がる 珠文 26個 丸外面ヘラ ミガキ・内面コビキ A	外:黒 内:灰黄	1mm以下の灰色微粒を少量含む	室町時代
T13	図 80 図版 53	軒丸瓦	2	261 井戸枠内 埋戻し一括	瓦当径 (14.5)		長さ 31.3 以上	三巴 尾は長く繋がる 珠文 26個か 丸外面ヘラ ミガキ・内面コビキ A・布 目 釘穴あり	外:灰 断:灰白	1mm以下の灰・白色粒を中量含む	室町時代
T14	図 80 図版 53	軒丸瓦	2 D9p15	259 下層	瓦当径 (16.5)		長さ 16.0 以上	三巴 尾は長く繋がる 珠文 26個か? 丸外面ヘ ラミガキ・内面コビキ A	外:暗灰 断:灰白	1mm以下の灰・白色微粒を微量含む	室町時代
T15	図 80 図版 53	軒丸瓦	1 E9d21	001-b 上層	瓦当径 15.5			三巴 尾は長く繋がる 珠文 24個か?	外:灰・暗灰・灰白 断:オリーブ黒	2mm以下の灰色粒を多く含む 1mm以下の白色微粒を少量含む	室町時代
T16	図 80	軒丸瓦	1 E9d21	001-b 上層	瓦当径 (15.0)		長さ 11.0 以上	三巴 尾は長く繋がる	外:灰 断:灰・灰白	2mm以下の灰色微粒を多く含む	室町時代
T17	図 80	軒平瓦	2 E10b1	001 上層	瓦当幅 130以上	瓦当高 3.6	長さ 8.9 以上	唐草文 顎幅広い	外:灰白・灰・にぶい黄褐 断:灰白	3mm以下の褐・白・黒色粒を多く含む	混入遺物か 鎌倉時代?
T18	図 80 図版 53	軒平瓦	2 D9	148	瓦当幅 14.5以上	瓦当高 3.9以上	長さ 8.0 以上	郭線内連珠文	外:灰・暗灰 断:灰白	1mm以下の灰・黒・白色粒を多く含む	混入遺物か 鎌倉～南北朝時代
T19	図 80	軒平瓦	1 E9	001 サブトレ2	瓦当幅 8.0以上	瓦当高 3.8以上		郭線内唐草文	外:灰 断:灰白	1mm以下の白・灰色粒を少量含む	混入遺物か 鎌倉～南北朝時代
T20	図 80	軒平瓦	1 E9g19	001-b 中層	瓦当幅 25.5	瓦当高 3.5	長さ 17.4 以上	不均整変形唐草文 中心飾り宝珠	外:灰 断:灰白	2mm以下の白・灰色粒を少量含む 1cm大の褐色礫1個	室町時代
T21	図 80 図版 53	軒平瓦	1 E9g19・ h19	001-b 上・中層	瓦当幅 24.5	瓦当高 3.5	長さ 19.6 以上	不均整変形唐草文 中心飾り宝珠	外:暗灰・灰白 断:灰白	1mm以下の灰・褐・白色微粒を中量含む	室町時代
T22	図 80	軒平瓦	1 E9c22	001-b 上層	瓦当幅 14.2以上	瓦当高 4.1	長さ 17.2 以上	唐草文 左右縁幅広い	外:灰・暗灰 断:灰	1mm以下の灰色粒を微量含む	室町時代
T23	図 80 図版 53	軒平瓦	2 D9o17・ 18	259 下層	瓦当幅 22.4	瓦当高 4.5	長さ 17.3 以上	均整唐草 中心飾り?	外:灰・暗灰 断:灰白	3mm以下の灰色粒を少量含む	室町時代
T24	図 80	丸瓦	2 E9b25	001 上層	長 31.3	13.5	1.8	外面板状工具ナデ 内面コビキ A 吊り紐	外:灰 断:灰白	1mm以下の灰色微粒を少量含む	室町時代
T25	図 80	丸瓦	1 E9c20	001-b 中層	長 30.3	(14.0)	2.3	外面ヘラミガキ 内面布目コビキ A	外:灰 断:灰白	2mm以下の灰色粒を多く含む	室町時代
T26	図 81 図版 53	丸瓦	2 E9b25	001 中・下層	長 33.0	14.2	2.2	外面板状工具ナデ 内面コビキ A 吊り紐	灰・灰白 断:灰白	1mm以下の灰色微粒を多く含む	室町時代
T27	図 81 図版 53	丸瓦	1 E9d20	001-b 中層	長 32.0	14.9	2.2	外面板状工具ナデ 内面コビキ A 吊り紐	灰・暗灰・灰白 断:灰白	1mm以下の灰色粒を中量含む	室町時代
T28	図 81	丸瓦	1 E9b25	001 中層	長 31.5	13.9	2.2	外面板状工具ナデ 内面コビキ A 吊り紐	灰・灰白 断:灰白	1mm以下の灰色粒を少量含む	室町時代
T29	図 81 図版 53	平瓦	1 E9d21	001-b 上層	30.5	26.0	2.2	板状工具ナデ	外:灰・灰白 断:灰白	1mm以下の灰色粒を少量含む 9mm大の黒色礫2個 3～5mm以下の黒色礫を少量含む	室町時代
T30	図 81 図版 53	平瓦	1 E9c22	001-b 上層	30.1	24.9	2.25	板状工具ナデ	外:灰・暗灰・黒 断:灰白・灰白	1mm以下の灰・黒色粒を多く含む	室町時代
T31	図 81 図版 53	平瓦	1 E9b25	001 上層	長 29.8	25.4	2.2	板状工具ナデ	外:灰・暗灰・灰白 断:灰・灰白	1mm以下の灰色粒を多く含む	室町時代
T32	図 81 図版 53	平瓦	1 E9d21	001-b 上層	30.3	25.7	2.3	板状工具ナデ	外:灰 断:灰白	1mm以下の灰色粒を微量含む	室町時代
T33	図 81	雁振瓦	2 E10b2	236 下層	長さ 24.1以上	13.5 以上	1.1	コビキ A	外:灰白・灰・暗灰 断:灰白	1cm大の石英1個 7mm大の黒色礫1個、5mm以下の石英、黒・糜・白色粒を多く含む	室町時代?
T34	図 81 図版 53	鬼瓦	1 E9f18	001-b 上層	タテ 18.5以上			ヨコ 20.4 以上	外:灰 断:灰白・灰白	1mm以下の灰色粒を多く含む	室町時代
T35	図 81 図版 53	鬼瓦	1 E9g19	001-b 下層	15.8以上			13.7 以上	外:灰 断:灰白	1mm以下の黒・灰色粒を少量含む	室町時代



1. 遺跡近景  
(南東上空から)



2. 調査区1  
(南上空から)



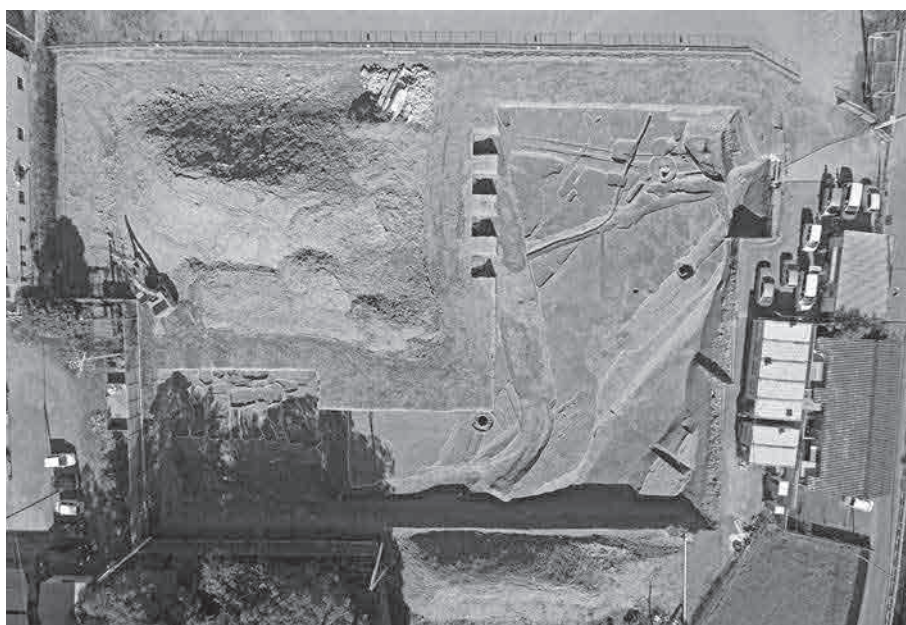
3. 調査区1  
(上空から)







1. 調査区2  
(北上空から)



2. 調査区2  
(上空から)



3. 調査区2  
(東上空から)





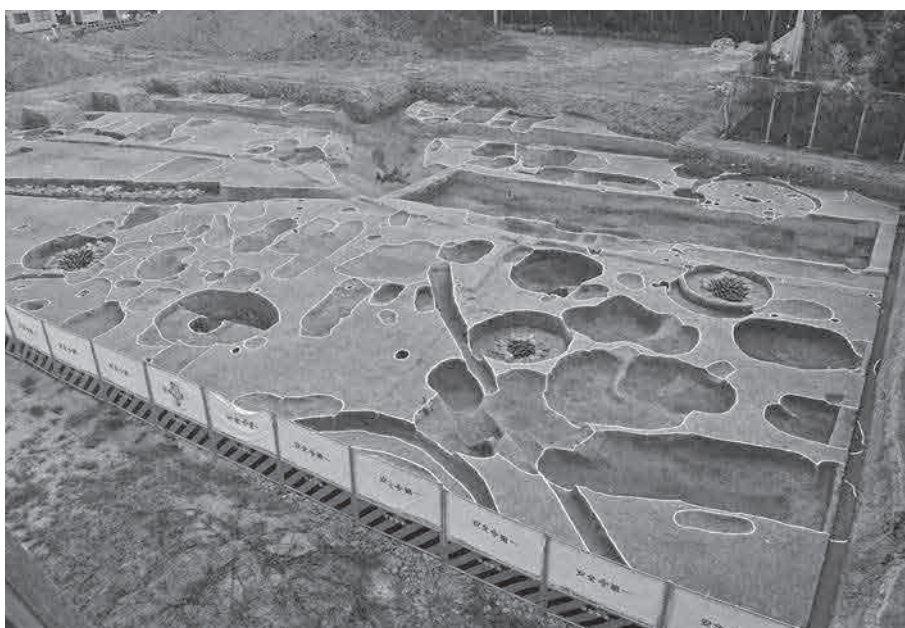
1. 調査区1西側  
遺構検出状況  
(北から)



2. 調査区1東側  
遺構検出状況  
(南東から)



3. 調査区1全景  
(北西から)









1. 調査区1全景  
(東から)



2. 002 竪穴建物  
(南から)



3. 002 竪穴建物 断面  
(北から)







1. 003 竪穴建物  
(上空から)



2. 003 竪穴建物  
遺物出土状況  
(南から)



3. 003 竪穴建物内  
172 土坑断面  
(南から)







1. 003 竪穴建物内  
036 土器棺墓  
(南から)



2. 004 竪穴建物  
(北から)



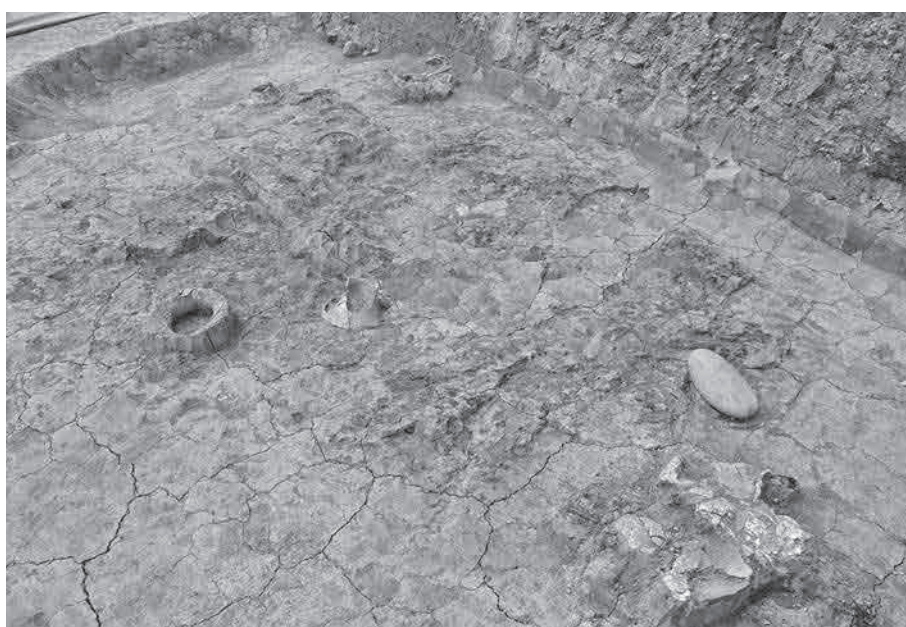
3. 004 竪穴建物 断面  
(西から)



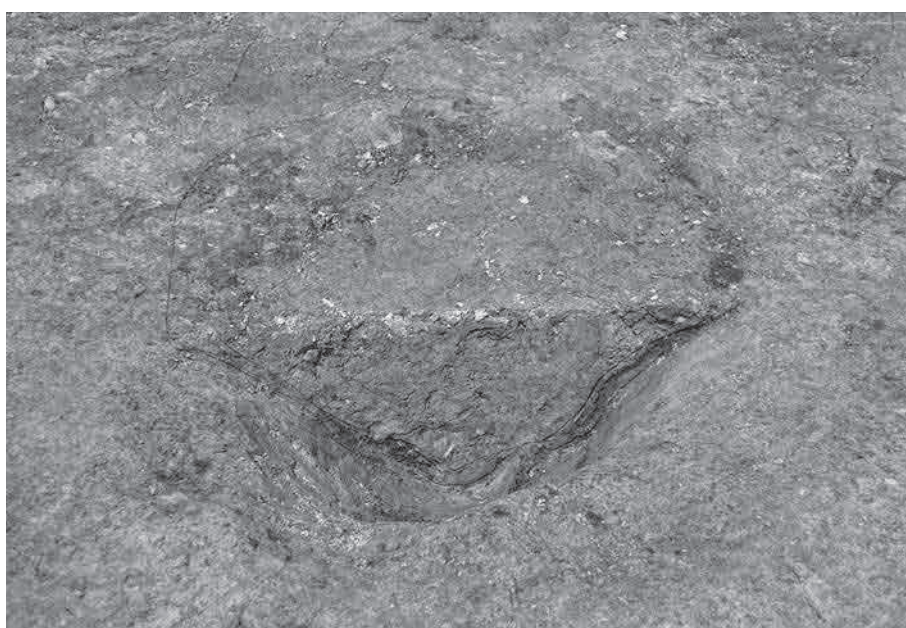




1. 024 竪穴建物  
(東から)



2. 024 竪穴建物  
炭化木・遺物検出状況  
(南東から)



3. 024 竪穴建物内  
153 土坑断面  
(南西から)



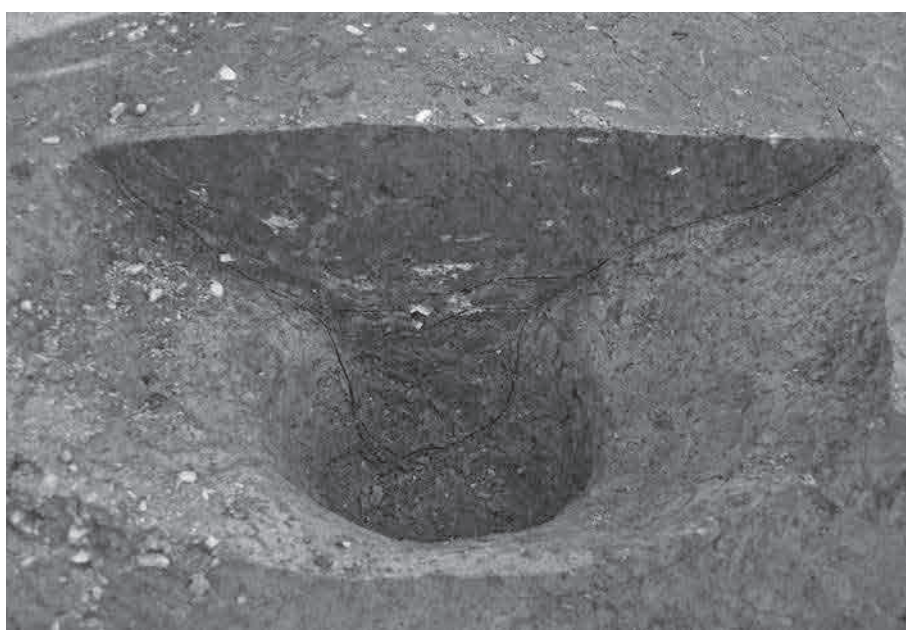




1. 028 竪穴建物  
(西から)



2. 028 竪穴建物内  
143 土坑断面  
(南から)



3. 028 竪穴建物内  
145 土坑断面  
(北から)







1. 弥生時代の土坑  
(上空から)



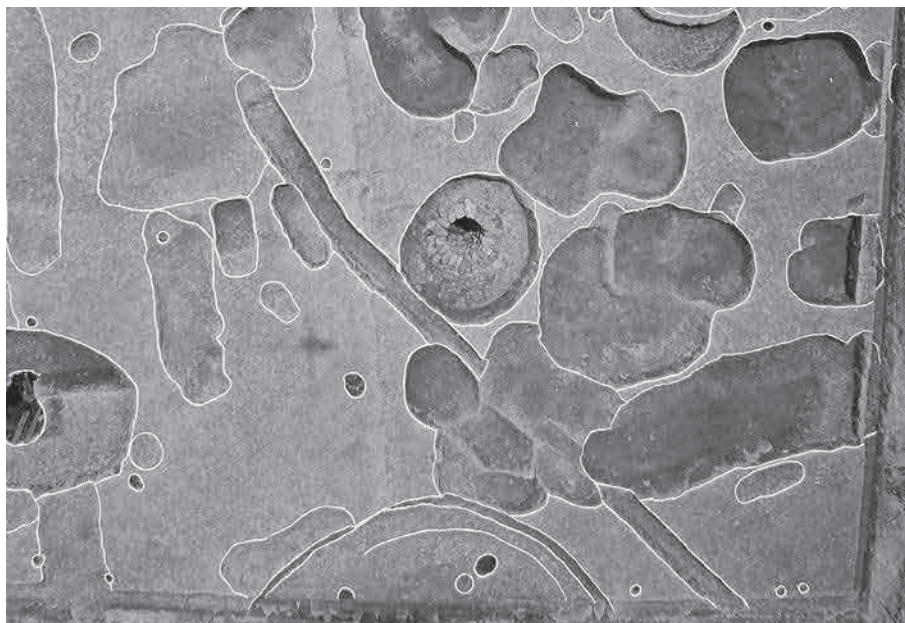
2. 068 土坑  
遺物出土状況  
(北東から)



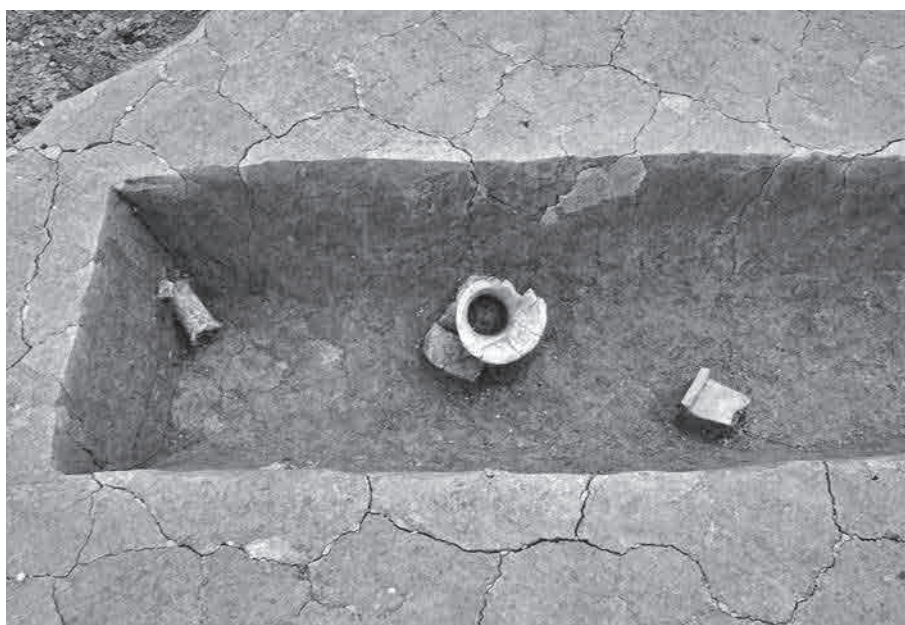
3. 293 土坑 断面  
(南西から)







1. 005 溝  
(上空から)



2. 005 溝  
遺物出土状況  
(南西から)



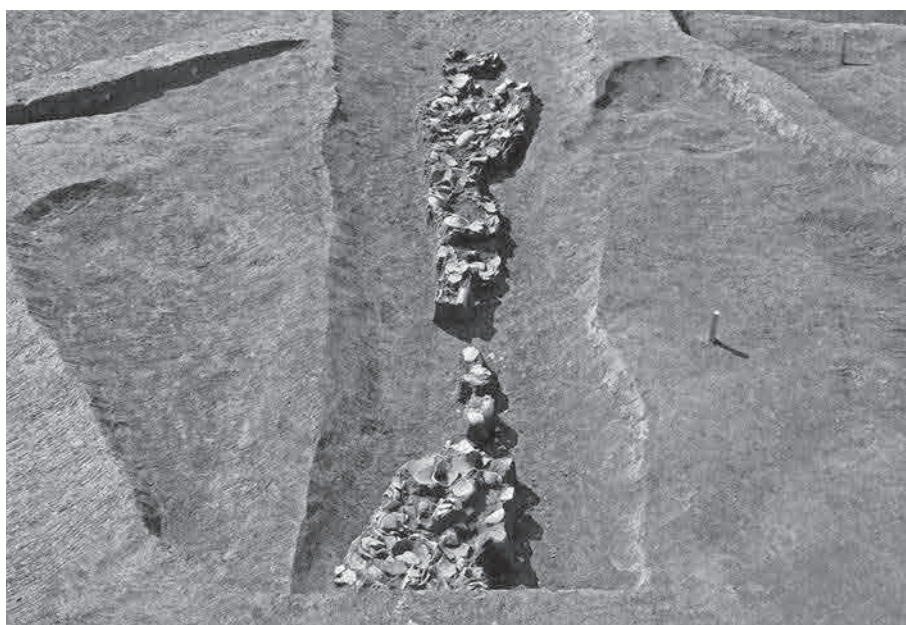
3. 005 溝 断面  
(北西から)



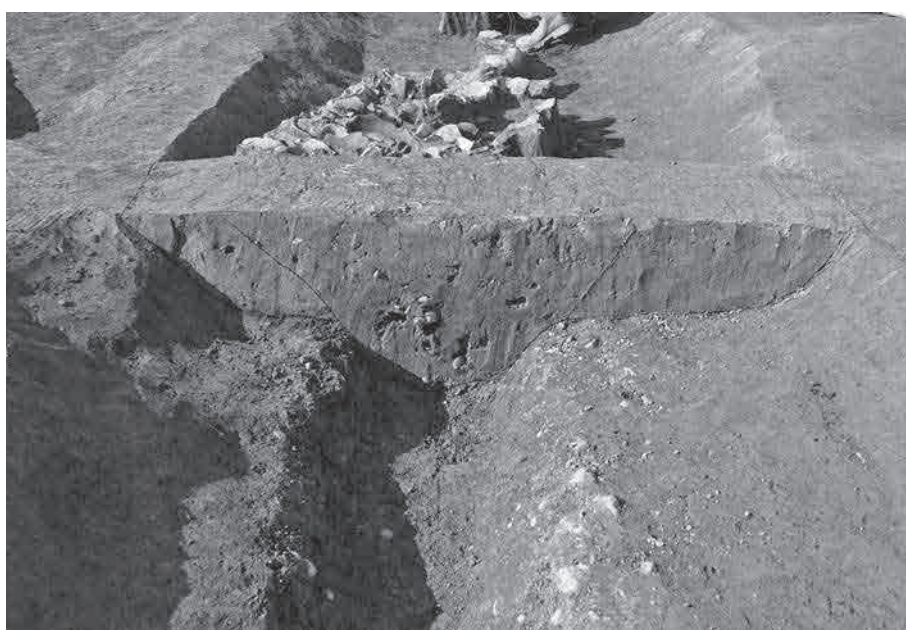




1. 266・270 溝  
(上空から)



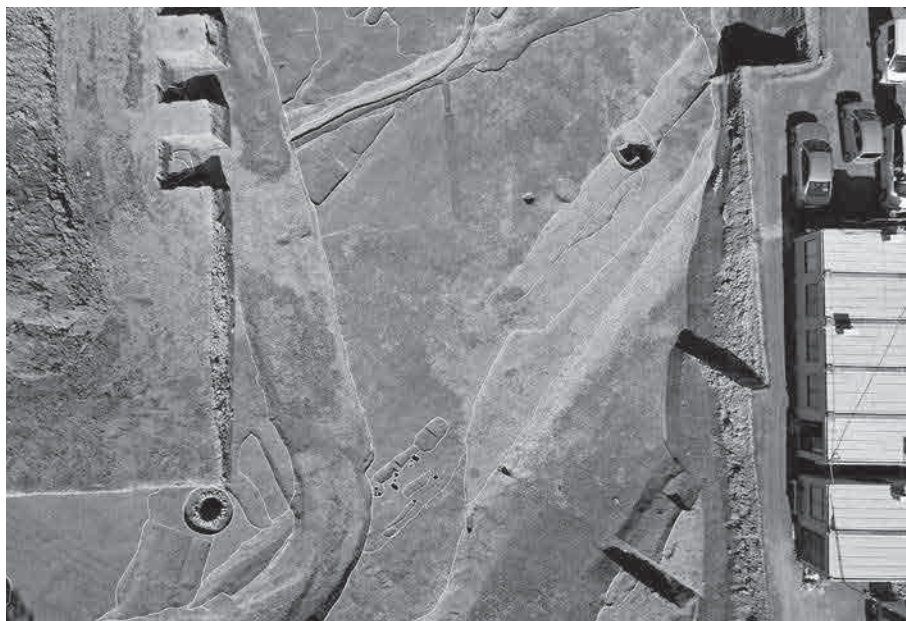
2. 270 溝  
遺物出土状況  
(東から)



3. 266・270 溝 断面  
(東から)



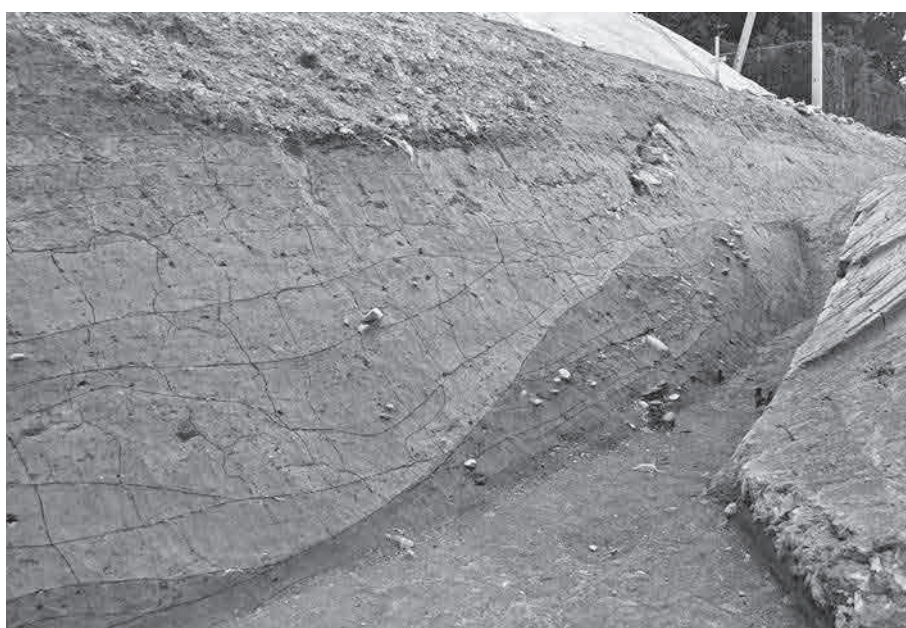




1. 263 溝  
(上空から)



2. 263 溝 断面  
(南西から)



3. 260 谷状遺構 断面  
(東から)







1. 295 井戸  
(北東から)



2. 295 井戸 断面  
(北東から)



3. 295 井戸  
井戸側  
(北東から)



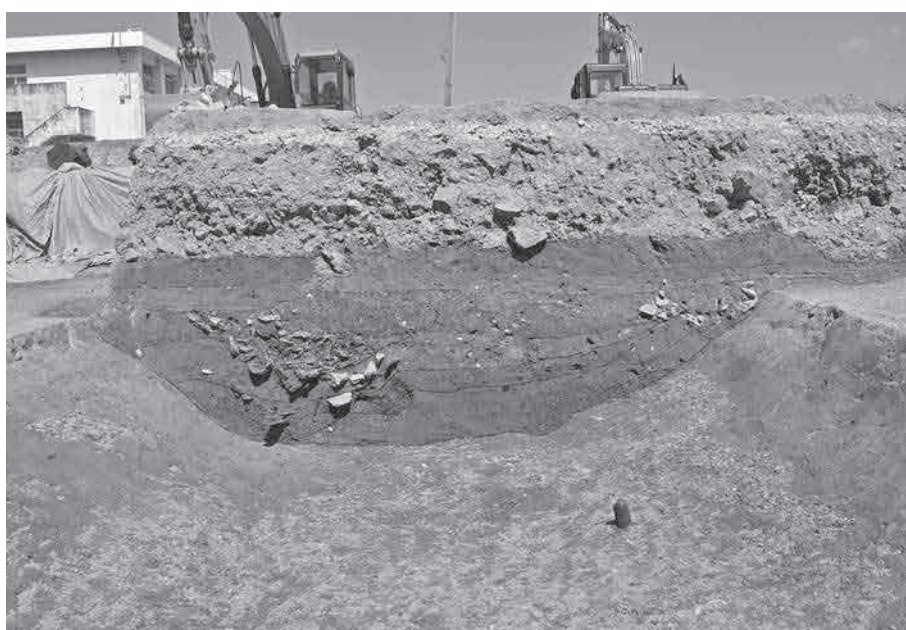




1. 001 堀  
(上空から)



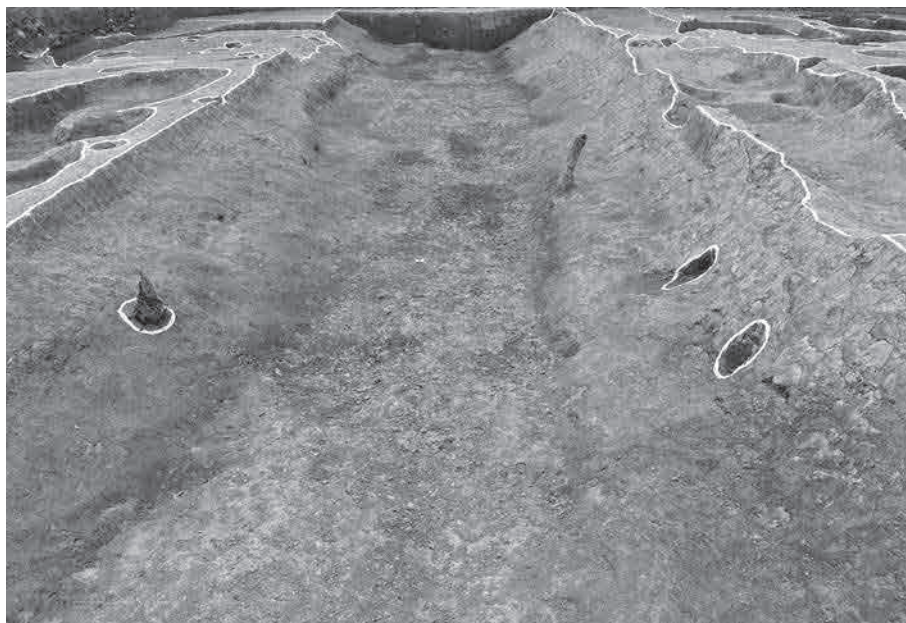
2. 001 堀 A-A' 断面  
(東から)



3. 001 堀 C-C' 断面  
(南から)



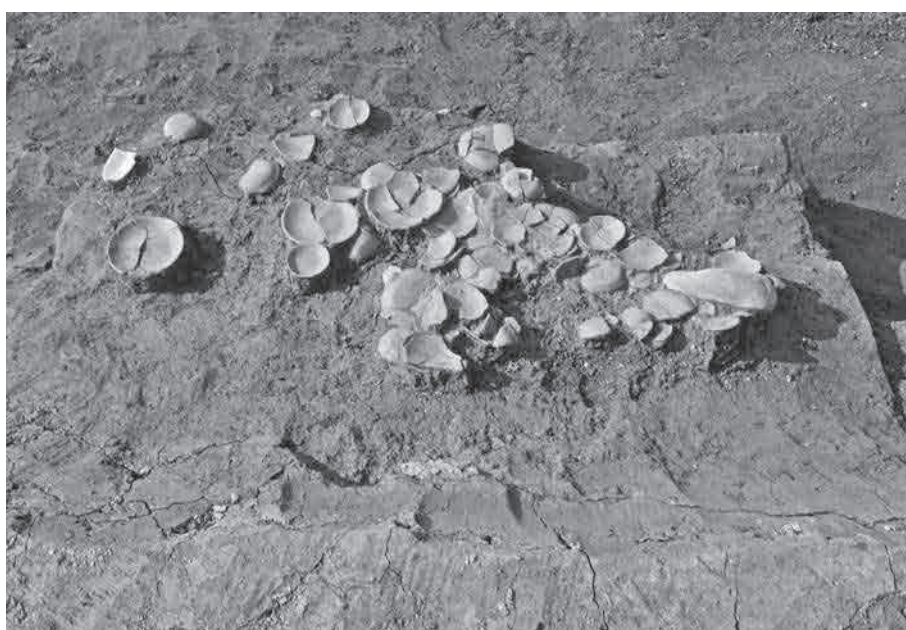




1. 001 堀内  
橋脚遺構  
(東から)



2. 001 堀内  
乱杭遺構  
(北西から)



3. 001 堀内  
土師器皿出土状況  
(北から)



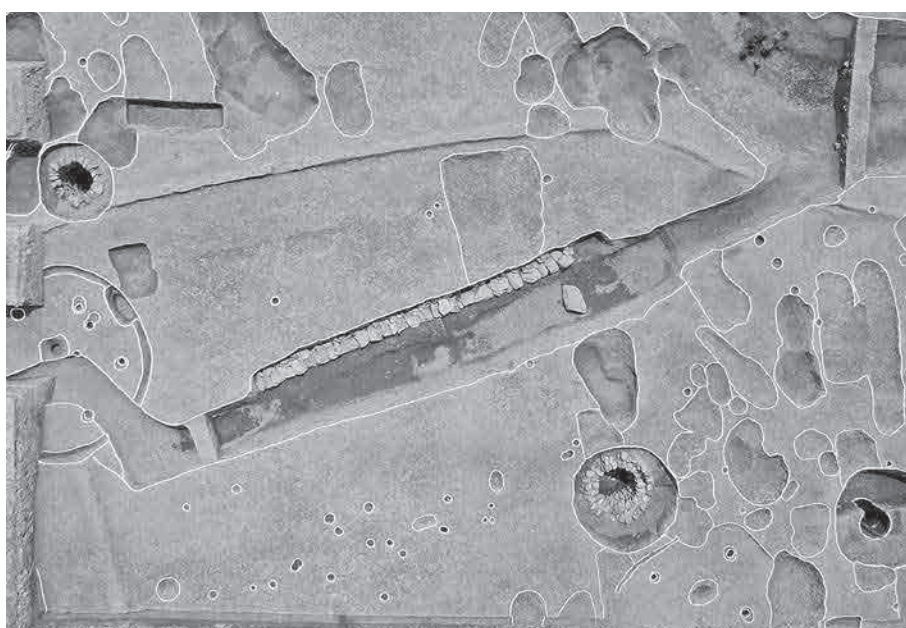




1. 019 堀  
(東から)



2. 019 堀 D - D' 断面  
(東から)



3. 027 堀  
(上空から)





1. 027 堀内  
石垣  
(北西から)



2. 027 堀内  
石垣  
(北東から)



3. 027 堀 断面  
(北東から)









1. 258・259 堀  
(南から)



2. 258・259 堀  
(北から)



3. 258 堀 断面  
(南から)







1. 259 堀 断面  
(南から)



2. 259 堀内  
橋脚遺構  
(南から)



3. 259 堀内  
橋脚遺構  
(西から)



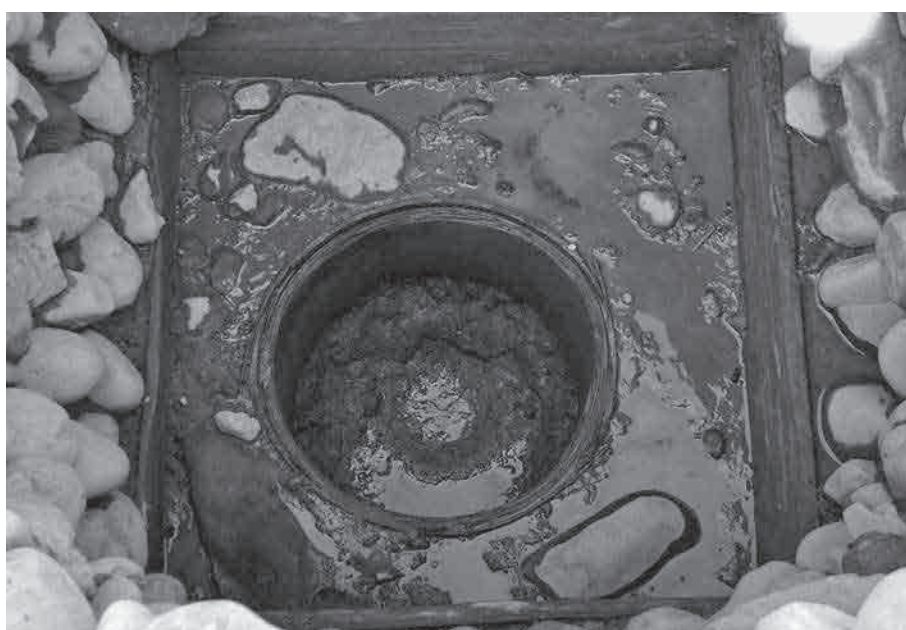




1. 008 井戸  
(西から)



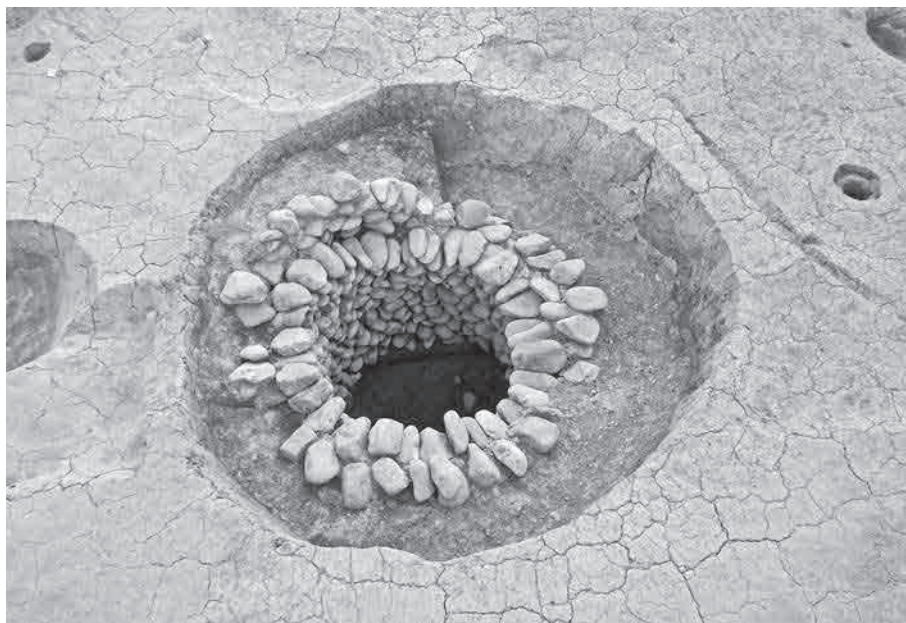
2. 008 井戸 断面  
(西から)



3. 008 井戸内  
方形枠・曲物  
(西から)







1. 026 井戸  
(東から)



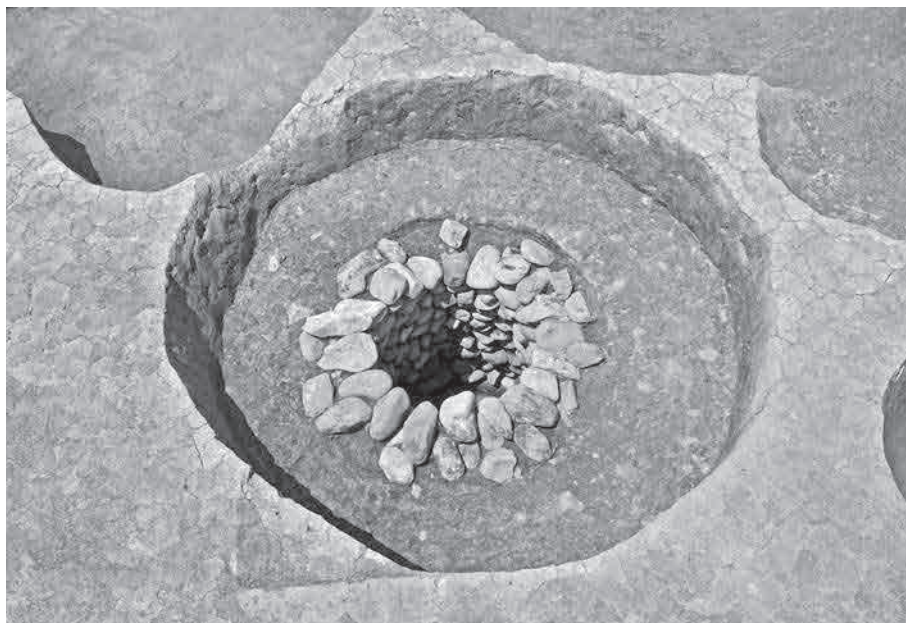
2. 026 井戸 断面  
(北から)



3. 026 井戸内  
(東から)







1. 048 井戸  
(東から)



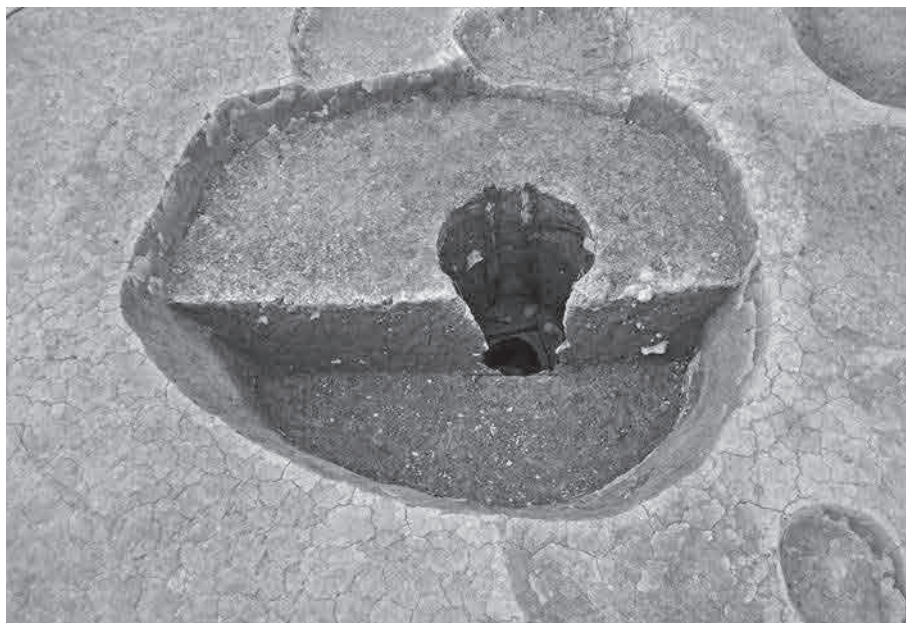
2. 048 井戸 断面  
(東から)



3. 048 井戸内  
(東から)







1. 070 井戸  
(南から)



2. 070 井戸 断面  
(南から)



3. 070 井戸内  
(西から)







1. 131 井戸  
(西から)



2. 131 井戸 断面  
(東から)



3. 131 井戸底  
(東から)



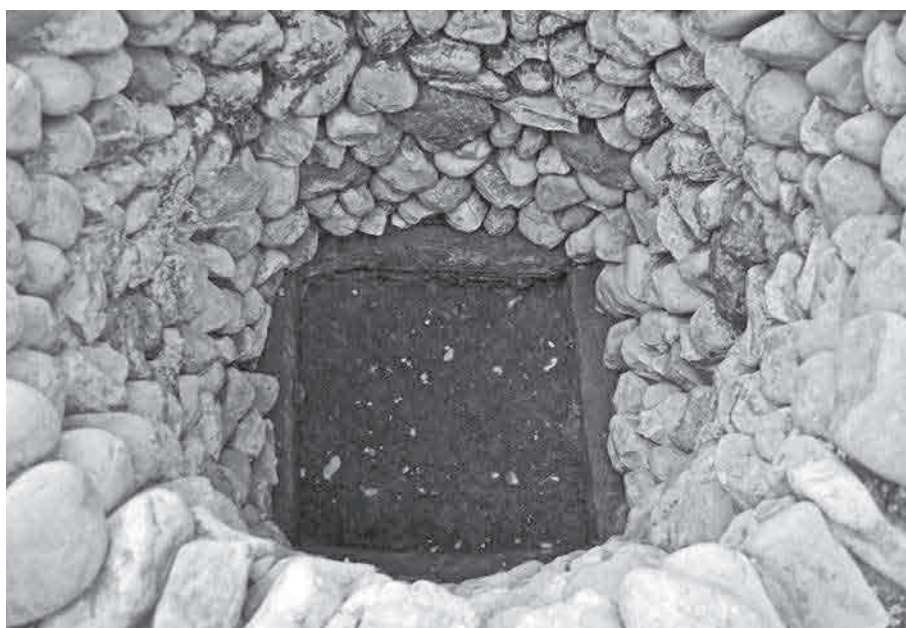




1. 261 井戸  
(南から)



2. 261 井戸 断面  
(東から)



3. 261 井戸内  
(北から)







1. 268 井戸  
(南から)



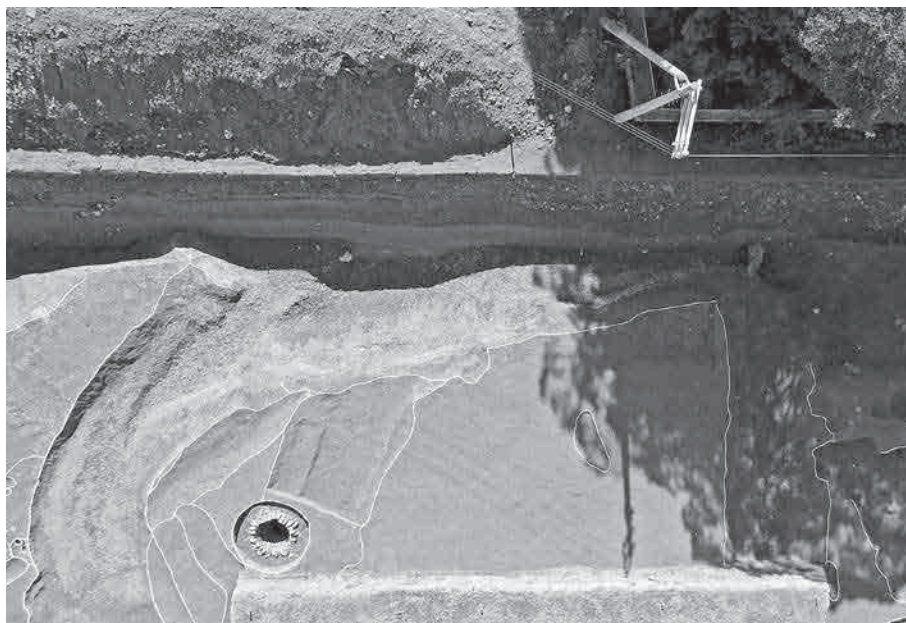
2. 268 井戸 断面  
(南から)



3. 268 井戸底  
(南から)







1. 236 池  
(上空から)



2. 236 池 断面  
(北東から)



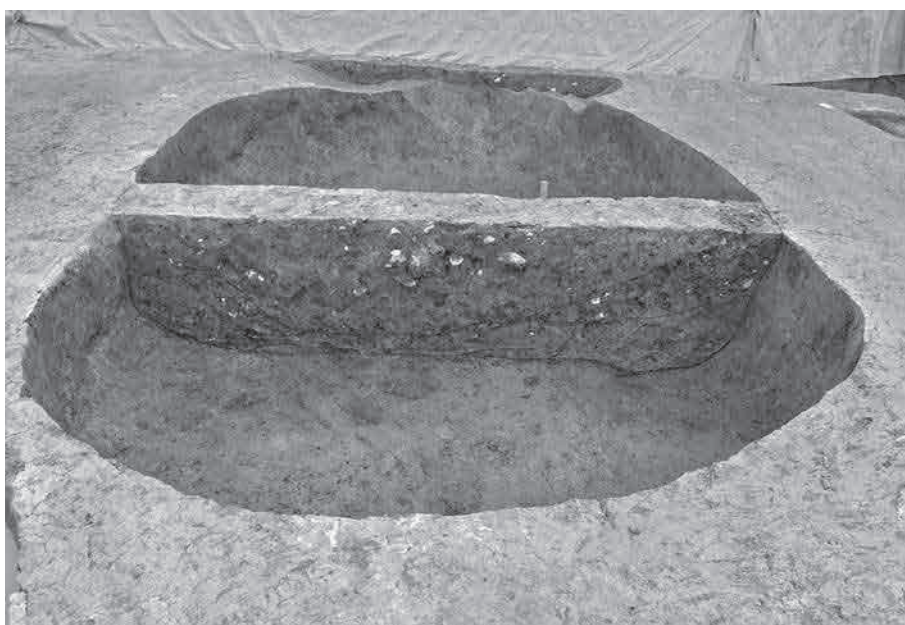
3. 調査区 1 近世土坑群  
(上空から)







1. 調査区2 近世土坑群  
(東から)

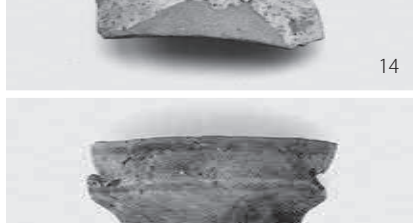
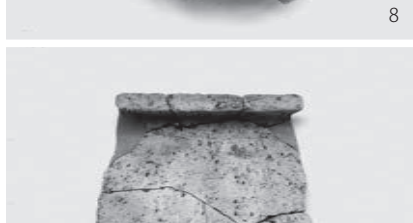
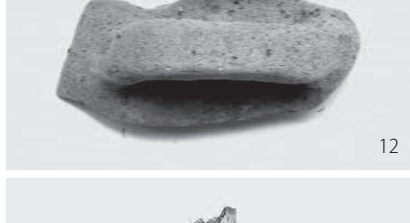
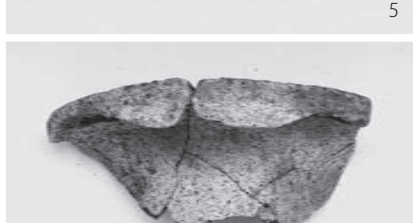
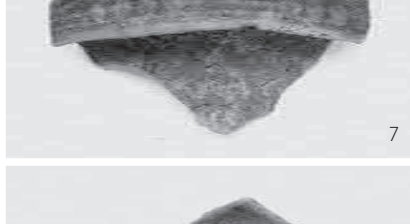
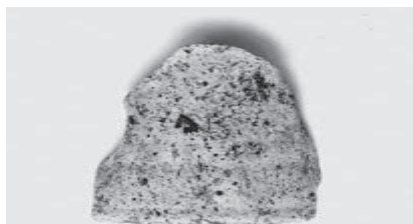
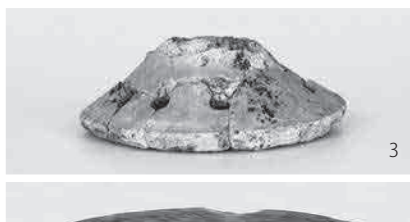


2. 042 土坑 断面  
(東から)



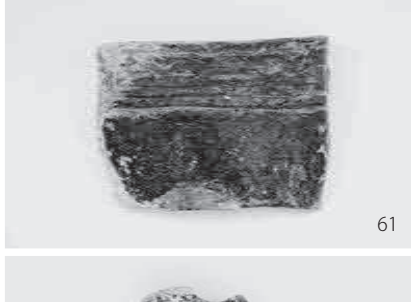
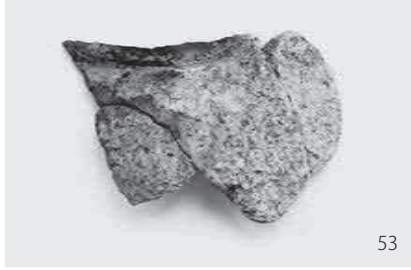
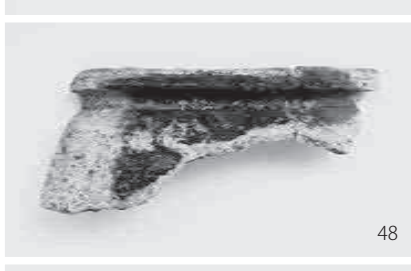
3. 057 土坑 断面  
(南から)







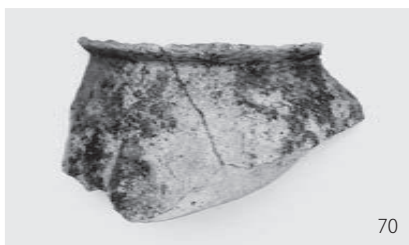








69



70



71



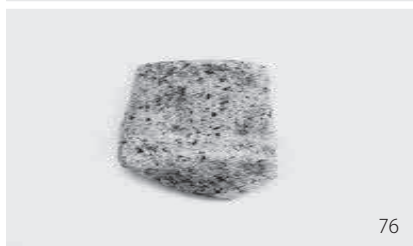
73



74



75



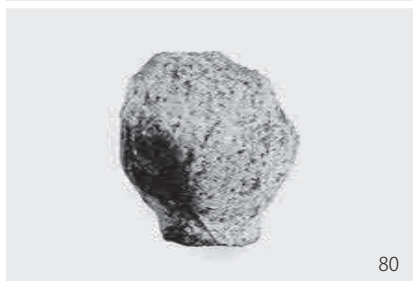
76



77



79



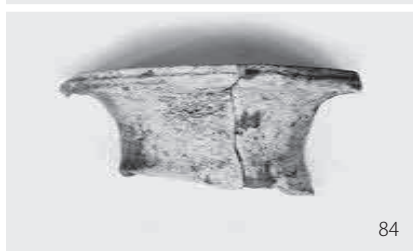
80



82



83



84



85



88



86



87



89



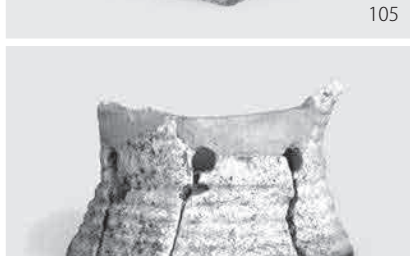
90



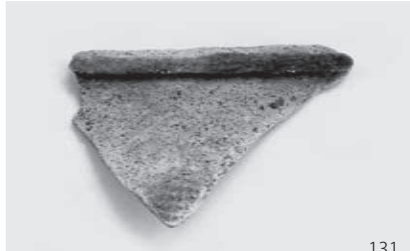
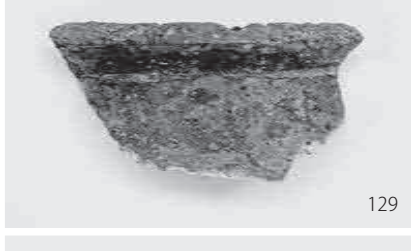
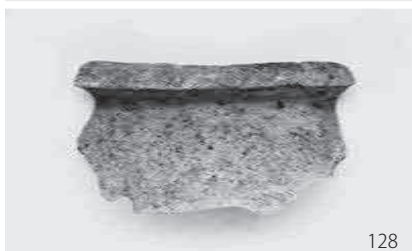
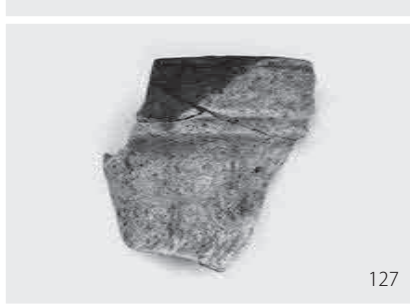
91





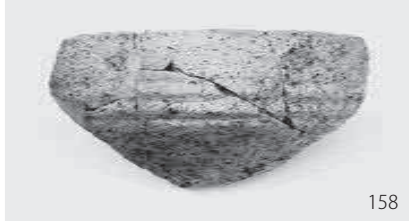










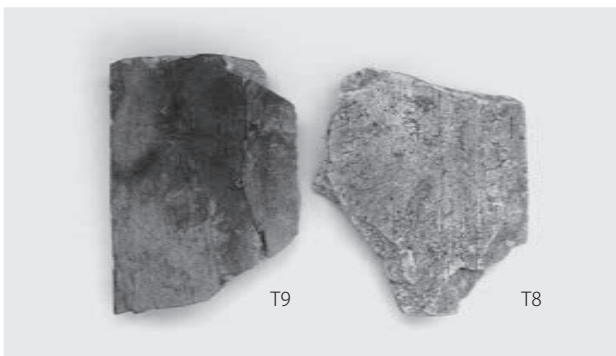
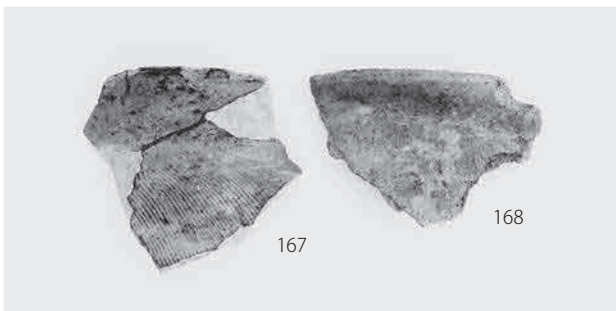




















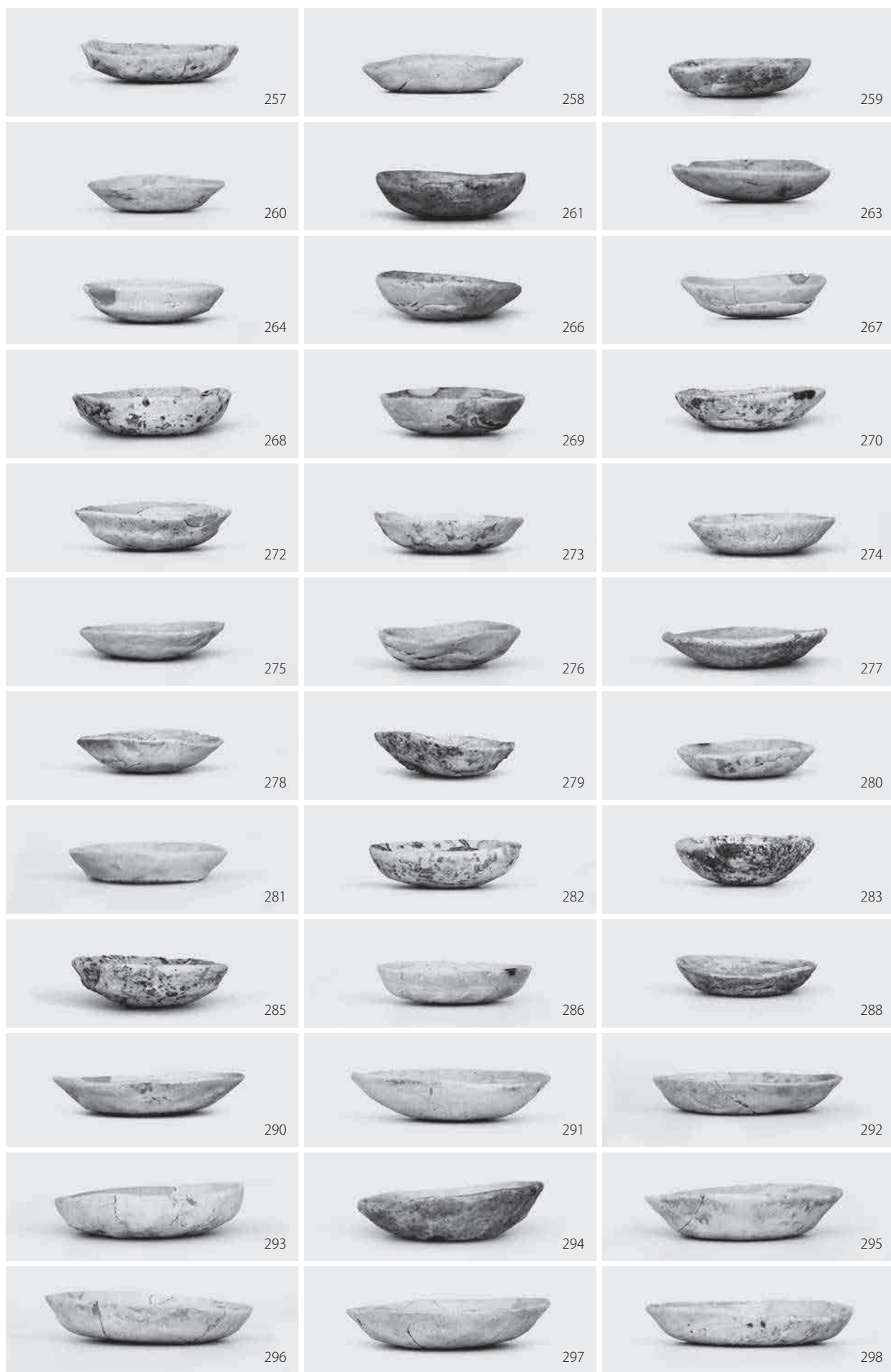










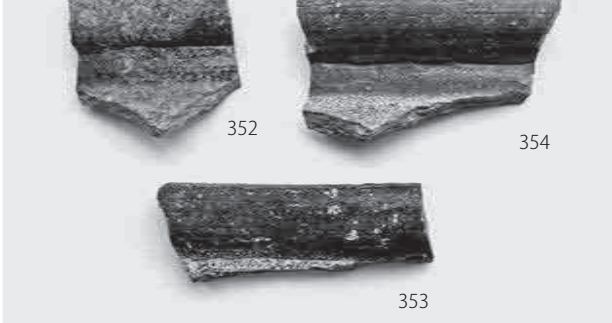
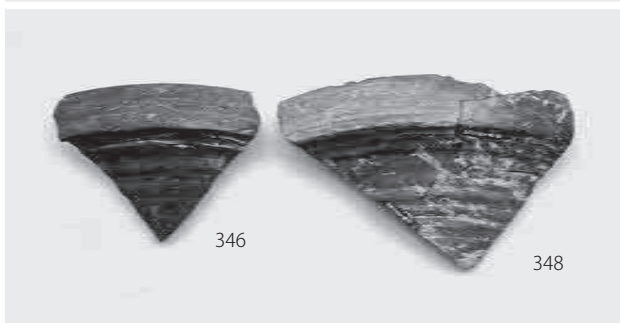
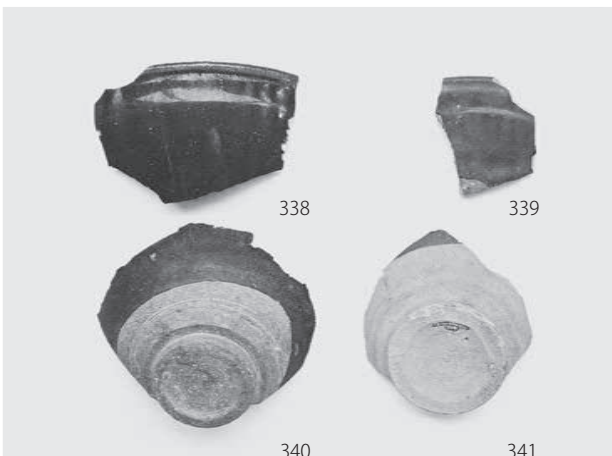
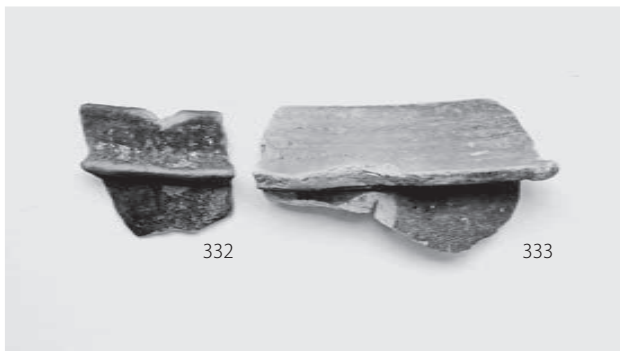
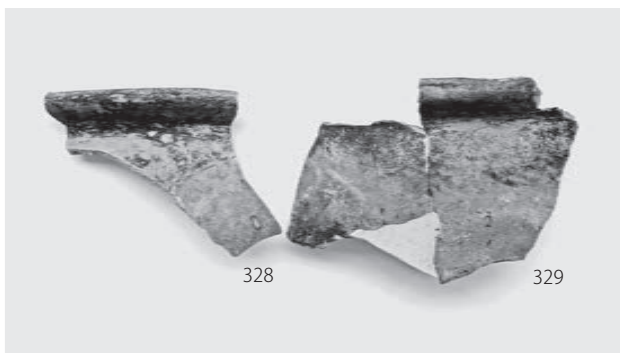




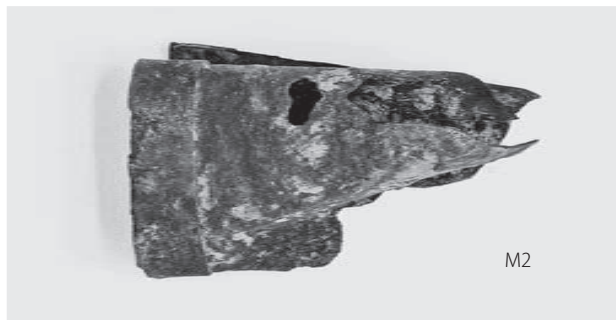
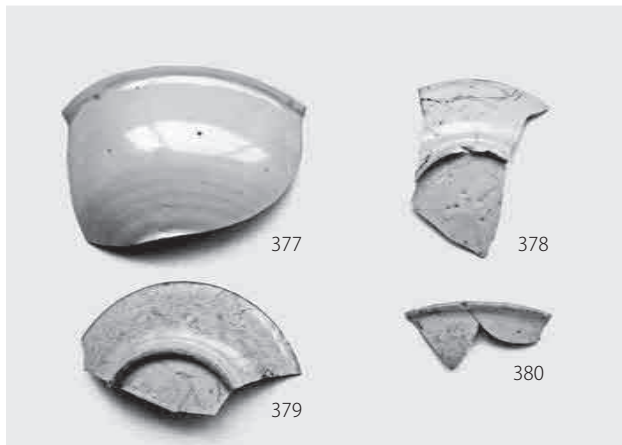
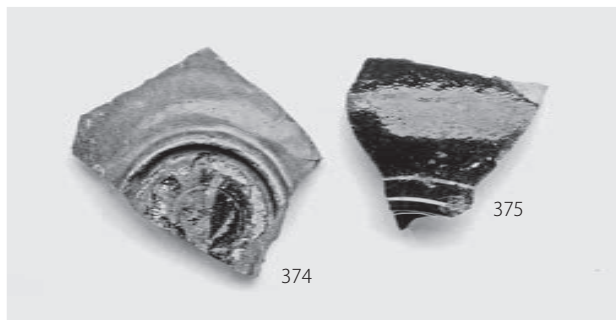
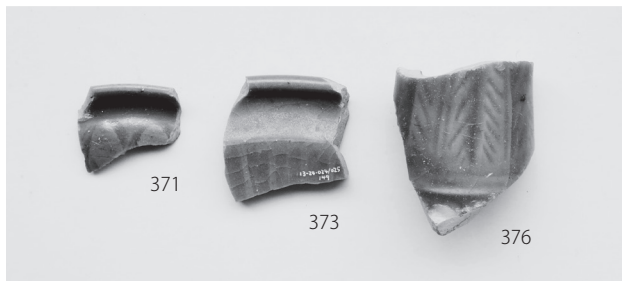
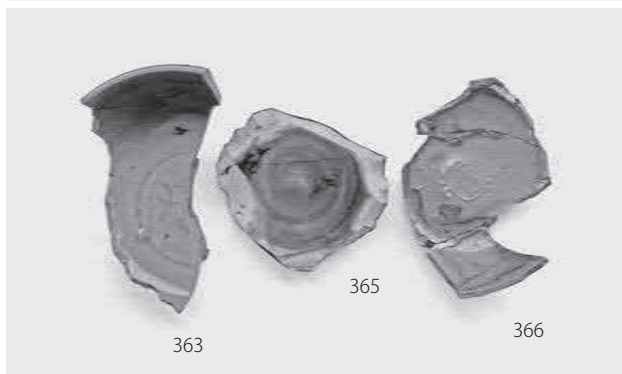
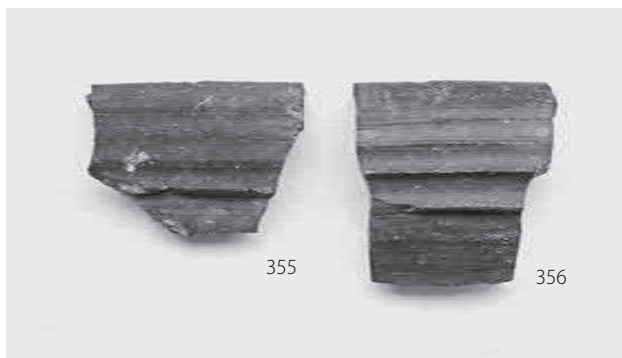






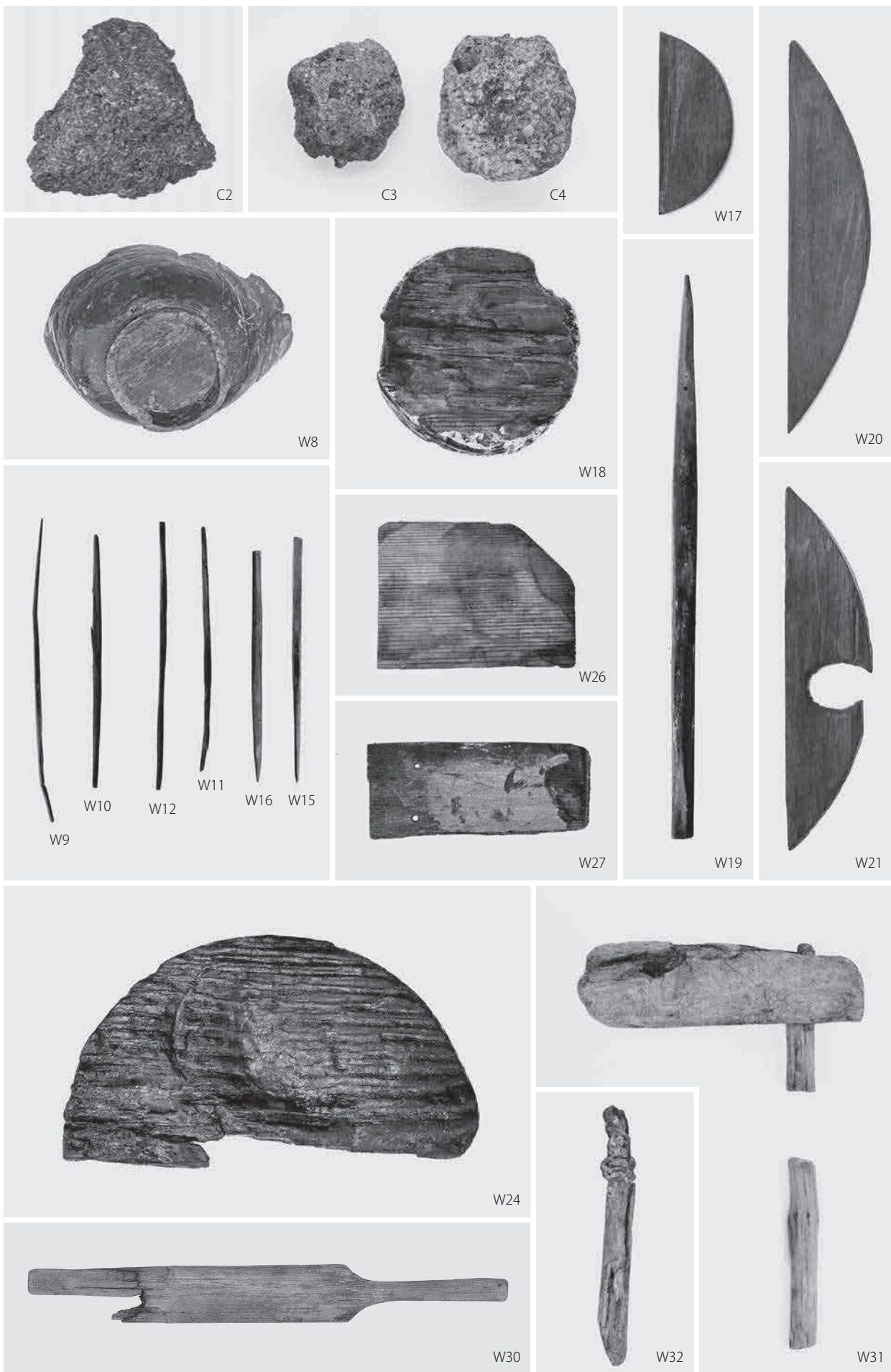




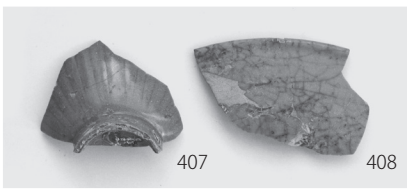
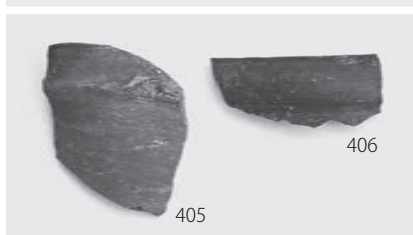
















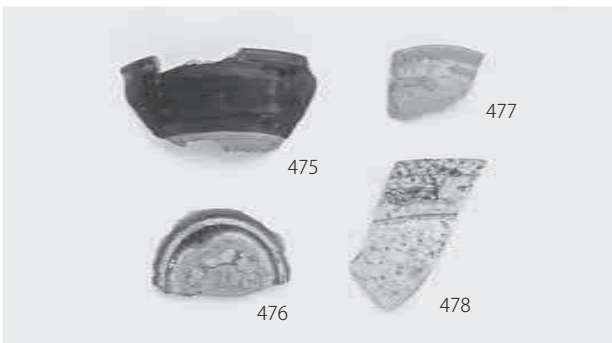




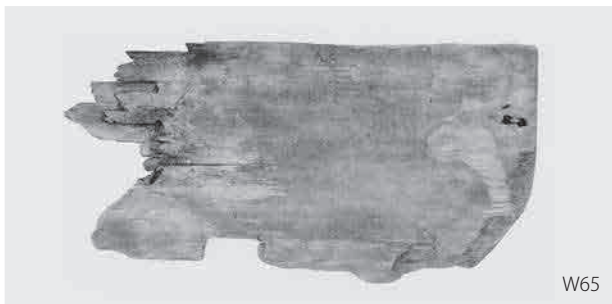






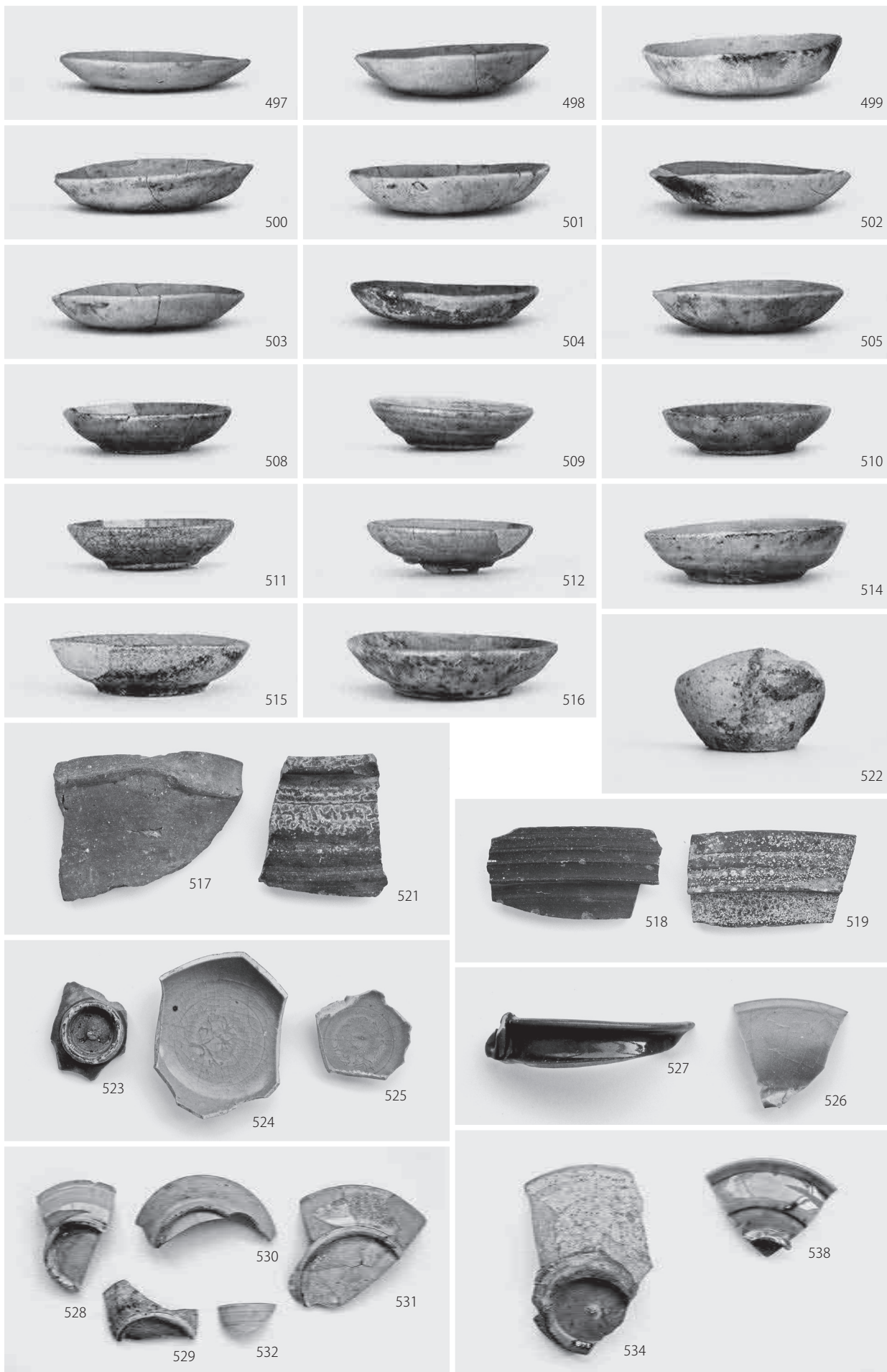










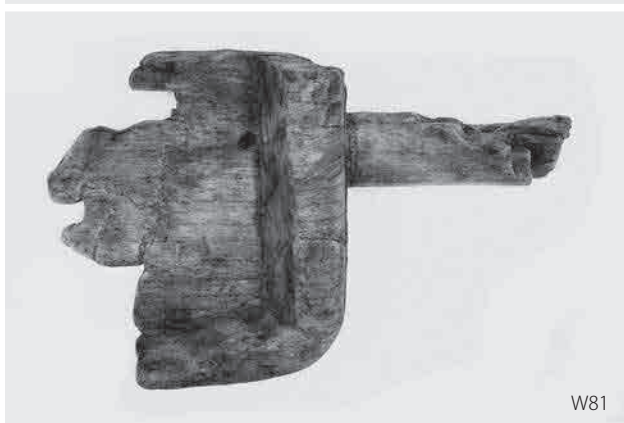




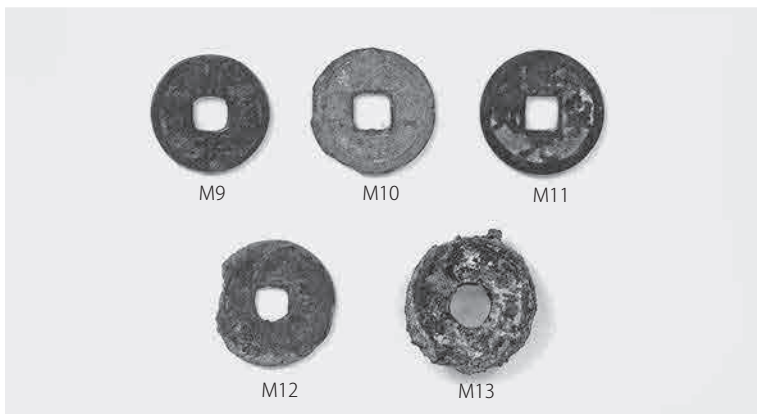
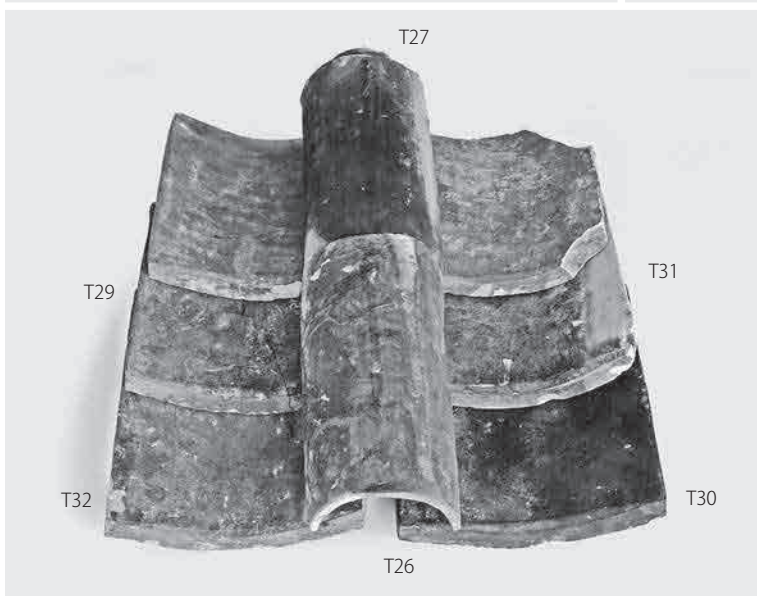
















# 報告書抄録

ふりがな	こまつばらにいせき・ゆかわしやかたあと							
書名	小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡							
副書名	湯川中学校改築工事に伴う発掘調査報告書							
編著者名	川崎雅史							
編集機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒640-8301 和歌山県和歌山市岩橋 1263 番地の1 TEL 073-472-3710							
発行年月日	西暦 2016 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こまつばらにいせき 小松原Ⅱ遺跡	わかやまけん 和歌山県 ごぼうし 御坊市 ゆかわし 湯川町 こまつばら 小松原	30205	024	33° 54' 24"	135° 09' 47"	20130517 ～ 20131226	3,783㎡	中学校改築工事
ゆかわしやかたあと 湯川氏館跡			025					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
小松原Ⅱ遺跡	集落	弥生時代	竪穴建物・溝・土坑・土器 棺墓・柱穴		弥生土器・石包丁・石鏃・ 礫石器		消失家屋を含む竪 穴建物が5棟 集 落を区画する溝	
		奈良時代 (白鳳)	溝		須恵器・土師器・製塩 土器・軒丸瓦・平瓦・ 木製品		白鳳時代の軒丸瓦 日本霊異記の 「別寺」か？	
		鎌倉時代	井戸・谷状遺構		瓦器・土師器・国産陶器・ 青磁・青白磁・木製品		位牌などの木製品 のほか、多くの土 器類	
		江戸時代	土坑		近世陶磁器・瓦		粘土採掘土坑	
湯川氏館跡	城館	室町時代	堀・井戸・石垣・池・橋脚		国産陶器・輸入陶磁器・ 土師器・瓦質土器・石 製品・金属製品・木製品・ 瓦		守護館に匹敵する 方形居館	
要約	<p>弥生時代中期の竪穴建物・溝・土坑、奈良時代の溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の堀・池・井戸、近世の土坑などを同一面で検出した。これらから、調査区付近は弥生時代中期には集落、奈良時代と鎌倉時代には寺院の存在が考えられ、室町時代には湯川氏の館が築かれ、近世後半頃には粘土の採掘土坑が掘削されたことが明らかになった。</p> <p>弥生時代の集落は中期後半代のもので、調査区は集落の南東部に相当すると考えらる。建物は同時併存するものでなく、おおそ3時期に分かれるものと想定できる。</p> <p>奈良時代の溝からは道成寺創建期の瓦と同タイプの軒丸瓦が出土し、付近に白鳳期まで遡る寺院が存在し、これは『日本霊異記』に登場する「別寺」の可能性がある。</p> <p>鎌倉時代の遺構は少ないが、谷状遺構から位牌などの木製品のほか土器類が多く出土した。以前からも六字名号を書いた笹塔婆などが出土していることから、付近に浄土系寺院が存在した可能性が高い。</p> <p>湯川氏館は、東を限る堀が見つかったことで、館の規模がほぼ想定できるようになり、東西約225 m、南北約200 mの方形居館で、各地で見つかった守護館に匹敵する規模であることが分かった。また、館の南東部には池泉を伴う庭園があり、その北側には堀を巡らした方形区画が存在することが明らかになり、遺物の出土傾向から方形区画付近には武家儀礼を行う主殿や会所が存在したことが想定できる。</p>							

## 小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡

—湯川中学校改築工事に伴う発掘調査報告書—

発行年月日：2016年3月31日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター  
和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1

印刷・製本：株式会社 協和  
和歌山県海南市南赤坂5-3